

仮面と海月と白鷺と

光の甘酒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地元で暴力沙汰起こしてしまった俗 芽音（ならわし さきなり）は高校進学を機に地元を離れ花咲川にやってきた。

人付き合いは深すぎず浅すぎずを信条に、本性を隠す仮面を被る芽音。そこで出会ったのはクラゲが好きな美少女だったり芸能人だったり・・・この出会いの結果は一体どこへ向かうって言うんだろうか？【第1章完結】【第二章〜】

目次

―序章―

―序章①― 出会いの章 | 1

―序章②― クラゲ大好き美少女と出会ったわけだが | 4

―序章③― クラゲ大好き美少女と友達になったわけだが | 10

―序章④― 友達の友達に出会ったわけだが | 22

―序章⑤― 友達の友達を助けたわけなんだが | 27

―序章FINAL― 友達の友達は友達 | 34

―記憶の章―

第1話 親友のイタズラとおしおき | 39

第2話 不意打ちバッドエンドとデートの約束 | 47

第3話 ミニチュアファッシュショールと疑似恋人 | 55

第4話 はじめてと煌めくブレスレッド | 63

第5話 ファーストな労働とツツコミ | 72

第6話 偽装デートと真面目なあの子との再会 | 83

第7話 本番偽装デートとお揃いのストラップ | 95

第8話 想定外休日デート | 105

第9話 想定外休日デートII | 112

第10話 稀代の悪女 | 125

第11話 悪女との再会 | 138

第12話 困惑、そして安堵、そして・・・ | 144

―紐解の章―

第1話 白鷺千聖 | 158

第2話 松原花音 | 173

第3話 居場所 | 189

第4話 夢

第5話 海月の奮起

第6話 白鷺の秘密

第7話 これがハッピーエンドというものだよ

第2章

第1話 再会と出会い

第2話 山吹沙綾

第3話 山吹沙綾Ⅱ

第4話 Pastel*Palettes

第5話 氷川日菜

第6話 氷川日菜Ⅱ

第7話 上原ひまり

第8話 上原ひまりⅡ

第9話 騒乱の学園祭

第10話 騒乱の学園祭Ⅱ

第11話 騒乱の学園祭Ⅲ

第12話 騒乱の学園祭Ⅳ

第13話 騒乱の学園祭Ⅴ

第14話 珠手ちゆ

第15話 仲間だよね？

第16話 √山吹沙綾

第17話 √山吹沙綾—fine—

第18話 √珠手ちゆ

第19話 √珠手ちゆ—fine—

最終章

序章	Nightmares again...?	401
第1話	悪女の復活とスキャンダル?	405
第2話	号哭—失速—	414

—序章—

—序章①—出会いの章

—プロローグ①—

中学時代、俺はわりかし日の当たるところにいた部類だったと思う。

所謂リア充系のグループに属していてワイワイ楽しくやっていた。
・・・だがそれも卒業間近になって崩れた。

「もういつペン言ってみろ!!!」

「ああ！何度でも言ってみろ!!!」

グループのうちの二人が対立し、その影響はグループ全体にまで伝染してしまった。最後はグループ全員を巻き込んで殴り合いの大ゲンカにまで発展してしまい、俺を含むグループにいた奴らが全員、停学を食らうという形で幕を閉じた。

結局のところ俺はそれが原因で地元にいづらくなり、高校進学を機に知り合いのいないここに来たというわけだ。

花咲川女学園。新たな試みとして今年から共学化した学校で、俺はその男子第一号の一員として入学したというわけだ。

「えつと俗（ならわし）くんだっけ？はじめまして、仲よくしてくれよな」

「うん、よろしくね〜」

1期生ということで男子の人数は少なく、入学式の前にとりあえず友達になっておこう、グループを作っておこうという奴らからたたくさん声をかけられた。正直中学時代のことトラウマでグループを作る気なんかになれないし、ボツチでいいのだが・・・

とはいえ、共学1年目ということでも男子はこのクラスにしかないため、3年間こいつらと同じクラスになるのはほぼ確定だ。

円滑に生活をするために全くボッチというわけにもいかない。

そう考えた俺は深すぎず浅すぎずの距離感を作り出し、まさに「仮面を被っている」というにふさわしい、誰にも分け隔てなく接する、“理想のクラスメイトである俗 芽音(ならわし さきなり)” を作り上げたのだ。

「では皆さん、自己紹介をお願いします！」

そして入学式の後の自己紹介。当たり前障りのないモノで終えた俺は他の奴らが自己紹介するのをダラダラと聞いていた。

別にクラスの奴らなんて興味ねーし。心底どうでもいい。だが最低限名前くらいは憶えておかないとな。

ぶっちゃけ高校なんて高校卒業の資格を得るために我慢して通うようなもんだ。はやく終わってくんねーかなあ……

「では次、白鷺さん……はお休みでしたね」

先生が名前を呼びつつそんなことをいう。入学式を休み？

これは高確率でボッチ化するアレじゃね？俺みたいに上手くやるならいいけど、休むのさすがにキツくね？

そう考える俺であったが、白鷺とやらの名前が出た途端何やらクラスがザワザワしている。

まあどうでもいいや。はよ終われはよ。

「あのあの、松原……花音です。その、好きなものはクラゲです!!! えつとその……ふえええええく……」

自己紹介は順調に進んだところでコレ。

あららこのクラゲ大好きちゃん、ガチガチに緊張して可哀そうに。

まあ可愛い子だしこういうのに弱い野郎もいるからいいじゃないか？とか思った。

実際下心丸出しの目で見てる奴らもいるし。

さて、自分語りが長くなってしまうが、こんな感じで俺の高校生活は始まった。別にワクワクもキラキラもドキドキもないけど、一応3年間通うところだ。

それなりに気合はいれていくかな。

このころの俺はまだ知らない。

どうでもいいと思っていた高校生活でかけがえのない友達ができ、そいつらのためならなんだってやれる。そう思うまでになるなんてね。

―序章②―クラゲ大好き美少女と出会ったわけだが

「ふええ〜ふえええ〜・・・」

入学して数日後、俺は配布される教科書を設置場所まで取りに向かったわけだけど。

その途中、奇声が聞こえてきて窓からその方向を見下ろすと、教科書を山積みにしながらか歩き、明らかに教室とは違う方向へ向かう何かが見えた。

「なにやってんのアイツ。あれじゃ前が見えんだろうに」

よくみると同じクラスのクラゲ大好きちゃんじゃないか。松原さんといったか？

「・・・みてしまったものは仕方ないよなあ」

ということであは階段へ向かう。

「なーにしてんの〜?」

「ふええ!?あのあのあ?!」

どうやら手にもつ積み上げられた教科書で前が見えていない様子。それゆえ、俺の声は届いているが俺を視認していない、といった具合だ。

「そつち教室じゃないけど用事あるのかな?」

「え?..え?..え?..」

「あ、ごめん!見えてないよね。同じクラスの俗、松原さんだよね?」

顔は見えないが困惑しているのがわかるなあ・・・

自己紹介を見るにテンパリやすいようだしちよつと突然声をかけすぎたか？

・・・なんで俺はどうでもいい奴の心配をしてるんだ。

「少し持つからさ、まずは落ち着こうか？」

「あ、ありがとう・・・。」

そういつてゆつくりと俺に向かって教科書を渡す松原さんであった。・・・しかしまあ、うん、これはお約束というものだ。

松原さんはバランスを崩し、そのまま転倒へとまっしぐらの体勢となつてしまった。

「きやつ!?!」

「おっと！」

片手で持てるだけの教科書をキャッチ、そして片腕で松原さんをキャッチ。

ふむ、なんとか大惨事は避けられたようだ。

「危なかったね〜大丈夫かな？」

「あ、はい。大丈夫です・・・つてふえええええ!!」

夢中になつてて気づかなかつたが、俺は今松原さんを抱きとめるような体勢になつている。

これくらいぶつちやけどうでもいいんだけど、入学してまだ数日。悪い印象を持たれるのは好ましくないで、ここは悪いことをした・・・と演技くらいはしといたほうがいいか？

「ごごごごめん！転んだら大変つて思つて！でも気軽に触れるのはダメだよ！本当にごめん!!」

「と、とりあえず体勢を戻させてえ〜」

体勢を戻し、落ちた教科書を拾い上げて一息。
話を聞くことにしたが心なしか松原さんの顔はほんのり赤い。

「あの・・・改めまして松原花音です。助けてくれてありがとうございます。ごうございました」

「うん、俺は俗 芽音！同じクラスなのは知ってるかな？」

「ごめんなさい！まだクラスメイトのこと覚えて切れてなくて・・・特に男の子は・・・」

「いや、大丈夫だよ！慣れないだろうしまだ入学してそんなに経ってないからさ。ゆつくり馴染めばいいと思うよ。それで、なんでこんなところにいたの？」

かねてからの疑問。明らかに教室とは違う方向だし、あんな重たいものを持って移動するのだ。何か目的があるに違いない。

「えーつと・・・実は道に迷っちゃって」

「・・・え？」

「ごめんなさい！私昔から重度の方向音痴で！」

ええ・・・マジか？

マジで迷っただけ？あんなもん来て戻るだけなのになんで全く違う方向へいけるんだ？え？マジ？

「まあ、徐々に覚えればいいさ。教室まで運ぶの手伝うから一緒に戻ろうか？」

「ふえ!?」一緒に・・・ですか？」

ん？なんでこんなに驚いてるんだ。

そういえば。さつきからなんか距離を感じるんだよな。

実は俺って普段から人の雰囲気や敏感に感知し、それを読み取って関係の深さをコントロールしている。そのせいかな”雰囲気や距離感

“からその人の考えていることや感情を読み取ったり、感じるのが得意だったりする。

松原さんはさつきからなんというか「警戒」または「困惑」といった雰囲気醸し出していた。

「もしかして・・・男が怖い?」

「あっ・・・怖いっていうより慣れてないっていうか・・・ずっと女子校だったから男の子と話すのが家族以外はほぼ初めてで」

「なんと、箱入り娘さんだったか!」

「ふえっ!?そんな大したものじゃ・・・!」

「さつきから思ってたけどそのふえっっていうの可愛いね。守ってあげたくなるよ」

「かわっ?!?!えっとそんな急に・・・」

「ごめん!ごめん。ついからかいたくなっちゃって(笑)でもそうだね、怖いのに無理して一緒に動くことはないかな」

まあ俺もぶつちやけ深くかわるのはめんどくせえしな。

さつきの「からかい」といい、ちよつと距離感を間違えたかな?

「じゃあこうしよう、教科書だけ俺が先に持っていくから松原さんはゆっくり来る感じで。それなら大丈夫かな?」

「あ、うん。それなら大丈夫そうです。ごめんね、なんか気を遣わせちゃって」

「大丈夫大丈夫♪じゃ、先に行ってるからね」

さてと離脱離脱。

さつきと運んで日常に戻るとしようか。

そう思った俺は教室につくなり松原さんの机に教科書を置き、今度は自分の教科書を取りに行くべく再び教室を出た。

「ふええええ~~~~」

・・・しかしその道中、さつきとはまた違うところでふえくとい
いながらわちゃわちゃするクラゲ大好き美少女がいたのだった。

※

入学後数週間しての休日。

この日は「クラスの親睦をさらに深める」というたいっへん素晴ら
しいご提案があり、クラスの奴らが集まって遊ぶことになった。
ファミレスの一角を貸し切り、さながら合コンのようにやるらし
い。

あ ほ く さ

行きたくない！行きたくない！

絶望的にやだ！死んでも行きたくない！

とにかく行きたくないあーもう行きたくない。

やだ！やだ！小生やだ！

・・・ぶつちやけ断ろうと思っただが俺以外の男子連中と、女
子連中も白鷺さんとやらを除いては全員いくらしい。

せっかく“いいクラスメイト”を演じてるのに行かなきや意味を
なさなくなってしまうじゃないか・・・

ってことで本当に仕方なくいくことにした次第だ。

「しゃーねえ行くかー」

集合場所に向かおうとすると見覚えのあるサイドテールの美少女
の後ろ姿が見えた。

「松原さん、お疲れ！」

「あ、俗くん」

「松原さんもいくの?」

「うん、みんな行くみたいだし・・・お母さんが最初は肝心だからいったほうがいいって。でも話せる人まだ全然いないし緊張するよ～～」

「たしかに松原さんって、おしとやかであんま騒ぐってタイプじゃないもんね」

「ふえっ!?おしとやかなんて・・・ただ単に暗いだけだよ・・・」

「うーん喋ってる感じそんな気はしないけどね。今もこうやって俺と喋れてるし」

「そうかな・・・」

しばらく話しながら歩く。しかしなあ、やはりどこか壁を感じる。まあ壁は俺も作ってるんだけどね。

「さすがに二人で歩いて向かうと変な誤解されるよね。松原さん先行きなよ。俺は少しあとに向かうからさ」

「あ、うん。そうだね。そうするね」

そうしていったん別れる俺と松原さん。

俺は順路通り右へそして松原さんは左へ・・・ん
?????? 左
??????

「ちよまままちよままま!なんでそっち行くの!?全然違う方向だよそっち!?!」

そうやら松原さんの方向音痴は俺の考えるよりはるかに重症であるようだった。

―序章③―クラゲ大好き美少女と友達になつたわけ
だが

さて、始まりました親睦会（死ね）

いくつかのテーブルに分かれ、男女4〜5人で話をし、ローテーションするというシステムだ。

まあアイディアとしてはいいと思う。しかしなあ、男連中は気になる女子と少しでも仲良くなりたのか下心満載のオーラが出ているし、女連中は品定めするかのような空気、緊張する空気等いろんなのが入り乱れている。

そしてその緊張オーラは違うテーブルにいる松原さんからとても強く出ていたのだ。

「ふ、ふえ〜〜〜」

ありやりや。ガチガチに緊張しちゃって・・・

まあでも、なんとか話せているみたいだし俺は俺でやんなきゃな〜・・・

「ねえ、俗君ってば！」

「ああ、ごめんね。考え事してたよ」

「もうーま、いいや。俗君って一人暮らしなんだっけ？」

「うん、地元が遠いからね。さすがに通いは無理だから近くに賃貸を借りてるよ」

「すっごーい！大人だあ！ねえ、今度遊びに行ってもいい？」
「機会があったらね（笑）」

うるせえ、なにいきなり人の部屋に来ようとしてんだ。

唯一の癒しポイントの自宅にまでくるんじゃないやねえっつもの。

「んなわけないでしょ（笑）そんな噂経ったら松原さんに失礼だよ（笑）」

「え?!そんなそんな!俗君に対して失礼だよ・・・」

「いやだつて結構二人が一緒にいるところ見たって人いるよ?」

「あれは違って!」

二人の声が重なる。

なんてやりとりをしていると「やつぱり息ぴつたり・・・」とクラスメイト達にからかわれたのであった。

※

さて親睦会（くたばれ）が終わったところで解散になった。

2次会でカラオケに行くということだったが、正直行きたくなさMAXで疲労困憊。

「家事やんなきやいけないから」と断った。

そこからはいくやつらといかない奴で別れ、俺も帰ろうかな・・・と踵を返すと明らかにあたふたしている松原さんの姿があった。

「まさかねえ・・・」

正直めんどくさかったが乗り掛かった舟だ。

俺は彼女に近づく。

「松原さんは帰らないの?」

「えっと・・・そのつもり・・・なんだけど・・・」

「まさか帰り道がわからないとか・・・?」

「ふえっ!?なんでわかったの?」

正解かーい!

「ええ（困惑）それでよくここに来ようと思ったね・・・」

「ふ、普段この辺には来ないけど・・・スマホのマップ見れば大丈夫だ
と思っただけけど方向がわからなくなっちゃって・・・」
「地図も読めないんだ・・・」

考えてみれば行きも怪しかったもんなあ・・・
しゃーねえ。

「家はどこ？」

「え？えつと・・・」

聞いた場所は意外や意外。俺の借りている賃貸からそう遠くない
ところだった。

はあくくくほんと特別。仕方ない。

「俺の家の近くじゃん。近くまで送っていいこうか？」

「いいの？」

「いやここでダメって言ったら松原さん帰れないでしょ」

そんなこんなで二人で帰路に就く。

他の奴らが解散した後でよかった。こんな姿を見られていたらま
たよからぬ噂が立つに違いないしな。

「松原さんってなんか趣味あるの？」

「趣味・・・かどうかはわからないけどドラムとかやるよ」

「ドラム!? すごい、バンドマンか！」

「ふふっ・・・そんな大したものじゃないよ。でも最近あまり自信が持
てなくて・・・」

今日の俺は口がよく回る。それは松原さんも同じようだ。

らしくねえけどまあたまにはいいだろう。どうせ帰宅するまでの
数十分の間だ。

「それでー」

ドンツ！

少し会話に夢中になってしまったせいか、松原さんは通行人にぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい……」

「つてーなー。うわーこれ折れてるわーいつてー」

そこにいるのはパリピ系の男。

なんだこの白々しいクソ棒読みは。

「折れて!?大丈夫ですか?」

「大丈夫じゃねえよー。おー痛えー。償いしてもらわなきゃなー」

なんでこんな戯言を真に受けちゃうかね?

あんなんで折れたらお前の骨どうなってるだっけ感じよ。

ふ菓子だっけ折れねえぞあんなんじや

「それは大変ですね!まずは病院へ行つて診断書をもらつて、それから話し合いをしましょう!」

「あん?なんだお前?」

乱入する俺。

ハア~~~~~ (糞デカため息)

このまま平和に終わると思ったのになんでこうなっちゃうかなあ……

しかも昭和並みの古臭いネタで絡んでくるアホが相手つてこれ絶対なんかあるパターンじゃん。

黙っていたほうが問題が大きくなるパターンじゃん。
しゃーねえ……

「本当に折れているなら治療が必要ですし、費用を出すには病院へ行かないとわかりませんよね？あ、救急車も呼びましょう！それと一応警察にも行ったほうがいいですか!？」

「チツ……めんどくせえなおめえ……」

よしよしこのまま諦めて消えろ。

これは因縁をつける相手には俺が良く使う手だ。因縁をつけてくるならその内容を肥大化させて大げさにしてしまえばいい。

もちろん正論を混ぜてね。

「じゃあそっちのカノジョと話させてもらおっかな」

「そこは去っていくところですよ!？」

「おめえには聞いてないわ!んでどうすんのお嬢ちゃん」

「ふえ!？」

「ふえ、だなんてかわいいねくくそうだ、今からお兄さんと一緒に遊ぼうよ!こんな頼りなさそうな男放っておいてさ!それで許してあげよ」

頼りなくて悪かったな。

許してあげるってお前骨折はどうした骨折は。

ていうかなんだこいつ日本語通じてないの?どこの国の方なの?

アホなの?バカなの?

「で、でも帰らないと……」

「ダイジョーブダイジョーブ!夜遊びくらい1回経験しとくと世界が変わるよ!」

松原さんと話してて忘れてたけど、俺は疲れていたのを思い出して

だんだんとイライラしてきた。

あーめんどくせー。ほんとめんどくせー。

松原さんも結構限界みたいだ。

「遊ぶんなら俺が相手になりますよ」

「だーかーらーダサイ男にはキョーミないの！いこうぜカノジョ」

プチンツ

何かが切れちやう音がした。

あ、これ俺からだ。

「松原さん、あそこのコンビニで待ってて。俺、このお兄さんと話付けてくるから」

「え!?!でも・・・」

「いいからいいから。平和的に、ね。帰れなくなると大変だから俺が来るまで待っててよ」

「う、うん・・・」

コンビニに入店する松原さんを見送ると、俺はアホに向き直った。

「さて、話し合いをしましょうか」

「てめー・・・勝手なことしやがって。ムカついた。ついてこい！」

そうして俺は腕を掴まれ、引っ張られるような形で裏路地の方へ連れていかれた。

その様を松原さんがコンビニの窓からおびえた様な目で見ていたのは印象深かった。

※

「話つていうけどさあ、俺今すんげーイライラしてんの。ただでさえ疲れるのにお前が絡んだせいで疲れ倍増。まじつらたんなの。わかる？この罪の重さ？」

「うぐおとおおお・・・」

地面に這いつくばる男。それをゴミを見るような目で見降ろす俺。

「もういいよね？じゃあ俺帰るから」

「ま、待ちやがれ・・・」ガシツ

俺の足を掴むヤロウ。

「あのさ・・・お前、この前まで中坊だった高校生に負けてさ、さらに醜く抵抗して恥ずかしくないの？」

「舐めやがって・・・不意打ちで勝ったからって調子に乗るな・・・！」
「不意打ち!?あのねえ、お前から殴り掛かってきたじゃん！事実のねつ造はよくねーぞ？」一応警告ね。すぐに手を放してそのまま俺たちのごと忘れろ」

「だれが・・・！」

「あーもうめんどくせー。こっちは疲れてんだよ。愛想振りまいてストレスマツハなの！もういいや、強制的に忘れてもらうことにするから」

俺は手を緩めない。軽く意識が飛ぶ程度に攻撃を加えて、それを終えると俺は踵を返し、松原さんの待つコンビニへ向かう。

はず・・・だったんだが・・・

「俗・・・くん？」

「松原さん？なんでここに・・・？」

俺が奴を眠らせた裏路地の入り口付近。

そこにはコンビニにいるはずの松原さんが立っていた。

※

「あの、ごめんなさい！私・・・やっぱり気になって・・・」

あーーーーーもーーーーー

どーーーーでもいやーーーーー

もーやだーつかれたーーーーー

「見てたのかよ？」

「う、うん」

「あーあ。短かったなー。明日から俺は本性が全校に知れ渡って腫物扱いだよ」

俺は思い出す。中学の時の事件・・・俺がここに来ることになったキツカケの事件。

あのときの俺は、停学が解けたあとの俺はまさに腫物を扱うかの如くだった。

他のクラスメイトは怯え、教師も異常に気を遣う。推薦で決まっていたはずの合格は取り消され両親には責められる。

あの時のトラウマがまーた戻ってくるのか・・・

「ハア・・・みたでしょ？あれがホントの俺。普段クラスメイトに振りまいてる愛想はぜーんぶウソ」

「じゃあ私との会話も全部・・・？」

「それはどうだろうな。取り繕ったのは認めるがお前との会話だけは何となく疲れなかった。今となっては意味をなさないけどな。他人を脅すほど度胸もねえし、このままお前がバラしたら俺は終わり。ちゃんちゃん（昭和）って感じ」

ゼーんぶ台無し。まさか入学数週間でダメになるとは。まあ元々
ポツチ貫くつもりだったしそれが早まるだけか。

あと2年と11か月ちよつとあるけど……

「……わないよ」

「あ？なんだって？」

「いわないよっ」

何言つてんだこいつ。言わない？何を？俺の本性を？

「寝言は寝て言えよ」

「寝言じゃないよ……それに、その。私、何となく……気づいて
いたから。俗くんが無理してるの」

「……どういうこつたよ？」

「あの、私も自分に自信がなくて……ずっと他の人の顔とか雰囲気と
かを伺いながら過ごしてきたの。俗君は話してて楽しいけどすごく
無理してる感じがしたから、なんでだろうってずっと思ってた……」

こいつはたまげた。松原さんも俺と同じ、人の雰囲気敏感なん
だ。

「それに今日すごく疲れてたよね？それなのに私のためにここまでし
てくれて……感謝こそすれど俗くんのマイナスになることなんてし
ないよ？」

「……なんでそこまでするんだよ」

驚きのあまり俺は聞いてしまう。

そして彼女から帰ってきた答え、それは……

「えつとねーその、俗くんが……はじめてできた、男の子の友達……
だからかな……」

そういい終わったあと、顔を真っ赤にして伏せてしまう松原さん。それを見た俺は自分の顔がぬれていることに気が付いた。

「ふえ!? 俗くん泣いて・・・?」

俺は物事を湾曲させて考えすぎていたかもしれない。

考えてみる、松原さんが人の嫌がることをしたりする奴だったか? いままで話す限りそんなことはあり得ない。そんなことわかりきっているはずだ。

松原さんは俺が本音で話してないのを見抜き、そのうえで友達と言ってくれたんだ。松原さんにしてみればどれだけ勇気のいることだったんだよ?

つまり、この涙は屈折した考えを持っていた自分への情けなさと、そして純粹な嬉しさによるもの。

我慢できなくなつてボロボロと涙が出てくる。

「あのあの、ごめんなさい! いやだよね・・・私みたいなのと友達なんて・・・」

—違う、そうじゃない。

「違う、そうじゃないんだよ!」

ビクツとする松原さん。

だが俺は続ける。

「俺はこんな奴だ。地元で暴力沙汰を起こして逃げるようにここに来た。振りまいてた愛想も全部作り物の仮面。こういうやつなんだよ」

「・・・でもそれが本当の俗くんこれ以上はないんだよね?」

「ああ、そうだな。正直コレ、かなり素だぞ」

「やつと本音の俗くんがみられたな。あのね、私の前ではそれでいいから……その……よかつたらまた話し相手になつてくれませんか？」

「本当にいいのか？こんな奴だし元来口もすげー悪い。松原さんを怖がらせてしまうかもしれない」

「うん、大丈夫。それにめんどくさいとか疲れたとかいいつつ私のこといつも助けてくれる俗くんが、心の底では優しいって知っているから」

「……よく恥ずかしくないねそのセリフ」

「ふええええええ！私つたらなんでこんな……?!?!?!」

我に返ったのか沸騰したタコのように顔を染める松原さん。

そんな彼女の姿を見た俺は、声が震えないように息を吸い込み、そしていう。

「松原花音さん」

「は、はい！」

「改めて俺と……友達になってください」

それを聞いた松原さんは一瞬、驚いた顔したがすぐに微笑み、こう返した。

「はい、喜んで」

これが俺と松原さん……花音と俺が本当の意味で出会った日の顛末だ。

これから俺はクラスメイトの前ではいつも通り、そして花音の前では素をだすという感じになり、かなり楽になった。

そしてこの出会いからちよつとしてー

俺はもう一人、かけがえのない女性と出会うことになる。

―序章④―友達の友達に出会ったわけだが

入学式から3か月ほど経ったころ。

俺は相変わらず仮面を被り良いクラスメイトを演じていた。

だが今までのように毎日仮面を被り休日のみ疲れを癒す、というわけではない。

素を見せられる花音という存在が俺の中では大きく、精神的な負担はかなり減っていたのだ。

今まで仲よくしてきた奴は大勢いるがそいつらは何かしら腹黒かったり、利己的だったり、下心を持っているもの。

対して花音は純粹・無垢で暗い感情を持ち合わせていない、いつでも本音でぶつかってきてくれる。それを鑑みると、今まで生きてきてここまで心を許せる友達はいなかったかもしれない。

だが、その花音はここにいない。

まさか―

あんなことになるなんて……

「ふええええええ〜まるで死んだみたいにいわないでよ〜」

「すまん」

まあ、風邪をひいて休んでいるだけなのだが。

どこからか花音の声が聞こえた気がするのととりあえず謝っておく。多分気のせいだろうけどな。

しかし気になるのは花音から送られてきたこのメッセージ

『千聖ちゃんにノートを見せる約束してたんだけど・・・芽音くん、代わりを見せてあげられないかな?』

千聖ちゃん・・・というのは白鷺さんのことだろう。

そうそう、白鷺さんといえば登校した時はすごい騒ぎだった。

なんか有名人らしいのだが、今は見事にボツチ化。他のクラスメイトと当たり障りのない会話はあるが、どうも接しにくい様子。何かやっちゃまったのかな?

ぶつちやけ興味が無いし関わることもあまりないだろうと思っていたが、花音の友達となると関わらざるを得ない。

そして意を決した俺は、白鷺さんの座る机に向かったのだ。

「白鷺さん!」

「あなたは・・・俗君、だったかしら?」

「うんうん、俗芽音(ならわし さきなり)ね。改めてよろしく!」

「ええ。それで?何の用かしら?」

「うん、松原さんからね。代わりにノートを白鷺さんに見せてあげてほしいって言われたから」

「・・・あなたが?確かに他の人をお願いしてあるって聞いてるけど・・・ええ、ありがとう。じゃあ遠慮なく借りるわね」

「今日はもう使わないし、終わったら机の中にでも入れておいてくれればいいからさ」

「ありがとう。借りるわね」

当たり障りのない会話。

話していて特に嫌な感じがしなかったし、ほんとクラスメイトはなんであんなによそよそしんだらうか?

まあいいや、花音の頼まれごとはこれで終わりだ。

うーん、花音に会いてーなー・・・

アレ？これつてもしかして依存？いかんいかん、依存はよくない。あくまで仲のいい友達に会いたいアレだよ。

・・・待てよ。会いたいなら会いに行けばいいじゃん。

別に西野力●じゃないから、会いたく会いたくて震えているわけじゃないけどさ。

やっぱあいつと話さないと一日が締まらない気がする。

以前、家まで送ったのもあって家の場所はわかってる。っていうか俺の家からそんなに遠くない。

「見舞いに行くか」

そう思ったら退屈な残りの授業も早く感じた。

そして俺は早々に教室を出て、通りがかりのお菓子屋で手土産を買い花音の家に向かったのだ。

※

「あら？」

「あれ？」

花音の家の近くまで来ると、今日学校で見た顔があった。

「白鷺さん？」

「俗君。なんでこんなところに？」

「かの・・・松原さんのお見舞いにね。白鷺さんも？」

「ええ。しかし意外ね。あなた、そんなに花音と仲よかったかしら？」

「そこそこね」

「もしかして付き合ってるのかしら？」

「それは誤解。俺と松原さんは友達だよ」

なんで仲がいい!!付き合ってるに持っていきたがるかね。
人の性だろうか。

「とりあえずインターホンを押そうか」

ピンポーン!

『はい』

「私、花音さんと同じクラスの白鷺と申します。学校をお休みと聞いてお見舞いに参りました」

すると中から花音のお母さんと思しき人が出てきた。

「わざわざありがとね〜あらま!男の子まで!?!あの子も隅に置けないわね〜!」

花音のお母さんは底抜けに明るい印象だ。

対して娘が静かなのは親父さんの遺伝か劣性遺伝子なのか。

まあどんなことはどうでもいいや。

「申し遅れました。俗と申します」

「あらあらご丁寧にどくも!でもごめんなさいね。花音、さつきまで起きてたんだけど、今は寝ちゃってるの」

え?マジ?花音に会えないのこれ?

しかしまあ寝ているなら仕方ない。治すのが先決だ。

「わかりました。ではこれ、よろしければ召し上がってください」

「あ、僕も」

俺と白鷺さんは持ってきた見舞いの品を花音のお母さんに渡す。

「あら、ありがとうく花音が起きたら食べさせるわね。ごめんなさいねくせつかく来てくれたのに」

「いえ、お大事になさってください」

「では、僕たちはこれで」

そうやって松原家を後にする俺と白鷺さん。

「じゃあ俺、帰るからさ」

そういつて背を向けると、突然ガシツつと肩を掴まれた。

「え!?!」

「俗くん、この後時間、あるかしら?」

「え・・・?もう帰」あるかしら?」

ゾクツ!!!

な、なんだこの感じ・・・!?

普段の白鷺さんから一切雰囲気は伝わってこなかった。

しかし今になって突然、背筋が凍るような何かを感じた。これは拒否してはいけない。そんなことを俺の本能が言っている気がする。

「あ、あります」

「そう、よかった(ニコツ)せつかくクラスメイトなんだし、親睦もかねてお茶でもどうかしら?」

最高の作り笑顔でそう宣言する白鷺さん。

俺は拒否できるわけもなく、言われるがままについていったのであった。

―序章⑤―友達の友達を助けたわけなんだが

「つぐみちゃん、こんにちは」

「あ！千聖さん！いらっしやいませ！」

白鷺さんに連れてこられたのは、元気な女の子が店員をやる喫茶店。

商店街にあり、個人経営ではあるが内装にアジがあつて、こだわりを感じる。

街の隠れ家的な店なのかもしれない。

「え!?千聖さんデートですか!?!」

「もう、違うわよ。この人はクラスメイト、それと花音と共通の友人ね。花音が風邪で休んだから一緒にお見舞いに行った帰りよ」

「そうなんですか！えっと、私は羽沢つぐみつていいいます！中学3年生、ここのお店のオーナーの娘で手伝ってます！」

「へ〜ってことは1つしかかわらないのか。俺は俗芽音（ならわしさきなり）。よろしくね！」

この子も明るくてなんとというか頑張り屋さんという雰囲気が出ている。

この感じは多分表裏のないいい子なんだろうな。

「私はいつもの。俗君は？」

「じゃあブレンドをブラックで」

「はい！かしこまりました！」

注文を取ってパタパタと厨房へ向かう羽沢さん。

対してまったく雰囲気伝わってこず、よくわからない白鷺さん。

さっきのはいったいなんだっただんた・・・？

なんか怖い。それに俺、白鷺さんのこと全然知らないし。

しばらくすると注文品がやってきて俺たちはそれを口に運びほつと一息ついた。

「それで何を話せばいいのかな？」

「そうね。あなた、花音と仲がいいのよね？」

「うん、まあ世間一般的にいうとそうなるのかな？」

「そうなの・・・じゃあ一ついいかしら」

「なにかな・・・はっ!？」

まただ。背筋が凍るようなプレッシャー。それを感じた俺は心臓が握りつぶされそうになる。

一体・・・これは何なんだ・・・!？」

「もう花音には近寄らないでくれるかしら?」

彼女が言い放った一言は聞き逃せるわけもなく、衝撃的な一言あつた。

「な、なんで君にそんなこといわれなきやいけないのかな・・・?」

「私が花音の親友だからよ。親友のことは私が守る。ただそれだけのことね」

「意味が分からないよ!それがなんで俺が近づかないのが解決になるのさ!？」

ふざけてもらっては困る。

今や俺にとって花音は大きな存在だ。それを奪うなんて・・・いくら花音の親友といえど許せねえ。

しかし、こんなことをいうってことは何かかワケがあるんだろう。それを聞き出さねば。

「ねえ俗君。私のこと知ってるかしら?」

「白鷺千聖さんでしょ？クラスメイトなんだし知ってるよ」

「そうじゃなくて、私の仕事のこと」

「……仕事？」

そんなもん知るわけがない。

まともに話したのだから今日が初めてだ。

「本当に知らないのかしら……？」

「ごめん、知らないや」

「白鷺千聖。元子役・といえばわかりやすいかしら」

「元子役……白鷺千聖……あああああああ！」

思い出した。そういえば昔テレビで見たことがある。

まさかそれがこの白鷺さんだっていうのか！

「知ってたみたいね」

「なるほど、それでみんなどこかよそよそしくなったのか」

相手が有名人だと確かにどこまでの距離感が適切かわかんねえもんなあ……

しかも仕事で忙しいのか、白鷺さんは学校を休みがちだ。

普段の交流も少ないためより一層どうしたらいいのかみんなわからないのだろう。

「さすが鋭いわね。それで話は戻るけど……改めて、花音には近づかないでくれるかしら？」

「だからなんでそうなるの!？」

「私は役者よ？あなたが仮面を被ってるなんてお見通し。そんな状態で花音に近づいて……何をたくらんでいるの?」

マジかよ……俺の仮面、バレてたのか……

「それにあなた、人の雰囲気を観察するのが得意よね？」

「……そこまでわかってるのか」

「ええ。だからこそあなたの前では考えていることを漏らさないようにしてた。そして必要な時だけ出してたのよ」

雰囲気をシャットアウトしたり、あの刺すような雰囲気をコントロールできるっていうのか……？
なんて恐ろしい奴だ。

「とにかく！得体のしれない男の人を親友に近づけるわけにはいかないわ。話は終わりよ。ここは私が会計しておくから……それじゃ」「おい待てよ！そんな一方的に……！」

しかし白鷺さんはそのまま店を出て行ってしまふ。

何かあつたんですか？という目線で羽沢さんがこちらを見る気配もわかる。

それに白鷺さんの話。

確かに言い分は理解できた。俺と同じように人の雰囲気を察せるのであれば、仮面を被っているヤツを警戒するなんて当然。しかも親友と仲がいいと来たもんだ。

そう、これはボタンの掛け違いのようなもの。なぜなら花音が俺の本性をしっていることを、白鷺さんは知らないのだから……

「追いかけてなきゃ」

誤解を解く。そのために俺は白鷺さんを追う。

しかし誤解を解くということは俺の本性を白鷺さんにもさらけ出さなきゃいけないということであるが、その度胸が俺にはなかった。

だがこのままギクシャクしてしまえば花音にも心配をかけることになるだろう。

それだけは避けねばならない。

「白鷺さん……！ってあれ？いない??」

おかしい。店を出てからそんなに経っていないのに姿がなくなるなんて。

「……ん?」

なんか気配を感じる。

これは恐怖と……醜い欲望……??

「……か!」

すぐ横にある裏路地へと続く道。その雰囲気はそこから出ていた。

「い、いやっ！離してください!」

「コラコラ、子役の頃から応援しているファンになんて言い草だ。俺が育ててやったようなもんだろ?千聖」

状況を確認。

ご立派な体系のオッサンが白鷺さんの腕を掴んでクツソ汚いしたり顔で白鷺さんの顔に接近する。

対して千聖は心底嫌そうな顔をしていたのだ。

「せっかくプレゼントも持ってきたし、育ての親同然のオレにサービ
スしてくれてもいいんじゃない?」

「プレゼントは事務所を通してください!それにあなたなんて知りま
せん!」

「パパに向かってなんて言い草だ!お仕置きだぞっ!」

パパパパパパパパア!?

ええええええ．．．(ドン引き)

なんかヤバイ奴がいるんですけどお．．．

うわー関わりたくねえ、関わりたくねえけど白鷺さんを放置する方がマズイ。

しかしなんで裏路地って悪いことする奴が使うのかね。

まあ裏路地だからが故のお約束なんだろうが。

「それにさつき男と一緒にいたよねえ？誰なんだ！あんなやつ許さないぞー！」

「あ、あの人は．．．」

「それって俺のことですか？」

「え．．．？俗君．．．？」

「俺、参上！」

どっかの赤鬼みたいな感じでやってみたが決まったかな？

あ、白鷺さんがゴミを見るような目でこつちを見てる。

え？決まってる？あらそう．．．

「オイコラそのデブ。俺の知り合いになーにやってくれちゃってんの？気色ワリイ顔を近づけんなよ、白鷺さんの顔が腐っちまうだろう？女の子の顔に傷つけて責任とれんの？」

「なんだ貴様．．．人が気にしてる体系のことまでそんなストレートに．．．それに、そんなひどいことをいうなんて．．．」

「気にしてんなら改善の一つでもしようとしなのか？それにひどいもクソも事実をそのまま言ってるだけだが？デブだし服のセンスは絶望的だし顔も脂ぎってきたねえし何よりそのしたり顔が最高に気持ち悪い。その姿で歩いてて恥ずかしくねえの？あ、もしかしてうんこの生まれ変わりかな？だったら便器に流れてろよクソ野郎」

とりあえず挑発。まずは狙いを白鷺さんから俺に向ける算段だ。

「そこまでいわなくていいじゃないかああああ〜〜〜〜」
「うお!?泣き出した!」

そいつはそのクツソ汚い顔で泣き出したのだ。

犯罪じみたことやってるくせにメンタル弱いなあオイ。

「・・・ろす」

「ん??なんだって?」

「殺すうううう!殺してやるうううう!」チキチキチキ

奴はカッターナイフを取り出し、刃を露出させると俺の方へ向かってきた。

注意を逸らすという目的を達することはできたがこれは予想GU Yデス

とりあえず、俺は近くに落ちている棒切れを拾い上げて構える。

あ、俺ってこう見えて剣道2段だったりするんだよな。

一応中学生まででとれる最高段位だったりする。中学生の頃は剣道部だったというだけだが。

勝負は一瞬。籠手打ちの要領でカッターを持つ手を打ち、すかさず面打ちの要領で頭に打突を加える。これでザ・エンドってね。

「うおおおおおおお・・・」

「自分の欲望を満たすためだけに自分勝手やらかす奴に救いはねえよ。豚箱に入ってる」

そして俺は周辺の人に呼びかけ奴を拘束し、到着した警察に引き渡したのであった。

―序章FINAL―友達の友達は友達

俺と白鷺さんが来たのは警察署。

昨日の自称パパ襲撃事件の事情聴取であるので今日は学校を休み、今に至るというわけだ。

せっかく来たのであるが、準備がまだかかるということので待合室に待たされる俺たち。

とりあえず昨日から会話ができてなかったので色々話すことにした。

「その、俗君。昨日はありがとう」

「礼には及ばんさ。ああいうの、初めてか？」

「いままでプレゼントとか手紙ではあったけど・・・直接は初めてね」「そうか」

芸能人つてのは大変なんだろうな。あんな奴まで相手にしなきゃいけないんだから。

「それが素のあなた・・・なのかしら？」

「今さら隠してもしやーねえと思つてな。どうだ？普段の愛想を振りまく俺、面影がないだろ？」

「ふふっ、そうね。でも、その方が何だがスッキリして気持ちがいい雰囲気が伝わってくるわ」

「・・・やっとなつた」

「え？」

「白鷺さん、やっとなつた。俺と話すようになってからクールなしかめっ面しか見せてなかったからさ」

「しかめっ面って・・・でも確かにそうかもしれないわね。得体のしれない男性が親友に近づいているってだけで心が穏やかじゃなかったもの」

柔らかな笑みを浮かべる白鷺さん。その表情にも、雰囲気にも俺に対する警戒はだいぶないように思える。

「あーそれについてひとつ誤解を解いておきたくてよ」

「誤解？」

「ああ、松原さん・・・花音は俺の本性を知っている」

「・・・！そう、だったのね」

「それを知ったうえで俺と友達でいてくれてるんだ。ほんといい奴だよな、花音って」

「ええ。花音だけだったの。私を芸能人の白鷺千聖ではなくて一人の親友、白鷺千聖としてみてくれるのは」

なるほど、そういうことだったのか。

確かに花音の性格なら納得だ。あいつは下心とか腹黒さとかそんなものは一切持ち合わせていない。

純粹に白鷺さんのことが好きなんだろう。

「それで、あなたはなんで仮面なんて被ることをしたのかしら？」

「そうだな。白鷺さんになら話してもいいかもしれない」

俺は地元であった事件のことを話した。

暴力沙汰で停学になったこと、逃げるように地元を離れここに進学したこと。

そして花音がそれを承知で受け入れてくれて友達になってくれたこと。

もうありとあらゆることをすべてぶちまけたのだ。

「納得したわ。その、俗君。あんなこといってごめんなさい。先走ってしまって・・・あなたにひどいことを言ったわ」

「構わんぞ。俺が逆の立場だったら同じことをしていたと思うし」

「ふふっ。意外と優しいのね」

「そんなことねえよ」

優しく笑いあう俺たち。

そして白鷺は立ち上がり、そして言う。

「私たち3人、どこか似ているのかもしれないわね」

「ああ。他の人を雰囲気を感じる事ができる。その結果こうやって出会い、そして惹かれあった・・・のかもな」

「あら、意外とドラマチックね。ねえ、一つお願いを聞いてもらっていいかしら?」

「なんだ?」

「私とも——」

白鷺さんはちよつとはにかんだ感じでいう。

「私ともお友達になってくれないかしら?」

優しく笑う顔。そして伝わってくる緊張の混じった温和な雰囲気。

答えは言うまでもないよな。

「ああ。こちらこそよろしく頼むよ」

「ふふっ。なんだか恥ずかしいわね」

確かに恥ずかしい。でもすごく心が嬉しいと言っている。

本音を隠さずに話せる相手がまたできたのだから。

「改めてよろしく」

「ええ」

「千聖」

「芽音」

※

事情聴取が終わり帰路につく俺たち。

思いのほか長くかかってしまい、外に出ることは薄暗くなっていた。

「結構遅くなってしまったな」

「そうね。でも疲れているはずなのなんだか気分がいいわ」

俺たちはこの後、花音と合流する約束をしていた。

病み上がりではあるが俺たちのことが心配で一目会いたいのとどこだった。

可愛いやつめ。

「花音には感謝しなくちやいけないな。俺たちをめぐり合わせてくれたんだから」

「そうね。花音がいなかったらこんなことになっていなかったと思うわ。さすがは私の一番の親友ね」

「あ、おい待てい。一番は譲らんとぞ。花音の友達ポイントは俺の方が上だ」

歩きながら話、合流地点は目前。

しかし、その言葉で空気が変わった。

凍るような冷たい雰囲気。それが千聖から漏れ出したのだ。

「あらあら嫌だわ芽音ったら。寝言は寝て言うものよ?」

「おいおい千聖さんよ? 負けを認めたくない心は立派だが過剰な自信は破滅を招くぜ?」

「いったわね・・・?」

「オーケー、戦争と行こうじゃないか」

ここから始まる俺と千聖の“花音の一番の親友はどちらか”バトル。

歩きながらの戦いは白熱し、ついに花音との合流地点に到達した。

「あ、芽音くん、千聖ちゃん！おつかれさ……まっ？」

「そうだ、本人に聞いてみよう。白黒はつきりするぜ？」

「望むところよ」

「あ、あの……二人とも……？」

「花音！」

「は、はい!？」

「私と」

「俺」

「どっちの方が好き?!?!？」

「ふえ……?ふええええええええええ?!?!?!？」

ああ、楽しい。コレが親友ってやつなんだ。

花音も、千聖も俺も……互いが互いのことを理解しあいバランスが良い最高の関係。

高校生活はまだまだこれから。たくさん、たくさん歩んでいこう。ちなみに、この勝負の行方であるが、全員が全員を同率一番にするということを決着がついた。

さて、ここまでが序章、二人との出会いの過程だ。物語はまだ始まってすらいない。

ここから……俺たちの物語は始まっていくのである。

―記憶の章―

第1話 親友のイタズラとおしおき

「あ、俗君おはよう！」

「やあ、おはよう俗」

「昨日はなんで休んだの？」

教室に入るなりクラスメイトが朝の挨拶を交わしに続々とやってくる。

正直朝から疲れる……のだけど、これは俺が上手く理想のクラスメイトを演じ切れている証拠なのかもしれない。

「いやー大したことじゃないよ」

適当に受け流していると、教室の空気が少し変わった気がした。

「……」

そう、千聖が教室に入ってきたのだ。

微々たるものだが少し緊張する人の気配がうかがえた。

そしてそのまま、千聖は自分の席に着く……。のではなくどんどん俺の方へ近づいてきたのだ。

「え？」

他のクラスメイトが困惑の雰囲気を出すのが分かる。

そりゃそうでしょうね、どう接したらいいのかわからないクラスメイトが近づいてくるんだし。

ってというか千聖、どんどん近づいてきてない？え？なにこれ？

「いやーだーーーーー」

とまあこんな感じでホームルームが始まるまで激動の朝は続いたのであった。

※

昼休み、俺と千聖・花音は校舎裏のスペースで昼飯を食べるべく集まっていた。

「おいこら千聖！朝のアレはなんだ!」

「あら？ちよつとした挨拶じゃない？」

「子供みたいなイタズラしやがつて・・・メチャクチャ大変だったんだぞー!」

「ごめんなさい・・・ちよつとやりすぎちゃった・・・かしら・・・」

すると困惑と悲しみを帯びた雰囲気が伝わってくる。

「いや・・・その、言いすぎた」

「・・・」ニヤツ

「あつ！千聖てめっ！演技だなそれ!?!」

「なんのことかしら?」

「千聖ちゃん、芽音くん。ごはん、食べないと時間なくなっちゃうよ?」

ツツコミを入れる俺にしれつと返す千聖。

雰囲気までコントロールしてくるとはなんて強敵か。

そして花音のやつめちやくちや冷静だなオイ。どうやら千聖が演技しているのを見抜いていたようだ。千聖の雰囲気を感じることに関しては俺より花音の方が長けているらしい。

「まあいいや。今度からああいうのは人前ではなしにしてくれよな」
「そうね、ちよつとやりすぎたのは認めるわ。ごめんなさい」

「まあいつか」そう思えるのは千聖相手だからか。
友達になつてわずか1日であるが、もう何年も親友をやっているよ
うな感覚だ。千聖や花音と話していると本当に心地がよい。

今こうして本音を隠さずあーだこーだ言えるのもすべて心地よい
のだ。

「あ、芽音くんのお弁当おいしそう」

「冷凍食品を詰めれば誰でもおいしく作れるわよ?」

「千聖、心を許してくれているが故の過激発言と信じているが残念
ながらこれは冷食じゃあないぞ」

そう、料理が趣味とまではいかないが、俺はそこそこメシを作るこ
とができる。

というのも俺の両親は夜勤が多く、朝練で早く出ていく俺と時間が
なかなか合わなかったのだ。そんなもんだから自分で朝飯や弁当を
作ることが多く、その結果身についたスキルといったところだ。

「え!?!これ手作りなの?」

「ああ、一つ食ってみるか?」

そして俺は卵焼きを掴みそのまま花音の口へ向ける。

「ほら」

「ふえ!?!あの、芽音くん!?!そのむぐう」

いいタイミングで口が開いたので卵焼きを入れる。

「どうだ?今日のはそこそこ上手くできたと思うんだが」

「お、おいしい・・・けど・・・／＼／＼」

なんでか知らんが花音は顔が赤い。ちよつと無理やりになつちやつたか？

それで喉にでも詰まらせたのだろうか？でも普通に喋れてるしな。

「さーきーなーりー？」

「なんだ千聖・・・つてうお!?なんだその禍々しい気配と恐ろしいくらの作り笑顔は!?!」

「わからないかしら・・・?」

「いやあ・・・あ!そうか、千聖も欲しかったんだな。ほら」

「え!?!ちがつ・・・むぐう」

なんだそんなことならそうといつてくれればいいのに。てなわけで千聖にも同じく卵焼きを口に運んでおいた。

「・・・美味しいわ」

「ふ、ふええええええ・・・」

感想は上々。しかしその割には般若のような顔をする千聖に、ふえええを繰り返す花音。

この二人は一体どうしてしまったというのだ。

「ねえ芽音」

「なんだ？」

「おしおきが必要かしら?」

刹那、再び禍々しい雰囲気纏う千聖。

「なんで!?!花音!助けてくれ!」

「芽音くん、今回はちよつと無理・・・かな?」

「ナンデー!ナンデエエエエエ!ぎゃああああああああ」

平和なランチタイムの一風景。

ちよつと怖い目（意味深）に遭ったけどこれはこれで楽しくてしょうがない。

こんな日常がずっと続けばいいのに。そう願わずにはられないね。

※

授業終了後、俺は花音と千聖とのグループLINE●にメッセージを送る。

とはいっても二人とも同じ教室内にいるのだが。

さすがに一緒に帰るところを見られるとあらぬ噂を立てられてしまうからが故の配慮である。

友達同士一緒に帰るのすら気を遣わなきゃいけないってのは正直めんどくさいが仕方ない。

S a k i n a r i : 俺、今日暇だけどどっかいくか？

松原花音：私は大丈夫だよ。

白鷺千聖：ごめんなさい、今日はこのあとはすぐに仕事なの

S a k i n a r i : それは仕方ないな

残念。今日は3人揃わないようだ。

まあ千聖は忙しいし仕方ない。今日は花音と二人だな。

そんな感じでその後は千聖が帰り、俺たちも適当なところで落ち合
い、下校したのであった。

「千聖ちゃん、なんだか今日は楽しそうだったな」

「そうなのか？」

「うん！なんかいつもよりいい感じだったかなあ。芽音くんのおかげ
かもね」

「そうだと嬉しいんだけどね。でも千聖、俺に当たりキツイ・・・キツくない?」

「うーん、それだけ心を開いてくれてるってことだと思うよ?」

そんなもんかねえ。

まあ確かに最初と比べて印象がかなり良いのは間違いないが。

「それにね、芽音くんもすごくいいと思う」

「俺も?」

「うん。最初に話したときみたいに、無理してるっていうのかな?その感じが全然なくなってるよ?」

「・・・そうだとしたら花音や千聖のおかげだな。そういえばお礼がまだだったな」

「お礼?」

何のことかわかっていない感じの花音は、疑問の表情を浮かべる。

「花音。その・・・なんていうか色々ありがとう」

「ふえ!?急にどうしたの!?!」

「いや、今俺がこうやって穏やかでいられるのも、千聖と出会ってこうやって3人で仲良くできるのも・・・あの時、花音が勇気を出してくれなかったら実現しなかったことだからさ」

なんだかんだでタイミングを逃していた花音へのお礼。

今、俺はそれを改めて言葉にする。

「・・・ふえええええええ・・・」

「え!?!花音!?!」

花音の震えたような声に反応すると、そこには目から涙を流している花音の姿があった。

「えつと、花音？ごめん・・・俺・・・なんかしたかな？」

「ち、違うのっ。そのね、芽音くん・・・う、嬉しんだよ！」

「嬉しい？」

「ずっとね。自信も持てずに、誰かのためになることなく過ごしてきた。そんな私がこうやって素敵なお友達と知り合えて、しかもお礼まで言われちゃって・・・嬉しいのっ」

泣きながらにして笑顔を浮かべる花音。

その姿はとても愛おしく、綺麗だった。

「わたしこそ、お友達になってくれてありがとう。これからもよろしくね？」

「あ、ああ！当たり前だ。その俺たちは・・・親友・・・でいいのかな」

雰囲気が出来上がってたせいで今まで言葉にしなかった“親友”という関係性。

口にするとかんんに気分がよくなるものなんだな。

「親友・・・うん、嬉しい。なんだか一生分の運をつかっちゃった気分だな。こんな短い時間ですごく素敵で大事なお友達が二人もできたんだもん」

「なんか恥ずかしくなってきた・・・」

「ふ、ふええええくいうの避けたのに言わないでよお」

なんてことない。ただの高校生二人が歩く帰り道。

楽しくて、心地よくて、嬉しさと優しきを感じる帰り道。

それは俺たちが、それぞれの自宅につくまで続いていたのであった。

第2話 不意打ちバッドエンドとデートの約束

清々しい朝だ。もう7月も終盤。厳しい暑さが続く。しかし、本日は晴れではあるがちょうどいい具合に雲が出ており、気温もちょうどいい。こんな日はなんだかいいことがある。そんな予感がしてならないのだ。

「おはよー!」

「おう俗、おはよう!」

いつものクラスメイトがいつも通り朝の挨拶を返してくる。

うん、今日も一日程々に仮面を被って、平和に過ごしましょうかね。・・・なんてことを考えていたのだが。どうやらその考えは甘かったようである。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「ひい!」

「ん?どうしたんだ俗?」

「い、いや・・・なんでもない」

教室に入って感じた気配。

それを発する先には・・・

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「ひえっ!」

「だからどうしたんだよ俗!」

固定された作り笑顔で碇ゲン●ウのような体勢で座り、禍々しい気配を発する白鷺千聖の姿があった。

「松原さんおはよう！」

「あ、おはよ．．．ふえええええ!?」

「松原さんどうしたの!?!」

それはどうやら、たった今教室に入ってきた花音も感じ取ったようであった。

※

昼休み。校舎裏で三人で昼食をとる。

暑いので近頃は日陰だ。

「なあ千聖。何かあったのか?」

「うん、教室に入った瞬間びっくりしちやった」

依然として禍々しい空気を放つ千聖を見かねて、俺たちは質問をする。

「ちよつと話を聞いてくれるかしら．．．?」

聞いてほしい空気も一緒に放ってたくせに何を言ってるやがる。

．．．．．と思っていたがあえて口に出さない。余計なことを言ったら多分大変なことになる。まさに藪蛇、触らぬ神に何とやらだ。

「実はね．．．．．」

※

― 昨日 都内某スタジオ控室

「千聖さん、そろそろスタンバイしてください」

「はい」

今日の仕事はドラマの撮影。とはいってもセリフは一言だけ、1話限りのチョイ役。

こんな役でも私のキャリアには必要な大事な仕事だ。気合を入れていかなければ。

「では行きましょう」

「はい」

マネージャーの川崎さんに連れられスタジオ入りするのであるが、そこに待っていたのは予想外の展開であった。

突然スタッフの一人が川崎さんに駆け寄り、焦った様子で話を始めたのだ。

「どういうことですか!?!」

「いや、そのね。監督が。ね、わかるでしょ?」

「そんな理由で!」

どうやらもめている様子である。

スタッフさんは私にも気が付いたようで申し訳なさそうに駆け寄ってくる。

「白鷺さんおつかれさまです」

「どうかしたんですか?」

「いや、……監督がね……その、白鷺さんを見て急に予定してたシーンなしにするって言いだして。なんか思ってたよりも可愛いからイラついた……みたいな」

監督は齡48歳の独身女性。仕事に全情熱を捧げた結果、婚期を逃してしまつたらしく、そのせいかわ若い女性スタッフや女性役者へのア

タリがきついらしい。

「と、いうわけでその・・・役なくなっちゃって」

「そんな！今日はこのためにスケジュール開けておいたのにどうしてくれるんですか!?!」

「ですからその、その件は後程こちらから正式に謝罪をさせていただきますので・・・」

「ですが!!!」

「川崎さん、もういいですよ。監督の気分や判断で演出やシーンが変わることなんてよくあることです」

「千聖さん・・・」

「さすがに出演シーン丸々カットは予想外ですけど・・・仕方ないです。今日はもう帰りましょう、監督に挨拶してきます」

「ちよ、千聖さん!?!」

私は椅子に座りふんぞり返る監督のもとへ向かう。

「監督」

「・・・誰?」

「白鷺千聖と申します」

「・・・ああ」

「本日はせっかくお呼びいただいたのにご期待に添えず申し訳ございません。またの機会にお呼びいただけよう、より一層精進いたしますので、今後ともご指導のほどよろしくお願い致します」

「・・・フンツ。考えておくれ。お疲れ様」

「はい、失礼します」

こうしてこの日の仕事が丸々一本なくなった私はスタジオを後にし、そのまま帰宅する。

「ふう・・・今日は災難だったわね」

自室のベッドに寝ころび一息。

これは仕方ないこと。さつきも言った通り監督の気分でこんなこといくらでも起こりうる。割り切って考えましょう。

・・・と思っていたんだけど

「やっぱりムカつくわね」

※

ってことがあったのよ。

「回想お疲れ様」

なるほどな。一日の予定を潰された上にそんな態度取られたんじゃ、ああなるのも納得だ。というか俺ならブチ切れると思う。ていうか今現在キレそう。

「ひどいよ！千聖ちゃんは頑張ってお仕事してるのにそんな理由で・・・」

現に花音は怒っていた。うん、その気持ち。とてもよくわかる。

「ああ、人を何だと思ってんだって感じだ。しかしそこで事を荒立てず切り上げたのは正解だったな。ここで有名監督とトラブルを起こせば後々・・・な」

「そうね。まあ実際、この業界ではよくあることなのよ。さすがにあそこまで理不尽なのは初めてだけど・・・さすがに笑っちゃうわね」

そういう千聖の目は笑ってない。こわいです千聖さんこわいですその目。

その後も色々仕事であったことなどを話す千聖。
どうやら相当たまっているようだ。

俺と花音はそれをあいづちを打ちながら、返事をしながら聞いていた。

「ふふっ」

しかしここで、打って変わって突然ほほ笑む千聖。

「おいおい、怒りのあまりネジが飛んで頭がおかしくなったか？」

「お仕置きするわよ？」

「ハイゴメンナサイ」

どうやらそうではないらしい。

よくよく感じると、怒りのボルテージは徐々に下がっており、安らぎの雰囲気が強くなっているように感じられるのだ。

「あれ？千聖ちゃん・・・怒ってる割には・・・？」

「あら、漏れてたかしら？」

「ああ、俺が気づくレベルで漏れてるぞ。何をそんなに喜んでるんだ？」

「・・・今まで仕事の愚痴を言える人なんていなかったから。理不尽な目に遭ってもこれは業界の慣例、私が我慢すればいいことって考えで。割り切つて、現実を見据えて・・・ずっと一人だったの。だから、こうやって話せて、一緒に怒ったりしてくれる友達ができたのが嬉しいのよ」

優しげな目で語る千聖。

それは俺もそうかもしれない。心を許して冗談も軽口も気軽に言い合える心地よい関係。それが今、俺たち3人の中にはできているのだ。

そして千聖は話してすっきりしたのか朝とは比べ物にならないくらいいい顔をしていた。

「千聖が超素直だ・・・」

「悪いかしら？私だってたまには本音をいうわよ？」

「いや、やっぱり怒ってるのよりそっちの方が可愛いぞ」

「ハア・・・あなたは本当に・・・」

呆れるようにため息をつく千聖であるがなぜこのタイミングでため息が漏れるんだろうか？

「ねえ芽音。あなた、色々気を付けたほうがいいわよ？」

「気を付ける？何に？」

「それはあなたが自分で考えることよ。ねえ？花音」

「ふえ!?私!?でもそうだね・・・うん、千聖ちゃんの言う通りかも」

「マジでわからん・・・」

なんだかよくわからん問題を突きつけられて若干消化不良だが、千聖の気分が晴れたようでよかった。

「あ、花音。今度の休日空いているかしら？気分転換もかねて、色々見とおきたいものがあって」

「次は・・・うん、大丈夫だよ。一緒にいこつ」

そう考える俺そっちのけで遊ぶ約束をする二人。

うん、仲が良いのは大変すばらしいことだ。

「たまには女二人でゆっくり買い物もいいかもな。楽しんで来いよ」

次の休日かー

俺はなにすっかなー・・・

なんて考えていると、疑問の表情を浮かべた二人が俺を見ていた。

「え？芽音くん・・・こないの？」

「え？芽音も来るわよね・・・？」

「・・・俺も行ってもいい奴なの？」

「当たり前だよ。てっきり三人でって思ってた千聖ちゃんが誘ってるんだと思っただよ？」

「私も芽音を誘ったつもりよ？」

「いや言うてませんやん」

「雰囲気で察しなさい？」

「ハイ」

てなわけで次の休日は3人でできたばかりのショッピングモールへ繰り出すことになった。

何気に3人で休日に遊びに行くのは初めてかもしれないな。

それが決まった俺は、柄にもなく浮足立ち、休日に来るのが楽しみで楽しみで仕方なかったのである。

第3話 ミニチュアファツションショーと疑似恋人

一体なんでこんなことになってしまったのだろう。

いや、ある意味必然だったのかもしれない。だが、いまさら憂いでも仕方ない。

早く……早く助けなければ……!

「ふええええええ流される〜!」

「かのおおおん!しかしこれ人多すぎイ!」

なんてことない。完成間もないショッピングモール、そして休日。

花咲川は都内とはいえ田舎に入る部類。

つまり、これだけの条件がそろっているということは言うまでもなく人が密集するということである。

とはいっても花音が言うほど大きさではない。動きにくい人がをかき分ければ動けるし、場所によつての混雑なので普通に歩けるところも多々存在している。

……今歩いているのは混雑している部分なわけだが。

「さすがに店に入ればマシだな」

「ええ。そうね」

「ま、迷子になりそうだった……」

流されそうになる花音をなんとか救出しながら、なんとか俺たちは一つ目の目的地。千聖の来たかったアパレルショップに到着したわけだ。

「ちよっと夏服を追加しようと思って。花音も一緒にどうかしら？」

「あ、うん。千聖ちゃんが選んでくれるなら間違いなさそうだね」

そういつてワイワイと服を見始める親友たち。

俺が男一人つてこと忘れてやいませんかね……？

「あ、こっちのワンピース。花音に似合いそうね」

「えくちよっと私には可愛いすぎるかなあ……」

そんなことないぞ花音。さすが千聖のセンスといったところか、そのワンピースは正直かなり花音に似合いそう」

「ふえ!？」

「あ……漏れてた」

いかんいかん……

思わず思考駄々洩れを起こしてしまった。

「……芽音、私はこれがいいと思うんだけど、どうかしら？」

雰囲気隠し、そういいながら話す千聖は少し怖い感じがする……しない？

そして手に持っていたのはパステルカラーの服。

夏という雰囲気ではないが明るく華やかさがある、これはこれで千聖によく似合いそうな服だった。

「さすがいいセンスしてるな・・・といたいところだが俺なんかの判断基準でいいのか？」

「・・・試着してくるわ」

「あ、私も・・・」

ええ・・・聞いておいて返答してくれないのか・・・

二人はそれぞれ服を持ち、試着室のカーテンの奥に消えていった。

「・・・気まずいっ」

そう、ここは女性服専門店。男一人、ポツンと試着室の前に待たされるのはなんとも言えない気分だ。

するとスタッフさんが話かけてくる。

「お二人ともすごくかわいい方ですね！どういうご関係で？」

「いや、その、二人とも友達で・・・」

やめてえー！なんでこう、服屋の店員って声かけてくるのお！しかも俺男！男！

しかも他の女性客とかこっちみてるし！なんだこの公開処刑・・・しばらく話していると、違うお客さんを見つけたようで適当に切り上げていったのであった。最初からそうしてくれ・・・

「あのおく・・・」

するとそのタイミングで花音が試着室から顔を出していた。

そうやら俺と店員さんが話していて出づらかったようだ。

「えっと・・・その、どうかな？えへへ」

カーテンが開かれると、そこには清楚で薄い水色のワンピースを身

にまとった、夏らしい花音の姿があった。

「100点」

「ふええええ!？」

それを見て無意識にそう呟いてしまっていた俺。

え、だってこれ普通に可愛いもん。花音自体、かなり可愛い部類に入ると思う。

それに加えてこの服。最高です……

「可愛くないわけがありませんね」

「あら芽音?親友を口説くってどういう神経しているのかしら?」

そんなことを言いながら試着室から出てくる千聖。

そこには温かさと華やかさ。そしてそれを纏う千聖と最高のシナジーを生み出していた。

「100点」

「そ、そう。ありがとう」

またしても無意識でつぶやく俺。

だって可愛いんだもん。アレ?芸能人白鷺千聖と一緒に服を買いに来て試着室までお供するとか俺すげえ贅沢してない?

ファンに見られたら殺されそうだ。

「買ってくるわ」

「私もそうするね」

「え?即決?大丈夫なの?」

「親友が褒めてくれたんですもの。だったら間違いないと思うし、それに今日の思い出にもなると思って」

「意外とロマンチストなんだな、千聖って」

「そういう一面も持っていないければ役者なんてやってられないわよ」

素っ気なく言うが、優しい雰囲気は漏れているのを俺は見逃さなかった。

「私もね。千聖ちゃんが選んでくれて芽音くんが褒めてくれたんだし……むしろ買わなきゃもったいないなって思うんだ。だからありがとね、二人とも！」

対して花音は全く嬉しい雰囲気隠す気配がない。ここまで喜んでくれるとは言ってみてよかったと思える次第だなあと考える。そんなことを考えながらレジに歩く二人の後ろ姿を見ていた。

※

「さて、次は花音の行きたい雑貨屋さんだな」

「そうね。でもこれ……」

「う、うん……」

目の前を見る。雑貨屋に行くにはこの人の多いエリアを通過しなければならぬ。

「よし、いくぞ。花音、千聖。はぐれるなよ？」

「もちろんよ」

「ふ、ふえええええ」

約1名が不安でしょうがない。でもいくしかないよな。

「よし、スタート！」

「ふえええええええ」

「言ってるそばからあ!？」

スタートしてわずか2秒。花音は正反対の人波に流されていつてしまった。

「花音?！」

「千聖！俺は花音を捕まえてくるから、先に雑貨屋にいつててくれ！」
「わかったわ！」

そういつて千聖と別れる。

大丈夫、まだ花音を見失つてない。俺はぴよこぴよこと揺れるサイドテールを目指して人をかき分けていく。

そして手を伸ばし、ついにその手を掴む。

「花音！」

「ふええええ……芽音くーん……」

半泣きで流される花音であったが何とか捕まえることができた。
とりあえず落ち着くためにいったん人の少ない場所に出る俺たち。

「やつと捕まえた……大丈夫か?」

「た、助かったあ……」

「あの速さで流されるつてある意味才能だよ……」

「ごめんね……?」

「いや、俺こそもつと配慮すべきだった。それに無事に合流できたんだからよしとするさ」

別に花音が悪いわけじゃないんだ。それよりも千聖を待たせるのもよくない。

ぼちぼち出発しなきゃなー……

「さて、そろそろ行くか。千聖が先に行つてるんだ」

「う、うん」

しかしその目線の先には人、人、人。
人がゴミのようでない。しっかりと立ちふさがる。うーん、ここを
安定して突破する方法・・・

「あつそつかあ・・・」

「どうしたの芽音くん？」

「花音、お手を拝借」

「え・・・？ふええええええ!?」

そういつて俺は花音の手を握る。

「いやだってコレが一番安全じゃん。離れて歩いたんじやまたいつ流
されるかわかったもんじやないし。正直すげー恥ずかしいけどさ」

「う、うん！そうだね！これが一番安全、一番安全・・・」

自分に言い聞かせるようにつぶやく花音。

うん、まあ気持ちはわかるよ？

「しかし本当にすごい人だな」

「うん、こんなに多いだなんて思ってたなかった」

手をつなぎ、少し緊張しながら歩く俺たちはまるで付き合いたての
恋人同士のようなだ。もしかしたら何も知らない人からしたらそう見
えているのかもしれない。

実際はそんな仲ではないのだが、知り合いが見ているわけでもない
しまたはぐれるよりはマシだ。それに花音からも信頼して手を預け
てくれている気配が伝わってきて心地よい。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

でもやつぱり気まずい！

アレ？花音と俺って普段何話してたっけ？

思い出せ・・・思い出せ俺・・・

「っとうおっ!？」

一瞬すごい波が来た。一瞬手を放してしまうが俺はすぐさま手を掴む。

危ない危ない・・・またはぐれるところだった。

「花音、大丈夫・・・か？」

「日菜・・・だいじょう・・・ぶっ!？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「えっ!？」

あ・・・ありのまま今起こったことを話すぜ！

花音の手を掴んだと思ったら全く知らない美少女の手を掴んでいた。

な・・・何を言ってるかわからねーと思う・・・

「誰だアンタ!？」

「誰なのですかあなた!？」

そこにいたのは美しき青緑の髪をなびかせ、『警戒』の色に染まったトゲトゲしい雰囲気纏う美少女の姿であった。

第4話 はじめてと煌めくブレスレット

「まずは落ち着こうか？」

「そうですね」

状況を確認。どうやらさつき手が離れた一瞬。そのわずかな時間で花音とこの人、掴む手が変わってしまったらしい。

それは向こうも同じようで、あの一瞬でツレと間違っただけで俺の手を掴んでしまったようだ。とりあえず相手がどんな人かわからないので、俺は“仮面”を被っておく。

「とりあえず、お互いのツレに連絡をとるところから始めよっか？」

「そうですね・・・あ」

「どうしたの？」

「この方・・・もしかしてあなたのお連れさんでは？」

「え？」

画面を見せられると、そこにはある人物のツーショット。

1人は目の前にいる女の子そっくりな子、そしてもう一人は・・・

「花音？」

そう、そこにはやや困惑気味に写真に写る花音の姿があったのだ。

「やはりそうですか。この子は私の双子の妹です。どうやらそれぞれの連れが入れ替わっているようですね」

「なるほど」 prrr

すると俺の携帯の方も鳴る。

すると花音からメッセージが来ており、行きたいお店が俺たちのいる雑貨屋の近くで、ひとりになるとまた迷いそうだからあつちはあつ

ちで行くとのこと。

それと共に先ほどと同じツーショット写真が送られてきた。
了解、こちらにも向かう・・・と打つ。

「どうやらキミのツレと俺の連れは一緒に行くようだね」

「そのようですね。では、私はこれで」

「え？どうせなら一緒に行こうよ？」

「えっ、嫌ですよ。男の人と一緒に歩くなんて知り合いに見られたら大変じゃないですか」

「・・・それもそうか。うん、配慮が足りなかったよ」

「話が分かる方で助かります。それでは」

そういつて別れる俺たち。まあ一人の方が気楽でいいかな。

さて、俺も向かいますかね。・・・待てよ。

俺とさっきの女の子は行き先は同じはずだ。と、いうことは彼女と俺は一緒の方向へ向かわなければおかしい。

「なんで違う方向に行くんですかね・・・？」

うーん、違うルートで行くだけかもしれないけど気になってきた。

乗り掛かった舟だ。彼女の後についていこう。違うルートなら最終的に行きつく先は一緒だし問題ないだろう。

そういうわけで行動開始。しかしそこで見たものは・・・

「うん、やっぱ迷ってるねアレ」

あの子は明らかに不安な雰囲気醸し出している。

そして徐々にテンパリが表情に現れてきたのだ。案内板を見れば一発なんだろうが、それを思いつく余裕もないようだ。

「しゃーねーかなあ」

俺は再びその子に近づき、声をかけることにした。

「ねえ、大丈夫？」

「あなたは!?!・・・コホン、どうしたのですか？別々に行くという話でしたけど」

いやそんな急に取り繕われなくても。明らかに雰囲気“不安”から“安心”に変わっている。目的地が一緒の人間が現れたからであらうか。

しゃーない、ここは穩便にコトをすますか。花音が向こうのツレにも世話になつてるようだし、せめてもの礼だ。

「いやーちょっと迷っちゃって。でもさつき案内板でルートを再確認してね、向かおうとしたらキミがいたってわけ！もし迷ってるんならやっぱ一緒に行こうと思つてさ」

後をつけてたなんていったらあらぬ誤解を生みそうなのでそんな感じで言う。

「迷つてなど！・・・いえ、そうですね。まあ目的地は一緒なんです。仕方ありません、早くいきますよ」

そんなことをおっしゃる。

どうやら知り合いに見られるリスクより安全に目的地にたどり着くことを選択したようだ。

「そうだね！それじゃあ行こうか」

二人で並ぶ・・・というよりは彼女が俺の後についてくるような感じで歩く。

しかし向かう先はさつき来たルートを戻るということ、人はどんどん多くなっていく。後ろを気にしながら歩くが、彼女はかなり歩きづらそう、俺についてこられているのか若干不安である。

「きやつ」

そして人に飲まれそうになるが小さな悲鳴とともに彼女は驚きの行動に出た。

「あらま」

そう、俺の手に捕まっていたのだ。

おそらく咄嗟のことで体が勝手に動いたものと思われる。

所謂、危険回避の本能のようなものだ。まあこれならはぐれないしいいと思うけど・・・彼女はそれでいいのだろうか？

とか考えているが彼女はとにかく進むことしか頭がないようだった。

※

ようやく人の少ないエリアにでる。

お互いの目的地もすぐ近くで、だいぶ落ち着きを取り戻した感じだ。

「ふう・・・ここまでくればいいね」

「ええ、助かりました・・・」

「よかったよかった。それでね、非常に申し上げにくいんだけどいいかな？」

「なんででしょう？」

きよとんと疑問の表情を浮かべられる。

オイオイまだ気づいてないのか。俺は目線を握られる手に落とす。

「……………?!?!?!?!?!」

「いやー俺はいいんだけど?!?!?!?!?!こういう場面こそ知り合いにみられたらまずいんじゃないかって思うんだよね、俺としては」

「ももももも申し訳ありません!!!私としたことが／＼／＼」

顔を真っ赤にして謝られる。うーん、この子もかなり整っている。普通に可愛いと思う。

「ま、いいよ。無事に目的地近くまで来られたし。じゃあこの辺で解散ってことでいいかな?」

「はい、その…ありがとうございます」

「ちゃんとお礼が言えてよろしい。じゃあね」

雰囲気はカタブツだったのが意外と面白い子だったな。

案外、心を開いたらいい友達になれるタイプかもしれない。まあ二度と会うことはないだろうけど…

なんて考えていたら、後程意外なところで会うことになるのは、このころの俺は予想だにしていなかったのである。

世間は実に狭い。そう思い知ることになるのであった。

※

「すまん…遅くなった」

雑貨屋に入るとすでに千聖と花音がおり、ショッピングを楽しんでいた。

「あら芽音。遅かったわね」

「ごめんね芽音くん、私のせいで…」

「いや、仕方ないさ。それよりも無事合流できてよかったよ」

マジでここまで長かった。

でもまあいいや。二人とも楽しそうだし、こうやって合流もできた。

「それで花音、ここには何を買いに来たんだ？」

「あ、えつとね。その・・・これなんだけど／＼／＼」

照れながら目線を移す先にはアクセサリーコーナーがあった。

「えつとね、今日って3人で初めてお出かけした日だよな？だから何か記念になるものが欲しいなあ・・・なんて思ってた」

なるほど、そういうことだったか。そして、どうやらその中にあるブレスレットが気になっているようだ。

「高校生だしそんな高いものは無理だけどこれくらいのアクセサリーだったら手ごろだし、男の子の芽音くんが付けても違和感ないと思って・・・どうかな？」

不安そうに俺と千聖に問いかける花音。

それに対し俺たちは顔を合わせ、思わず笑ってしまった。

「ふええええ!?なんで笑うのお!?!」

「ごめんなさい、緊張気味に言う花音が可愛くって・・・!」

「ち、千聖ちゃんくくくく!」

「ま、拒否する理由はないよな、千聖?」

「当たり前ね。花音の心遣い、すごく嬉しいわ」

「右に同じ」

「ふえ!?じゃあ・・・」

「ああ買おう、おそろいのブレスレット。今日の記念に・・・親友の証にな」

「やったっ！」

そういうと花音は心底嬉しそうな顔をしてくれた。

うんうん、いいねこういうの。

「よく恥ずかしげもなくそんなこと言えるわね」

「うるせえ、そんなこと言いながらも嬉しそうな雰囲気、漏れてるぞ？」

「・・・不覚」

ツツコミを入れてくるが、どうやら千聖も結構浮かれちゃってるよ
うだ。

そんなわけで俺はグリーン、花音はブルー、千聖はイエローとそれぞれ色違いのおそろいを購入した。

うん、千聖にあんなこといったけど俺も結構浮かれちゃってるみたいだ。

「よし、じゃあ次は芽音くんの行きたいところだね」

その後は俺たちはそれぞれ行きたいところに行き、今日一日遊びつくしたのであった。

※

「じゃあ、私はここで。今日はすごく楽しかったわ。二人とも、ありがとう」

「うん、千聖ちゃん。また遊びに行こうね！」

「じゃあな、楽しかったよ」

帰る方向が違う千聖と別れ、俺たちは二人帰路につく。

「えへへ〜」

その道中、花音は腕につけたブレスレットを眺めながら気の抜けた表情で笑っていた。

「花音、さつきからそればつかだな」

「だって嬉しいもんっ」

「ま、気持ちはわからんでもないが」

なんてことをいうが俺も内心、すげー嬉しい。

ただ花音のように感情をオープンにして喜ぶのは、なんとなくこっぴどくさしいからやらないというだけだ。

今日は本当に楽しかった。トラブルはあつたけど・・・気の許せる親友と一日一緒にいるだけでこれだけの充実感を得られるとは。

中学の頃はこんな思いをしたことがなかったので、以下に俺がうわべだけの人付き合いをしていたかがわかる。

「今日はありがとな」

「どうしたの？急に？」

突然お礼を言う俺に少し驚く花音。

特別意味はない。ただ単に、遊んでくれた親友に対するお礼だ。

「いや、なんか言いたくなっただけだ」

「ふふっ、変なの。うん、私もすごく楽しかったよ！」

一緒に歩きながら今日という日を振り返る。

新しい服を買って二人の可愛い一面が見られて、少し苦勞をしたけどやっぱり花音は花音なんだなと微笑ましくなり、最後の最後で嬉し

いサプライズをくれた。

腕につける煌めくブレスレット。俺は今日という日を忘れないだろう。

「また、3人で遊びに行こうね?」

「もちろんだ。あ、そうだ花音」

「どうしたの?」

「今日は少し遠回りをしていかないか?」

もう少しで俺の部屋につく。いつもはここで別れるのであるが…今日はなんだか、もう少しこの余韻に浸っていたい気分だったのだ。

そう、親友と一緒に。

「うん、実は私もそう思ってたんだっ」

今日はまだまだ1回目。俺たちはこれから何回も何回も今日のような楽しい日を過ごすのだろう。そんな期待と希望を胸に、俺たちは“少し遠回りをして”帰路についたのであった。

第5話 ファーストな労働とツツコミ

「金がない」

「藪から棒に何を言っているのかしら？」

なんてことない、いつもの帰り道の光景。

俺が放った一言にあきれた感じの声で白鷺千聖は訊く。

一人暮らしは何かと金がかかる。特に最近は花音や千聖と遊ぶ機会が増え、出費もかさむばかりである。

故に最近結構カツカツになってきている。うーむ、やはり遊ぶ金くらはいは自由に、苦労しないようにしたいものである。

「バイトかなあ……」

「芽音くんバイトするの？」

「ああ。もうちよつと生活に余裕が欲しくてな」

二人と遊ぶ出費がかさんでいるなんていったら気を遣われそうなのであえて言わない。俺が遊びたいから遊んでいるのであって、こいつらに責任はないしね。

「そーいや花音ってバイトしてるんだったよな？」

「うん、ファーストフード店でね」

「……俺もやってみようかな、そこ」

こういう言い方をしちや失礼だが、花音が苦手なはずの接客業をちゃんとやれているんだ。

バイト経験はないが俺でもやれるかもしれない。

「え!?!芽音くんも来てくれるの!?!」

「うお!?!びつくりした!」

花音が突然らしからぬ声で言うのに思わずビクツとしてしまった。それに気づいたのか花音ははっとして恥ずかしそうだ。

「あつ／＼／うんとね、いっつも人手不足だから大歓迎だと思うよ?」

照れながらも言うなんだが花音は嬉しそうだ。まあ実際のところ俺も知り合いが一緒の方が何かとやりやすいので望むところである。

「芽音と花音は同じところでバイトをするのね。私だけなんだか仲間外れの気分だわ」

「あつ・・・えつと、千聖ちゃん・・・あの・・・」

「ふふっ、冗談よ。どちらにせよ私は仕事はあるしね。それに二人なら息びったりだから、同じ職場というのはいいかもしれないわね」

そういつて笑う千聖はまるで子供を見送る母親のような笑顔だった。

「すぐ出られる?」

「望むところです」

「OK, 採用ね」

とまあこんな感じで俺はその後面接を受け、即採用となったのであった。

※

「とりあえずオーダーはこうやって受けて、清算したら指示を送って・・・」

先輩バイトからレジの打ち方を教わる。

うん、一回覚えてしまえばそんなに難しい操作ではない。機械の操作は得意な方だし、体に覚えさせれば“やるだけ”ならば造作のない

ことである。

「そうそう！いや、俗君、飲み込みが早くてまさに即戦力だね！よろしく頼むよー！」

「あ、はい」

そういつて先輩バイトは作る側に回るために離脱する。

おいおいいきなり一人かよ、よつぽど。まあレジだけなら支障はないからいいが・・・

「すみませーん」

おつといけない。いかなきや。

バイト初日は特に問題はなく、その後も様々な業務を覚えていく俺であった。

「あ、芽音くん。今日は一緒だね！」

そんな感じでバイトをこなす俺。

レジの他キッチンにも回り、もともと食品を扱うのに慣れていた俺は割と早く習得できた。

そして遂に、何回かこなしたある日、花音と同じシフトに入る日がやってきた。

「ここじゃ花音の方が先輩だからな、色々教えてくれよな」

「えへへ先輩かあ。うん、任しておいてよ」

なんてことない友人同士の軽口のたたき合い。

普段の花音からは想像できない姿ではあるが俺たちの間ではわりと普通のノリだ。

「んじゃ、でますかね」

「頑張ろうね」

よーし、芽音くんに教えるぞーと息巻く花音。

うん、俺もぜひ花音先輩にレクチャーしてほしいものだな。

※

「セット上がりました！あ、レジ入ります！いらっしやいませー」

「……はえー」

「こら松原さん、ぼーっとしてないでキッチン回って！」

「ふえええ〜わかりましたー」

よーし、芽音くんに教えるぞーと息巻いた私だったけど、そこで見た光景はあらゆることを難なくこなす芽音くんの姿。

あれ？これももしかして芽音くんの方が仕事できるんじゃないか？と考えていたらそれがぼーっとしているように見えたようで先輩バイトに少し怒られちゃった。

「俗君、このセットは!?!」

「それ4番でお待ちのお客様です！」

「了解！松原さん、コレ4番の札もってる人のところね！」

「わかりました！」

指示された通り、4番の札を立てているテーブルに運ぶ。

そこにいたのはちよつと怖そうな二人組だったけど、置くだけ、置くだけ……

「失礼します、セットお待たせしました！」

「あーはいはいアリガトー」

「おっ、君可愛いねー！スマイル一つ頂戴スマイル！」

「えっ!?!」

「ど、どうしよう・・・こういうときどうやって対応したらいいんだらう・・・?」

「えっと・・・こうですか・・・?」ニコツ

「うお!マジ可愛い!君、バイト何時終わり?このあと俺たちと遊びに行こうぜ!なっ?」

「ふええええ!?!」

「おお、可愛いね!なんなら今から行く?」

「えっ!?!」

「よし、決まり!俺たち怖い人じゃないから大丈夫だって安心しろよ、へーキへーキ、へーキだから!」

ふええええええ

!?!?!?!?!?

※

「松原さん、遅いわね。セットを運ぶだけなのに何分かかっているのかしら。」

「そーいやそうですね。俺、見てきますよ」

「うん、よろしくね」

確かに遅い。花音の性格からしてサボるのはありえない。だとすると一体どうしてしまったというのだろうか。

そんなことを考えながら進むと、あまりよろしくない光景が繰り広げられていた。

「ほら、いこうよ!」

「ふええええ無理ですう・・・」

「無理かどうかは俺たちが決めること。俺たちは無理じゃないって決

いつらに付き合う義理も暇もない。

「ほら君も一緒に行こうか？」

「ふえええ!?!」

そんなことをいいやがりながら花音の腕も掴むゴミ①。

ん……?花音の腕を掴むだと???

イライラしているところにそんな光景を見せつけられた俺。

あの時と同じ、またしても何かが切れる音が俺の中でした気がした。

「おきやーくさーまー……そんな粗相をされては困りますねえ……!」

「は?えっ!?!いでででででで!」

花音を掴むゴミ①の腕をガシツと掴んだ俺は花音からそいつを離し力いっばいねじり上げる。

「おいテメエ!そいつを放しやがれ!」

そーいいながら殴りかかるゴミ②。

さすがに俺も二人を一気に相手にするのはキツイ。

俺は考える。そう、ならば二人を一気に相手しなくていいようにしよう、と。

というわけで俺はそのパンチの軌道上、ちょうど拳が着地する位置になるよう……

ゴミ①の顔面を引っ張って持って行ったのだ。

「ぐおおおおおおおおお」

「オイ、大丈夫か!?!」

予定通り、ゴミ②のパンチはゴミ①の顔面にヒット。
これは俺が直接殴ったわけじゃないからセーフ・・・セーフじゃない？

「バカじゃねえの（嘲笑）あゝ手が滑ったあ（棒読み）」

続けてゴミ②に向けてゴミ①の顔面を打ち付ける。

これも直接的にダメージを与えてるのはゴミ共だから多分セーフ！よしっ！（よくない）

地面で悶えるゴミ①、②。ここはゴミ集積場じゃないんだけどなあ。

「おい、俗君！何をやっている?！」

その声をきっかけに、俺はここで周りを見渡す。

そこにはざわつく一般客、騒ぎを聞きつけて現れた店長や他のバイトの姿があった。

「あつ・・・すまん花音。俺がここで働けるのは今日まで見たいだ」

それは俺の短いバイト人生に終止符を打った。

ただそれだけの、些細な出来事であった。

※

あの後、ゴミ共は事務所に連行されて、出禁の誓約書を書かされた。ついでに店長が警察を呼んだようで、他の人の証言から俺は一応お咎めなし。

だけど俺はこの日付でバイトを辞めた。

なんでも俺の姿を見て怖がっている従業員が出てきたらしい・・・という口実だ。実際は正当防衛とはいえ暴れた俺を置いておきたく

ないのが本音だろう。

まあ、どちらにせよ本性の一片を出してしまった以上、あそこには
いられないだろうから、どちらにせよやめるつもりだったけどね。

「芽音くん・・・あの、ゴメンね」

「なんで花音が謝るんだよ?」

「だってあの人たちの相手、ちゃんとできなかつたからっ。それにバ
イトまでやめることになっちゃって・・・」

どうやら俺がこうなつたことに責任を感じているらしい。

「別に花音は悪くないしよ。まあ仕方ない、他のバイトを探すよ」

「ううん、それだけじゃなくて。あのっ・・・芽音くんの過去を掘り起
こすようなキツカケを作っちゃつたから・・・」

「俺の過去?」

はて、なんのことやら。

「だって芽音くん、地元で・・・」

「あつ!そういうことか」

花音がいろいろいいたいのはこのようだ。

俺はが花咲川に来た理由。それは地元で暴力沙汰を起こしたから。

これは俺の中でトラウマになっている出来事で、今の俺を形成して
いる要因である。

そして今回の出来事はそのことに近く、結果だけを見れば暴力沙汰
でバイトを追い出された、という形に見えなくもない。

「だから本当にごめんねっ」

「不思議なもんだ」

「え?」

俺は今、思ったことを口にする。

「花音に言われるまで、自分が自分のトラウマに触れていることが付かなかった」

「ふえ!? そうなの!？」

「ああ。なあ花音」

「なにかな・・・?」

「多分、それは花音のためにやったからだと思うんだ」

「私の・・・? どういうこと?」

頭にクエスチョンマークを浮かべたような表情になる花音。

ぶつちやけ俺自身も驚きを隠せないでいる部分もある。

「あの時の俺は理由もなく、ただただムカついて・・・手あたり次第にケンカした」

そう、拳を振るう理由。コレって結構重要なことなんだと実感する。

「でも今回は違う。花音を助けなきゃってちゃんと俺なりの正義を持ってやったことなんだ。その結果、俺はバイトを辞めるハメになったけど花音は何ともないし、俺自身も後悔していない。だから何も謝ることはないんだよ」

「芽音くん・・・」

「だからそんな暗い顔して謝らないで笑って過ごそうぜ。今この時、この一瞬は一度しかないんだよ」

「うん、わかったよ。芽音くんがそういうなら私もそうする!」

相も変わらず、何の変哲もない帰り道。

うん、やっぱり花音という時間は俺にとって特別なんだと実感す

る。

—いつまでも、いつまでもこの時が続いてほしい。

俺の本能が、そう言っていた。

花音しんゆうたちや千聖と会うたびに、そう言っていたんだ。

「あくでも芽音くん、さっきのはちよっと恥ずかしいセリフ……だったかな?」

「花音にツツコミを入れられる日が来るなんて?!」

ああ、平和だ。明日も、これからも、平和に過ごしたい。

そう願わずにはいられなかった。

第6話 偽装デートと真面目なあの子との再会

—この感覚。

そう、これは夢だ。

夢を見ていることを夢の中で自覚する、いわゆる明晰夢というものだろうか？

しかし夢を好きなように操作できているとは思えない。

「芽音くん」

「・・・よう」

ここは—

どこだ？

そう考えているところに現れたのは女の子だ。

俺はこの子を知っている・・・というかいつも一緒にいたじゃないか。

だが誰だ・・・？思い出せない。

「様子はどうかかな・・・？」

「いつも通りだ。よく眠っている」

そう返すのは俺自身。会話する俺たちの前には、見覚えのある人間が眠っているように見える。

「なあ、今日もいい天気だぞ」

返事が来ないのがわかりつつもそう問いかける俺。

—そして案の定返事は返ってこない。

俺は一体誰に問いかけている……？
俺はその眠る人物の顔を確認しようとする。

P i i i i i i i i i i

その刹那―

けたたましく鳴り響く音。

俺の意識はその音に吸い寄せられ、気が付くと現実世界に帰ってきていた。

※

「……なんだったんだ？今の夢。……夢？どんな夢を見ていたんだったか？」

なんだか夢を見ていたような気がする。

よくあるんだよね、夢が思い出せないこと。起きた直後は覚えていても少ししたら忘れてしまう。

まあ思い出せない夢のことを考えても仕方ないだろう、学校に行く準備をしますかね。

「……んんん？」

時計を手取る俺。そして気が付く。さっきのアラーム音はスヌーズ機能により、本来俺を目覚めさせる刻より……予定より遅くなったものであるということ。

「寝坊じゃねえかあああああ―」

なんてシリアスぶって言った見たが単なる寝坊だ。

すべての考えを捨てた俺は速攻で準備を行い、走る。走って走ってとにかく走る。しかし時間は無情にも過ぎてゆき、校門に到着するころには生活指導教員が立ちふさがっていた。

「はいキミ遅刻ね」

時刻は8時26分。

この学校は8時25分までに校門をくぐり、8時35分に始まるH Rに間に合わなければならぬ。

「先生、1分ちよいくらいカンベンしてもらえませんかね？」

「ダメダメー。はいキミ、名前とクラスは？」

どうやらダメみたいであることを確認し、俺はおとなしくクラスと名前をいう。

「はい、俗くんね。放課後に風紀委員会室へ来てね。決まりだから」

「はい・・・」

この学校では遅刻をしたものは理由を問わずまずは風紀委員会による遅刻者登録を受けるシステムらしい。それで生徒の遅刻者数の管理を明確化し、さらにそういうめんどうくさいことを放課後の時間を使ってやらせることで、遅刻者を減らす狙いだとか。

「おっとキミは・・・白鷺さんか」

「申し訳ありません先生、朝の仕事が少し押してしまっただけ」

「いいよいいよー。ただ悪いんだけど、いつも通り登録だけはよろしくねー」

「はい」

俺の後に現れたのは千聖だ。

どうやら早朝の仕事が押してギリギリ遅刻してしまったようだ。

「あら？芽音じゃない。遅刻だなんて珍しいわね。夜通しゲームでもやってたのかしら？」

「いんや、なんか今日は寝覚めが悪くてフツーに遅刻だ。千聖も朝からお疲れさん」

「ありがとう。さて、HRまで時間もないし、とりあえず教室にいきましようか」

「ああ」

教室前で千聖、俺は別々で入りいつも通り自分の席へ向かう。

「俗、おはよう！さつき走っているのが見えたよ。遅刻だなんて珍しいね」

「ああ、おはよう。いやーまいったまいった！寝坊しちゃうなんてね」

いつものクラスメイトと挨拶を交わし席に着く。

「ふあゝ」

しかし今日は眠い。変な夢（とはいっても覚えていないが）を見たせいだろうか？

ピロン

「ん？」

スマホが音を出す。ていうかマナーモードにするの忘れてた。

俺はマナーモードのスイッチを入れ、通知を確認する。

・・・千聖か。離れた席からこちらをうかがう様子が見える。

そう、それこそが違和感の正体。
特に照れている様子も、動揺する様子も見受けられない。
それにさっきの千聖の雰囲気。そう、まったくわからなかったのだ。

千聖は親友となつてからも雰囲気を消すことはあるが、その細かな変化を見抜くことができるようになったのか、あるいは慣れたのか。俺はある程度察することができるようになっていた。

しかし今回はそれが全くない。これは初めて会った時の雰囲気を消した千聖と同じだ。そう考えた俺は、ここで俺は一つの結論に達することとなる。

ああ、なるほど。これは――

演技をしてやがるな・・・と。

「あらかた彼氏の“役”をやってくれということじゃないか？」

「さすが芽音ね、恐れ入ったわ」

「役者魂が垣間見えたぞ？」

「え？え？役？どういうこと？」

アイコンタクトで意思疎通を果たした俺と千聖に対して、花音はわかっていない様子で困惑を続ける。

「実は、名前付きの役を貰えたの」

「すごいっ！千聖ちゃんおめでとうー！」

「とはいっても深夜枠ドラマで脇役なんだけど。その役というのが主人公と1回だけデートをする女の子の役で、最後は主人公の子にとられちゃうんだけどね」

「つまり噛ませ犬ってことか」

「ハッキリ言うわね・・・でもそうね、そういうこと。でも私は、たとえ1回限りの脇役でも全力で演じるだけよ」

力強い目を輝かせ、千聖は言い放つ。

正直、千聖のこういうところは素直に尊敬できる。

やるべきことがどんな小さなことでも全力で取り組み、未来への糧にする。

その場しのぎの行き当たりばったりで過ごしてきた俺には到底真似できないだろう。

「あ、それで・・・」

「ええ。でも恥ずかしながら・・・男性とデートなんてしたことなくて。そこで芽音」

「唯一の男友達の俺に白羽の矢が立った、つてことか」

「その通りよ。お願いできるかしら？あなたも将来彼女ができたときの参考になるわよ？」

俺に彼女ができるかどうかは別としてソウダナー・・・

「ま、いつか。受けるよ、それ」

“なんていうか純粹に楽しそうだ”

そう思えたのだ。俺は内心、どんな千聖が見られるのか少しワクワクしていた。

「あ、じゃあ明日のお休みは二人でお出かけだね。私はバイトだし、楽しんできてねっ」

その花音の言葉で昼休みは締めくくられた。さて、午後の授業も頑張りますか。

※

「あら？芽音、どこにいくのかしら？」

帰ろうとして廊下に出たところ、千聖に声をかけられる。
一体何の用だってんだ？

「あなた、今朝遅刻したじゃない。風紀委員会室にいかないよだめよ？」

「あ、忘れてた……」

しまったあ……完全に失念していた。

そうか、俺は遅刻者登録を受けなきゃいけないんだっけ……
かつたるいねえ。まあ俺が悪いんだけど。

「わかったらいくわよ」

「あいわかった」

ガラガラガラガラガラ

「失礼します」

「あら白鷺さん、今日もですか？」

「ええ。氷川さん、いつもごめんなさいね」

「いえ、仕事ですから。はそちらの方も遅刻ですか？申し訳ありません、他の人は今、出払っております。順番に処理するのでお待ちください」

「あ、はい。大丈夫で……す？」

「では白鷺さん、学生証を出して……ください……？」

風紀委員の女の子、そして俺。俺たちは互いを認識し、会話をしようとするがそこで途切れる。

「あ、あなたは！」

「おやまあ、まさかこんなところで会うとはね」

「知り合いなの？」

「うん」

それはそう、以前ショッピングモールで花音と入れ替わった、あの女の子であった。

「その節はお世話になりました」

「いやいや、あの後妹さんとはちゃんと合流できた？」

「ええ、おかげさまで。しかしあなたが花咲川の生徒だったとは……」

「こちらも驚きだよ」

「氷川紗夜。1年生です」

「ならわし 芽音。さきなり よろしくね」

思わぬ再会を果たした俺たちは和やかな雰囲気なで雑談する。

結構話が弾むもんだな。やはり仲よくなれば気が合うという俺の目測は当たったようだ。

まあさすがに仮面は被っているけどね。

「……そろそろ話に入っていいかしら？」

「あ、白鷺さん！申し訳ありません、私としましたことが」

しばらくすると千聖が口を開く。

「……アカン、千聖のこと完全に頭から抜けてた……」

「氷川さんはいいのよ。ねえ、芽音？」

ビクウ
!!!!

アエイエエエエエ!!?

ナンデ!? チサトナンデ
!?!?!?

一瞬放たれる禍々しい雰囲気。

なんで千聖さん怒ってる(？)んですかね・・・？
いままあ俺の放置プレイが原因なんだろうけどさ。

「芽音、説明なさい」

「ハ、ハイハイ！」

金髪の吸血鬼に“歩道に車で突っ込め”と言われた議員のように勢いよく返事をする俺、そして当時の出来事を説明する。

それを聞いて納得したのか、千聖の禍々しさは薄れていくのを感じる。

「なるほどね」

「わかってもらえた？」

「ええ。納得したわ。氷川さん、私からもお礼を言われてもらうわ」

「いえ、お世話になったのはコチラもです。しかし・・・白鷺さんと俗さんは仲が良いんですね。一緒にお出かけだなんて」

考えてみりや俺と千聖が親友なのは面倒を避けるためにあまり公開していないことだ。

しかし、氷川さんなら大丈夫な気がする。なんとなく、そう思えた。

と、いうわけで俺たちが仲が良いこと、そしてそれを隠していることを氷川さんに話す。

「なるほどそういう事情でしたか。安心してください、誰にもいいませんよ」

「氷川さんならそう言ってくれると思っていたよ！」

その後、俺たちはしばし歓談をし、風紀委員会室を後にしたのであった。

「氷川さん、いい子だね」

「そうね」

話している最中は普通だったはず。

しかし、二人きりになった途端、千聖はまたしても雰囲気をシャツトアウトしてしまう。

だがそれも一瞬。すぐにいつもの和やかな雰囲気に戻った。

一体何だったんだろう？うーむ、心当たりがない。さつき放置プレイした件を根に持つ・・・ような性格じゃないしな、よくわからん・・・

「芽音」

「うん？」

「明日、朝の10時に待ち合わせでいいかしら？」

「ああ。デートコースはどうすんだ？」

「それなんだけど、私に任せてくれるかしら？ドラマとできるだけ同じコースを回りたいの」

ああ、なるほどな。そういうことか。

「あ・・・」

「どうした？千聖？」

「・・・ドラマの撮影これからだから・・・私の役が振られるってことはオフレコでお願い？」

そういつてペロツと舌を出す千聖。

「うん、可愛い」

「バカなこと言っていないで帰るわよ」

明日は千聖と（疑似）デートだ。

俺はやっぱり期待してしまい、胸を弾ませながら帰路についたので
あつた。

第7話 本番偽装デートとお揃いのストラップ

「目が覚めて本当に良かったよ」
「心配をかけたわね」

俺は目を覚ましたその子がハキハキ喋っているのをみて安堵する。

「でもよかった。ずっと目を覚ますのを待ってたんだよ?」

「本当にごめんなさい。それにお医者様から聞いたわ」
「うん?」

「あなたが助けてくれたってことを。改めてありがとう」
「気にすんな。俺は俺のやれることをやっただけだ」

会話に参加する人数は3人。

そして平和な雰囲気、安堵する雰囲気、楽しい雰囲気。その部屋はソレに包まれていた。

P i p p i p p i p p i p p i p p i p p i . . .

それを遮るかのようにけたたましくなるアラーム。

ああなるほど。これも夢だったんだ。

そんなことを考え、遠のく世界を感じながら、俺は覚醒した。

※

「まーた変な夢を見ちゃった」

しかし相も変わらずすぐに記憶から消失する。まったく厄介だな。
時間はーうん、今日はスヌーズじゃない。寝坊はしていないよう
だ。

今日は千聖と出かける日だ。寝坊なんてしようものならどんな目

に遭わされるかわかったもんじやない。

「・・・こんなこと千聖にいつたら「あなたは私をどういう目でみているのかしら？」と違う怒りを買いそうだ。」

「さて、いきますかね」

俺はすぐに準備を始め、千聖が待つであろう集合場所に向かった。

※

時間は20分前。少し早めについてしまったようであるがその先はずでに千聖が待っていた。

「悪い千聖、待たせちゃった」

「ううん、いいの！あたしも今来たところだから！・・・こうやってキミを待つ時間もすつごくドキドキして楽しかったからだいじょーぶ!!」
「フアツ!?!」

誰 だ お 前

れれれれ冷静になれ!

よし、ちよつと考えよう。考えて考えをまとめて考えよう (錯乱)
まず俺は誰だ?

—うん、紛れもなく俗 芽音。そして今日の目的はなんだ?
—解。白鷺千聖と遊びに行くために来た。

では目の前にいるのは?

—この姿かたち、間違いなく千聖だ。寄生獣が脳みそを支配していたりワームが擬態してなければ間違いない。

そして—

「どうしたんだよ千聖・・・」

「えー？いつもみたいにちーちゃんって呼んでよ！それにさつきから何考えてるの？あたしも教えて教えてー！」

だから誰だお前

「頭痛くなってきた・・・」

「え!?大丈夫!?どうしちやったの急に!？」

あんたのせいだよあんたの・・・

ふとここで考えよう。なぜ千聖はこんな風になったのか？

頭でも打ったか？いや、そんなことでこんなにおかしくはならないだろう。

ではなぜ・・・いや、まてよ。千聖、さつきから”なんの雰囲気も感じない”

まるで演技しているときみたいだ。

ん・・・？今日の目的ってそういえば・・・

「あ、そっかあ！」

「どうしたの？」

「いや、色々理解したただけだよ。じゃあ行こうか、ちーちゃん」

「・・・!あ、うん!!」

「・・・」

「・・・」

うん、気まずい雰囲気が出てきたぞ。

まあ気持ちはわかる。大方、あの性格も演じる役のものをそのままやっているんだろう。

しかし相手は俺だし、かなり無理をしているのが分かってきたのだ。

「あーもう無理！芽音相手こんなことするの無理!!!」

「あ、うん。そんな気はしてた」

陥落

つていうか自爆か。千聖はあっさりキャラを崩し、いつも通りになっただ。

ものすごく羞恥に満ちた表情でモジモジしている。

「いつも通りいくか」

「……そうね、いつも通りで」

「んでちーちゃん、最初はどこに行くんだ？」

「もうやめてええええええええええ！」

そんなこんなで顔を真っ赤にし悶える千聖の大声は待ち合わせ場所に響き渡るのであった。

※

映画館に入る。チケットはすでに千聖がネットで購入してあったようだ。

普通なら一緒に窓口に行ってチケットを買うところだが、おそらくこれも台本通りの行動なんだろう。

俺はチケット代をわたし、2枚のうち1枚を受け取る。

映画の内容はなんてことない、話題になっっている恋愛映画だ。しかし話題になっただけあってこれはなかなか面白い。

ただ単にラブコメをやるだけでなく程よいシリアス、緊張感のある駆け引き、思わず手を握ってしまう展開のしばしはある。

映画なんてこういう機会でもなきや観にこないが、今後は面白そうな映画を見る趣味を始めてもいいかもしれないな。

「……？」

そんなことを考えていると手に何か違和感が。これは温度……？

ふと横を見ると、そこには俺の手を握り、恥ずかしそうにしている千聖の姿があった。

「これも台本通りなのか？」

「……」

そんなことを訊いてみるが映画の音が大きくて俺の声が届いていないのか、千聖の反応はない。

その後、千聖の手は映画が終わるまで俺の手から離れることはなかった。

※

「いい映画だったわ」

上映が終わり、エンディングが流れると劇場内の照明が点灯され始める。

感想を口にしながらか席を立つ人、一人で見に来たのか静かに席を立つ人。そして千聖のように座ったままにまずは一言感想を言う人。

劇場内では映画鑑賞後の独特の雰囲気とその空間を支配していた。

「ああ、確かにかなり当たりだったもしれない。観る前は所詮恋愛映画とナメてかかっていたが、なかなかなどうして出来がいいじゃないか。しかし……」

映画自体はかなり面白かったといえるだろう。

だがそれはまた後でカフェにでも入って感想を言い合えばいい。

それよりも気になるのは俺の手に未だの残る感触だ。

「それで千聖、これも台本通りなのか？」

「なんのことかしら？」

「ん？手、あなたの手、Your hand。」

「なんで急に英語に……あつ／＼／／」

「忘れてたのか……」

「……なんてね、ここまで台本通りよ」

顔を赤くしたと思ったら瞬時に表情を戻し、そう言い放つ千聖。

すげえ、これが役者魂……！

「全然わかんなかった。さすがだな」

「でなきやここに来た意味がないわ。……よかった、バレてないみたいね……」

「ん？」

「なんでもないわ。出ましょう」

「ああ」

何かをつぶやいていた千聖であったがまあいい。

俺は席を立つと軽く伸びをし、劇場内の段差を下っていく千聖の後を追ったのであった。

※

「これなんか花音好きそうじゃないか？」

「そうね、結構いいと思うわ」

映画が終わり、昼食をとった後にショッピングを楽しむ俺たち。

楽しい時間はあっという間とはよく言ったものだ、気が付くと外はいい感じに暗くなっており、そろそろデート（仮）もお開きになる時間だろう。

とりあえず花音に土産でも買おうという話になり、最後に雑貨屋に

よる俺たちはアレコレ見て回り、花音の土産と各々好きなものを買っていた。

「じゃあ花音はこれでいきましよう」

「ああ。他に買うものはいいか?」

「そうね・・・せっかく来たことだしあっちにほうも見てこようかしら」
「了解、俺も適当にみているよ」

花音への土産を決め、千聖といったん別れると俺もブラブラと店の中を見て回る。

「ん?」

すると発見したのはあるストラップ。ふむ、結構千聖の好きそうな色合いとデザインだ。

「せっかくだしなあ」

俺はそれを手に取ると、買い物かごの中に投入したのであった、

※

「結構いい時間になってきたな」

「そうね」

店を出て、薄暗くなった道を二人で歩く俺たち。なんとなく名残惜しい気もするが、そろそろ終わりの時間だ。今日一日、本当に楽しかった。

飯とはいえはじめて千聖とデートできて本当に良かったと思う。

「んじゃそろそろ」

「そうね。今日は一日ありがとう、芽音」

「いいって。それよりも役の雰囲気は掴めたか？」

「・・・あ、そうね。うん、おかげさまで」

「それはよかった」

一瞬固まった気がするがおそらく気のせいだろう。

「あ、そうだ。コレを渡しておこうと思ってな」

「・・・？なにかしら」

俺はさつき雑貨屋で買ったストラップを袋から取り出し、千聖に手渡す。

「一応、今日のお礼だ」

「お礼を言うのはこっちの方よ？せつかくの休日に付き合ってもらったんだし」

「いんや、まあそうなんだけどき。きっかけはそうだったとしてもこうやって楽しい時間を貰ったわけだし、なにより千聖と二人で出かけたの初めてじゃん？だからなんていうか記念・・・みたいな」

うーむ、なんか少し恥ずかしいぞ。考えてみりやこのいい方ってちよつと誤解を招く言い方なのでは？

「そう、ありがとう。受け取っておくわ」

なんて心配をしていたが千聖は特に違和感なく受け取ったようだ。

「あら？もう一つ入っているわよ？」

「あ、そうだった」

千聖があることに気付く。あのストラップはペアストラップ。あ

のデザインのものを買うには対になるもう一つのものもセットで買わなといけなかったのである。

ならば他のモノを・・・と思ったがアレよりいいデザインのものが見当たらなかったわけだこれが。

「そつちも貰っておいてくれよ。ペア品でばら売りしてなかったんだ」

「・・・それなら」

素晴らしいながら片割れを差し出す千聖。

「二人ででかけた記念の意があるのなら、もう一つは芽音が持ってもいいんじゃない？」

ふむ。確かにその理論はもつともだ。せつかくのペア品出しタイミングもいい。

俺としたことが気が付かなかった。

「そうだな。ありがたく貰っておく」

「あなたが買ったものなのに変なの」

クスリと笑う千聖は思わずドキッとしてしまいそんな綺麗さだ。

俺は煩惱を振り切り、ストラップを受け取った。

「あれ？芽音くん？千聖ちゃん？」

するととても覚えのある声が俺たちの名前を呼ぶ。

「あら、花音？」

「うん！えへへ、バイト終わって帰ろうと思ったら二人をみつけて思わずね」

思いがけないところで会えたのが嬉しかったのか花音は満面の笑みで語り掛ける。

「帰ろうと思っていたが・・・なあ千聖、せっかくだから3人で飯でも食っていくか？」

「いいわね」

「うん、私もそうしたいなっ」

「決まりだな」

俺たち3人は歩き出す。

「そういえば花音にお土産があるの」

「わあ、なにかなー？」

楽しそうに話しながらあるく二人の友達しんゆうたちの背を見ながら俺は考えていた。

「芽音、早くいくわよ」

「ああ」

こんな時間がずっと続けばいいのに。
そう、考えていた。

第8話 想定外休日デート

楽しい一日になるはずだった。

親友の一人を隣に、ただなんの変哲もない休日。

しかしその日、俺は再び出会ってしまった。

あの日、あの時、あのきっかけになったアイツに。

「なんで・・・お前がここに」

「芽音くんやつほー。ねえねえ新しい学校でも暴力振るってるの？」

蘇るトラウマ。

そう、そいつはある意味、俺がかつて停学に追い込まれた原因を作ったヤツだ。

「なによー。久しぶりに地元の友達に会えたんだからもっと喜ぼうよ？・・・って隣のその子はなんなのかな？」

俺はあの日のことを思い出す。

思い出しくもないあの日のことを。

※

「めっちゃくちや続きが気になる!!!」

休日。俺は部屋に閉じこもって漫画を読むという、盛んな高校生とは思えない日を過ごしていた。

部活でもやらないのか？と思うところであるが・・・あ、ちなみに花咲川に剣道部はある。

しかし共学1年目でしかも男子の人数は1クラスの半分程度。それに加え剣道をやっている奴なんて俺しかいない。

毎日放課後の部活まで外面よく、女子しかいない中で男一人竹刀を

振るうのはゴメンと考えた俺は部活に属さず帰宅部と化していた。まあ、さすがに剣道自体をやめるのは勿体ないので、週2である剣道クラブには通っている。

さて、前置きが長くなった。要約すると俺は部活にも入らず、せつかくの休日にも外出もせずひたすら漫画を読んでいたというわけだ。

そして俺が読み終わった漫画はまだまだ続編がある。しかし俺が手に取ったのは持っている中で最後に1冊であった。

「……続きは？」

そう、実はこの漫画。花音イチオシということで花音に借りたわけだ。

あまりに面白いと熱弁するもんだから根負けし、

とりあえず……と思つて長編30巻中10巻をドカツ借りたわけだがいやはやメチャクチャ面白い。

深夜から読み始めて徹夜で読み切ってしまった。

畜生、主人公の愛はヒロインに伝わるのだろうか……誰か……

誰か教えてくれ……!!

……時間はまだ午前9時だな。徹夜のせいで正直眠気でトランス状態なのだが続きが気になってしょうがない……!!

「気になる……気になる……そうだ、花音に続きを……続きを借りよう……」

そう思った俺は、何も考えずにスマホを取り出し、気が付いたら花音の電話番号に向け発信ボタンを押していた。

『もしもし?芽音くん?』

『よう花音。今いいか?』

『電話してくるだなんて珍しいね。どうしたの?』

『(主人公の)愛(が伝わるのかどうか)を教えてください』

刹那、満面の笑みを浮かべこちらをみる花音ママが姿を現した。

1回しかあつていないはずなのに記憶力すげーな花音ママ。

「どうも、ご無沙汰しております」

「なーに花音？風邪ひいたときもお見舞いに来てくれたけどアンタそ
ういう……」

「ち、違うから!!!もう、お母さんは家の中に行つてて!!」

「ふふっ。はいはい」

はえー……花音つて結構デカイ声出せるんだな。

「あ、芽音くんゴメンね！お母さんが変なこと言つて……」

「なーに構わんさ」

「じゃ、じゃあ漫画の続き持つてくるね！」

そう言つた花音は、漫画を取りに行くべくぱたぱたと家の中に戻つた。

「俗君」

「え？あ、ハイ」

それを見計らつたかのように花音ママが再び現れた。

「ありがとうね。あの子の友達になつてくれて」

「いえ、俺こそありがたいつて思つてます」

「あの子、私に似ず引つ込み思案でしょ？そのせいか中学の時はあんまり友達もいなくて……でも高校に入つてからは白鷺さんやあなたの話をすごく嬉しそうにするのよ。あんな花音は初めて。だから……これからも花音のことよろしくね？」

その目は我が子をものすごく大切に思う、母親としての力強いものであった。

「安心してください。花音さんから離れていけない限り、俺や千聖から離れるなんてことはありませんから」

「ふふっ。なら安心ね。それにあの子から離れることもないでしょうしね」

美しい笑みを浮かべる花音ママ。うむ、やはり花音はお母さん似だな。笑顔にもものすごく面影がある。

「お、お母さん!!」

すると響く大声。その声の主は漫画の詰まった手提げ袋を両手に持つ花音だ。

「もう、芽音くんに変なことしてないよね?」

「してないわよ。あ、そうだ俗くん」

「何でしょう?」

「なんなの私のこと、お義母さんって呼んでもいいのよ?」

「フアツ」

!?!?!?

いきなりなんてこと言うんだこの美人さんは……

俺と花音が結婚?付き合っつてすらいねえつてのに何を……

「ふええええええ!?お母さん!?!?!?!?」

「ふふっ。冗談よ冗談」

!?!?!?!?

アレ?冗談を言ってる雰囲気じゃないんですがそれは……

「まあ、まだ若いしね。青春を謳歌しさい?」

「もう……」

うーむ。やはり大人は強い。勝てる気がしねえわ。

「あ、そうだ。もうお昼じゃない？花音、コレ」
「え？」

花音に手渡されたのは5千円札。

「これで俗くんとランチでもいってそのまま遊んできなさい。高校生が部屋に閉じこもってちや青春を逃すわよ？」

「ふえ!?で、でも芽音くんの都合もあるし……」

「んー別に構わんぞ。明日も休みだし漫画は帰ったらゆっくり読むさ。しかしいいんですか？俺まで」

「いいのよ。ほら花音、俗君もこう言ってるし観念しなさい」

「わ、わかったよう……芽音くん、よろしくね？」

「ああ」

「じゃあ、ちよつと着替えてくる。待っててね」

そう言つて再び部屋に戻る花音。

そしてそのあとお母さんは一言、こう言い放った。

「ほんと、あんなに生き生きしてる花音を見るのは初めて。じゃあ芽音君、あとは若い者同士楽しんでらっしゃい」
「ありがとうございます」

そう言つて花音ママも家の中へ戻つていった。

「お待たせしました。あれ？お母さんは？」

「リビングに戻ったみたいだよ。さて、じゃあ行こうか」
「うんっ！」

その後まずは借りた漫画を俺の部屋に置き、食事をすべく歩き出した。

こうして俺と花音の想定外休日デートが幕を開けたのであった。

第9話 想定外休日デートⅡ

「もう、お母さんだったら・・・」

「まあいいじゃないか。なんだかんだ花音と二人つきりで出かけるつてのも始めてほしい機会だ」

花音ママに見送られ遊びに繰り出す俺たち。千聖とは疑似デートで何回か遊びにいつているが花音とは何気に初めてだったりする。

「芽音くんと二人つきりつてはじめてだよね」

「まさに俺も同じことを考えていたところだ」

やはり波長が合うのだろうか？

花音と俺は二人して同じことを考えていたようだ。

「さてどこへいこうか・・・花音、なんか希望とかある？」

「そうだなあ・・・うーん、実はちょっと気になるお店があるんだけどね」

「おお、いいじゃないか。気になるってことは行ったことはないのかな」

「うん。実は1駅で乗り換えして3駅向こうなんだ」

「あっ・・・(察し)」

なるほど。絶望的に方向音痴な花音がそんなところに向かおうものなら女子高生行方不明事件に発展してしまうだろう。

そうでなくてもそんなに遠くないファミレス(初期の方にやった合コンモドキ)にいくのすら迷ったくらいだ。

・・・スマホのマップを見ながらあんだだけ迷えるってある意味才能じゃないですかね？

「それなら・・・あっ」

ならば千聖といかないのか？と言おうと思ったが言葉を飲み込んだ。

「そういえば千聖も電車の乗り換えが苦手だったことを思い出したからである。」

この二人が遠くに出かけられない理由はそこにあり、この二人が一緒にそんなところに出掛けようものなら女子高生行方不明事件になるだけではなく迷いに迷ってさながらバイオハザードやがつこうぐらしのごとく、ゾンビのように街を徘徊するに違いない。

「むう〜なんか失礼なこと考えてないかな？」

「ソナコトナイデスヨ」

「棒読みだよ〜！」

「さていこうぜ」

「もう〜〜〜！」

膨れ顔の花音をからかいつつ俺たちは駅に向かって歩を進める。やがて駅に着くとICカードを片手に改札を進むとあつというまに駅のホームにたどり着いた。

「ふう・・・駅までは順調にこられたね」

「むしろ来られないほうがどうかしてるぞ」

「あはは・・・でもよかった、芽音くんと一緒に」

柔らかな笑みを浮かべながら安堵する花音。

あとは電車に乗って乗り換えを1回すればOKだ。そんなことを考えていると電車がやってきた。

「あ、電車来たね」

「そういいながら乗り込む花音。」

「・・・ん？ちよつと待てこれは」

「ちよ、待てい！それは・・・！」
「え？」

プシュー！

ホームに取り残される俺、そして一人電車に乗り込む花音。

パニックで目を回しながらあたふたする花音であるが現実是非情なもの、電車は発車しどんどん離れていき、やがて花音の姿は見えなくなる、

つまるところ俺たちはものの見事に分断されてしまった。

「うわくやつちまったなあ・・・」

電車に表示された“快速”の文字。

俺たちが乗り換える駅は次の駅。しかしあの快速が次に停まる駅は3駅飛ばして4駅目だ。4駅先なんて花音からしたら未知の領域だろう。しかもそこそこデカイ総合駅だから一旦降りて戻るのすらできるか危うい。

「これは・・・とりあえず花音にL●NE送るか」

S a k i n a r i : 花音、とりあえず落ち着け。俺もそつちに向かうから次の駅についたら合流しよう

松原花音：こめんね！うん、できるだけわかりやすい場所にいるから着いたら教えてくれると嬉しいな

S a k i n a r i : 了解

花音も思いの外落ち着いているようだ。

これで俺も次の電車に乗って向かえば解決。うむ、意外と何とかなりそうだ。

・・・なんて思っていたのであるが。こう見えて焦りが出ていたのか、そのときの俺はある不幸が襲い掛かりつつあることに気が付いていなかった。

※

花音が飛ばされたであろう4駅先についた俺。うん、相変わらずデカイ駅だ。

さて、花音はどこにいるのだろうか。わかりやすい場所にいるといつていたが、いつそ降りてすぐのところを待たせておいた方がよかったかもしれない。

「とりあえず連絡を・・・げっ!？」

スマホを出した俺の目に映るのは1%という数字。

コレが何を意味するか？答えは簡単である。スマホの充電残量だ。そういえば昨日はスマホも充電しないまま放置し徹夜で漫画を読み、そのまま家を出て松原家へ向かったんだ・・・

「とりあえず花音と連絡が取れるまで持ってくれ・・・!」

S a k i n a r i : 駅についた。どこにいる？

送信。早く、早く返事を・・・!

ピー

そんな願いなどしらねーよといわんばかりに鳴り響く無機質な機械音。それは充電量がゼロになったことの通告であった。

「なんという・・・そうだ、モバイルバッテリー!」

俺は足を動かし、花音の姿を探し始めたのであった。

※

「うわあくおつきい駅」

なんて感心しているけど心臓はばくばく言ってる。

私が早とちりしたせいで芽音くんとはぐれちゃって、しかも来たことがないような大きな駅にポツンと一人。

不安しかなかった。

「でもすぐ来てくれるっていったから大丈夫だよね・・・？」

そう思いながらとりあえずわかりやすい大きな時計の足元に移動した。

他にも人がたくさんいて、どうやらここは待ち合わせスポットとして多く使われているようだった。

ピロント

S a k i n a r i : 駅についた。どこにいる？

構内を歩きかう人たちをぼんやり流れていたらスマホが反応した。どうやら芽音くんが駅についたみたいだ。

松原花音：大きな時計の足元にいるね

私でもわかったんだから芽音くんならすぐにわかると思う。

そう思って待っていたけど5分経っても10分経っても芽音くんは現れない。

それどころかL●NEに既読すらつかない。
もうすぐ芽音くんと合流できる。そんな安心感を抱えていた私は
徐々に不安を募らせていく。

「おかしいなあ・・・そうだ」

私は電話をかけること試みる。もしかしたらうまく受信できてないだけかもしれない。電話なら・・・

“ おかけになった電話は、電波の届かないところにいるか電源が入っていないため、かかりません。おかけになった電話は・・・”

「えっ・・・？」

おかしい。ほんの10分前までは普通にメッセージが届いていたのに、それが急につながらなくなるなんて。

「もしかして、何かあったのかなあ・・・」

でも騒ぎが起こっている気配はない。もし芽音くんの身に何かあつて、仮に事件が起こっているんだとしたら少なからず騒ぎになっているはずだ。

「改札の方へ行つた方がいいかな？」

そうだ、もしかして電池切れとか落として壊れちゃったとかかもしれない。
それなら改札の方に行けば絶対に会えるはずだよね・・・？

「大丈夫、来た道に戻るだけ。来た道に戻るだけだから・・・」

改札からここに時計までそんなに歩いた記憶はない。なら来た方に
戻るだけで改札に行けるはず・・・いけたはずなのに。

「どっ・・・？んっ・・・？」

私の目の前に広がるのは知らない風景。少なくとも私が来た改札
出ないのだけは確かだ。それどころか駅の構外に出てしまっている。
ふええええ・・・こんなところで方向音痴が発動しちゃうなんてえ
く・・・

「しよ、しょうがないね。また時計に・・・時計に・・・」

私は気づいてしまった。

「どうしよう・・・どっちからきたかわからなくなっちゃった・・・」

その事実気付いてしまった私の心は不安と焦りでいっぱいにな
る。

「ふえ・・・ふえええええ・・・」

そしてその不安は限界を迎えてしまった。そのまま私は人目をば
ばかり隅に移動すると・・・静かに泣いてしまった。

—どうしよう

このまま芽音くんに見つけてもらえなくてこのまま動けなくて・・・
どうしたらいいんだろう。

冷静になって考えれば駅員さんに頼ったり、構内の交番にいたり
いくらでも手段はあったのだけれど、この時の私はそこまで考える余
裕なんてなかった。

「嫌だよ・・・芽音くん・・・芽音くん助けてよお・・・」

思わず読んでしまう芽音くんの名前。でもこんな喧嘩にかき消されるような小さな声で呼んだところで聞こえるはずが――

「ああ。ごめん花音、待たせた」

「え!?!」

「やっと見つけた」

聞きたかった声、見たかった顔。

それを視認した私はものすごい安心感を覚え、体の力が抜けて足がガクンときてしまう。

「おっと！大丈夫か？花音」

そこには額に汗を浮かべ、息を切らした芽音くんの姿があったのであった。

※

改札にはいなかった。そして一番目立つ時計の足元。

いるのだとしたらここかと思っただがそこにも花音の姿はない。

「いったいどこに行ったんだ・・・?」

俺は俗芽音としてではなく、松原花音ならどうするかという頭に切り替え考える。

まず俺と連絡が取れなくなったらどうするか。

もしここで待っていたのなら待ち続けるか、確実に合流できる改札に向かうだろう。

ここにいない時点で前者はハズレ。ならば後者であるが……
改札からここに来る間はすれ違わなかった。ならば改札方面へは
行っているのか確実だ。

「待てよ……改札に行こうとしたのなら……？」

端から見たら意味不明に見えるだろう。

だが待て。相手があの花音なら一つ可能性が浮上する。そう“改
札に向かおうとしたが向かえていない可能性”だ。

「ならばこっちか」

俺は改札の反対側の道に体を向ける。いけるルートは2つ。そし
て俺はあることに気が付いた。

「似てるな」

そう、2つのうち一つは改札方面へ向かうルートに雰囲気や見え方
が似ているのだ。ここで俺は花音はこちらへ向かったことを確信す
る。

そう答えを導き出してからは早かった。

「見つけた」

目線の先。見慣れたサイドテールの女の子が隅っこでしゃがんで
いた。

「嫌だよ……芽音くん……芽音くん助けてよお……」

近づくと俺の名が聞こえた。

いけないな。こんなに怖がらせてしまうなんて……

花音ママに任された大切な娘さんを泣かせてしまうとは情けないばかりだ

「ああ。ごめん花音、待たせた」

「え!？」

「やっと見つけた」

驚く顔。そして同時に安堵する雰囲気伝わってくる。

「ほんと、ごめん。携帯の電池切れちゃって」

「芽音くん・・・芽音くん!」

「うお!？」

胸に響く衝撃。俺は一瞬事態が呑み込めないでいるが、数秒して把握した。

「ちよ、花音!人前!人前!」

「ふええええ・・・うえええええん」

「ああもう収拾がつかない!」

ひたすら安堵の雰囲気が伝わってくるが花音は泣き止まない。

“うわ・・・あいつ女の子泣かせてるぞ”

“サイテー・・・”

“でも泣き方尋常じゃないよ・・・?大丈夫・・・?”

うわああああああ注目集めてるうううううううう

何とか花音を・・・花音を落ち着かせなければ・・・!

なんて考えていたわ俺であるが、そんな願いは虚しく砕け散ることとなる。

「あー君たち。こんなところでなにしてるの？」
「まじっすかー……」

その声の主は……日の丸親方、見慣れた青い制服を着てこれまた見慣れた帽子をかぶり、腰に物騒な黒光りするオモチャをぶら下げる公務員の姿であった。

※

「うう……取り乱してゴメンねっ」

「もう済んだ話だ。問題ないさ」

あのまま交番に連行された俺たち。しかし事情を話すとすぐに解放してくれた。

『もう彼女泣かすんじゃないぞ!』

なんてことを警官に言われたが余計なお世話だしそもそも彼女じゃねえ。

なんていうのもめんどくさかったので生返事だけして出てきたわけだ。

「でもさ……芽音くん。彼女だつて。そんな風にみえるのかな……?
?えへへ」

「どうなんだろうな。まあ男女が並んで歩いてりゃ付き合ってる認定したがる奴はおおいからな」

はずがしげに笑う花音はやはり可愛い。でも親友。異性として見られるかといわれたら……

「……!?!」

「……？芽音くん、どうしたの？」

俺は目の前に立つ、ある人物の顔を視認すると目ん玉をひん剥いたという表現がぴったり合うくらい、その人物を凝視してしまった。

楽しい時間というのはあつという間に終わるというが、それは楽しいから時間の流れが速くなり、楽しいまま終えることを意味する。

故に、今この状況はその要件を満たさない。

「なんで……お前がここに」

「芽音くんやつほー。ねえねえ新しい学校でも暴力振るってるの？」

蘇るトラウマ。

そう、そいつはある意味、俺がかつて停学に追い込まれた原因を作ったヤツだ。

「なによー。久しぶりに地元の友達に会えたんだからもつと喜ぼうよ？……って隣のその子はなんなのかな？」

俺はあの日のことを思い出す。

思い出しくもないあの日のことを。

第10話 稀代の悪女

ここからの話を進めるにはまずは俺の過去を話しておかないといけないだろう。

なぜ俺が停学にまで追い込まれ、地元を離れるハメになったのか。時は遡り1年前。

当時中学3年生であった俺は全中剣道大会（剣道の全国大会）で準優勝という土産を引つ提げ、すでにスポーツ推薦で剣道の名門高校に進学が決まっております、あとは中学生生活を円満に終えるだけという状態であった。

まあ周りは受験モードの奴もいたし、暇なのでトップとまではいなくてもそこそこの進学校でA判定がとれるくらいには勉強は続いていたわけではあるが、今は関係ない。

「芽音、学校いこうぜ」

「ああ、待たせたなカケル」

朝、俺の家に迎えに来たこのサワヤカ野郎。こいつは好本翔（よしもとかける）

俺の幼稚園からの幼馴染で、所謂親友と呼べる存在である。

「なんか嬉しそうじゃん？」

「お、わかつちやう？」

カケルはその体から漏れ出す喜びの雰囲気隠すことなく俺に話を始めた。

「実はさ、昨日彼女ができたんだよ」

「マジ!?そっかーお前にも春が来たかー・・・相手は？」

「同じクラスの清田美緒」

「大人気どころじゃん。やるなーお前」

清田美緒。クラス的女子ではまさに中心人物と呼べる人物で人当たりの良さ、見た目の可愛さなどをとっても大人気のクラスメイトである。

「すげーな。カケルから告ったのか？」

「いや、向こうからだよ」

「ほんとすげえなお前。まあお前もテニス部のエースで女からはかなりモテるし不思議でもないか」

「おいおいやめろって。それにモテるのはお前もじゃん。それに剣道で全中準優勝って普通じゃねーよ。でもなー．．．ホントは恥ずかしいからクラスの誰にも秘密って言われてるんだけど芽音ならいいかなって思っで。あ、お前も秘密にしてくれよ？」

「わかってるよ」

ありきたりな朝。いつもと違うところは親友に彼女ができたことくらいだ。

大変微笑ましい。カケルはいい奴だしな。

しかしこれがすべての始まりだった。この日のカケルの報告が、今に至るまでの俺の道筋を決めたのであった。

※

とある休日。俺はブラブラと数駅向こうの繁華街に出ているのであるが、そこであるものを見てしまった。

「．．．．？あれは清田と．．．」

町を歩くカップル。その片方はクラスメイトの清田美緒。カケルの彼女だった。

「隣を歩くのは・・・アレ？」

しかし隣を歩くのはカケルではない。同じグループに属するクラスメイトの男子生徒でだ。まあモブだしA、とでも称しておくか。

「・・・まさかな」

俺は気づかれないように二人の後を追った。二人がカフェに入るのを見届け、少し時間をおいて入店すると話は聞こえるが向こうからは見えない配置の席についていた。

悪趣味だとは思うが俺の勘違いならそれでいい。違うという確証が持てたらすぐに帰ろう・・・そう思っていた。

だがそんな期待は瞬時に打ち砕かれた。見てはいけないものを見てしまった気がした。清田とAの会話から察するに、明らかに二人は付き合っておりかなり生々しい話までしているのを聞いてしまったのだ。

「そろそろいいっつか」

話を終え、カフェを出る二人の後ろ姿を見ながら俺もそれに倣って出る。どこまでも悪趣味だし不安しかなかったが・・・体が動いてしまったのだ。

その後二人はネカフェの個室に入ってしまった。俺はその隣に気付かれないように入りじつと耳を澄ませた。

「んん・・・」

艶やかな声に布が擦れる音。それを聞いた瞬間、俺は目の前が真っ暗になった気がした。この薄い壁を隔てて、二人は確実にやっている。

カケルにいうべきか？乱入して止めるべきか？そんな思考がグル

グルと頭を巡ったまま動けなくなり、気が付けば二人は行為を終えて個室を後にしていた。

そんな無音になった空間の隣で、俺は未だ考えがまとまらず茫然と座っていたのであった。

※

「俗君、話って何？もしかして告白かなー？ごめんねーあたし、もう彼氏いるからさあ〜」

翌日、俺は昨日の件を聞くために清田美緒を人気のないところに呼び出した。

現れた清田美緒が纏うのはいわゆるゆるふわな雰囲気、というのであろうか。

悪意のないオーラを放ちながら、俺の呼び出しにノコノコ来たヤツはあつけからんという。

「それはカケルか？それとも昨日一緒に出掛けてたアイツか？」

「……どこまで知ってんのよ!??!?!」

まどろっこしいことはなしに核心に迫る話を始めたのであるが、その刹那、俺の全身を刺すように禍々しい気配が清田美緒からあふれだす。

俺はそれに圧倒されないよう、気を強く持ち話を続ける。

「二股かけてんのか？」

「違うわよ二股なんてかけてない」

俺の問いに即否定の言葉を発する清田美緒。いやいやどう考えたってそうだと心の中で突っ込む。

「とぼける気か？まあなんでもいい。ただカケルは俺の大事な友達なんだ。本気じゃないならあいつを解放してやってくれ。あいつを悲しませるようなことはして欲しくないんだ」

「うわー男臭い友情ね。うん、断る！」

「なんだと・・・？」

「別に恋愛の形なんて自由じゃん？中学の恋愛なんてその場限りのものだしさ。もしくは数多い男の中から運命の人が現れるかもしれない。だから好きって思った人とはみんな付き合う。翔君も、あの人もね。幸い容姿には恵まれて生まれたし、告白して断られることなんてないから」

こいつ壊れている・・・

そしてものすごい自信だ。確かに清田美緒程の見た目なら喜んで付き合ってくれといいたくなるだろう。・・・本性を知らなければな。ん・・・？ちよつと待てよ。つてことは・・・

「二股してないってのは本当みたいだな。二股は、な。・・・いったい何股かけてんだお前？」

「んー・・・クラスの子が5人でしょ、他のクラスとか学校とかを含めるとー・・・両手じゃ足りないや」

—恐ろしい。

何かおかしいの？といわんばかりにあっさりという清田美緒に俺は純粹に恐怖を感じたのだ。

まさに男を手玉に取り弄ぶ稀代の悪女。15歳とは思えない恐ろしき。

「そうだ！俗君も私と付き合い合おうよ！話してたらなんか好きになって来ちゃったから！」

「ふざんけんのも大概にしろ。さっきまでの話を聞いて」はいそうですか」というと思うか？」

「え〜？いいじゃん。同じ穴の貉になっちゃえば秘密も共有出来て、黙ってれば翔君との関係も崩れない。win-winだよ？」

「ふざけるな！何がwin-winだ。そんなもの、お前しか得をしない！それを基にできたできたwin-winな関係なんて虚像だろ!!」

「さつきもいったよね？あたしつてさ、告白して拒否されたことないの。アンタ、その経歴に泥を塗るつもり？付き合えばいっぱい尽くしてあげるし、そのうち本命になるかも！この体だって好きにさせてあげるよ？」

そういつて自分の服をまくり上げる清田美緒。下着が見えようとしていのに何の羞恥も焦りも伝わって来ない、

俺はそれを見た焦り、今までの言葉、そして言動に俺はただただ怒っていた。そして、それと同時に得体のしれない相手への恐怖を感じていたのだ。

「やめろ!!」

いろんな感情が入り混じった俺はたまらなくなり、大声でその行動を制する。

「もう話すことはない。俺はもう行く」

そういつて踵を返す俺。こいつは本当の悪女だ。こんなやつを放置していたら傷つく人がいっぱい出てしまう。

ひとまずカケルだけにでもこのことを・・・

「あたしの邪魔はしないでよ？何か余計なことをしたら・・・アンタの大事な翔君がどうなっても知らないから」

そう考えていた矢先に放り込まれる一言。

“こいつはなにをしでかすかわからない”

直感的にそう思った俺は、これからどうするべきなのか考えがまとまらないまま、教室へ戻ったのであった。

※

その日は眠れなかった。そして一晩中悩んだ。俺はどうするべきなのか？

今日もカケルが迎えに来て通学路を歩く。表面上はいつも通りを装うが教室について清田美緒の姿をみた俺は冷静でいられるだろうか。

そんなことをひたすら考えていた。

—しかし、その不安はすでに災厄へと変わっていることを俺は教室についた瞬間、知ることになるのである。

「もういつペン言ってみろ!!!」

「ああ！何度でも言ってみろ!!!勘違いして舞い上がって人の彼女に手を出すんじゃない!!!」

教室内に響き渡る怒号。一人は以前、清田美緒と一緒に出掛けていたクラスメイトのAだ。

もう一人は同じくクラスメイトで俺やカケルと同じグループに属するBだ。顔を真っ赤にしてブチきれている。

「おいどうしたんだよ？朝から怒鳴り散らしちゃってさ」

「あ、カケル！聞いてくれよ、Aが俺の彼女と付き合ってるって言うんだ！しかもそれを勘違いって言いやがって……!」

「当たり前だろ!?!それにお前、ちゃんと俺がデートしてるとこ見たんだろ？それがなによりの証拠じゃねえか!」

この瞬間、俺は察してしまった。

BもAと清田美緒が一緒にいるところを見てしまったんだ。

Bも清田美緒と付き合っているから”どういうことだ?”となり、Aに話を聞いたならこんな感じになったのだろう。

「とりあえずAもBも落ち着けて。話まとめると、二人とも同じ人と付き合ってたわけわかんなくなってるんだろ?何か誤解があるのかもしれないから冷静に話そうぜ?」

とりなすカケル。だが俺はこの時点で嫌な予感が止まらなかった。なんとか場所を変えて冷静にならないといけない。そんな気がずっとしているのである。

だが、そんな願いは虚しく次なる修羅場がすぐさま生まれたのであった。

「とにかく!美緒は俺と付き合ってるんだ!!勘違いでいつまでもグダグダ言ってるじゃねえ!」

ついに放り込まれた爆弾。

ついに、奴の名前をいってしまった。

当の本人はまだ登校していない。だがそんなもの関係ないと言わんばかりに教室内は強烈な怒りと困惑のオーラに包まれる。

「美緒・・・美緒だと・・・?それは清田美緒のことか・・・?」

カケルは信じられないといった風に問いかける。

「そうだよ!」

「ハハ・・・なにをバカな。だって、美緒は俺と付き合ってるんだぞ・・・?」

そう口にした瞬間、カケルだけじゃない。他にも2人、名乗りを上げた。

こいつらもモブなのでC、Dとしておく。

「待てよ、俺も付き合ってるんだけど……」

「俺も……」

もはや意味が分からない雰囲気に含まれる。

そういえば清田美緒は言っていた。クラスに5人、付き合っている奴がいると。

AとD、そしてカケル。ピッタリ5人だ。

「おはよく……ってなにこれ」

そんな中、空気を読まずほんわかとした空気を出して入ってきたのは稀代の悪女。

本件の最大の当事者で元凶である清田美緒である。

「おい美緒！ どういうことだよ!?! BもCもDもカケルもお前と付き合ってるって……! ウソだよな!?! こいつらの勘違いだよな!?!」

Aが叫ぶように問いかける。それを聞いた瞬間、清田美緒の顔がこわばりこちらを睨みつけるように見た。

“アンタ、バラしたわね?”

清田美緒の目はそう言っていた。だが俺はそれに対し、小さく首を横に振る。

「あーあ。遊んでたのバレちゃったか。ゴメンネ、みんなは本命じゃないんだ」

清田美緒はそう言い放つ。そしてその瞬間、5人の顔は絶望色に染まる。

「それにく……あたしの本命は芽音だから！ねっ！芽音!!」

「は?!?!?」

!?!?!?

突然そんなことを言い出す清田美緒。当然大嘘であるが頭に血が上っているAをはじめ、他の4人も驚愕と怒りの雰囲気醸し出していた。

「芽音……?どういうことだよ……?」

「カケル！違う！これはこいつのウソだ!!」

「お前……俺のことバカにしたのかよ……?お前が美緒の本命で、遊ばれてる俺のことをさ……?」

「違う！カケル、話を聞いてくれ!!」

「言い訳すんなよ!?!もし本当に付き合っていないのなら美緒がお前の名前を出す理由がない……!」

「カケル！冷静になれ!」

焦る俺。そしてそんな俺を見て、清田美緒はニヤリと邪悪の笑みを浮かべていた。

「さきなりいいいいいいいいいい!!」ドゴツ!

「ぐあああ!」

不意打ち。なんと横からAが殴りかかってきた。

「A、落ち着け！すべて清田美緒のウソだ!」

「……聞きたくない、聞きたくない……美緒、何かわけがあつてこんなことしてるんだよね？俺だけが好きなんだよね……?」

自分に言い聞かせるように言うA。それを見た俺はついにイライラが爆発してしまった。

「クソ女に騙されてここまでやりやがって!!! テメエは自分の意思を持ってねえのかクソ野郎!!!」ドゴツ!!

「がああ・・・て、テメエ芽音いいい!」

「叫んでキレて暴れば何でも思い通りになると思うなバカ野郎! 頭を冷やしやがれ!!!」

さらなる攻撃を加える俺。こうは言ってるが俺もかなりキレていたので説得力などなかった。

「・・・もうどうでもいい。お前ら全員ぶちのめしてやる!!」ドゴツ

「いてええええ! てめえなにすんだゴラア!!!」

放心状態になったかと思えばまたブチ切れたAはBを殴る。周りにいる奴らを次々と殴っていく。C、D、そしてカケルにも。

さらにそれを止めに入った別のクラスメイトも次々と巻き込まれる。

そいつらも殴られたことによる怒りでブチ切れ、俺たちのグループ全員を巻き込んだ殴り合いのケンカが始まってしまったのであった。

※

血の海・・・とまではいかないが汚れた教室。

机も椅子もメチャクチャになっている。俺たちのケンカは教員が総動員で止めにかかり、ようやく終息した。

その日の授業は中止になり、俺たちは全員病院に連れていかれケガの治療を受けた。

全員停学1か月、推薦入学が決まっていた者はすべて取り消し、さらに反省文。

これが俺たち全員に下された処分だ。

停学があげ登校すると、今まで仲の良かったクラスメイト達は俺を触ってはいけないモノのように振る舞った。グループは当然崩壊、教員も腫物を扱うかごとくケンカに参加したメンバーには無関心を貫いていた。

俺が清田美緒とは付き合っておらず、奴に言いがかりをつけられただけというのは幸い理解してもらえたが現状はコレであった。

さらにあの一件以来、学校に来なくなつた奴も多くいた。ちなみに俺は親がそれを許さなかつたため居心地の悪い中ひたすら登校した。それに推薦が取り消しになってしまったので受験もしなければならぬ。

そして清田美緒も姿を消した。さすがに本性や派手なオトコ関係が暴露されて学校に来られるほどの強メンタルはお持ちでなかつたようだ。おそらく最後にかました俺と付き合っている宣言はどうせ死ぬなら道連れに精神だつたのだろう。

「ここにするか」

出し直しになつた進路希望調査。

俺はいろいろと調べた。そこで選んだのが花咲川女学園だ。

- ・ 顔見知りのいる地元ではないこと
- ・ 共学化によるテストクラスなので元々は中学からのエスカレーターが多い女子高であること

- ・ 故に男子と絡む機会が少なかつたはずで、清田美緒のようにクラスメイト達を手玉に取るような悪女に出会う確率が共学に比べて低い

というのが理由だ。

偏差値は十分足りているので、試験は余裕であった。

「色々あつたがこれで地元ともお別れか」

清田美緒という稀代の悪女に出会ってしまったばかりに起きてしまった悲劇。

地元での居場所を失い、子供の頃からの親友まで失ってしまった。もう俺には何も残っていない。

「どうせ、高校で出会う奴らも3年間だけの短い付き合いだ」

どれだけ仲のいい親友でも些細なことで友情が崩壊する。

友達を作らないこと。親友なんてもつての他。

本性を隠し、理想のクラスメイトを演じること。

決して深い関係にならないこと。

これが今回の件で俺が学んだことだ。だが、ここまで読んでくれた諸君はわかっていると思うが全然守れていない。

それはやはり松原花音、白鷺千聖という特別な存在に出会えたからだ。

それなのに・・・再び俺は出会ってしまった。

—あの稀代の悪女に

第11話 悪女との再会

「なによー。久しぶりに地元の友達に会えたんだからもっと喜ぼうよ？……って隣のその子はなんなのかな？」

目の前にヤツがいる。

—清田美緒

俺の……俺たちの人生をめちやくちやにした張本人は悪びれずに云う。

「あの芽音くん、この人は……？」

「はじめまして！清田美緒っていいまーす！んーとねー……芽音君の元カノでーす！」

「ふえええ!?も、もとかの……？」

それどころか大嘘まで吹き込む始末。

人に親友に手を出すクソさ加減は相変わらずのようだ。

「デタラメ言ってるじゃねえぞクソ野郎」

「まあ！クソ野郎だなんてひどーい！」

「大嘘つくからだろ。さっさと俺の前から消えろ」

「うわーそこまでいう？ねーねーアナタ、こんなのと付き合ってる大丈夫ー？こいつはねー暴力を振るって暴れたり、女の子に暴言を吐くDV気質満載の最低野郎だよ？」

「その子に話しかけるな。花音、いくぞ」

俺は一刻も早くこの場から離れたくて花音の手を掴む。

「ちよ、ちよつと待ってよ芽音くん！いたいよ……」

「あつ……ごめん」

俺は無意識に力加減を忘れて花音の手を掴んでいたことに気付き猛省する。

「ほーら、そういう男なんだって！ねえねえ、芽音君が何をやってきたか、教えてあげようか？」

「やめろ！今となつては関係ないッ！」

俺は再び清田美緒という女に恐怖する。何をしでかすかわからない意味不明さは健在で、俺がぼんやりと花音に伝えていた過去を克明に覚えている人物だ。

しかもかつて俺と親友を引き裂いた実績付きである。

“もし、花音が清田美緒の話を聞いて俺に対する態度を変えたら？”

“清田美緒の都合のいいように吹き込まれてそれを信じてしまったら？”

そんな恐怖が俺を襲っていた。そして清田美緒はそんな俺のことなどどうでもいいといった風で、問答無用で話を始めた。

俺がどうして暴力沙汰を起こしたのか、喧嘩の生々しい描写、嘘は言わずいかに俺が凶暴で恐ろしい人物かを脚色して話す清田美緒。正直清田美緒の本性を知らない人からすると本当のことに聞こえてしまうくらい説得力のある話し方をしたのである。

「・・・というわけ！暴力は振るうわ、女の子に暴言吐くわ・・・とにかくこいつから離れたほうがいいよ！」

「・・・あの・・・えっと・・・私、そもそも知ってるんです。芽音くんがその・・・人を傷つけてしまったってこと」

花音がそう言った瞬間、清田美緒の雰囲気が変わった気がした。

“想定外”

といわんばかりの雰囲気だ。

こう言つてはアレだが、花音は見るからに大人しく、争いを好まな

いように見える。清田美緒の目論見は俺の本性（脚色付き）を暴露して、花音にこう言わせたかったのだろう。

“最低、もう話しかけないで”

みたいな。しかし意外や意外、花音が俺の過去をある程度知ったうえで一緒にいることが判明したのだ。

自信満々に俺の罵詈雑言を並べた清田美緒からしたら困惑する答えだったのだろう。

「でも！暴力は暴力だし、それに女の子に暴言を・・・」

「それにねっ・・・！」

「・・・！」

ならば攻め方を変えよう・・・としたが花音はまたしても言葉を遮る。

「それに、知ってます。あの、芽音くんの口が悪くなる時は誰かのためになにかを言うときだって・・・」

「くっ・・・！」

「芽音くんと出会ってから、確かに怖い一面を見たり、口が悪いなあ・・・って思うこともあったけど」

「えっマジかすまん花音」

反射的に謝罪が出る俺。

「ううん。いいの。その・・・それは決まって私や千聖ちゃんのために何かをするときだったから・・・私は芽音くんがあなたの言うような人じゃなくて、他人のために行動できる立派な人だと思います」

花音は緊張気味に時々下を向きながらではあるがそう言い切った。

「な、なによ！せつかく人が親切で言ってあげてるのに!!あたしの忠

告を無視する気!？」

それに対し狂ったようにヒステリックを起こす清田美緒。こいつこんなに気性の激しい奴だったか？

「ふえっ!? えっと・・・あのですね。急に出てきていっばい芽音くんの悪口を一方的にいう人より、いままで一緒にいた芽音くんを・・・自分の目を信じたいなあ・・・って。えっと、それだけです」

※

すべて杞憂だった。

“花音が俺を見る目を変えてしまうのではないか？”と少しでも思っただけの俺をぶん殴りたい。

「花音」

「なにかな、芽音くん？」

喚く清田美緒を無視して奴の目の前を離脱した俺たちは電車に乗って自宅の最寄り駅を降り、帰路につきながら話していた。

「その、さっきはありがとね。奴にハッキリいってくれたさ、正直すげー嬉しかった」

「ちよつと怖かったけど・・・うん、私は思ってることを言っただけだよ？芽音くんがそんな人じゃないっていうのはわかってるし」「信じてもらえるってこんなに嬉しいものだな」

清田美緒と再会するという不幸があつたが、それを上回る幸福があつたので今の俺は大変気分が良い。

「でも花音があそこまで言ってくれてなんて思わなかった。いや、嬉しかったんだけどさ。なんかいつもの花音より強いというか、らしく

ないというか・・・うわ、何言ってるんだろ俺」

あたふたする俺。しかし花音はそんな俺の姿をみて考えるしぐさをしながら話し始めた。

「うーん・・・そうだなあ・・・それはね、私もちよつと思うところがあつたんだ」

「思うところ？」

花音は振り返り俺の目を見て、ほほ笑むとともにこう言い放った。

「私だって、大事な人を悪く言われたら怒るってことだよ」

その笑み、優しい声。それを直視した瞬間、俺は違和感を覚えた。胸がうるさい。それとなんか体温が上がってきた。なんというかとにかく変な感じだ。

花音も結構恥ずかしいことを言った、という雰囲気伝わってきた。顔がほのかに蒸気しているのが感じ取れた。

「あつ！お、おうち着いたね!?芽音くん、今日はありがとねっ」

「あ、ああ。ありがとう。楽しかったよ」

「じゃあまた学校でね！」

「お、おう。おやすみ」

なんとというか勢いよくわかれた俺たち。

花音が家に入るのを見送り、その場に立ち尽くす俺。

「えっ。ちよ、待ってよ。これなに？」

今までに経験のない感情。もしかしてこれが恋愛感情なんだろう

か？それとも特別な親友へ向ける類の愛情なんだろうか？

その感情の正体がわからない。

果たしてこれはなんなのか。俺は自問自答しながら帰路についてが、結局答えが出ないまま帰宅し、そのまま眠れぬ夜を過ごしたのであった。

第12話 困惑、そして安堵、そして・・・

清田美緒襲撃事件から1日。俺は昨日のこと、俺が感じたこと、そして現状を相談すべく千聖を頼ることにした。

待ち合わせは13:30で現在時刻は13:10。約束の時間まであと20分ほど。早く着くに越したことはないし、もしかしたら千聖はもう来ているかもしれない。

そんな何の変哲もない、ただ親友と会うだけの日のはずだった。俺はこの後に起きることなんて全く想像していなかった。いや、できるはずもなかった。

※

「まだ来ていないか」

待ち合わせ場所である羽沢珈琲店に到着すると時間は15分前。

千聖はまだ来ていないようだ。

そういえば午前は仕事が入っているといていたから、今の時間で来ていないとなるとギリギリか少しくらい遅れる可能性はあるか。

まあ俺が相談したくて呼び出したわけだし、それくらいは全然かまわないのだけれど。

「あ、芽音さんいらっしやいませー！」

「こんにちはつぐみちゃん。席いいかな？千聖と待ち合わせしてるんだ」

「はい！あちらの席どうぞ！」

「ありがとう。注文は千聖が来てからするよ」

「かしこまりました！」

元気いっぱいの声に迎えられた俺は席に着く。

するとほどなくして店の扉が開く音と、それを出迎えるつぐみちや

んの声が響き渡る。

「あ、千聖さんいらっしやいませ！芽音さん、来てますよ!!」
「ありがとう、つぐみちゃん」

千聖が入店し、こちらに気が付いたようで近づいてくる。

「芽音、ごめんなさい。待たせたわね」

「まだ時間前だし問題はないさ。仕事は順調か？」

「ええ、つつがなく」

さらに少し待つと千聖がやってきた。集合3分前。仕事から直行して間に合うとはさすが優等生だ。

「それで？今日は急にどうしたのかしら？」

千聖の質問から始まる会話。俺は昨日あったことを話した。

清田美緒の襲撃があったこと。花音に結果的に助けられたこと。また、中学時代の事件の詳細も話す。千聖といるときに清田美緒が襲撃してくるとも限らないし、なにより千聖には知っていて欲しかった。千聖も俺のかけがえのない親友だし、花音だけが知っているのは何か違うなと思ったからだ。結果的に花音は受け入れてくれたがすべての人がそうとは限らない。そんな不安は付きまとうが、意を決したわけだ。

「そう、話はわかったわ」

でも、なんだかんだ話すことに俺は特に抵抗はなかったようですんなり話せた。

“千聖なら大丈夫”

そんな謎めいた確信が俺の中にあつたことに気が付いたのは話が

終わってからだ。

「話を一つずつ整理するわね。まず一つ、その清田美緒さんがまた現れるかもしれない。これは了解したわ、私も警戒しておく。それとあなたが起こした事件だけど・・・」

「・・・うん」

「ふふっ・・・そんな心配そうな顔をしなくても大丈夫よ。話を聞く限り、悪いのはその清田美緒さんだし、何より芽音はしっかり反省してるじゃない。むしろあなたがどうしてそうなったのかはつきりと原因が聞けて良かったわ」

「・・・ああ」

「今度は急に安心した顔になったわね」

「そりやそうだ・・・俺にとつて最大の黒歴史だし、人によっちゃ受け入れてもらえない話だろうし」

「でも私には自分から話してくれた。大丈夫よ芽音。だからといって私はあなたから離れることはないし、話してくれたことは私への信頼の証と解釈することにするわ」

その言葉を聞いてどつと脱力する俺。大丈夫とは思っていてもやはり緊張するもので、その緊張は今ここに解消されたわけだ。

「目に見て力が抜てるわね」

「まあ・・・そうだなあ・・・うん、俺は今超安心してるところだ」「こんな弱気な芽音初めてよ。それくらいあなたにとつては重要なことだったのね」

千聖は微笑みながらコーヒーを口にすする。

さて、ひと段落ついたところで話題をもう一つの相談にシフト・・・むしろこれが本題といえることだ。

「それでだな、千聖・・・」

「わかってるわ。ねえ芽音。あなた、花音が好きなのかしら?」
「好きだよ。ただ正直恋愛の意味か……って言われると……わか
らん……」

そうなんだ。あるとき花音に抱いた感情。一晩かけてかみ砕いて、
ひたすら考えたが答えは出なかった。

俺は確かに花音に好意を抱いている。だがそれは……

「ここまで話したからかなりぶつちやけるけどさ」

「なにかしら?」

「同じような感情を千聖にも抱いてんだよね」

「……?!?!?!」

そう言い放った瞬間、千聖は顔を紅潮させ、目を見開いた。

「な、な、なにを言ってるのかしら!?!」

「おお、目に見えて動揺してるね」

「当たり前じゃない!急に変なこと言うから!!」

大きな声を上げる千聖につぐみちゃんがカウンターの奥から「何か
あったんですか!?!」いわんばかりの目で見てる。

俺はアイコンタクトでなんでもないと返すと「そうですか、よ
かった……」みたいな感じで奥に戻っていった。

「ごめんなさい、少し取り乱したわね」

「少し……まあうん、少しね」

「何か言いたいことがあるのかしら?」

「いえ、なんでも」

さすがにいじりすぎたようで千聖の目が怖い。うん、真面目にいこ
う真面目に

「まあそういうわけだからさ。恋愛とか……そういうわけじゃないと思うんだよね。もしそうだったら二人の女性に手を出すクソ野郎じゃん」

「……それもそうね。うん、わかったわ。親友として、人として好きってことで解釈しておくわね」

「あ、その表現ナイス。一番しつくりくるかも」

なるほど、人として好き。うん、それだ。

「なんか胸のつつかえがとれた」

「それならばよかったわ」

その後俺俺たちは談笑しつぐみちゃんが新作の試食をしてくれな
いかと申し出てきたのでそれにあやかることにした。

ちなみにそんなことをしている間につぐみちゃんの友達もやって
きたのであった。

聞けば新作を出すときはいつもその友達に食べてもらっているら
しい。

※

羽沢珈琲店を出ると俺たちは商店街をぶらつくことにした。

この商店街は若い子が多く活気がある。肉屋の店先で元気に呼び
込みをしている子をはじめ明るい雰囲気があるので居心地が良い。

「ありがとうございますー！」

俺は明日の朝飯用に通りがかった女の子が店番をしていたパン屋
でいくつかパンを買い、おやつにひとつつまんでみた。

「お、このチョコココロネうんまい」

店員の女の子がオススメだというチョコココロネを一口齧ると最高の触感を持つパンに濃厚で市販のものとは明らかに違うチョコクリームの絶妙なバランスに、思わず舌鼓打つ。

「千聖も食うか?」

「え?・・・むぐつ」

喰うか?と聞いておきながら口に突っ込む俺。

そういや以前も同じようなことをしたな。あんときは弁当だったけど。

「むぐむぐ・・・急に何を・・・」

「いや、食べたそうな目をしてたから」

「芽音・・・あなたねえ・・・」

さっきのことがあって嬉しくなっているのか明らかに調子に乗る俺。

あーまた怒られる・・・でも雰囲気も口調も本気で怒っているように思えないから何とも可愛いものだ。

「もう・・・」

そんな俺の雰囲気を感じ取ったのか千聖はしようがないわけねえみたいな感じのジト目だ。

いやー楽しいなあー

やっぱこうでなくっちゃ。

キイイイイイ!!!

「え．．．？」

楽しい時間はあっという間に終わる。そんな言葉を耳にしたことはないだろうか。

しかしそれは楽しくて時間を忘れてしまうという意味であり、理不尽な理由により終わらせていいものではない。

「千聖!!!!!!」

ドンッ!

突っ込んでくる鉄の塊。

そのフロントガラスの奥には老人が座って目を見開いている。

そしてそれはあろうことか俺たちの．．．千聖の方に突っ込んだのだ。

ドガアアアア!

ソレはそのまま壁に突っ込む。

「ははっ．．．フラグは回避してやったり．．．だ!」

車を視認した瞬間、俺は咄嗟に体が動いた。

俺はとっさに千聖を抱きしめ、そのまま全力で足に力を込める。

めいっぱいの力で跳躍した俺は間一髪のところまで車を回避し、そのまま跳躍先の壁にぶつかっただのである。

「お約束通りどっちかが死ぬなんてあつてたまるかよ．．．!千聖、大丈夫か!」

「．．．．．」

「おい千聖．．．?千聖!!」

死を回避したはずの俺たち、しかし俺の腕の中にいる千聖は……目を閉じてなんの反応も返してこなかったのである。

※

救急車で病院に運ばれる千聖。ここは弦巻総合病院。都内でもトップクラスの大規模を誇る総合病院だ。どうやらこのあたりの地元の名士がかなりの会社を経営しているらしく、この病院もその一つのことだ。普通であれば病院一つ経営するのに精いっぱいなもんだがあくまで事業の一つだというのだからすごい話である。

「芽音くん……!」

「よお花音」

廊下の椅子に座っていると花音がやって来た。

「千聖ちゃんは大丈夫なの!？」

「ああ……壁に当たったときに頭を打ち付けてしまったみたいでな。検査をしたが命に別状はないそうだ。疲労もたまつてたみたいで目を覚ますのに数日かかるだろうとのことだが……今親御さんが病室で医者のお話を聞いているところだ」

「よ、よかったああああ……」

俺の報告を聞くと花音はその場にへたり込む。

どうやら安心して力が抜けたようだ。

「あとで一緒に行こうか」

「うん!」

そんな感じでしたばらく話していると、病室から親御さんが出てき

た。

「俗くんだったかな？」

「あ……どうも」

相手は千聖のお父さんだ。後ろではお母さんは頭を下げている。

しかし二人ともものすごい美男美女だ。年齢でいうと40代中盤くらいだがオーラが違う。

「娘が世話をかけたね」

「いえ……僕がもつとちゃんと避け切れていれば……」

「あの状況の中であれだけ動ければ大したものだよ。知らせを受けたときは血の気が引いたが……君のようになしっかりした子が側にいてくれて不幸中の幸いだったね。ただ娘との交際を認めるかどうかは別の話だよ？」

「はは……そんな恐れ多い」

冗談っぽくいつてくる。雰囲気は優しいものだ。

てつきり”お前がもつとちゃんと見ていけば！”とか”お前が千聖と遊ばなければ！”とか”娘を傷つけやがって!!”みたいに責め立てられると思っていたが、冷静に状況判断ができる人のようだと安心した。

「そちらの方は？」

「あ、松原花音と申しますっ……！えっと千聖ちゃんの友達です！」

「そうか、来てくれてありがとうね。千聖も喜ぶよ」

その後色々なことを聞いた。

どうやら事故の原因は運転手の老人がアクセルとブレーキを踏み間違えての暴走らしい。

このあと老人の親族が謝罪に来るそうだ。ちなみに老人も大げが

はしたものの命に別条はないらしい。いやあ死者が出なくて本当に良かった。

「それじゃあ僕たちは色々手続きもあるし、いったん行くよ。よかつたら二人で改めて千聖に会いに行ってくれと嬉しい」

「わかりました。でも一応、改めて言わせてください。娘さんにケガをさせて申し訳ありませんでした!」

頭を下げる俺。するとそれに対して返答したのは千聖のお母さんだ。

「俗さん、頭を上げてください。私たちはあなたに感謝こそすれ責めるつもりは毛頭ありません。これからも千聖と仲よくしてやってください」

「そういうことだ。まあ入院中千聖が退屈しないように構ってあげてよ」

そういつて親御さんは去っていった。

「いい人だね、千聖ちゃんのお父さんとお母さん」

「ああ。千聖があんだけ優しい子になるもの納得だ」

「じゃあ千聖ちゃんに会いにいこっか?」

※

千聖が入院してから数日。

あれから千聖のマネージャーさんや事務所の人などが入れ代わり立ち代わりで訪れた。

俺であるが、空いた時間は基本見舞いに来ていたので、看護師さんからは「彼女さん早く目を覚ますといいわね」とまで言われてしまわないんだかなあといった具合だ。

ちなみに今日、花音はバイトがあるとのこと遅れて見舞いに来るらしい。先ほどもうそろそろつくと連絡があったのでもうすぐ来るだろう。俺は花音を待ちながら病室の椅子に座り、ぼんやり外を眺めていた。

「芽音くん」

「・・・よう」

数分もしないうちに花音が到着した。

「様子はどうかかな・・・？」

「いつも通りだ。よく眠っている」

千聖は依然目を覚まさない。医者の話だとそろそろ目を覚ましてもいいころなのであるが・・・

「なあ、今日もいい天気だぞ」

俺はちよつとしたおふざけでシリアスな雰囲気を出してみる。

そして眠る千聖の顔を確認しようとのぞき込む。

「・・・!!?」

「なにシリアスな雰囲気を出してるのよ」

その目線の先には千聖が目を開けて俺の方を見ていた。

「千聖?!俺のことわかるか?自分のことわかるか?」

「そんな大きな声出さなくてもわかるわよ、芽音・・・ここは病院?」

「ああそうだ。花音もいるぞ」

「千聖ちゃん!」

「とりあえずナースコール!」

俺はナースコールを押し、千聖が目覚ました旨を伝えると医者がすぐに来た。

その後、検査をするということで俺たちは外に出され、ちょうど見舞いに来ようとしていた千聖のお母さんも合流し、そちらに任せると俺たちは待合室で待ったのあった。

※

検査が一通り終わり、再び病室に入ることを許された俺たち。時間はだいぶ遅くなったが千聖のお母さんが気を利かせてくれた形だ。

「うええええん千聖ちゃあああん」

「よしよし、私はもう大丈夫よ」

緊張の糸が切れたのか泣きながら千聖に抱き着く花音。

命に別状はなくすぐに目を覚ます。そうわかってはいてもやはり実際に目を覚ますまでは不安だった気持ち、俺にもよくわかる。

花音が大泣きしているせいで逆に落ち着けているが、俺も結構ヤバかったりする。

「目が覚めて本当に良かったよ」

「心配をかけたわね」

俺は目を覚ました千聖がハキハキ喋っているのをみて安堵する。

「でもよかった。ずっと目を覚ますのを待ってたんだよ?」

少し落ち着いた花音も会話に加わる。

記憶とんだ様子も無く、会話もはつきりしているようだ。

「本当にごめんなさい。それにお医者様から聞いたわ
「うん？」

「あなたが助けてくれたってことを。改めてありがとう
「気にすんな。俺は俺のやれることをやっただけだ」

千聖は親御さんや医者からことの顛末を聞いたように礼を言っ
てきた。

「まあ千聖を無傷で守ることができなかつたし、一応謝らせてくれ。
申し訳ない」

「頭を上げて!?あなたにそんな風にされると調子が狂うわ・・・」

「ふふっ・・・千聖ちゃんも芽音くんもいつも通りだね!」

花音が笑顔を見せることで場の空気は一気に和む。

俺たちはいつもの親友に戻り、しばらく病室で歓談に耽った。

「ふう・・・たくさん話したらなんだか疲れてしまったわ」

「数日眠ってたんだから無理もないさ。病み上がりだし今日はこの辺
にしとくか」

「そうだね。千聖ちゃん、また明日来るね?」

「ありがとう、二人とも。あっ・・・」

俺と花音が帰り時支度をはじめ、席を立って所で千聖は何かを言
かけた。

「どうした?」

「えっと・・・ヘンなことを聞くのだけれど・・・」

※

「なあ花音。さっきのアレどう思う?」

「あー・・・帰り際のアレだよな?」

『えっと・・・ヘンなことを聞くのだけれど・・・前にもこんなことがなかったかしら?』

『前にもって、千聖が事故に遭ってこういうシチュエーションになったってことか?』

『そういうことになるわね』

『うーん・・・さすがにないと思うなあ・・・』

『確かに。頭を打って混乱しているのもあると思うし、一回ゆっくり休んだらどうだ?』

『・・・それもそうね。ごめんなさい、ヘンなこと言って』

帰り際に千聖が放ったあの言葉。

しかしながら俺も花音も全く身に覚えがないのでただただ困惑するだけだ。

「千聖も疲れているだろうし、ゆっくり回復を待つしかないな」

「そうだね。明日からお見舞いいこうね?」

「ああ」

平和が戻った夕暮れの帰り道。いつもの親友といつもの帰り道を歩く。

しかし俺は安心感で油断していた。全く気付いていなかった。

「・・・みつけた」

背後から狙う、悪意の正体に。

― 紐解の章 ―

第1話 白鷺千聖

頭に強烈な衝撃を感じた直後、眩む視界。

「あーっはっはっはっはっはっは!!!」

うつすらと見える風景には、高笑いする清田美緒と病院着のまま顔を俯かせて落胆する千聖、そして何かを思い出したかのように目を開く花音の姿があった。

「いったい・・・なん・・・で・・・」

声がかうまく出ない。それどころか視界はどんどん悪くなっていく。頭の名がグニヤグニヤになる感覚が襲い掛かる。

つらい。きもちわるい。

「また・・・ダメだったのね・・・」

「千聖ちゃ・・・はっ・・・！そっか・・・まだダメだったんだね・・・」

「待っててね・・・また・・・頑張るから・・・」

「かのん・・・ちさと・・・？」

俺の記憶はそこまでだ。

そしてただただ深い闇の中へ意識は消えていった。

※

これは私、白鷺千聖の物語。

いや、私と、花音と、そして芽音というのが正しいのだろうか。

「白鷺さん！」

入学してしばらくしたが私は仕事が忙しくなかなか学校に来られなかった。

その間の分のノートを花音に貸してもらおう約束だったのだけれど、どうやら花音は風邪をひいてしまったらしく休みらしい。

クラスの友達にノートをお願いしてあるからって言っただけで誰なんだろう？

そんなことを考えていたら、その人は突然私に話をかけてきた。

「あなたは・・・俗君、だったかしら？」

「うんうん、俗芽音ね。改めてよろしく！」

まさかの男の子。

清々しい笑顔、明るい言葉遣い。きれいすぎて反吐が出るほどにその声はさわやかに聞こえた。あくまで表情を崩さず、態度も崩さず普通に返答する私。

聞けば花音が見せてくれるはずだったノートをこの人がみせてくれるらしい。

その日、私は俗芽音という人間を注意してみるようにした。

その生活態度は非の打ち所がない。クラスメイトとは男女問わず打ち解け、まさにクラスの中心人物となりえるスペック。誰に対しても優しいまさに“理想のクラスメイト”を体現したような人物であつた。あまりに完璧だった。

そう・・・一点を除いては。

※

「それで何を話せばいいのかな？」

「そうね。あなた、花音と仲がいいのよね？」

「うん、まあ世間一般的にいうとそうなるのかな?」

「そうなの・・・じゃあ一ついいかしら」

「なにかな・・・はっ!」

花音のお見舞いに行つたところではったり俗くんと出会つてしまつた。

これぞ好機、ととらえた私は俗くんに質問すべく、つぐみちゃんのお店へ連れて行つたのだ。

そこで話を切り出し、いままで隠していた雰囲気を一気に開放する。

それに俗くんはわかりやすいくらい反応し、私はある確信を言い放つた。

「もう花音には近寄らないでくれるかしら?」

「な、なんで君にそんなこといわれなきゃいけないのかな・・・?」

「私が花音の親友だからよ。親友のことは私が守る。ただそれだけのことね」

「意味が分からないよ!それがなんで俺が近づかないのが解決になるのさ!」

この人の本性は底知れない。

今日一日観察し私はそう確信した。仮面を被り、上っ面だけ完璧でその仮面の裏にはドス黒いオーラを隠している。それがさつき思つたただ一つの欠点。

何を隠そう私自身、感情を制御しながら生き、相手によつて顔を変えらる役者である。それと全く同じことをしている男の子が親友に・・・花音に近づいているのだから放っておけるわけがなかった。

「私は役者よ?あなたが仮面を被つてるなんてお見通し。そんな状態で花音に近づいて・・・何をたくらんでいるの?」

本題。私は思っていたことを一気に言う。

「それにあなた、人の雰囲気を観察するのが得意よね？」

「……そこまでわかってるのか」

「ええ。だからこそあなたの前では考えていることを漏らさないようにしてた。そして必要な時だけ出してたのよ」

「うなれば」ウソだろ……？」と言いたげな表情。

上手く隠していたつもりがあつさりバレ、詰問され何らかの目的で狙っていた花音に近づくなどいわれたらこうなるのもわかる。

私は追い打ちをかけるべくさらに続けた。

「とにかく！得体のしれない男の人を親友に近づけるわけにはいかないわ。話は終わりよ。ここは私が会計しておくから……それじゃ」「オイ待てよ！そんな一方的に……！」

私は伝票を確認し、おつりはいらないわとつぐみちゃんにお金を渡すと早足で店を出た。まあ、おつりがいらななんていわれたらお店は困っちゃうだろうから、あとでつぐみちゃんにはフォローを入れなければならないわね。

「……!?!むぐう!?!」

店を出て少し歩いた刹那、私は急に口を塞がれ裏路地の方へ引きずられてしまった。

「むうー！むうー！」

「あ、ごめんね千聖。苦しかったよね？今放してあげるけど……大声出したり、逃げたらわかるよね？」

突然訪れた危機。恐怖でどうにかなりそうだった。

でもここで動けなくなってしまうては相手の思うツボ。心を強く持ち、相手が私を放すと私は逃げようとする・・・しかしすぐにつかまってしまうた。

「い、いやっ！離してください！」

「コラコラ、子役の頃から応援しているファンになんて言い草だ。俺が育ててやったようなもんだろ？千聖」

そんなことを言いながら顔を近づけてくる相手。

汗をかき、体温が上がっているせいかな嫌な熱気を感じ、不快な臭いと恐怖が私を襲った。

「せっかくプレゼントも持ってきたし、育ての親同然のオレにサービ
スしてくれてもいいんじゃない？」

「プレゼントは事務所を通してください！それにあなたなんて知りま
せん！」

「パパに向かってなんて言い草だ！お仕置きだぞっ！」

ダメ・・・話が通じない・・・

私はどうなってしまうの・・・？

強く気を持つとうとこわばっていた心がどんどん緩んでいき、不安と恐怖が徐々に侵食するのを私は感じていた。

「それにさつき男と一緒にいたよねえ？誰なんだ！あんなやつ許さな
いぞー！」

「あ、あの人は・・・」

い。 どうやらつぐみちゃんのお店にいるときから監視されたいたらし
い。

ダメ。もうダメかも。怖い。動けない。どうすればいいの・・・
？

「それって俺のことですか？」

「え……？俗君……？」

「俺、参上！」

そんなことを言いながら現れたのは俗くんだった。

シリアスな雰囲気をもともせず、思わず昔の特撮ヒーローのようなポーズをとる俗くんを私は汚物を見るような目で見てしまった。でもそれが逆に良かった。彼がお道化てくれた賭けでそのおかげでこんな状況下でも心が恐怖に完全に支配されることはなかったのだ。

「オイコラそのデブ。俺の知り合いになーにやってくれちゃってんの？気色ワリイ顔を近づけんよ、白鷺さんの顔が腐っちまうだろ？女の子の顔に傷つけて責任とれんの？」

ポーズを解除した途端、俗くんの口からあふれ出る罵詈雑言。

そこには普段感じていた仮面も完璧な雰囲気も……跡形もなく消し去っていた。

「なんだ貴様……人が気にしてる体系のことまでそんなストレートに……それに、そんなひどいことをいうなんて……」

「気にしてんなら改善の一つでもしようをしないのか？それにひどいもクソも事実をそのまま言ってるだけだが？デブだし服のセンスは絶望的だし顔も脂ぎってきたねえし何よりそのしたり顔が最高に気持ち悪い。その姿で歩いてて恥ずかしくねえの？あ、もしかしてうんこの生まれ変わりかな？だったら便器に流れてろよクソ野郎」

びっくりするくらいの罵詈雑言を繰り返す俗くんは、相手は体をプルプル震わせながらうつむきだした。

「そこまでいわなくていいじゃないかあああああ~~~~~」

「うお!?!泣き出した!?!」

「・・・ろす」

「ん???なんだって?」

「殺すううううう!殺してやるうううう!」チキチキチキ

私を突き飛ばし、殺意を放ちながらカッターナイフを取り出し俗くんへと襲い掛かる。

その光景に戦慄したのも一瞬、俗くんは落ちていた棒で応戦し、あつという間に制圧してしまった。

「うおおおおおおお・・・」

「自分の欲望を満たすためだけに自分勝手やらかす奴に救いはねえよ。豚箱に入ってる」

その日、私は俗芽音という人間のことを理解し、友達となった。

その時、私は彼に普通ではない特別な感情を抱いたのだった。

ただ、それは恋愛的にとは断言できない。

正直、あんな危ないところを助けてもらって吊り橋効果的なものがあるとも思うからだ。

※

ある休日、花音と芽音と一緒に出掛け、お揃いのブレスレットを買った。

花音は顔に出して喜んでいたが私はプライドからか顔には喜びを出さないでいた。これは金額で見たら大したでないけど私の大事な宝物。

そういえば朝の仕事で学校を遅刻した時、芽音も遅刻したようで校門でばったりで出会った。

その後、風紀委員会室にも一緒に行った。

「その節はお世話になりました」

「いやいや、あの後妹さんとはちやんと合流できた？」

「ええ、おかげさまで。しかしあなたが花咲川の生徒だったとは……」

「こちらも驚きだよ」

「氷川紗夜。1年生です」

「俗 芽音。よろしくね」

どうやら風紀委員の氷川さんとは知り合いだったようで二人で話し始める。どうやらこの前ショッピングモールへ行つたときに関わつたようだ。

「……そろそろ話に入つていいかしら？」

「あ、白鷺さん！申し訳ありません、私としたことが」

「氷川さんはいいのよ。ねえ、芽音？」

あら、思わずイライラした感じを出してしまったわ。

芽音もそれを感じ取つたようでビクついているのがわかる。

別に芽音が誰と話そうが勝手なはずなのになんでこんなことをやってしまったのかしら？

「芽音、説明なさい」

話を聞いて私の気もおさまってきた。

いや、最初から気なんて立ってない……立ってないはず。

※

「私の彼氏になってくれないかしら？」

この言葉から始まつた私と芽音の仮想恋人。

私は役になり切りたいというもつともな理由で申し出たわけであるが、嘘ではない。でも本当の目的は私のこのよくわからない気持ちの答えを探すためであつた。

「悪い千聖、待たせちゃった」

「ううん、いいの！あたしも今来たところだから！こうやってキミを待つ時間もすっごくドキドキして楽しかったからだいじょーぶ!!」

「フアツ!?!」

正直、顔から火が出るほど恥ずかしい。役柄を掴むという目的もある以上、それも完遂しなければならぬ。

故に行った役へのなりきり。仮想デート中はこれで過ごすつもりだ。でももう一度言おう。顔から火が出るほど恥ずかしい。案の定、私はすぐに陥落した。

「んでちーちゃん、最初はどこに行くんだ？」

「もうやめてええええええええええ！」

陥落したのを察したのか、芽音はここぞとばかりにからかってくるのに悶えながら、私たちは映画館へと入場していった。

※

映画が始まる。

今日見るのは前から観たかった話題作の恋愛映画だ。それに私が尊敬する役者の一人も出ている。

出来はかなり上々。コメディから始まり駆け引き、緊張感、そして壮大なハッピーエンド。すべて調和し、役者の演技がそれをさらに磨く。

夢中で映画にのめりこみ気が付けばスタッフロールまであつという間だった。

「いい映画だったわ」

「ああ、確かにかなり当たりだったもしれない。観る前は所詮恋愛映

画とナメてかかっていたが、なかなかどうして出来がいいじゃないか。しかし……」

芽音が感想を言うのであるが、ここで困惑したような雰囲気伝わってきた。

「それで千聖、これも台本通りなのか？」

「なんのこともかしら？」

特に特別な挙動はしていないはず。一体芽音は何のことを言っているのだろうか？

「ん？手、あなたの手、Your hand.」

「なんで急に英語に……あつ／＼／＼」

そういえばさつきから何か違和感があったのだ。それを指摘され、初めて自覚した。どうやら映画に夢中になり、演出に感化され知らない間に芽音の手を握ってしまっていたのだろう。

「忘れてたのか……」

「……なんてね、ここまで台本通りよ」

一瞬不意を突かれて熱が上がったが瞬時に平静さを保ち、クールダウンすることに成功した。

「全然わかんなかった。さすがだな」

「でなきやここに来た意味がないわ。……よかった、バレてないみたいね……」

「ん？」

「なんでもないわ。出ましょう」

「ああ」

そうやって涼しげに言う私。でもその心臓はさっきの失態を思い出して破裂しそうであった。

一体なんでここまでうるさいの・・・？

その謎はまだ解けそうになかった。

※

「ここまで話したからかなりぶっちゃけるけどさ」

「なにかしら？」

「同じような感情を千聖にも抱いてんだよね」

「・・・?!?!」

!?!?!?

ある日のこと。芽音から相談したいことがあるといわれてきた仕事終わりの羽沢珈琲店。そこで言われた一言は不意打ちで、体の温度の上昇を抑えることができなかった。

「な、な、なにを言ってるのかしら!？」

「おおう、目に見えて動揺してるね」

「当たり前じゃない！急に変なこと言うから!!」

芽音の過去を聞いた。そして今後気を付けるべきことを。そこで芽音が言ったのだ。芽音は花音が好きで（恋愛の意味かはわからないけど）、その感情は私にも向けられているのだと。

「まあそういうわけだからさ。恋愛とか・・・そういうわけじゃないと思うんだよね。もしそうだったら二人の女性に手を出すクソ野郎じゃん」

「・・・それもそうね。うん、わかったわ。親友として、人として好きってことで解釈しておくわね」

「あ、その表現ナイス。一番しつくりくるかも」

芽音は一人で納得しているようだったので援護射撃を出しておい
た。

うん、これで正しいはず。正しいはずなんだ。なんでさっき動揺し
たのか？その答えを考えることを放棄した私は芽音が出した私に
とつても都合のいい回答に便乗した。

※

「千聖も食うか？」

「え？・・・むぐつ」

羽沢珈琲店の帰り、芽音にチョココロネを口に押し込まれた。

「むぐむぐ・・・急に何を・・・」

「いや、食べたそうな目をしてたから」

「芽音・・・あなたねえ・・・」

別にそんな目はしてないわよ！

まあでも、芽音が浮かれる気持ちもわかる。今日くらいは大目に見
てあげましょう。

・・・別に私も嬉しいとかなはず。

私は芽音にジト目を向けつつもしょうがないわねえと思っていた。
キイイイイイ!!!

「え・・・？」

「千聖!!!」

ドンッ!!!!!!
ドンッ!

刹那、私は意識を手放した。次に眼が覚めたのは病院のベッドだ。
どうやら私は事故に遭ったらしい。でも命に別状はなく、仕事の疲
れもたまつてたか数日間眠っていたらしい。

「ふう・・・たくさん話したらなんだか疲れてしまったわ」

「数日眠ってたんだから無理もないさ。病み上がりだし今日はこの辺にしとくか」

「そうだね。千聖ちゃん、また明日来るね?」

検査も終わり、二人と話していたがさすがに少し疲れてしまった。それを察してか二人もそろそろ切り上げるとのことだ。

「ありがとう、二人とも。あっ……」

……?なんだろう?私は何を言おうとしているの?

「どうした?」

「えっと……ヘンなことを聞くのだけれど……」

なぜこんなことを聞いてしまうのかわからない。でも聞かなきゃダメな気がした。

「えっと……ヘンなことを聞くのだけれど……前にもこんなことがなかったかしら?」

※

なんであんなことを聞いたんだろう?

私が以前もこんな状況に置かれたことなんてない。あるはずないのだ。

あるはずないのに……

「……ッ!」

そう、考えていた。

「……芽音」

そう言った瞬間、芽音の意識と共に私の視界はブラックアウトし、そして……

現実へと引き戻されるのであった。

※

「芽音!!!」

「芽音くん!!!」

私たちは飛び起きる。

「はあはあ……はあ……また……」

「また……ダメだった……んだね」

これで何回目だろうか。何回芽音を辛い目に遭わせているんだろうか。

汗だくになって目を覚ます私たち。そして機械に繋がれ意識を取り戻さない芽音。何も変わらない。

何も変わらず、ただただ室内に響く機械音とともに、私たちの頭には芽音が倒れる瞬間がただただひたすらフラッシュバックしていたのであった。

でも――

「何度だって、何度でも……絶対助けるから」

私は何回目かわからない決意をする。

だって私は――

芽音のことが好きだから。

第2話 松原花音

これは私、松原花音の話だ。
あの日に至るまでの物語だ。

「そっち教室じゃないけど用事あるのかな?」

「え? え? え?」

「あ、ごめん! 見えてないよね。同じクラスの俗、松原さんだよね?」

初めて話したのは学校の廊下。何も考えずに教科書を山積みで運んでフラフラしてた私を助けてくれたのが始まりだった。

「あの・・・改めまして松原花音です。助けてくれてありがとうございます!」

「うん、俺は俗 芽音! 同じクラスなのは知ってるかな?」

「ごめんなさい! まだクラスメイトのこと覚えて切れてなくて・・・特に男の子は・・・」

「いや、大丈夫だよ! 慣れないだろうしまだ入学してそんなに経ってないからさ。ゆっくり馴染めばいいと思うよ。それで、なんでこんなところにいたの?」

最初に感じたのはなんか底知れないなあ・・・って感じだった。

よくわからないけどすごく違和感がある人。一言でいうなら機械がそのまま正確に作業をしているのをみているような感覚だ。

でもその違和感の正体は意外とあっさり説明することになった。

「松原さん、あそこのコンビニで待ってて。俺、このお兄さんと話付けてくるから」

「え!?! でも・・・」

「いいからいいから。平和的に、ね。帰れなくなると大変だから俺が来るまで待っててよ」

「う、うん……」

クラスの親睦会の帰り、芽音くんと一緒に帰ったところ、通行人の人にぶつかってしまった。でもその人が怖い人で、そこで芽音くんが助けに入ってくれたはいいけどその人に連れて行かれることになってしまった。

「おいおいお兄さん、話し合いするんじゃないんですか？」

「うるせー！話なんかせずにテーマをぶん殴って金貰ってそれで勘弁してやる！感謝しろ！」

「……本気でいってますそれ??」

芽音くんは待つてろっていったけど、私が招いたことだしどうしても気になってあとをつけて裏路地まで来てしまった。

相手の人からは怒りの気配を感じる。

でも不思議だったのが芽音くんからは恐怖や畏れのような気配は全く感じず、むしろ余裕まで感じるようだった。

「2、3回で勘弁してやるからじってしてろ！」

相手の人が殴りかかる。私は思わず目をつむってしまったが、聞こえてきたのは芽音くんの悲鳴ではなかった。

どうやら芽音くんは避けて相手の足を引っかけたようで、そのまま相手の人はすごい勢いで転倒する。

「……ほらよ」

そのまま芽音くんの蹴りが相手の人に炸裂し、相手の人はそのまま動けなくなった。

「話っていうけどさあ、俺今すんげーイライラしてんの。ただでさえ

疲れるのにお前が絡んだせいで疲れ倍增。まじつらたんなの。わかる？この罪の重さ？」

「うぐおおおおお……」

それは芽音くんが隠していたであろう違和感の正体。怖いものを見てしまったけど、それ以上に芽音くんに感じていた変な感じの理由がわかったことの方が大きかった。助けてくれたという事実もあるのだろう。

その日、私たちはちゃんとした友達になった。

※

色々話すうちに“あ、千聖ちゃんと似てるな”って思ったんだ。

だから私が風邪で休んだ日、ノートを千聖ちゃんに見せてくれるよう芽音くんに頼んだ。そしたら案の定、千聖ちゃんと芽音くんは仲良くなってくれた。

そこに至るまで色々あったらしいけど大好きな友達同士が仲良くなってくれたのはとっても嬉しい。話を聞くに芽音くんが千聖ちゃんを助けたみたいだ。

「あ、芽音くん、千聖ちゃん！おつかれさ……ま？」

「そうだ、本人に聞いてみよう。白黒はつきりするぜ？」

「望むところよ」

「あ、あの……二人とも……？」

「花音！」

「は、はい!？」

「私と」

「俺」

「どっちの方が好き?!?!？」

「ふえ……?ふええええええええええ?!?!?!？」

・・・いささか仲良くなりすぎな気もするけど、これはこれでいいよねっ・・・？

※

私と芽音くんと千聖ちゃんの3人でご飯を食べたある日のこと。

千聖ちゃんがすっごく楽しそうだった。思えばあんなイタズラ（クラスメイトの前で思わせぶりな会話をしたり）をする千聖ちゃんは初めて見たかもしれない。

芸能人つてことでクラスの人たちは少し近づきづらいみたいだし、千聖ちゃんは千聖ちゃんであるべく目立たないようにしているようだった。

だからこそ珍しい。やっぱりこれは芽音くんの力が大きいのかな。

「千聖ちゃん、なんだか今日は楽しそうだったな」

「そうなのか？」

「うん！なんかいつもよりいい感じだったかなあ。芽音くんのおかげかもね」

「そうだと嬉しいんだけどね。でも千聖、俺に当たりキツイ・・・キツくない？」

「うーん、それだけ心を開いてくれてるってことだと思うよ？」

これは本心だ。私も千聖ちゃんとそんなに付き合いが長いわけではないけれど、あの千聖ちゃんが心の底から楽しさを感じているのはわかった。

「それにね、芽音くんもすっごくいいと思う」

私は思わずそんなことを口にしてしまった。

「俺も？」

「うん。最初に話したときみたいに、無理してるっていうのかな？その感じが全然なくなってるよ。」

「・・・そうだとしたら花音や千聖のおかげだな。そういえばお礼がまだだったな」

「お礼？」

「なんのことだろ・・・？最近はずっと普通で過ごしてたしなにかしたっけ・・・？」

「花音。その・・・なんていうか色々ありがとう」

「ふえ!?急にどうしたの!？」

「いや、今俺がこうやって穏やかでいられるのも、千聖と出会えてこうやって3人で仲良くできるのも・・・あの時、花音が勇気を出してくれなかったら実現しなかったことだからさ」

思わず泣いてしまった。

「ありがとうって言うてくれた。そして私のことを親友といってくれた。」

「私がしたことが芽音くん、千聖ちゃん、そして私との絆を紡いで、みんなが本心で笑えているのは私のおかげって言うてくれた。」

嬉しくないわけがない。

嬉しくないわけがなかった。

※

芽音くんと千聖ちゃんのおかげで日常がどんどん楽しくなってきた。私にもいろんな変化があった。でもその日常は唐突に終わりを告げたんだ。

「もう、お母さんだったら・・・」

「まあいいじゃないか。なんだかんだ花音と二人つきりで出かけるつてのも始めてだしいい機会だ」

「芽音くんと二人つきりつてはじめてだよね」

「まさに俺も同じことを考えていたところだ」

ひよんなことから二人でお出かけすることになってしまった。

確かに二人つきりでお出かけするなんて初めてだから少し緊張している。

お母さんが変な気を利かせたおかげではあるけどたまにはいいかなって思えた。

「あ、電車来たね」

今日のお出かけ先はなんと乗り換えをして3駅先。

私一人じゃ同じく電車が苦手な千聖ちゃんとかふたりではとてもじゃないけどいけないところだ。

でも今日は芽音くんがいる。そんな安心感を胸に電車に乗り込んだわけではあるのだけれど……

「ちよ、待てい！それは……！」

「え？」

芽音くんが驚いたような声が聞こえたときにはもう遅かった。

すでに扉は閉まり、私と芽音くんは分厚い電車の扉で分断されてしまった。

“この電車はく快速●●行です”

そんなアナウンスが聞こえる。

「かい……そく……？」

快速。快速つて確か駅を飛ばさなかったつけ。
あれ？次に停まる駅の名前が違う。あ、飛んでる・・・
そんな・・・

「どどどどどうしよう・・・」

ピロン

S a k i n a r i : 花音、とりあえず落ち着け。俺もそつちに向かうから次の駅についたら合流しよう

芽音くんからメッセージが届いた。それをみてすごく安心する私。
うん、芽音くんの言う通りにしていれば大丈夫なはず。

松原花音：こめんね！うん、できるだけわかりやすい場所にいるから着いたら教えてくれると嬉しいな

S a k i n a r i : 了解

※

「うわあ〜おつきい駅」

なんて感心しているけど心臓はばくばく言ってる。

私が早とちりしたせいで芽音くんとはぐれちゃって、しかも来たことがないような大きな駅にポツンと一人。

不安しかなかった。

「でもすぐ来てくれるっていったから大丈夫だよね・・・？」

そう思いながらとりあえずわかりやすい大きな時計の足元に移動

した。

他にも人がたくさんいて、どうやらここは待ち合わせスポットとして多く使われているようだった。

ピロンツ

Sakinari：駅についた。どこにいる？

構内を行きかう人たちをぼんやり流れていたらスマホが反応した。

どうやら芽音くんが駅についたみたいだ。

松原花音：大きな時計の足元にいるね

私でもわかったんだから芽音くんならすぐにわかると思う。

そう思ってたけど5分経っても10分経っても芽音くんは現れない。

それどころか既読すらつかない。

もうすぐ芽音くんと合流できる。そんな安心感を抱えていた私は徐々に不安を募らせていく。

「おかしいなあ・・・そうだ」

私は電話をかけること試みる。もしかしたらうまく受信できてないだけかもしれない。電話なら・・・

“ おかけになった電話は、電波の届かないところにいるか電源が入っていないため、かかりません。おかけになった電話は・・・”

「えっ・・・？」

おかしい。ほんの10分前までは普通にメッセージが届いていたのに、それが急につながらなくなるなんて。

「もしかして、何かあったのかなあ・・・」

でも騒ぎが起こっている気配はない。もし芽音くんの身に何か

あつて、仮に事件が起こっているんだとしたら少なからず騒ぎになっているはずだ。

「改札の方へ行つた方がいいかな？」

そうだ、もしかして電池切れとか落として壊れちゃつたとかかもしれない。

それなら改札の方に行けば絶対に会えるはずだよね・・・？

「大丈夫、来た道に戻るだけ。来た道に戻るだけだから・・・」

改札からここに時計までそんなに歩いた記憶はない。なら来た方に戻るだけで改札に行けるはず・・・いけたはずなのに。

「どっ・・・？(っ)・・・？」

私の目の前に広がるのは知らない風景。少なくとも私が来た改札出ないのだけは確かだ。それどころか駅の構外に出てしまっている。

ふええええ・・・こんなところで方向音痴が発動しちゃうなんてえ
く・・・

「しよ、しょうがないね。また時計に・・・時計に・・・」

私は気づいてしまった。

「どうしよう・・・どっちからきたかわからなくなつちやつた・・・」

その事実気付いてしまった私の心は不安と焦りでいっぱいになる。

「ふえ・・・ふえええええ・・・」

そしてその不安は限界を迎えてしまった。そのまま私は人目をばばかり隅に移動すると・・・静かに泣いてしまった。

—どうしよう

このまま芽音くんに見つけてもらえなくてこのまま動けなくて・・・
どうしたらいいんだろう。

冷静になって考えれば駅員さんに頼ったり、構内の交番にいつたりいくらでも手段はあったのだけれど、この時の私はそこまで考える余裕なんてなかった。

「嫌だよ・・・芽音くん・・・芽音くん助けてよお・・・」

思わず読んでしまう芽音くんの名前。でもこんな喧噪にかき消されるような小さな声で呼んだところで聞こえるはずが—

「ああ。ごめん花音、待たせた」

「え!？」

「やっと思つけた」

聞きたかった声、見たかった顔。

それを視認した私はものすごい安心感を覚え、体の力が抜けて足がガクンときてしまう。

「おっと！大丈夫か？花音」

そこには額に汗を浮かべ、息を切らした芽音くんの姿があつたのであつた。

ああ、やっぱり。すごく安心する。

その姿はすつごくまぶしくて、安心して。私の中にはやっぱり芽音

くんに対する特別な感情があるんだなって完全な自覚をさせた。

※

『もう彼女泣かすんじゃないぞー!』

私が泣きじゃくってしまったせいで勘違いされてしまい、お巡りさんのお世話になってしまい、落ち着いた私が誤解を解いたところ終わり際にお巡りさんにそんなことをいわれたのだった。

「でもさ……芽音くん。彼女だって。そんな風にみえるのかな……? えへへ」

「どうなんだろうな。まあ男女が並んで歩いてりや付き合ってる認定したがる奴はおおいからなく」

さつきのこともあつてついつい嬉しくなってしまう私。

普段だったら絶対そんなこと言わないんだけど思わず言ってしまった。芽音くんはあまり気にしてなさそうだけど……

でもそんな帰り道。芽音くんは立ち止まり、そのまま固まってしまふ。

「……!?!」

「……? 芽音くん、どうしたの?」

目の前にいるのは可愛い女の子。年は私たちと一緒にくらいかな? でも私のそんな考えとは裏腹に、芽音くんの表情は違った。

「なんで……お前がここに」

「芽音くんやつほー。ねえねえ新しい学校でも暴力振るってるの?」

感じるのは恐怖……遺恨……驚愕……?

とにかくいいものではなかった。

「なによー。久しぶりに地元の友達に会えたんだからもっと喜ぼうよ？……って隣のその子はなんなのかな？」

そういつて私の方を向いた途端、すごくよくない感じがその子から伝わってくる。

「あの芽音くん、この人は……？」

「はじめまして！清田美緒っていいまーす！んーとねー……芽音君の元カノでーす！」

「ふえええ!?!も、もとかの……？」

自分でも素っ頓狂な声が出たと思う。でもそれくらい驚きだった。そっか、そうだよ。芽音くんみたいないい人だったら彼女の一人くらいいたことがあってもおかしくない。

「デタラメ言ってるんじゃないやねぞクソ野郎」

「まあ！クソ野郎だなんてひどーい！」

「大嘘つくからだろ。さっさと俺の前から消えろ」

「うわーそこまでいう？ねーねーアナタ、こんなのと付き合ってる大丈夫ー？こいつはねー暴力を振るって暴れたり、女の子に暴言を吐くDV気質満載の最低野郎だよ？」

「その子に話しかけるな。花音、いくぞ」

でもそれはなんだか違うようだった。

芽音くんからあふれ出るネガティブな感じは変わらず、それどころか嫌悪すら感じる。そして相手の子からは芽音くんについていろいろなことが出てくる。

そんなやりとりをしているうちに芽音くんがしびれを切らし、私の腕を掴んでその場を後にしようとした。

かなり焦っているのか、力いっぱい私の手を掴んでいる。

「ちよ、ちよつと待ってよ芽音くん！いたいよ・・・」

「あつ・・・ごめん」

驚きと痛みで私はつい声を上げてしまう。

それを聞いた芽音くんははつとしたのかすぐに手を放してくれた。

「ほーら、そういう男なんだって！ねえねえ、芽音君が何をやってきたか、教えてあげようか？」

「やめろー！今となつては関係ないッ！」

そこから始まったのはいかに芽音くんが危ない人で、怖い人で、暴力的な人かの説明。その人の説明は真に迫っていてすごく説得力のある言い方だった。

私はチラツと芽音くんの顔を見る。

「・・・ッ」

芽音くんは唇をかみしめ、悔しそうに、不安そうにしていた。

—そんな顔しなくても大丈夫だよ、芽音くん

私はぼんやり、そんなことを考えていた。

それと同時に、相手に対してのちよつとした感情が現れ始めた。

“あなたが芽音くんの何を知っているの？”

“何の権利があつてそんなひどいことを言うの？”

“あなたは芽音くんのなんなの？”

そう、これは怒りだ。

そっか、私は怒ってるんだ。

「・・・というわけ！暴力は振るうわ、女の子に暴言吐くわ・・・とにかくこいつから離れたほうがいいよ！」

言いたいことはそれだけ？

「・・・あの・・・えっと・・・私、そもそも知ってるんです。芽音くんがその・・・人を傷つけてしまったってこと」

そんなドライな感情とは裏腹に私の声はいつも通りだ。

どんな言い方をしたらわからないし、そもそも私にきつい言い方なんてできない。

あくまで、いつも通りのトーンで話す。

「で、でも！暴力は暴力だし、それに女の子に暴言を・・・」

「それにねっ・・・！」

「・・・！」

そんな私の反応を見て再び悪口を重ねようとしてきた。

どうにもイライラが収まらない私はつい上からかぶせる形で反論してしまった。その反応を見て芽音くんも相手の子も驚くような様子を見せる。

「それに、知ってます。あの、芽音くんの口が悪くなる時は誰かのためになにかを言うときだって・・・」

「くっ・・・！」

「芽音くんと出会ってから、確かに怖い一面を見たり、口が悪いなあ・・・って思うこともあったけど」

「えっマジかすまん花音」

「ううん。いいの。その・・・それは決まって私や千聖ちゃんのために何かをするときだったから・・・私は芽音くんがあなたの言うような人じゃなくて、他人のために行動できる立派な人だと思います」

「な、なによ！せっかく人が親切で言っただけなのに！！あたしの忠告を無視する気!?!」

「ふえっ!? えっと・・・あのですね。急に出てきていっばい芽音くんの悪口を一方的にいう人より、いままで一緒にいた芽音くんを・・・自分の目を信じたいなあ・・・って。えっと、それだけです」

それ以上相手は何も言わなかった。芽音くんもなににも言わなかった。

「じゃ、いこっか。芽音くん」

「お、おう」

今度は私が芽音くんの手を引く。

「なによおおおおおおー!」

そんな声が背後から聞こえてくるけど、私や芽音くんは振り返ることなくその場を後にした。

※

この日、事故にあった千聖ちゃんが無事に目覚め、病院の帰りでの出来事だ。

千聖ちゃんが目を覚ましてひと段落したはずだった。

「やっと見つけた・・・」

私たちは気づいていなかった。安堵から油断していたんだ。

「さあああああきいいいいいいいいいいいい!!!」ドガッ
「・・・なッ!!!」

第3話 居場所

芽音くんが凶行に倒れて数カ月がたった。

「芽音くん。今日から私たち、2年生だよ」

「いつてくるわね。芽音」

未だ意識が戻らない芽音くんの病室によつてから私たちは学校へ行く。

表面上は明るく振る舞っているけれど、私たちはあれ以来確実に変わった。

当たり前になつていた芽音くんのいる日常。こんなにも色あせて見えるなんて思つてもみなかった。

手術は成功したものの芽音くんは頭を強く打つて意識が戻らない状態。事件の犯人、清田美緒さんは完全に私怨で事件を起こしたらしい。私も事情聴取を受けて色々と言明を受けた。

詳しいことは捜査上の秘密ということだけど、清田美緒さんが逮捕されたことだけは知っている。

あの日以来、私たちは関係性は変わらずともどこかぽっかり穴の開いたような生活をしていたのだ。

運命の日までまだ少し。ここからはそこに至るまでを少しふれてみようかな。

※

気分が落ち込む。趣味のドラムも満足にできず、いつそやめてしまおうとドラムを売りに出すべく楽器屋さんを目指していた。

「ふっふっふ．．．いいもの、み——つけた!!!」

「えっ、えっ!? あ、あの制服．．．花咲川の．．．?」

「そうよ! あたしは花咲川の1年、弦巻こころ! あなたの名前は? そ

の荷物って楽器でしょ?」

それがころちゃんとの出会いだった。

ころちゃんも駅前にもかかわらずアカペラで歌いだしたり飛んだり跳ねたりととにかくすごかったのだ。そんなころちゃんに捕まってしまったのは楽器屋さんに向かおうとするも道に迷っていた私だった。

「さあ! ドラムをここで演奏するわよ! あたしが歌うわ!!!」

「ふえええ〜こんな人前で!」

訳が分からなかった。本当に訳が分からなかった。

「二人でも上手に叩けないのに…こ、こ、こんな人前で無理です…」
「…? それはそうよ? 一人で演奏しても、上手く叩けないなんて当たり前よ。だって、あなたが上手いかどうかなんてどうしてあなたが決めるの? 人に聴いてもらわなきゃわからないじゃない!」

は、話を通じない。

それにこんな落ち込んだ気分で、芽音くんもいなくて自信も持てなくて…

なによりそんな勇氣、持ち合わせていなかった。

「勇氣なら、あたしがあげるわっ! あたし、今ここで歌うことがとっても楽しいの! あなたも一緒にドラムをたたいてくれたらもつともーつと、楽しくなるわ!! 楽しくなったら笑顔になる! そうしたらね、上手いとか下手とかそんなこと、すぐどうでもよくなっちゃうんだからっ!」

滅茶苦茶な理論だ。やっぱり無理と断ろうにもころちゃんはすぐにパフォーマンスを始めてしまい、私もそれに乗っかる形でドラム

を叩くはめになってしまった。

“なにあれ？ドラムとボーカルだけのバンド？”

“いいぞいいぞ！もつとやれ〜！”

「ふえええ．．．人が集まって来ちやったよお．．．」

でも、やり切った後はなんだろう、達成感っていうのかな？とにかく満足感があつた。そしてなぜかその流れで私とこころちゃんはバンドを組むことになってしまい、無謀なメンバー探しの旅が始まったのだ。

「花音ー！来たわよー！」

「花音は儂いね．．．」

「かのちゃんせんぱーい！コロッケ食べる!？」

「花音さんお疲れ様です」

なんだかんだだけで結成してしまったこころちゃん。これが私の新しい居場所。

これが“ハロー、ハッピーワールド！”だ。

芽音くん。私、すっかりやってるから。だから、目を覚ますの待ってるね！

※

事務所の意向で結成された異色のアイドルバンド。それが“Steel*Palettes”通称パスパレだ。

ファーストライブは散々だった。いや、もはや散々で片付けられれば良いレベルだ。

事務所の指示で行った口パク、エア演奏が機材トラブルで露見してしまいSNSは大炎上。スタートから躓くどころか顔面からアス

ファルトに突っ込むレベルの大失態を犯してしまったのだ。

私は芽音の事件以来、今まで以上に仕事に没頭した。とにかくネガティブなことを考えないようにするため、そして芽音がいなくなった穴を埋めるためだ。でもそんなことをしてもその穴が埋まらない。改めて芽音の存在がいかに大きかったかを思い知った。

「もうこのグループはダメね」

あんな大失態を犯したグループが復活するなんて到底無理な話だ。努力すればなんでもできると思い込んでいる研究生上がりのボーカル、モデル出身で純粹すぎる心が逆にあだになっているキーボード、技術は素晴らしいけどアイドルらしきのないドラム、天才で何でもできるけどイマイチ心の読めないギター。一緒にやっていくなんてとてもじゃないけど想像できなかった。

特にボーカルの丸山彩ちゃん。彼女はどんなひどい目にあっても、どんな誹りを受けようとめげず、挑戦していく。

なんで彼女があそこまでするかわからなかった。

「でも、だからといって・・・」

在籍している以上は私の仕事だ。どんな小さな仕事でも、無理な仕事でもやり切る。そうでないと芽音に申し訳が立たない気がした。

そう考えた私はスタッフに掛け合いパスパレの次の仕事であるアイドルイベントの仕事をとってきた。

これが上手くいけばパスパレは存続するし、ダメなら消えるだけ。判断するいい機会だと思ったからだ。

「・・・?どうしたのみんなびしょ濡れで」

「実は・・・」

その知らせをした数日後、事務所では雨でずぶ濡れになった彩ちゃ

ん以外のメンバーがいた。

私の問いかけに対し、ドラムの大和麻弥ちゃんが答える。

「どうやらチケットを駅前で手売りしていたらしい。しかし雨が降って中断したところ、彩ちゃんだけが残って売り続けているということだった。」

「次の仕事があるから私は行くわ」

そんなことを言っただけで退出したけど、なぜか私は彩ちゃんが気になつて仕方なかった。

駅前についたら彩ちゃんがいた。チケットを売る声は雨にかき消され、通りかかる人は見向きもしない。

「彩ちゃん、あなたは どうしてそこまで・・・？」

雨にもかかわらず叫び続ける彩ちゃんは儂げで、でも芯の強さが出はつきりわかった。

「お願いします・・・私たちの歌を・・・」

「聞いてください!!」

気が付いたら私は駆け出し、声を出していた。

「え・・・？千聖ちゃん・・・？」

「彩ちゃん、チケットはまだこんなに残っているわよ？」

「・・・」

「雨で声がよく聞こえないわ。もつと大きな声を出さないと歌声どころか聞きに来てくれる人すら集まらないわよ？」

「・・・うんっ！」

私はそんな中に“丸山彩らしさ”を見た気がした。

夢に向かって、どこまでも愚直に突き進んでいく。自分にはそれしかないからって自覚したうえであがき、夢を叶えようともがき続ける、とつても不器用な人。

「まるで芽音みたい」

チケットを売った帰り道、ふと口に出してしまった。厳密にはまったく違う。芽音はどこまでも計算して、先を読んで行動する。

でもその信念の強さがどこか似ているな、とも思った。

「なにかいった？千聖ちゃん？」

「いいえ。そろそろ事務所につくわよ」

その後はすごかった。あれだけ酷いことが書かれていたSNSは「雨の中チケット売る根性見直した」「またひたむきな彩ちゃんが見られて嬉しい」「口パクバンドって思ったけど頑張ってる」などプラスの口コミが増え始めたのだ。

そして歌が安定しない彩ちゃんにまた口パクさせるというスタッフの意向を押し切り、パステルパレットはイベントのライブを大成功させてしまった。

「そっか、ここが今の私の居場所なのね」

変わった人ばかりだけど、きっと私は嫌いじゃないのだろう。

「あ、千聖ちゃん！お疲れ様!!」

「チサトさん！ゴキゲンウルワシユウです！」

「あ、千聖さん！ベースの弦、新調しておきました！」

「おお、これでるるるんっ♪ってする演奏ができるね」

芽音、私、新しい居場所を見つけたわ。

役者として、アイドルとして、パスパレという居場所を守りながら
あなたが目を覚ますのを待ち続けます。

だからいまはゆくつり休んで、早くいつもの感じで声を聞かせてく
れるかしら？

第4話 夢

※

「あら？花音に千聖じゃない!!ハロー!!」

「あれ、こころちゃん？」

「こんには、こころちゃん」

芽音のお見舞いにくために病院に行ったら、そこにはこころちゃんがいいた。

花音とバンドを組んだと聞いたけど見れば見るほど正反対な二人だ。

「どうしてこころちゃんがここに？」

「ここ、お父様が経営している病院なのね！それでたまにきて入院中の人たちに笑顔を届けに来ているのよ!!」

そうか、ここは弦巻総合病院。要約するとボランティアでお父様が経営する病院に来ているということらしい。

「花音と千聖はどうしているのかしら？」

「えっと、友達が入院しててね・・・」

「どうしたのかしら二人とも？怖い夢をみた時みたいな顔してるわよ??」

そう聞かれて私たちは少し状況を話した。

「ふむふむーなるほどそういうことだったのね！花音と千聖が笑顔じゃないのはダメね!!あたしがちよつと聞いてきてあげるわー」

「えっ...こころちゃん!？」

そういうところろちゃんはどこかへ行ってしまった。

「いっちゃったね・・・？」

「え、ええ」

とりあえずどうしたらいいかわからないので私たちはすぐその芽音くんの病室へ向かう。病室につくとちょうど、芽音くんの入院を受けて地元から来ている芽音くんのお母さんがいて、軽く挨拶をした。

「こんにちはは、松原さん、白鷺さん。いつもありがとうございます」

「いえいえ、大事な友達ですから」

「そうです、芽音くん、早く目を覚ますといいですね」

「千聖！花音！ここにいたのね！」

「こころちゃん、病院だから声を小さく・・・ね？」

挨拶で少し落ち着いたのも束の間。怒涛の勢いで現れたのはこころちゃんだ。

後ろには息を切らした病院の先生がいた。

「ぜえ・・・ぜえ・・・お嬢様・・・病院内は・・・ゼエ・・・お静かに・・・」

「さあ説明してあげて頂戴！」

「わかりましたから少し休憩をですネ・・・」

「それで、先生どうかしかのですか？」

冷静にツツコミを入れたのはお母さんだ。

「実はちょうどお母様に報告することがありましてね。芽音さんの病状についてです。検査の結果新しいことがわかりまして」

「新しいこと？」

「ええ。あ、ご家族以外の方がいますがご説明しても？」

「構いません」

「わかりました。芽音さんは、頭に強い衝撃を受けていますね。命にかかわる部分は手術で治りましたが、殴られた後遺症で記憶に障害が起きてるようなんです」

※

私たちは静かにお医者様の話を聞く。

「その記憶障害のせいで脳が正しい選択をできなくなっちゃっています。不謹慎なたとえかもしれませんが、機械がバグをおこし〝目を覚ます〟というコマンドを選択できない状態といいまじょうか」

「治す方法はあるんでしょうか・・・？」

「・・・ありませんでした。少なくとも、今日この時点では選択肢が、という意味ですが」

「どういうことでしょうか？」

「実はですね、試験的に運用している医療機器があります。記憶喪失の患者さんや芽音さんのような記憶障害を起こしてしまった患者さんの記憶を再生する機器といいまじょうか」

「そんなことができるんですか!？」

「VRMMOというのを聞いたことはありませんか？フルダイブシステムともいいます。仮想空間にダイブし、まるで現実世界のように振る舞えるシステムです。現実的にはまだまだ実用的はないのですが、一昔前にそれを題材にしたアニメーションが流行りました。そう言ったものと思っただいて結構です」

お医者様はさらに続ける。

「この機械はですね、患者さんの記憶を読み取り、その情報を基に患者さんの記憶を再現した仮想空間を作り出します。そうやって作り出

した仮想空間を患者さんに夢のような形で見せて、復元した記憶として脳に定着させるのです」

「でも、実用的ではないということはまだまだ運用できる段階ではないということなんですか？」

「いい質問です。厳密に言えば、条件が厳しすぎるのが今の課題なんです。まず、仮想空間を作り出すだけでは記憶として定着しません。ストーリーミングの動画再生の状態といえわかりやすいでしょうか。映像は流れるけどダウンロードしていないからデータとしては残っていない状態ともいえます。そのままではただの夢であると脳が認識してしまうので、定着させるにはきつかけが必要です」

「きつかけ？」

「本人に、仮想空間で〃これは自分の記憶だ、夢ではない〃と認知させることです。それがいわゆるダウンロードの状態です」

「・・・どうやってやるのですか？」

「これが二つ目の課題です。誰かが仮想空間に潜り込んで、そのことを教えてあげなければいけません」

「誰かが？」

「ええ。それも直近の記憶で深くかかわった人が必要です。それに潜り込む人にも条件が課されます」

「条件とはなんでしよう？」

「仮想空間に入ったら今お話した内容は断片的にしか保持されません。おそらく入った人本人も患者さんの記憶通りの行動を強いられます。つまり仮想空間に入ったあとは記憶通りの行動に抗いながら、自力で役割を思い出し、患者さんにこれは夢ではなくあなたの記憶だ、教えてあげる必要があります。そして仮想空間が維持されるのは記憶を失う寸前まで。芽音さんの場合はやられるまでがタイムリミットです。仮想空間で芽音さんがやられれば仮想空間は再生をストップし、入っていた人は現実世界に強制送還されます。」

確かに条件が厳しい。まだ実用段階ではない医療機器でしかも現実世界の話ではない。そんななか数多の課題をこなすのは困難を極

めるだろう。

「それともう2つ。仮想空間に入った人は、ダイブ中は記憶が保持されませんが目を覚ました後は仮想空間で起きたことの記憶は保持されます。つまり、失敗したら失敗しただけ芽音さんが酷い目に遭うシーンを見続けるということなんです。それはかなり精神的に辛いでしよう。もつとも何回もやることによって断片的な記憶が補完され思い出す率は高くなります。加えて、費用の話です。先進医療扱いなので治療費が全額負担の高額治療になります」

まとめるとこうだ

①芽音の記憶を基に仮想空間を生成し、夢として見せる
②さらに第三者が仮想空間に入り込み、芽音にそのことを教える必要がある

③第三者は基本芽音の記憶通りの行動を強いられる

④入った第三者も記憶が断片的にしか保持できないので自力で役割を思い出さなければならぬ。失敗すればするほど記憶保持の率が上がる。

⑤タイムリミットは芽音がやられるまでで、失敗すればただけ芽音が殴られるシーンをみることになる

⑥費用が高額

「すごく難しい話ですが・・・とにかく難易度が高くて現実的じゃないってことですよねえ・・・費用もそんなにかかるとうとうにも・・・」

お母様は心底残念そうな顔で、声を絞るように言った。難易度に関してはやってみる価値はあると思うが、現実問題費用面がかなりネックだ。

こうなると確かに現実問題難しいだろう。私も、花音も顔を俯かせ

「あら？諦めるのかしら？」

そんな空気を壊したのはこころちゃんだった。

「少しでも治る可能性があるのよね？だったらやらない手はないわ！」

「でも条件が・・・」

「んー・・・少し待っていてくれるかしら？」

そういうところろちゃんは病室の外に出ていった。

・・・かと思っただけなのに戻ってきた。

「費用のことは心配しなくていいわ！」

「えっ!?お嬢様それはどういう・・・」

ピンポンパンポーン・・・

刹那、アナウンスがなりお医者者に電話が入っていると呼び出しがあった。

少々お待ちを、といって病室を出ていった先生であるが、しばらくすると戻ってきた。

「・・・費用面は問題ありません。スポンサーが付きました」
「えっ!？」

こころを除く全員が驚いた声を上げる。

「いや、その。医院長よりデータ収集実験扱いでやれという指示がきまして」

「うーん！これで安心ね！あとは花音、千聖、あなたたちがやるかどうかどう

かだけだわ!!」

「え?! 私達?!」

「そうよ? だってこの人とずっと仲良しだったのよね? あなたたち以上の適任なんていないと思うわよ? うーん、でもちよつとツライこともあるみたいだから無理強いはするなってお父様にはいわれてるけれど・・・どうかしら?!」

・・・確かにそうだ。出会ってからこんちに至るまで、ほぼ一緒に過ごしたいても過言ではない。私も、花音も。

さっきまでの話をまとめると、こころちゃんが言う通り私たち以上の適任はいないのかもしれない。

「・・・私はやるよ、千聖ちゃん」

「花音・・・?」

「少しでも可能性があるのなら、私でも芽音くんの力になれるならなんだってやる。それに千聖ちゃんもやる気なんですよ?」

「・・・花音には敵わないわね」

花音はすでに心を決めた私を見抜いていたようだ。

そうして、私たちは決意する。

「その役割、謹んでお受けいたします」

その後、芽音のお母様にお礼を言われて、自分たちの親にも説明して許可を得た。

「じゃあ花音、芽音を迎えに行きましょうか」

「うん!」

機械に横たわり私たちは言葉をかけあう。

「それでは生成した仮想空間にダイブしていただきます。目を閉じて力を抜いてください」

そうして、私たちの長い戦いが始まった。

第5話 海月の奮起

「千聖ちゃん・・・大丈夫・・・？」

「ええ・・・花音こそ大丈夫かしら？」

もうこれで何回目だろうか？仮想空間に入っては1年生の最初からやり直し、芽音くんや千聖ちゃんのもであって、そして芽音くんが酷い目に遭うシーンを見て目を覚ます。

何度も何度もあの光景を見ている。

「松原さん、白鷺さん、大丈夫ですか？」

「は、はい・・・」

「まだいけます」

そんな風に強がって見せるが正直結構しんどい。

千聖ちゃんの顔を見ても同じく辛そうだ。

「どれくらい時間が経ったのですか？」

「そうですね、始めてから4時間といったところでしょうか？」

聞くところによると、仮想空間は時間の流れがかなり速いらしい。今の時点、回数で言うすとすでに10回ほど失敗をしているらしい。たった4時間で10回分の高校2学期分を過ぎた計算だ。そう考えると恐ろしい、脳が疲れているのをものすごく実感する。

「でも、芽音くんのため・・・！」

「そうね」

さあ、11回目のダイブだ。そう思っていたのだけれど・・・

「今日はこの辺で終わりましょう。医者としてそんな疲れた顔をして

いる方に無理強いはできません」

「……でもー」

「……そうですね。初日なのに飛ばしすぎたのかもしれない」

私はまだいけるよ！……って言おうとしたけど疲れがあるのも本当だった。

特に千聖ちゃんは仕事柄自分の体力の限界やペースの維持のコントロールに長けている。なにより私一人では仮想空間に行っても意味がない。ここは素直に千聖ちゃんに合わせたほうが良いかもしれない。

「そうだね、やっぱり今日は終わりにしようか」

そのまま本日は解散となった。千聖ちゃんと駅で別れた後、帰宅した私は何も考えず、思考を放棄してベッドに倒れこんでそのまま朝まで目を覚まさなかった。

よかった、次の日が日曜日で。

※

「花音さん疲れた顔してますけど大丈夫ですか？」

「あ、美咲ちゃん」

今日病院に行くのはお昼から。それまでリフレッシュしておこうかなとつぐみちゃんのお店に向かう途中で美咲ちゃんに会った。

「ちよつと色々あつてね」

「あく……余計なお世話かもしれないですけど私でよかつたらお話し聞きましょうか？」

お言葉に甘えた。誰かに聞いてほしかったのかもしれない。

私と美咲ちゃんはそのまま羽沢珈琲店に向かい、今のことをお話しすることにした。

「いらっしやいませー！あ、花音先輩、美咲ちゃん！」

お店に入るとつぐみちゃんが元気にお迎えしてくれる。

そのまま席に案内され、腰を下ろして一息つく。

「あら？」

「あれ？紗夜ちゃん？」

「松原さん、奥沢さん、こんにちは」

そこには紗夜ちゃんもいた。どうやら一人らしい。

「今日はハロハピの練習はないのですか？」

「今日はオフです」

「うん、こころちゃんが家の用事ではぐみちゃんがお店の手伝い、薫さんは劇の本番が近いとかで別の練習なんだよ」

「なるほど」

「ま、私と花音さんが会ったのは偶然なんですけどね」

「Roseliaもおやすみ？」

「ええ。今日は湊さんと今井さんがお隣同士二家族そろって出かけだそうで。今日は自主練です。私は昼から個人練習の予定ですが軽く食事をおもっています」

紗夜ちゃんは相変わらず真面目だ。

「おまたせしました」

そのタイミングつぐみちゃんが注文の品を持ってきた。

「ぐゅっくり〜」

うん、やっぱり羽沢珈琲店のコーヒーは絶品だ。
素人の私でも香り、味の違いが判るほどだ。

「で、どうしたんですか？花音さん」

「あ、それはね・・・」

一息ついたところで美咲ちゃんが話を切り出した。

「私は訊かないほうが良い話ですか？」

そして横で聞いていた紗夜ちゃんが気を利かせてくれた。

「ううん、紗夜ちゃんも芽音くんと仲良しだしいと思う」

「俗さんですか？彼が休学しているのに関係あることなのでしょう
か。それに仲良しというほどでは・・・」

「でも紗夜ちゃんって他の男の子と話すときより芽音くんに優しいよ
ね。あ、今からはなすことは他言しちやダメだからね？」

「え、そんな重たい話なんですか花音さん」

「どうだろ・・・聞きようによつてはかな・・・？」

私は今の悩みを紗夜ちゃん、美咲ちゃん、そして他にお客さんがい
ないのでつぐみちゃんまで加わって話した。

「まさか俗さんが・・・」

「芽音さん・・・最近来ないと思ったらそんなことになってたなん
て・・・」

「うわーコメントしづらいなあこれ・・・」

店内が若干お通夜モードになる。

「あ、でも続けなければいつかは・・・！今日もいくしね」

「・・・しかし松原さん。今それは何度目なんですか？」

「うーんと。ちようど10回かな」

「10回!?!?!」

一同が裏声で驚く。うん、まあ気持ちはわかるよ。

「なんとというか花音さん・・・すごいですね」

「驚いたわ・・・」

「花音先輩・・・すごいです」

みんなが感嘆の声を上げる。

「しかしなぜ俗さんのためとはいえそこまで？松原さんの負担も相当なものでしょう？」

「え!?!」

「え!?!」

紗夜ちゃんが疑問を口にする、つぐみちゃんと美咲ちゃんはさらに驚く声を発する。

「あの、紗夜先輩。今の花音さんの話など話し方とか聞いていたらアレだと思っんですけど」

「う、うん。アレだと思う」

「・・・?」

「あの、花音さん。間違ってたらごめんなさい。その、俗さんって人のこと、花音さんアレなんですよね。なんというか特別なんですよね」

美咲ちゃんの言ったことを消化する。

とくべつ・・・あつ／／

「ふええええ」

「花音先輩大丈夫です！私はそんな花音先輩のこと応援します!!!」

「ふえええええ／＼／＼／＼」

「・・・?」

「紗夜先輩（さん）まだわからないんですか!？」

「申し訳ありません、なぜ松原さんはそんなに顔を真っ赤にしているのでしょうか？」

「好きってことですよ！その人のこと!!」

美咲ちゃんの一言で訪れる沈黙。美咲ちゃんは「あ、しまった。

ハッキリ言っちゃった」という顔をしている

もうやだあ・・・死んじやいそう・・・

「・・・なるほど」

そして納得のいくような顔をした一人だけ冷静な顔をした紗夜ちゃん。

「それはあれですか？LikeではなくLove的な意味で？」

「・・・うん」

「なるほど、松原さんは俗さんが好きなのですね」

「冷静に分析しないでええええええええ・・・」

しばらく顔を上げることができなかった。

「でもまあ・・・花音さんがそこまで本気になってるなら応援しますよ。今日みたいに話聞くとか気分転換に付き合うくらいしかできないですけど」

「そうですね。私も俗さんのことは心配です。力になれることがあればなんでも言ってください」

「またいつでもお店に来てください！疲れがとれるメニュー考えておきますね！」

みんな、ありがとう。私は元気をもらい、お店を出た後芽音くんの待つ病院に向かったのだった。

第6話 白鷺の秘密

「さすがに眠いわね」

昨日はぶっ続けで仮想空間に行っていたせいで疲れている。昨日は帰ったあとシャワーも浴びずそのまま布団へ倒れこんでしまった。

しかも今日は朝から仕事だ。倒れこむ前にアームだけはセツトした昨晚の私を褒めてあげたい。

「千聖ちゃん、疲れてる?」

「そんなことは・・・いえ、そうね。少し疲れているわ」

レッスンの休憩中、日菜ちゃんが話しかけてくる。隠していたつもりだったけど日菜ちゃんには通じなかったようだ。

「あ、やっぱりリツスカ?ちよつと動きが鈍いなくって思ってたんですよ。演奏に支障がないレベルだったので言わなかったですが・・・」

「あ、実は私もちよつとヘンかな?って思ってたんだ」

「私ものです!チサトさん、やっぱりお疲れなんですね!」

と思ったらパスパレのみんなにはバレていたようだ。私もまだまだね。

「そんなに他のお仕事忙しいの?」

彩ちゃんが心配そうな顔で聞いてくる。

「それもあるけど・・・うーん」

これはいつでもいいことなのか?

そういう懸念が頭に浮かんだがこの子たちが言いふらしたり茶化

したりすることはないっていうのもわかっている。

その安心感からか、はたまた誰かに聞いてほしいという潜在的な願望か……

無性に話したくなったのだ。

「ちよつと休憩の雑談程度に聞いてほしいのだけれど」

私は語り始める。友達が大変なこと、そして治療のこと、仮想空間のこと。

もちろんパスペレのみんなは芽音のことは知らないでのそのあたりはぼかした。

「「「おおく……」」」

話し終わったとき、みんなはそんな感じで感嘆の声を漏らした。

「千聖ちゃん……すごいことやってるんだね」

「さすがにこれにはジブンもびっくりす」

「チサトさんはその方にとつての救世主なのですわね！」

「ふーん。なんかおもしろそーだね！」

約1名不謹慎な感想を漏らすが、それに不快感が出ないのは日菜ちゃんだからだと思う。

「でもさく千聖ちゃんどうしてそこまでするの？いくら友達でもふーそこまで命かけないと思うんだけど」

日菜ちゃんは本当に分からないといった感じで聞いてくる。

「そうね……本当に大切な友達だから……かしら」

「そんなにな？」

今度は彩ちゃんからの疑問だ。

「ええ。その人はね、飾らないこと、本音で向き合うこと、そして今の私が必要であるべきであることを教えてくれた、存在を示してくれた大切な人。私に初めてできた・・・いや、ここまで言う必要はないわね」

男の子の親友、と言いかけたけどやめておいた。

「えく気になるなく」

「でも千聖ちゃんにそこまで大切って言ってもらえるなんてちよつとうらやましいな」

「あら？彩ちゃんだって、それにパスパレのみんなだって私にとって大切なお友達よ？」

彩ちゃんの発言にフォローするのも忘れない。

まあ本当にそう思っているので嘘ではない。

「チサトさん！ハグしましょう!!」

「・・・は？」

自分で素っ頓狂な声が出てしまったと思う。

「イヴちゃん・・・？」

「ハグ、しましょう!!」

「い、イヴちゃん!?!」

間髪入れず抱き着いてくるイヴちゃん。

力強く、そして安心感のあるハグ。イヴちゃんの得意技だ。

「チサトさん、頑張ってます！きつと報われます！その人も目を覚ま

します！私にはこんなことくらいしかできないけど・・・応援します！」

イヴちゃんは純粹無垢な目でハッキリという。

「あー！イヴちゃんずるい〜！あたしもー!!」

「きやつ・・・日菜ちゃん!」

「ほら彩ちゃんと麻弥ちゃんも！」

「え!?!私もいいの?」

「ジブンはちよつと恥ずかしいっす・・・」

「いいからいいから！ほらほら！」

日菜ちゃんに強引に引き寄せられる彩ちゃんと麻弥ちゃん。

そんなこんなでパスパレによる謎のハグ塊が出来上がってしまったのだ。

「でもね、千聖ちゃん。さつきイヴちゃんがいったこと、私も一緒の気持ちだよ。それに無理しないでね、頼ってね?だって私たちは・・・その・・・大切なお友達、仲間だからや・・・あつ／＼／」

「うーん、ここでとちるのが彩ちゃんだよね〜」

「ひ、日菜ちゃんー!」

「さすがアヤさんです！」

「イヴちゃんまでえ〜」

「やつぱり彩さんはこうでなくてはダメっすね〜」

「麻弥ちゃんも!」

うん、いつものパスパレだ。話してよかったな、と素直にそう思った。

「みんな、ありがとう。なるべく迷惑をかけないようにするから」

さて、今日も仕事が終わったら病院だ。元気をもらったしこの後の
レッスンも頑張れそうだ。

「あ~~~~!!わかった!!
!!!!!!」

・・・なんてことを考えていたら日菜ちゃんが大声を上げた。

「千聖ちゃんが助けたいってその友達!男の子でしょ!?

「「「え!?!?!」」」

日菜ちゃん以外のみんなとともに驚く私。私は凶星を言い当てら
れ、他のみんなはまさかの発言にびっくりしている感じだ。

「ひ、日菜ちゃん・・・?何を言っているのかしら・・・?」

「あ、その顔やっぱり当たりなんだ」

「しまった・・・」

時すでに遅し。バレてしまった。

「でも日菜ちゃん。助けたいのが男の子でも別にいいんじゃないかな
?大切なお友達なんだし」

「そうですね!友情に性別は関係ありません!!」

「自分は異性のお友達がいないのでわかりませんが、確かにそうです
ね」

みんながフォローに回ってくれている。これなら大丈夫そうだ。

「えー?みんなそれ本気で言ってるー?」

日菜ちゃんの追撃。正直嫌な予感しかしなかった。

所っていう自覚が出てきたからなのだろうか。

この一連の騒動を終えたあと、私はそのまま花音と合流し病院へ向かうのであった。

第7話 これがハッピーエンドというものだよ

俺は今日、花咲川に入学する。中学までの俺とは訣別し、仮面を被り、無難で中身の無い3年間を送る。そう決めて臨んだはずであるが、そこで一人の少女と出会った。

絶望までの方向音痴でクラゲが大好きらしいクラスメイト、松原花音。その後俺が被る仮面を見抜かれたこともあり、ありのままの俺を受け入れてくれた花音。

親友になれた。初めてだった、ここまで信頼できる人に出会えたのは。

「いや・・・はじめて・・・だよな？」

「え？何が？」

しかし違和感があった。なんていうかこう、かなり前から親友だったような感じだ。いや、間違いなく初めてあったはずだし地元が違うし実は幼馴染で昔会ってた、なんてこともなはずだ。

なのにこの安心感、信頼感はなんだろうか？それほどまでにこの子を信頼しきっているのだろうか？

「俺と花音って高校が初対面だよな？」

「え・・・？そうだと思うけど」

花音はなんでそんなこと聞くの？といわんばかりの反応だ。

まあマイナスな感情ではない、よいだろう。

そして次に出会ったのは俺と同じく仮面を被り、雰囲気のコントロールまでこなす化け物、白鷺千聖。

どうやら花音が一番仲のいい子らしくなんと芸能人。一時は誤解から花音と俺の中を引き裂こうと画策していたが、あるトラブルから助け、誤解を解いたことで二人目の親友となった。

「なあ千聖、俺と千聖って昔会ったことあるとかないよな？」

「ナンパは初対面の相手にやらないと逆効果よ？」

「ナンパじゃねーよ、いや、俺も何変なこと聞いてるんだって感じなんだけど……」

「ふふ……変なの」

そういつて千聖は笑う。やはり俺の気のせいなんだろうか？

そして俺と花音、千聖。3人の楽しい時間はどんどん過ぎていき、ついに運命の日とも呼べる日を迎えてしまう。

「なんで……お前がここに」

「やつほー、芽音」

目の前にいるのは清田美緒だ。俺が地元を離れるきっかけになったトラウマの元凶、仮面を被ることになった原因の人物。

その日をきっかけに、俺はすべてを知ることになる。俺が抱いていた違和感の正体、そして花音や千聖が何をしているのか。そのすべてを……

※

私は考える。

清田美緒さんが突然現れて、芽音くんの過去をさらけ出し、陥れようとした。

でも私はそれが来るのが分かっていたかのようにスラスラと反論し、追い返すことに成功したのだ。

「うーん……なんなんだろう」

「どうした花音？」

「あ、ううん。ごめんね、独り言だよ」

「珍しいな、花音が独り言だなんて」

「ねえ、芽音くん。変なこと聞くんだけどね。清田美緒さんと私って初対面だよな？」

「初対面じゃなかったら怖いわ・・・なんでまたそんなことを？　そういや花音、清田美緒を目の前にしてすげー毅然とした感じだったよな」

二人で頭を悩ませるがどれだけ悩んでも答えは出なかった。

そしてその後、事故で入院した千聖ちゃんのお見舞いの帰り。私はなんだか胸騒ぎが収まらなかった。

“前にもこんなことなかったかしら？”

さつき病院で千聖ちゃんが言ったあの言葉。千聖ちゃんが事故に遭うなんてそう何回もあったらたまらないと思う。でも不思議と私もそんな気がしていたのだ。

ああもう、最近感じるこのモヤつとしたの、本当になんなんだろう？　でもその答えはもう間もなく、出ることになった。

「さあああああきいいいなりいいいいいいい!!!」

「芽音!!後ろ!!逃げて!!!」

響き渡る恨みのこもった声、そして近くで叫ぶのは・・・病院着を見たまま全力で走ってくる千聖ちゃんの姿だった。

「.....!!!!!!!」

そっか。そうだった。

「全部、思い出した」

そうだ、私がここにいる理由。答えはもう決まっている。

「芽音くんはやらせないよ・・・!」

※

“前にもこんなことなかったかしら?”

事故で入院し、目を覚ました私は芽音と花音にそんなことを聞く。少なくとも今まで事故に遭って芽音に助けてもらった・・・なんてことはないはずだ。

・・・ないはずなんだけどそうにも頭がモヤモヤする。寝起きだからだろうか?

「何か大事なことを忘れているような気がするわね」

思えばここ最近は何んだか煮え切らない日々が続いた。

既視感を覚える頻度も多く、芽音もことあるごとに「前にもおんなじことが・・・」と聞いてきたりしてきたからだ。

私は考える。考えて考えて必死に記憶の引き出しを開ける。

「・・・・・・・・!!!!!!」

それは一瞬の出来事。喉につつかえた小骨がなくなったような感じだ。

「芽音!!」

私は駆けだす。病院着のまま、裸足のまま。腕についた点滴のチューブを引きちぎり、走る。

芽音たちが病院を出てからそう長い時間は経っていない。

以前の失敗より時間はあるはずだ。

「……いた！」

芽音と花音の後ろ姿。そしてそのあとをつけるレンガを手を持つ女性。

「さああああきいいいなりいいいいいい!!!」

「芽音!!後ろ!!逃げて!!!」

私は力を振り絞り走る。

そしてそのまま女性のうごきを止めるべく、行動を起こしたのであった。

「やらせない！」

「な。なんだよお前!!離せ!!!」

私は女性にしがみついても女性は手に持つレンガを振り回し、それは運悪く私に当たってしまふ。

「あぐっ……!」

「邪魔しないで」

倒れこむ私を背に再びその女性は歩き出した。

「花音……!」

私は花音が思い出していることを信じ、彼女に託すのであった。

※

「清田美緒……!?!なんでここに……?……!!千聖!!!」

「さああああきいいいなりいいいいいい!!!」

不意を突かれた。俺の目の前で千聖が突き飛ばされる。咄嗟のことに判断できなかった俺は、鬼のような形相でレンガを掲げる清田美緒を前に硬直してしまった。

「死ねええええええええ!!!」

ドガツ!!!

「……………?」

確かに殴る音は聞こえた。しかし俺は何ともない。
俺は咄嗟に閉じたを目開ける。

「……………よか……………た。芽音くん……………無事だあ……………」

「か、花音……………?」

レンガを受け倒れる花音。花音は心底俺が無事でよかったという顔を浮かべていた。

「花音……………おい花音……………どうしてだよ……………!!?」

「チツ……………ジャマばかりしやがって……………でももう壁はないわ。芽音、覚悟して!!!」

再びレンガを振りかざす清田美緒。俺はそんなものどうでもいいくらいブチ切れていたのだ。

「……………なっ?!?ぐああああ!!!」

まさに一閃。俺は迫りくる清田美緒にカウンターで拳をぶち込み、一撃で静めた。

無言で放つ一撃。俺は今までにないくらいさらにブチ切れていた。

「花音……！千聖……！なんで……」

俺は花音と千聖に問いかける。

「……どうやら成功したみたいね、花音」

「うん、よかった。ようやく上手くいったんだね」

「花音……？千聖……？怪我は大丈夫なのか……？」

花音と千聖は何にもなかったかのように立ち上がった。

それどころかさつきぶちのめしたはずの清田美緒の姿も消えており、次第にまわりの景色も崩れ始めた。

「うーん、本来は存在しないケガだからね。貰った時は痛かったけど大丈夫だよ」

「私に関してはそもそもこの場にいることがイレギュラーですもの。なんてことないわ」

花音と千聖はこの状況を理解しているようだ。

とりあえず俺も冷静になろう。この二人からしっかり説明を聞いて、消化させよう。

「……すまん、取り乱した。説明してほしい」

「さすが芽音ね。切り替えが早くて助かるわ」

「ねえ。芽音くん。今まで妙に既視感があったり、私たちと昔から知り合いだったって感じがあったって言ってたよね？」

「ああ」

「それね、気のせいじゃないの」

「どういうことだ？」

その後、花音と千聖の説明をしっかりと聞く俺。

その内容は想像を絶する内容であった。

「つてことは……ここは現実じゃなくて俺の記憶を基に作られた仮想空間……？」

理解が早くて助かるよ。多分何回も仮想空間を再生するうちに、定着まではしないものの断片的な記憶としては残ったんじゃないかな？」

衝撃的過ぎて話に若干ついていけない。でもこの二人の雰囲気は至って真剣だ。決してからかったりはしていないだろう。

「本来の記憶はあそこで芽音は清田美緒さんの凶行に倒れるはずだった。でも間一髪で役割を思い出した私たちが清田美緒さんを止めた。そのことによって存在しなはずの記憶が一時的に生成されているわけね。そうなるって仮想空間が無理やり書き換えられていることになるから、記憶の本人と、介入者である私たち以外は消滅を始めるというわけよ。おそらく私たちも長くは持たないと思う」

「……話はわかったよ。ありがとう、二人とも。俺のために」

衝撃的な内容もそうだが、それ以上に俺は嬉しかった。二人の親友が俺のためにリスクを背負ってここまでやってくれることに。

こりや目覚めた後は当分頭があがんねーな……

「あ、そうだ、一応これは言っておかなきゃ」

花音が思い出したあのように口を開いた。

「芽音くん。これはあなたの記憶です。夢でも錯覚でもなく、あなたが歩んできた人生の一片です。わかってくれましたか？」

優しい気な表情で花音は言った。

ああ、もちろん――

「わかったよ。二人とも、本当にありがとう」

「よかった」

「これであれば目覚めるのを待つだけね」

そういつた瞬間、二人の体は光を放ち始めた。

「そっか。役割がおわったから私たちも戻らなきゃなんだね」

「芽音。これからあなたはそのまま眠りながらゆっくり記憶として定着させていくわ。目覚めるその日まで私たちはずっと待ってるから・・・頑張るのよ」

「ああ！」

「ふふ、いい返事ね」

「じゃあね、芽音くん。現実で待ってるから」

そういつて二人の姿は消えた。

そして俺の視界も揺れる。周りの景色はすでに崩壊し、真っ暗な暗闇になっている。

「さて、俺もひと眠りしますかね」

俺はそのまま体を闇にゆだね、そのまま目を閉じた。

そして次に目覚めたときには、ドラマにありがちな病院の白い天井が見えるベッドの上であった。

※

「・・・」

「・・・」

ゆつくり起き上がり考えを整理する。私と花音。

「・・・やったね」

「ええ・・・やったわ」

やりきったー

これで芽音は目覚めるはず。お医者様の話だと、記憶の定着まではもう少々かかるだろうということだ。

ちなみに私たちがあれから仮想空間に入った回数には50回を超えたところから数えていない。この短期間で一体何年分の時を駆けたのだろうか？

実際は成長していないし精神的なものではあるのだけれど。

そして、その日は意外にも早くやってきた。数日後、いつも通り花音とお見舞いに来た時だ。

「・・・ここは現実か？」

ボソツとした声で囁かれた言葉。でも私たちは決して聞き逃さなかつた。

「芽音くん!？」

「芽音!？」

※

「あー・・・なんていうか心配かけたな、うん。うわ、喉がカラカラで声が全然でねえ・・・」

あのあと医者がすつ飛んできて俺の検査をした。その後、長期間眠っていたことによる筋力の衰えと喋らなかつたことによる喉の弊

害以外問題なしと判断されたようだ。

「ほんとうによかったよお・・・」

「か、花音・・・泣くなんてはしたないわ・・・」

「千聖ちゃんだつて泣いてるよお・・・」

うーん、二人の女のこと泣かせちゃうなんてあたしってばとんだ畜生ね。

・・・なんてアホなこと考えている場合じゃないや

「二人とも。改めて本当にありがとう。俺がこうして無事に起きて話せるのは二人のおかげだ」

「ううん、私たちがしたいからした。それだけだよ」

その後は俺が眠っていた間の話を聞いた。

なんと花音も千聖もバンドを始めたとか。俺が眠っている間にたくさん友達や仲間ができて、進むべき道も定まっているようで安心した。

「あ、そうだ。花音、千聖これだけは言わせてくれ」

「なにかな（かしら）？」

「ただいま」

俺がそういうと二人は笑顔でこう返してくれた。

「おかえり!!」

―第2章―

第1話 再会と出会い

「うわ、この感じ超久しぶり」

新しい春が来た。もちろん、俺が今地に足をつけている花咲川地区にもだ。川沿いには満開の桜が咲き乱れ、商店街もどこか活気がある。

たった一年しか過ごしていないのであるがもうすっかり俺の心になじんでいるのを実感する。

「待ち合わせまではまだ時間があるな・・・」

さて、俺・俗芽音が花咲川に帰ってきたのは約1年ぶりである。

1年前、清田美緒の襲撃により倒れた俺は二人の親友である松原花音、白鷺千聖のおかげで無事に目を覚ますことができた。

しかしながら長い間眠っていた俺の筋力は衰え、襲撃の際の後遺症もあり、まともに生活できるようになるまでは順当にやって2年、かなりきついリハビリをやっても1年はかかるだろうと言われた。

そこで提案があつたのだ。地元でゆくりりリハビリをやるか、遠く離れたところにある、弦巻家が運営する専門のリハビリ施設に入つてガツチリやるか。

俺は後者を選んだ。しばらく花咲川を離れることになるが長い目で見れば早く復帰できるわけだし、なにより時間を無駄にしたくなかった。

それにその施設はリハビリの他色々と鍛えてくれる施設もあるらしい。

俺はそこでキツイリハビリを乗り越え、そしてもつと強くなつていざというときに大事な人を守るように腕っぷしの強さも磨いた。

そんなことをやっていたら想定以上に回復が早く、1年がたつまでもなく十分な力を取り戻したのである。しかも以前よりも強くなつ

た。

これにはリハビリの先生も驚いていた。

「腹減ったなあ・・・久々につぐみちゃんのお店にでも顔を出してみようか」

そして今日はあれから初めて花咲川に足を踏み入れる日。花音は家の用事が、千聖はどうしても外せない仕事があり会えるのは夕方になつてしまいうらしい。

とはいっても遠方にいる間もハロー、ハッピーワールド!の謎(というか弦巻家)の財力でそれなりの頻度で会いに来てくれていたのでメチャクチャ久しぶりというわけではない。千聖も休暇を利用して何度か会いに来てくれていた。

とまあそういうわけではあるが、仕方がないので俺は商店街で時間をつぶすことにした。

あ、俺の学校復帰はすでに決まっている。襲撃される前に進学に必要な出席日数は満たしていたので、今年から2年生だ。

ちようど1年留年した計算になるが復帰できるだけでもヨシとせねばね。

ちなみにリハビリの手配、学校復帰の算段などはすべて弦巻家、弦巻こころ(俺は経緯その他を込めてお譲と呼んでいる)がやってくれた。

正直、俺はもうお嬢に頭が上がらない気がする。しっかりと恩を返していかねばならん。

「あちやう今日定休日だったか」

そんなことを考えながら羽沢珈琲店についた俺であるが、目の前にぶら下がるのは定休日の看板。

「うーん、甘いものを食べるハラになっていたのだけど・・・どうしたもんか・・・あつ」

歩いていると見つけたのはパン屋だ。

そう、やまぶきベーカリー。以前ここで買ったチョココロネはマジでうまかった。

「いらっしやいませー!」

店に入ると元気な声で出迎えられる。年は俺と一緒にくらいかな？
そういえばここのおすすめがチョココロネだつてことはこの子に教えてもらった気がする。

「おや?これは?」

「あ、それ新作なんです。ちよつと変わった色してますけど」

「確かに、でもこういう創作パンも楽しみの一つですよね」

「そう言ってもらえると助かります!それに実はこれ、私が考えたパンなんです。お父さんがこれなら店に出していいよつて、今日初めて店に出させてもらったパンでして」

「そりゃいい。うん、これも貰います」

「ありがとうございます!!」

こうして美味しいパンを手に入れた俺。そのあと色々あったが、時間は間もなく待ち合わせの時間。

待ち合わせ場所に指定されたのはとあるライブハウス前の喫茶店だ。

「CiRCLEか」

目の前に掲げられた看板はライブハウスCiRCLE。

花音も千聖もここを拠点にバンド活動を始めたとか。

なるほど、羽沢珈琲店が定休日だと知っていたからこちらになったわけか。

「芽音くん、久しぶり・・・でもないかな？」

「よう花音。んーまあそれ内に空いたから久しぶりでもいいんじゃないかな？」

「私は結構久しぶりね」

「千聖は忙しいからな。仕方がないさ」

そんなことを考えていたらちようど二人がやってきた。どうやら来る途中でたまたま合流したらしい。

いつもとかわらない空気。いつもと変わらない会話。

うん、俺の居場所はやっぱりここだ。

「あ、そうだ。一応今日が戻ってきて初日だしこれは言っておかなきや。ただいま。花音、千聖。また今日からよろしくな」

「うん、おかえり！」

二人の笑顔がはじける。

俺はまた始まる花咲川での生活に期待を膨らませ、積もる話を二人としたのであった。

※

俺は仮面を被るのを辞めた。

はじめは高校なんて高校卒業の資格を得るために我慢して通うよいうなものだ。適当に仮面を被って3年間無難に過ごせばいいと思っていた。

でもあいつらと出会い、その考えは変わった。もちろん相手によっては仮面を被るし、そうでない相手には普通に接する。やめた、というよりも気ままに生活してみようと思ったただけなのかもしれない。

「あれ、美咲？」

「芽音さんじゃないですか。なんでここに」
「なんでってここ俺のクラスですしお寿司」
「あくそっか芽音さんダブったんでしたっけ」

新学期1日目。俺はクラス分け表に従い自分のクラスに入ったわけであるが、そこで見慣れた顔である奥沢美咲を見つけた。

美咲を含むハロハピメンバーは花音やお譲にひっついてよく俺のリハビリ地まで来ていたので、よく知る仲となっている。

ちなみにお嬢とはぐみは違うクラスみたいだ。

「まあよく知らない人が同じクラスにいるよりはいいか。よろしくお願いしますね、芽音さん」

「こちらこそ。あと同級生になるわけだから敬語もやめてもらえると助かる」

「あくそっか。確かに学校じゃ違和感ありますもんね。わかりました。じゃあよろしく芽音……くん？」

「それでOK」

こちらとしても顔見知りの人がいるのはありがたい。1年ダブったのでまた友人0からスタートすると思っていたのでこれは嬉しい誤算だ。

その後は始業式、そしてホームルームを経て1日目は終了した。

「さて帰るか……美咲は練習？」

「そうだね、今日はこのままハロハピの練習」

「ってことは花音もか。よろしく言っておいてくれ」

「はいはい」

そんな感じで雑談をしていると、誰かがこちらに近づいてくる気配を感じた。

「あの〜・・・」

「あれ？市ヶ谷さんどうしたの？」

「えっと、俗くん？に用事があった」

美咲に市ヶ谷と呼ばれた子は恐る恐るといった感じだ。

どうやら目的は俺らしい。

「俗は俺だけどうしたのかな？」

「えっと、よくわかんないんですけど俗くんは手続きの書類を書いてほしいらしくて。生徒会室にあるので今から来てもらえたりしますか？」

「なるほど、そういうことね。いいよ」

「助かります」

「しかしそういうのは職員がやるものだと思うんだけどなんで市ヶ谷さんが？」

「私生徒会なんですけど先生が忙しいから同じクラスだし代わりにもらっておいてくれて」

「うーん、人使いが荒いねえ」

「まったくです。どちらにせよ生徒会の印があるので理にかなってるとは理にかなっているですけどね」

そんな感じで話す俺たちであるが俺は一つ考えていた。

あ、この子猫被ってるなど。

まあ気持ちはわかるがそれが見抜かれていて気づかないふりをするのはちよつと悪いかもしれない。俺自身外面ばかりに仮面野郎だったのでその苦しさはよく知っている。

あとで俺には猫を被る必要がないことは教えてあげよう。

「というわけだ美咲」

「うん了解。じゃあ私もいくね」

美咲と別れ生徒会室へ向かう俺と市ヶ谷さん。
沈黙はアレなのでわざとらしくならない程度に会話をする。

「奥沢さんと知り合いなんですか？」

「美咲とは共通の知り合いがいてね。まさか同じクラスになるなんて思ってたかったけど」

「なるほど。っていうか俗くんって転入生か何か？去年うちの学年にはいなかったと思うんですけど」

「うーん、そのようなものかなあ。多分これから書きに行く書類もそれに関係することだろうしすぐわかるさ」

「へえ」

そんなことを話している間に生徒会室に到着する。

「あ、市ヶ谷さん。お疲れ様です……」

「お疲れ様です燐子先輩。連れてきました」

「こんにちは。生徒会長の白金燐子と申します。放課後にわざわざありがとうございます」

「いえいえ。そちらこそお疲れ様です。俗芽音です、よろしく願います」

「はい」

生徒会室に入り、椅子に座る俺。

そういえばこの学校、生徒会室と風紀委員室が一緒だったな。

「そういえば氷川さんって元気になっています？」

「氷川さんですか？氷川さんなら……」

「ただ今戻りました。おや……？」

「ちようど来たみたいですね」

ドアが開いた先には氷川さんが立っていた。

俺の顔を見て少し驚いている様子だ。

「俗さんではないですか。そういえば復学されるのは今日でしたね。．．．なるほど、この書類はそのために」

「そうみたいだね」

「学年は一つ変わってしまいましたが変わらぬお付き合いをお願いします」

「こちらこそ」

氷川紗夜さん。久しぶりに会うが変わらない．．．いや、雰囲気はかなり柔らかくなった気がする。この1年で色々あったんだろう。

「あのく紗夜先輩と俗くんは知り合いなんですか？それに学年が変わったって．．．」

「あー俺ね、一つダブっちゃったんだよね。ケガで療養しててさ。それで1年ずれちゃったわけ」

「アレ？ってことは先輩？」

「そうなるけど同じクラスのよしみだし同級生として扱ってくれると嬉しいかな。敬語とかも抜きで」

「．．．りよーかい、そうしますわ」

「話が早くて助かるよ」

市ヶ谷さんは少し緊張が解けたような雰囲気を出した。うんうん、やはり気を張っていると疲れるだろうしもっと気を抜いてほしいものである。

「さて、書類とやらを記入しましょうかね」

「それではこちらをお願いします」

やはり留年関係の書類であったか。

俺は手早く記入し、しばらくみんなと雑談していた。

「え？白金さんと氷川さんって同じバンドなの？」

「ええ」

「私がキーボードで氷川さんはギターです」

「へえ〜…アレ？美咲もやってるって言ってたけどバンド流行ってるの？」

「大ガールズバンド時代とまで言われてますね。かくいう私もキーボードやってますし」

「なんと」

市ヶ谷さんが解説してくれる。どうやら今はガールズバンドが大人気のようだ。

「あ~~~~り~~~~さ~~~~!!!」

そんな感じしていると突然生徒会室のドアが開く。

なにやらめちやくちや元気な女の子が入って来るや否や、市ヶ谷さんに抱き着く。

「ちよ、香澄!!場をわきまえろ場を!!!」

「だってえ〜有咲いつまでたってもこないんだもん」

「だあ〜くつつくなあ〜!!」

叫ぶ市ヶ谷さんであるが俺の顔をみてハツとする。

あ、そうか。市ヶ谷さん俺の前では猫を被っていたからね。思わず本性を見せてしまっただけなのかな。

「えっと、これはその。仲のいい友達同士だからというか・・・」

「大丈夫大丈夫。市ヶ谷さん猫被ってたの気づいてたし、俺の前で無理はする必要ないよ」

「気づいてた!?!いつから!?!」

「教室で話しかけられた時から」

「マジかよおおおお！」

うん、恥ずかしいよね。気持ちはよくわかる。

※

その後書類を出してくるということで白金さんが、校内の見回りに行くということで氷川さんが退室した。

市ヶ谷さんも今日の仕事はこれだけということ、この後はバンドの練習があるようだ。

「え？じゃあ戸山さんも同じクラスなんだ」

「そうだよー？まあ初日だし気づかなくても仕方ないよー！」

「何はともあれ、これからよろしくね」

「こつちこそー！」

「お前ら初対面でここまでフランクに話せるってコミユカお化けかよ……」

市ヶ谷さんのツツコミも入りながら歩く俺たち。市ヶ谷さんは完全に猫を被るのを辞めたようだ。うん、こつちの方が俺も気楽だ。ちなみにこの後はバンドメンバーと待ち合わせをしているらしい。

「あ、いたいた！さーやー！」

どうやらそのうちの一人が偶然いたようだ。

「あれ？」

その中のメンバーの一人は見覚えがあった。

「やまぶきベーカリーの子だ」

「俗くん、沙綾と知り合いなのか？」

「客としてだけど」

「あーね。そういうことか」

近づくとあちらも気が付いたようだ。

「え!?!うそ・・・」

そして驚いた顔をされた。

「どうも。昨日ぶりかな？」

「昨日はありがとうございまして!!!」

そして深々と頭を下げられる。

「そう大したことはしていないよ」

「いえ、ほんと助かったので。というか同じ学校だったなんて」

「うん、俺もびっくり。よろしく」

「よろしくお願いします!」

昨日何があったかは別の機会に話すとしてこれは思わぬ再会だ。

さて、俺もそろそろ帰るかな。

「んじゃ、俺はこの辺で。練習頑張ってるね」

「うん!俗くんもじゃーね!」

「気を付けてなー」

「またね」

そんな感じで俺は撤退だ。

さて、下校する俺であるがこの後やることがある。

「俺の読みが正しければそろそろ来る頃だろうね」

一言つぶやくと、俺はそのまま商店街へ、やまぶきベーカリーへと向かったのである。

第2話 山吹沙綾

「そーういや沙綾、俗くんと昨日何かあったのか？」

「え？んーちよつと助けてもらったんだけどね」

練習に向かう前にうちでパンを買ってから行こうという話になり、その役目を私と有咲で買って出た。他の三人は先に蔵に向かい、私たちはパンの調達。店に向かう途中、有咲が私にこんなことを聞いてきたのだ。

「実はね・・・」

私は昨日あったことを思い出しながら有咲に語った。

※

「ありがとうございます！」

私の新作のパンを買ってくれた男の人が会計を終えると、怒ったような顔をした女の人がレジにやってきた。

「いらつしやいませー！」

「ちよつと!!!このパン食べたらお腹壊したんだけど!!!どうしてくれるのよ!!!」

突然ぶつけられる怒り。私はびっくりしてしまい、上手く返せなかった。

「なによ！だんまりを決め込むつもり!?」

参った。今お父さんは配達でいないしお母さんも買い物に出かけ

ている。

私で対応するしかない。

「えっと。まずは申し訳ありません。お話を聞かせていただいても・・・」

「お話も何もここで買ったパンを食べたらお腹痛くなったの!!食中毒よ!?!なんてものを売るの!?!」

ダメだ、取り付く島もない。

「ちよっとお姉さん、少し落ち着いてくださいよ」

「なによアンタ!?!」

「偶然居合わせた客ですよ」

そこで割って入ってきたのはさつきパンを買ってくれた男の人だった。

「クレームつけるなどは言いません。問題があったのなら店側が誠意ある対応するのが当たり前ですからね。しかし怒りに任せて怒鳴ってちや解決しませんよ」

「私は怒っているの!!あなた、店をかばうの!?!」

「そうは言ってません、俺は中立です。なので一度冷静になってくださいと言ってるんですよ」

「アンタには関係ない!とにかく!病院に言ってお金かかったんだから治療費と慰謝料をもらおうよ!」

ど、どうしよう・・・

こんな大きなことになるなんて。店にいるお客さんだけでなく道路を歩いていたお客さんもなんだなんだんと野次馬化していく。

「だから落ち着きなさいって。治療費や慰謝料を請求するならなおの

「こと事実関係をしっかりとさせない」と

「何よ事実関係って。私が嘘をついているとでもいうの!?!」

「なんでそうなるんですかね。お金を請求するなら手順が必要だって高校生でもわかりますよ。それに本当に商品に問題があったのなら何を売って何が悪かったのか店側も原因しらべなきゃならないでしょう?」

男の人は全然焦らず、むしろ余裕のある感じで返す。

「あなたがお腹を壊したパン、なんでした?」

「そんなの・・・あつ!これよ!この気味の悪い色をしたパン!!」

その女の人が指さしたのは私が考案した新作パンだった。

その指摘に私はすごく悲しい気持ちになる。

「へえ・・・ちなみにお腹を壊したのはいつですか?」

「昨日よ!昨日の朝食食べて、お昼ごろにお腹が・・・」

「それは間違いないですか?ほかのパンじゃなくて?」

「間違えようがないわ。昨日はそのパンしか買ってないもの」

それを聞いた瞬間、男の人はニヤリと笑った。

「はい!言質いただきました!!」

そういうと男の人ボイスレコーダーアプリの録音画面を見せた。

「おつかしいですねえ!このパン、出たばかりの新作で今日が初お披露目のはずなんですけどね。昨日存在しないものをどうやって食べってお腹壊すんですか?ん?」

・・・そっか

そうだ。このパン、今日から売り出したんだ。確かに昨日買えるはずがない。だって、存在していないのだから。

「なっ!? アンタ騙したわね!？」

「騙すって意味わかってます? アンタが勝手に自白しただけですよ。しかもアンタ結構慣れてるだろこういうの。個人店に言いがかりをつけて金をむしり取る小遣い稼ぎ」

「言いがかりはやめてちょうだい!!」

「言いがかりねえ・・・なんなら名誉棄損で俺を訴えますか? なんなら警察呼んで白黒つけてもいいですよ? もちろん俺は録音データを警官に渡しますけど」

「け、警察・・・」

「あんまナメたことしないほうがいいですよ」

「チクショオオオオオオ!」

そんなやり取りの後、女の人は叫びながら逃げていった。

「ありやりや、逃げちゃった。大丈夫ですか?」

「は、はい。ありがとうございます!」

「大したことはしてないよ。それに・・・」

男の人は袋からさつき買った私の新作パンを取り出すと一口かじった。

「こんなおいしいパンでお腹を壊すなんて、そっちの方がどうかしてるよ」

「ほんとありがとうございます!でもよくここまで冷静に対応出来ましたね。私なんてあたふたしてただけなのに」

「いんや。話聞いてて最初から因縁つけに来てるのわかってたんで。うまいこと自爆してくれてよかったよ。おっとそろそろ時間がヤバい。んじや、俺はこれでいきますので」

※

「はえ〜かつけえ〜・・・」

「とまあそんな感じ。その後名前も名乗らず出て行っちゃって」

「やるなあ俗くん」

「そのあとお父さんも帰ってきて一応警察には相談したよ。また来たらずぐに通報してくれって」

そんな話をしながら歩いていると店についた。店に入ると沙綾のお父さんが出迎えてくれる。

「おかえり、沙綾」

「ただいま〜っていつでも練習用のパンを買いに來ただけですぐ行くんだけどね」

「そつかそつか。有咲ちゃんもいらっしやい」

「こんにちは」

私たちはみんながリクエストしてくれたパンをトレイに乗せる。すごく平和な時間。でもそんな時間も長くは続かなかつた。

「オイコラ、ここか？オレの嫁に因縁つけたっていうパン屋は？」

見るからにガラの悪そうな男の人。その人がドアを勢いよく開けると突然怒鳴り声をあげた。その後ろには昨日因縁をつけてきた女の人もいる。

「そう、ここよ。早くやっちゃってよ」

「まあ待て。いちおう相手の話も聞いてやんねーとなあ。おいお前が店主か？」

そういつて突つかかる男の人。これは・・・まずい気がする。
お父さんも突然の出来事で困惑している。他のお客さんや有咲も
怯えたような目でその様子を見ていた。

「あ、そいつ！その小娘が私に因縁つけてきたの!!」

そして指をさされたのは私。

いけない、これはほんとうにまずい気がする。私自身、突然のこと
で頭が回っていない。

「テメーか！うちの嫁にエライ恥かかせてくれたみたいだけどよ・・・
どう落とし前つけるんだ？あ？」

「娘には手を出さないでくれ！」

「うるせえ！ジジイは引っ込んでろ!!」

「お父さん!!」

そういつてとびかかるが、あつけなく突き飛ばされるお父さん。
商品棚にぶつかり、いくつかパンが落ちる。

「あ、それよ！そのパン！その気味の悪い色をしたパンが原因！」

「これか？きたねー色だなあ」

「・・・ッ」

「まあいいや。俺たちは別にことを荒げるつもりはねえ。うちの嫁に
治療費と慰謝料・・・昨日因縁つけてくれた分もコミで包んでくれりや
退散してやるよ」

「バカなこといつてんじゃねー！」

「なんだお前？関係ない奴は引っ込んでろ！」

足をガタガタさせながら声を上げてくれた有咲だったけど、怒鳴り
声に委縮して黙ってしまった。これは私でもそうなる。声を上げて
くれただけ有咲は勇気があってすごいと思う。

「んでどうする？払うのか払わねーのか？ま、後者なら店をめちやくちやに荒らしてやつから払わねーって選択肢はないけどよ」

※

ふむ。予想通りであったな。

実は昨日やまぶきベーカリーから出た帰り、例の因縁女を偶然発見し、今日誰かと再びやまぶきベーカリーを襲撃することを電話で話していることを聞いたのであった。

ここまでくると見過ごせないわけでやまぶきベーカリーに来たのであったのだが・・・

「すごいことになってるわね・・・」

偶然千聖と会ってしまい、なしくずしに一緒に来ることになってしまったわけだ。

「とりあえず千聖は警察に連絡してくれ」

「芽音はどうするの？」

「そりや俺がここに来た役割を果たすだけさ」

「警察が来るのを待った方がよくないかしら？」

「確かにそれも正解かもしれない。でも警察が来る前に店がメチャクチャに荒らされたら？山吹さんにけがでもあったら？」

「それは・・・」

「自分の城で命かけて商売している人にそれは酷だろう。まあ俺がやるのは警察がくるまでの時間稼ぎ程度さ。俺もやられるつもりはない」

「はあ・・・そうなった芽音は止められないか・・・」

さて、いこうか。

※

「オラ！払うのか？払わねーのか？なんとか言えや！店ぶっ潰すぞ！！」

依然として怒鳴り声は店内に響き渡る。

お父さんは必死で抵抗しているけど私は怯えるばかりで黙ることしかできなかった。

「あれー？昨日の食中毒おばさんじゃないですか？まーた来たんですか？」

「え!？」

しかしそんなか空気が変わった。そこに現れたのは――
俗くんだった。

「お腹壊したんなら家でトイレにこもっててくださいよ。アンタの顔
またみるなんてパンがまずくなっちゃうし」

「だれがおばさんよ!？それにアンタは昨日の!!」

「覚えててくれたのはいいんですけどあんま嬉しくくないですね」

「おい、このガキなんなんだ？」

「昨日話した奴よ!」

「テメーがそうなのか!!」

ふむ、どうやら食中毒おばさんは俺のこともダンナに話していたらしい。

「あなたは？」

「こいつの旦那だ。昨日は嫁に恥をかかせてくれたみたいじゃねーか」

「へえ！あなたが。つてことはさしずめ食中毒おじさんつてところで

すかね？いや、それよりももっと下劣なうんこの擬人化ですかね？
おっとパン屋でこの表現はいささか不適切ですか」

恐ろしいほど口が回り、相手を挑発する俗くん。

その挑発に相手は顔を赤くさせ怒りに震えている。

「ナメてつと殺すぞ？」

「きゃーうんこおじさんこわーい」

棒読みでさらに挑発を続ける俗くん。

「あんまでかい声で喋らないでくださいよ。うんこの臭いが移るんで」

「ぶっ殺す!!!!
!!!つてオイ!?!」

その瞬間、俗くんはお店を出て裏路地の方へ走り出した。

「待てゴラァー！オイ、追うぞ!!!」

「う、うん！」

その後を追って店を出る相手二人。

私は見逃さなかった。俗くんが店を出る瞬間、私と有咲に目配せをしたことを。

“あとは任せて”

そう言ってる気がした。

第3話 山吹沙綾Ⅱ

「あんだけのこと言ったんだからわかってるよな？」

「さあ？食中毒おばさんとうんこおじさんの考えることなんてわかりたくもありませんね」

「もういいわ！こんなガキ早くやっちやってよ！」

「え？やる？やるって何をです？俺ホモじゃないんで男同士はちよつと・・・」

「ふざけたことばかり言いやがって。もういい、ぶっ殺してやる。俺に舐めたクチきいたこと後悔させながら死ねや」

ふむ、大層お怒りである。

「いやー殺すはマズいですよ？もう警察に通報も行ってるでしょうし」

「デカイ口叩いて結局は警察頼りか？情けないガキめ！」

「ねえ、ブーメランって知ってますか？」

「あ？」

「ブーメラン投げたら自分のところに返ってくるあれです。あんだ、うんこだけじゃなくてブーメランの擬人化でもあったんですね。こいつは驚きだ」

「意味不明なことばっか言いやがって！死ね！！・・・ってなんだと!?!」

ただ単にイノシシのように直進しストレートで殴ってくるだけ。

俺はあまりに単調な動きに少しガツカリしていた。

俺はその腕を掴み、力いっぱい締め付け、相手が動けないようにする。

「あのさあ・・・ブーメランなんですよ、全部」

「う、腕が動かな・・・離しやがれ！」

「話は最後まで聞きましょうよ。さっき俺のこと情けないだのいって

くれましたけどね。自分はどうなんですか？自分より弱い店を狙って、店主や高校生の娘さんを恫喝して金品を奪い取る。それこそ情けないじゃないですか。やるんだったらヤバい筋の人を襲うくらいの気概は見せてくださいよ」

「うるせえ！人の金の稼ぎ方にケチをつけるんじゃないやねえ!!」

「金の稼ぎ方・・・？金を稼ぐってのは労働が伴うんですよ。会社に勤める人もいればあの人達みたいに、あの子みたいに小さい自分の城を守って必死にアイデアを絞り出して、何度も何度も失敗して、そして認められて初めて売り物になる。それが金を稼ぐってことだ」

「なんでテメエみたいなカギに説教されなきゃならんのだ？この世は弱肉強食。よえーヤツが強い奴に搾取されるのはこの世のシステムなんだよ！」

「あきれてものもいえねえよ」

俺はこのやり取りで結構怒りを感じていた。いやまあ最初からだったわけだけど、山吹さんが自分が考えたパンが初めて店頭に並んだことやそれを嬉しそうに話していたこと、そして実際に食べたパンのおいしさを思い出してしまったからだ。

「俺は友達が搾取されるのも、傷つけられるのも絶対に許さない。お前みたいなクズにあの子の苦労や喜びを絶対に踏みにじられせはしねーよ。あの子だけじゃない。俺が関わる人はできる限り俺が守る」

それが今の俺だ。かつていろんなものを巻き込んでいろんなものを壊し、情けないことに清田美緒に殺されかけた俺。もう同じ過ちは繰り返さない。そのためにキツイリハビリに耐え、キツイトレーニングに耐えて強くなって戻ってきたのだから。

「カッコいいね〜でもこれを見ても余裕でいられるかな？」

かろうじて俺の手から逃れた男は懐からナイフを取り出す。

武器を手にした男は余裕綽々といった顔だ。

「それでどうするつもりだ？」

「んなもん決まってるんだろー！テメーをぶっ殺す。死ねやクソガキ！」

あーあー後先考えず来ちゃって。仮にここで俺が死んだら確実につかまるというのにどうやら頭の出来があまりよくないようだ。

ここは裏路地。お約束といえばお約束であるが、俺は近くにある棒切れを手取る。

「あーあ。殺すって言いながら刃物で襲い掛かって来ちゃいましたね。殺人未遂成立つと」

「なんだと・・・うごあ!？」

刃物を持つているだけで動きはイノシシのまま。

俺はすぐさま突きをぶち込み、ひるんだところをナイフを持つ手に向けて棒切れを振り下ろした。

その一連の動きで男はナイフを落とし、突きが炸裂したことでその場に跪いてせき込んでしまった。

「ゴホツゴホツ・・・てめ・・・」

「お前さん、もちろん覚悟を持って刃を振ったんだよな？」

「覚悟だと・・・？」

「ああ。殺すなら自分も殺されるという覚悟だ」

「ま、まさかお前俺を・・・？」

「やめてええええ、その人を殺さないで!!!」

そこでずっと傍観を決め込んでいた女が突然叫びだし、俺は深くも少し驚いてしまった。

「バカ野郎。そんなことしたらお前と同類になるだろうが。少年院送

りになる気はねーよ」

その言葉を聞いた瞬間、二人は少しほっとした雰囲気醸し出す。「ただ警察が到着するまで抵抗できないようにはさせてもらうけどな」

「えっ……ちよ……やめ……来るな……」

「そうだなー。俺の見た感じ、さっきの騒動でパンが10個くらいダメになってた気がするから10発で勘弁してやるか」

「じゅ、じゅう……?」

「はーい、んじやあ歯を食いしばってくれるかなー?」

とまあそんな感じで俺はすごくニコニコしながら腰が抜けて動けない女とうずくまる男に向けて歩みを進める。

「ぎゃあああああああああああ」

※

「すごいもの見ちゃったね」

「お、おう……」

「いやーなんつーか……想像以上にすげー奴だった……」

「う、うん。それしか感想が出てこない」

あのあとやっぱり心配になってあとを追った私と有咲。

裏路地の物陰からずっと様子を見ていたわけだけれど、その光景はものすごいものだった。

「お客さんが連れ込まれた裏路地というのはこちらですか!？」

そんなことをしていたらいつの間にか警察官の人たちがたくさん

来ていた。

「あ、はいこつちです！あそこに倒れて伸びてる人が犯人です！」

「え・・・？」

「あ、お巡りさんやつとききましたか。刃物持って襲い掛かってきたんで近くの棒切れで反撃しちゃいましたけど大丈夫ですよね？」

「私たちも見てました!!間違ひなく正当防衛です!!」

「ひとまず容疑者を連行します。後程詳しいことを署で聞かせてもらってよろしいでしょうか」

そういつて連行されていった二人。

私たち3人は店の方へ戻るべく歩き出した。

「俗くん・・・ほんとありがとね」

「俺が気に入らなかつたから勝手に暴れただけだよ。むしろみてたんなら怖い思いさせちゃつてごめん」

「いや、結局俗くんが介入してくれなかつたら店がどうなつてたかわかんないし結果オーライじゃね？」

「うんうん。それに怖いだなんて思わなかつたよ。俗くんが私たちのために頑張つてくれたの、凄く伝わつたから」

「そっか、それならよかつた」

お店につくと現場検証や警察の人が目撃証言やお父さんから聞き取りをしていた。

どうやら私たちは後日目を改めてということになつたらしく、帰宅するように言い渡された（私はここが家だけど）

「あ、そうだ。帰る前にパンを何個か買つてもいいかな？」

「あ、うんいいよ。どれにしようか？」

「うーん、それ。山吹さんの新作の奴。それなんか気に入つちやつたんだよね。なんていうかすごく安心する味がして」

「そ、そんな！でもありがとね！今日はたくさん助けてもらったしサービスしとく」

「そいつは嬉しい。んじゃ、俺は帰るね。また明日学校で」

「うん！」

「市ヶ谷さんも」

「あいよー。またなー」

そういつて背を見せ歩いていく俗くん。

なんていうかすごい人だったなー。

それにあの言葉。

“ お前みたいなきずにあの子の苦労や喜びを絶対に踏みにじられせはしねーよ”

本当に嬉しかった。あのパンや私との話を通じてしつかりと私のパンに込めた思いや嬉しかったことを見ていてくれてたってわかったから。

「さーて私も帰るかなー。っておい沙綾。顔真っ赤だぞ」

「え!?!」

「あー・・・沙綾もしかしてアレか？うん、まああれだけのもの見せられたら気持ちはわかるわ、うん」

「あ、有咲くくくく」

「まあみんなには黙っててやるから。・・・二人の時はいじるけど」

「もうくくくく!!!!」

「やべ、香澄たちからめっちゃ着信はいつてる!?!私は蔵に戻って事情説明してくるから沙綾はゆっくり休めよな。じゃあなく〜!」

私、これからどうなっちゃうんだろ？

この胸に宿ったほのかな想いについて思案しながら、この後香澄たちからひっきりなしに来た心配の連絡にレスポンスを返すのであった。

※

「あなたって結構ムチャするのね」

「そういえば千聖、警察とか色々助かったわ」

「それはいいのだけれど、あまりムチャするのはダメよ？一応病み上がりなんだし」

「すまんすまん」

私、千聖は芽音と歩きながら帰路につく。

「しかしほんとのパン美味しいなあ。つぐみちゃんの店といい山吹きんの店といいこの商店街はあたりが多すぎる」

「それに関しては同感ね」

でもあの後の沙綾ちゃん表情。

あれは間違いなく……

でも気持ちはわかる。私もきっかけはあんな風に助けてもらったことだったから。

「ライブル登場ね」

「千聖？なんか言ったか？」

「いいえ、難聴系主人公には関係ないわ」

「難聴系？誰のことだ？」

「はあ……」

思わずため息が出てしまう。でもこれが芽音だものね、わかっていたわ。

「それじゃ、俺はこっちなので」

「ええ、今日はお疲れ様」

「じゃあな」

やがて私たちは別れそれぞれの帰路につく。

「私も頑張らなきや」

私は少し性格が変わってしまった、いや本来の性格を隠す必要のなくなつた友人の晴れ晴れとした顔と後ろ姿を見ながら。

思わぬライバルの出現に緊張を覚えながら、その日を終えたのであつた。

第4話 Pastel*Palettes

「ふーんキミがねー」

「えっなにこれは…」

俺は今、女の子に壁ドンされている。

事の始まりは千聖の事務所で雑用のバイトを募集していたことから始まる。

※

「バイト？」

「ええ。今度リリースイベントがあるんだけど人が足りないみたいで」

千聖がある日持ち掛けてきたのはこんな話。

千聖の事務所で今度千聖が所属するバンドであるパスパレのリリースイベントをやるらしい。

リリースイベントというのはCDの発売を記念してトークショーやお渡し会などをやることである。

「誰でもいい、というわけではなくて。誰か信頼できる人はいないかってスタッフさんに聞かれたのよ」

「なるほどね。それで俺か」

ありがたい話である。バイトを探していたのはもちろんであるが、アイドルの現場という信頼がないと入れない職場。そこへ紹介してもらえらるという信頼も感じたからだ。

・・・何より時給がめちゃくちゃ高額だった。

「俺は構わんぞ。むしろありがたい」

「ふふっ。芽音ならそう言ってくれると思ったわ。早速だけど今日の放課後に一緒に事務所に来てもらえるかしら?」
「了解」

※

とまあそんな感じだ。そんな感じで事務所に連れてこられて、面接するから控室で待つように言われて待っていると突然女の子が入ってきたわけである。

「千聖ちゃんが連れてきたバイトの子ってキミ?」

「はい、そうですけど・・・ってうお!?!」

気が付けばこの状況だ。

突然壁に押し込まれ、そのまま壁ドン。そして至近距離に顔が近づきまじまじと顔を見つめられる。

ふわっという匂いして正気を失いそうになるがそこは耐え抜く。

「えっと・・・なんでこんな状況になってるんですかね?」

「えー?だつて千聖ちゃんが連れてきた男の子ってことは・・・あ!これはいつちやダメなやつか!あぶないあぶない」

「・・・要領を得ない。とりあえずどいてもらえると」

「ちよつと日菜ちゃん!何をやっているの!?!」

「あ、千聖ちゃん」

そんなやりとりをしていると千聖が戻ってきた。

「あ!千聖ちゃん来た!えっとね・・・るんっ♪っしてしたからじーっ
と見てた!」

「る、るん?」

「芽音、考えてもわからないと思うから気にしないでいいわ」

「あー千聖ちゃんひどーい！」

この流れで大体わかった。多分この子は感覚で生きているのだろう。

気になったら気になり続け、思い付いたことは即実行するタイプだ。

しかしなあ・・・この子どこかで会ったことないか？

「待たせてごめんなさい。説明してくれるスタッフさんを連れてきたわ」

その後日菜さんとやはらは部屋から出ていき、千聖とスタッフさんの顔合わせが始まった。

本当に俺が信用に値する人物であるかを見極めている様子だった。以前過激なうんこの擬人化デブ（序章⑤）に出てきたHENTAI）から守った本人であると千聖から告げられると一発で合格となった。

「それでは今週末からお願ひしますね」

「わかりました」

スタッフさんが部屋から出ていくと千聖がほっと一息つく。

「お疲れ様、芽音」

「ああ。とりあえず仕事のことはわかったよ。それで千聖、さっきの子なんだがどこかで・・・」

「あー！終わった？終わったんだよね？もうあたし入ってもいいかな？」

そんなことを聞こうとしていたらさっきの子が入ってきた。

「もう、日菜ちゃんったら・・・」

「あのー・・・実はジブンたちもいるっス」

「私もですー!」

「どうも〜」

その後ゾロゾロと入ってくる。

そこには今を時めくアイドルバンドが勢ぞろい。

・・・らしい。千聖がアイドルバンドの仕事をやっているのももらったCDで曲は聴いていたが、テレビもろくに見ないためか他のメンバーのことはほとんど知らない俺であったので、何気に詳細を知るのは今日が初めてである。

「もう、みんなつたら」

「だって千聖ちゃんが連れてきた男の子ってことは千聖ちゃんの・・・モゴツ!」

「彩さん、それ以上はダメです!」

「彩ちゃん?」

彩ちゃんと呼ばれた女の子に向ける千聖の笑顔が怖い。え、怖い。ナニコレ。

「あははー彩ちゃんおもしろーい!」

「ほ、ほへんなさい・・・(ぎょ、ごめんなさい)」

謎のコントが繰り広げられるわけではあるが気を取り直して自己紹介をすることになった俺たち。

丸山彩さん3年生、若宮イヴさん2年生、大和麻弥さん3年生、そして氷川日菜さん3年生。

これがアイドルバンドPastel*Palettes、通称パスパレだ。丸山さんと若宮さんはなんと花咲川の生徒らしい。クラスが違うので知らなかったよ。

1年休学してたからね。仕方ないね。

「というわけで俺は俗 芽音。今週末のリリイベからお手伝いに入る
ことになったのでみなさんよろしく」

そんな感じで俺はアイドルバンド、パスパレに関わることになった
のであった。

第5話 氷川日菜

はじめてのリリイベの手伝いは全く問題なく進んだ。

むしろ事務所側が想定していた以上の働きをしたようで、リリイベ以外にもスタツフ業務のバイトでこのまま入ってくれないかという申し出を受けたので俺は二つ返事でOKした。

「お疲れ様〜！」

事務所のスタツフ数人とパスパレメンバーで店を貸し切り、ささやかなものではあるが打ち上げがはじまった。

場所は羽沢珈琲店だ。羽沢珈琲店は俺がいなかった間にかなり業績を伸ばしたらしい。ちなみに若宮さん改めイヴちゃんはここにバイトで入っているらしい。親子で切り盛りしていた店がバイトを雇うほど儲かっているのは常連として嬉しいところである。

席はいくつか別れており、俺は他のスタッフと同じ席にいた。

「芽音さんがパスパレの皆さんと一緒になんて珍しいですね」

コーヒーを運んできたつぐみちゃんがいう。

「実はパスパレ所属の事務所でバイトしててさ。その仕事かひと段落したから打ち上げでね、メンバーと知り合いだったからこうやっておこぼれ頂戴して参加させてもらってるわけ」

「なるほど！でもよかったです。また芽音さんが来てくれるようになって」

「聞いているかもだけど色々あってね。そういや留年しちゃったからつぐみちゃんとは同級生になるね学校は違えど」

そんな感じで久々の雑談を交わす俺とつぐみちゃん。

「つぐみーちょっと来てくれ」

「あ、お父さんが呼んでる。では芽音さん、ゆっくりしていつてくださ
いね!」

「うん、ありがとう」

ぱたぱたとつぐみちゃんが厨房に行くのを見送ったあと俺はメン
バーの方に向き直る。

「ふーん、芽音くんってつぐちゃんと仲いいんだ」

「日菜さん」

テーブルに向き直ったらそこには違う席にいたはずの日菜さんが
いた。

「仲がいいっていうか常連のよしみというか。日菜さんは同じ学校
だっけ?」

「そうそう、しかも生徒会で一緒なんだー。私が会長でつぐちゃんが
副会長!!」

「日菜さんが生徒会長……?」

こんなぶつとんだ人が生徒会長で羽丘は大丈夫なのか?

俺はわが校の生徒会長、白金会長の顔を思い浮かべながら日菜さん
の顔を見る。

「あー芽音くん絶対いま失礼なこと考えたー。失礼だなあ、これでも
ちゃんとやってるんだよー?」

ぷんぷんと頬を膨らませる日菜さん。やはりアイドルだけあって
こんな表情も絵になるな。

ん……表情か。前から気になっていたことを今聞いてしまおうか。

「そーいや日菜さん、俺たちってどっかで会ったことない?」

「え？今あつてるじゃん」

「いやNowの話じゃなくて」

「んーないと思うけどなー」

「うーん、俺の勘違いか・・・？」

「芽音、それは多分日菜ちゃんではないわ」

「あ、千聖ちゃん」

そんなやりとりをしていると他の席と談笑していた千聖も来たようだ。

「芽音、気づかないかしら？日菜ちゃんの名字」

「名字？・・・あつ」

「気づいたみたいね」

「えー？なにになにどういうことー？」

「・・・双子だったのか」

合点がいった。なるほどなーそういうことだったのか。

「あれ？芽音くんおねーちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も普通に友達」

「おく・・・世間は狭いねえ」

「いやほんとびっくりだよ」

なるほど、この感じの正体はコレだったか。

いやあ日菜さんの言う通り世間は狭いなあ。

「おねーちゃんと芽音くんって仲いいの？」

「顔を合わせれば普通に会話するくらいには」

「へーおねーちゃんが男の子と仲よくしてるなんて想像できないなく芽音くん、気に入られてる」

「そうなの？」

「うん！おねーちゃんおとーさん以外の男の人以外と必要最低限な会話しかしないもん！雑談なんてもつてのほか！」

「私の目から見ても紗夜ちゃんと芽音は仲が良いと思うわ」
「おおう」

思いがけない援護射撃を受け何気に喜ぶ俺。考えてみれば氷川さんも比較的本音を隠せず話せている気がする。

そして双子の妹の日菜さんとも知り合いになれたのは今後のプラスになるかもしれない。

「あ、俗君！ようやく見つけた」

「川崎さん？」

その中に割って入ってきたのはパスパレマネージャーの川崎さんだ。

この年にして結構なやりてらしく、仕事がかなりできるキャリアウーマンといった感じの人である。（肝心の事務所がポンコツ気味で振り回されている感はあるが）

「どうしたんですか？」

「実はお願いしたいことがあります」

「私たちは退席したほうがいいですか？」

すかさず千聖が聞く。

さすが芸能人だけあってこの場にとどまっていいかの判断を仰ぐのが早い。

「いえ、構いません。あなたたちにも関わってくることなので」

「私たちにも？」

「はい。俗君、このままバイトを続けてほしいという要望は前に伝えたとおりですが・・・」

「ええ」

「そのバイトなんですけど、私の助手、パスパレのマネージャーのお手伝いをしてもらえませんか？」

※

まあ色々理由はあるらしいがそういうことだ。俺はOKした。

俺の仕事ぶりが評価されたのと、メンバーと年が近く色々悩み事に気付きやすかったり学校やプライベートでのトラブルに対応してもらいたいと。

割と役割が重たいので時給は恐ろしいことになるようだ。

なにより今までかかわれず正体不明の、仕事中の千聖達に関われるのが嬉しかったのだ。

「芽音くん、次どこだっけ？」

「えーとあと5分くらい歩いたビルの中で打ち合わせだね」

そしてその仕事の一環として俺は日菜さんに同行していた。

ビルにつくとエレベーターに乗り込む。

「いやーまさかこんなことになるなんてね〜」

「うん、まあ結構驚きだよな」

「おねーちゃんにいわれちゃった、〃 俗さんに迷惑をかけないように！〃 ってさ〜ひどいなくそんな風に見るなんて」

「そういえば俺も〃 日菜が〃 迷惑をおかけしますがよろしく願います〃 って言われた」

「あははー！」

日菜さんの話題のポイントはズバリ氷川さん、改め紗夜さんだ。

(姉妹と知り合いになってしまったので名前で呼ぶことを了承してもらった)

紗夜さんの話をしている日菜さんは本当に楽しそうだよっぽど好きなんだというのが隠すまでもなく伝わってくる。

「それでさく……!?」

「……日菜さん!」

俺はその異変を察知し日菜さんを俺の方に抱き寄せ、上から覆いかぶさるような姿勢をとる。

—地震

それも足元がふらつくくらいには大きい。

「……………」

「おさまったか……?」

しばらくすると揺れが収まった。

「うわーびつくりしたねー結構大きかったかも」

「ああ」

「それでさく芽音くん、結構苦しいんだよなーこれが」
「あ」

俺は慌てて日菜さんから離れる。

「んーんいーよ。真っ先に体が動いて男の子の対応としては満点!川崎さんにも評価アップ伝えておくよ」

「そりやどうも。でもね日菜さん。ちょっと問題が起きたみたいだね」

「あー芽音くんもそう思っているってことは間違いないか」

俺たちが感じていたこと。その正体はすぐ判明した。

「エレベーター止まっちゃったね」

「うん、そうみたいだね」

つまるどころ—

俺たちは地震で停止したエレベーターに閉じ込められてしまった。

そして脱出までの時間、俺たちはこの狭い密閉空間で過ごすことになったのである。

第6話 氷川日菜II

「いやーどうしようねこれ」

「どうしたもんかねえ」

俺たちは意外と冷静だ。別に一生出られるわけではないし、所詮は止まったエレベーター。ぶっ壊れて落下でもしない限り問題はない。

日菜さんは日菜さんでエレベーターが止まる非日常を少し楽しんでる節がある。

こういう時は取り乱されたり暴れられたり泣きわめかれたりする方が大変なので今回はその辺に救われた。

「んー・・・あ、これダメだ」

「なにが？」

「エレベーターって普通24時間リモート監視されてるでしょ？だから非常通話ボタン押したんだけど繋がらないや。電気系統もいつちやってるのかなー？あーでも照明は生きてるしなー」

「え、マジか。俺もそれやるつもりでいたんだけど。うーん・・・あ、なんならエレベーターの天井開けてみる？出口が近ければ扉をこじ開けることができるかもしれん」

「今のエレベーターの上はあかないよ？」

「・・・そうなの？」

「そ、だからあたしたちは救助が来るまで待つしかないってわけ」

「無知をさらけ出して恥ずかしい・・・というか日菜さんやけに詳しいね」

「そーかな？サスペンスドラマみてて気になったから調べたことあつてさ。それを覚えていただけだよ」

「いやー気になるのもすごい普通そこまで調べないと思うんだけど。いや、おかげで見聞が広がったし余分な体力を使わなくて済んだよ」

「ま、あたしはあたしだからさ。しかし参ったねー。密閉空間だから

暑いよ。喉かわいちゃった」

日菜さんは胸元をパタパタとし涼をとっている。あまり見るものではないがこう狭い空間だとその合間合間に見えてはいけないものが見えてしまうのはつらいところだ。

「日菜さん、気持ちはわかるんだけど俺、男。キミ、女。わかるよね？」
「えー？わかんない」

「いやその声のトーン絶対わかってるでしょ」

日菜さんは小悪魔的な笑いをしながら胸元パタパタをやめない。
うん、絶対からかわれている。

「なんてねー。別に見えたところで下にキャミ着てるし、芽音くんがなにかするなんて思っていないからさ」

「そういう問題じゃない気がするしそれはそれでなんか複雑だよ」

こう、男として見られていないということかな？
いやまあ信頼されているのは伝わってくるのでいいんだけどさ。

「信頼してるってことだからだいじょーぶだいじょーぶ！」

「心の声を読まないでくださいませんかね」

「しかし暑いなー」

「スルーですかそうですか・・・あ、そういやあとで飲もうと持ってきたコーヒーでよかったですらあるけど」

そういつて俺はまだ冷たい、ペットボトル入りのアイスコーヒーを取り出す。

「お、芽音くんナイス！貰ってもいい??」
「構わんよ」

「うーん、おいしい！」

日菜さんはふたを開けるとグビツつとコーヒーを飲む。相当喉が渴いていたようで半分以上飲んでしまった。

「ぶはー！おいしいー！あ、芽音くんも喉乾いてるでしょ？返すよ」

「いや、それぞれそのまま飲んだら間接キスですよん」

「えー？あたしは全然気にならないけどなー」

「日菜さんは気にしないけど俺っていうかファンは気にするの。ここでペットボトルをうけとってそのことがばれたら俺はおそらく明日を迎えることはなくなってしまうよ」

「あははーなにそれ！」

「いや冗談抜きに男にこういうことしないほうがいいよ。アイドルとして結構ヤバめだよ」

「はーい」

わかっているようなわかっていないような返事をする日菜さん。

どちらにせよ待つ以外にやることがないのでひたすら雑談に興じた。

「そーいや芽音くんって表裏の使い分け上手いよね」

「え？」

「相手を見てオンオフが切り替わってるっていうか？仮面被ってるっていうか？」

「なんと。」

たしかに俺は以前より仮面を被らなくなり、仮面を被るときはほとんど限定的な場面のみ。スタッフとしての業務中や知らない人・ほかのスタッフと話すときなど外面をよくする必要がるときだけだ。

そんなわずかな違いを見抜いてくる日菜さんは単純にすごい。

「いやー日菜さんと学校が違って本当に良かった」

「えー？なにそれひどくない？」

「もし紗夜さんじゃなくて日菜さんが花咲川に通っていたら早い段階で本性が一発でバレてたわ」

「あ、そういうことね」

もしそうなら今みたいな地位にはいられなかっただろう。

まあIFの話をしてもし方がない。

幸い俺も日菜さんもよくしゃべるほうだし、日菜さんに仮面を被っても無駄だということもありなんだかんた結構ウマが合う。

話はずみ、空になったコーヒートのペットボトルを床に置く。

しかしそれは、その楽しい時間を不穏な方向へと誘う合図なのであった。

「あ」

「どうした？」

「うーん困ったなー。いやー実に困った」

日菜さんは少しもじもじしながら突然言い出す。

「だからどうしたの？」

「うーん・・・ねえ芽音くん。人の尿って出したばかりは無菌で飲めるって知ってる？」

「なんじゃその恐ろしく物騒でヤバイ性癖の人が喜びそうな発想は・・・」

唐突に物騒なことを言い出す日菜さん。

あ、待てよ。そういうことは。

「いや・・・ちよっと待って理解した。うん、察せなかった俺が悪いね、うん。いや、すまんが俺にはそれをやる勇氣も性癖も持ち合わせていないしアイドルがそんなヤバイ単語を口にしちゃいけないし金輪際

その考えは捨てなさいわかったね？」

「おお、芽音くんが割と怖い」

「当たり前!!!・・・っとそんなことよりつまり日菜さんアレだね」

「うん、トイレいきたくなくなっちゃった」

最悪の事態だ。

「コーヒーがぶ飲みなんてするから・・・」

「だってー喉乾いたしそれにくれたの芽音くんじゃん」

「それはそうだけど・・・」

これは結構まずいのでは。早く復旧してくれるのを祈りつつ我慢してもらうしかない。

「・・・あ」

「どうしたの？」

「携帯、あつたんだった・・・」

「・・・」

「・・・」

お互いに顔を合わせ真顔で見つめあう。

「あはははははは！すつごい二人とも綺麗に忘れてた!!」

「いやこれは笑うわさすがに。とりあえずマネージャーの川崎さんにかけてみる」

俺はすぐさま携帯を使い、電話をかけた。

携帯はマナーモードになっており、着信履歴には川崎さんからのものが何件も入っていた。

「あ、もしもし俗です」

「芽音くん、よかった。時間が過ぎていきますけど地震でトラブルですか?」

「実は……」

俺は今の状況を説明。

地震でエレベーターが止まったこと。リモート通話が機能しないことなどなど。

「なるほど、エレベーターに閉じ込められてしまってるんですね。実は他のスタッフも別のエレベーターに閉じ込められているようで、今復旧作業をしているようです。あと20〜30分はかかるようなのですが……」

「20〜30分」

うーん。長い。これは厳しいかもしれない。

「あと芽音くん。日菜さんは無事ですか?」

「はい」

「それと暑いと思うので脱水症状には気を付けて下さい。もしお水などがなかったらエレベーターにある非常ボックスにある程度入っているようです」

「え? そうなんですか?」

「はい、なのでもうしばらく辛抱してください」

「分かりました」

そういつて通話を終了した。とりあえずこれで俺たちがエレベーターに捕らわれていることが伝わった。

初耳だ。目をやると確かにそれらしきものがエレベーターに鎮座している。

ん……? 非常用BOXということはまさか……

非常BOXを開けて中身を確認する。

「やっぱりだ」

「なになにどうしたの?」

「これだよ」

俺が手に取ったのは非常用の簡易トイレだった。

「コレがあれば大丈夫だ!!」

「いや大丈夫じゃないよ全然!!!つまりそれ、この密室で芽音くんの目の前でやれってことだよね!?!?!」

日菜さんが珍しく動揺している。こんなに顔を真っ赤にして焦り、ツツコミに回る日菜さんは貴重かもしれない。

「さつき無菌ならなんとかっていったた・・・あ、いえなんでもないです。一理あるね、うん」

「でも現実問題救助までまだまだかかるし・・・うーん・・・」

「わかった、俺は耳も塞ぐし後ろ向いて目をつむるし鼻にもティッシュ詰め込むから」

「うーん・・・うーん・・・そこまでいうなら・・・背に腹は代えられないかなあ」

話はまとまった。

まず俺は持っていたティッシュを鼻に詰め込み嗅覚を遮断した。そしてまたまた持っていた音楽プレイヤーのイヤホンを耳に刺し聴覚を遮断、音楽を流す。そして後ろを向き目をつむり視覚を遮断した。

「これで完璧・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・日菜さん・・・いつでもOKだ・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「いや変態じゃん」

だって鼻呼吸できないから口でするしかないんだもん。
仕方ないね。

※

「照れてる日菜さんってなんか貴重だね」

「いやこれ照れてるんじゃないやなくて普通に恥ずかしがってるだけなんだけどなー」

そういつつ冷静さを取り戻しつつある日菜さんであった。

すべてがおわったあと俺の視界に入らないところにブツを隠し、非常セットに入っていた消臭スプレーを振りまくと再び待機モードに入った。

「あ、動いた」

「動いたね」

そしてしばらくするとエレベーターは動き出し、扉が開いた。

「日菜さん、芽音くん、大丈夫ですか!？」

「川崎さん。おかげさまで」

「大丈夫です！」

「いやあよく耐えてくれました」

メンテナンス作業員と思しき人が声をかけてきた。

「おや？非常BOXが開いて・・・あ、トイレ使ったんですか？」

「ええ。恥ずかしながらちよつと我慢できなくて俺が」

「そうですね。しかしいい判断です。我慢は体に毒ですし万一粗相に

なったら精神的にも辛いですからね」

そんなこんなで俺たちのエレベーター幽閉大変は終わった。色々あったけど結果的には日菜さんとももつと仲良くなれた気がするし、エレベーターに捕らわれるというある意味貴重な体験もできたので結果オーライだろう。

その後の俺たちは予定より遅れたものの仕事をつつがなく終わらせたのであった。

※

「ええ。恥ずかしながらちよつと我慢できなくて俺が」

芽音くんが作業員さんにそういうのを聞いてえ？って思った。だって使ったのはあたしだから。

あーそつか。芽音くんあたしをかばってくれてるんだ。考えてみれば芽音くんは紳士だったもんね。さすが千聖ちゃんの想い人って感じかなあ。

でもさすがのあたしも恥ずかしかった。あんな体験後にも先にも今日だけにして欲しいしそうでないと困るよね。

・・・ここであたしのこころに一つの感情が芽生えた。

“ あたしだけ恥ずかしい思いしたのは納得できないから芽音くんの恥ずかしいところも見たい”

こんなふざけた、戯れのような感情。あたしは新しい遊びを見つけたのだ。

「うーん、るんっ♪ってきた!」

「日菜さん、いくよ?」

「あ、うん!」

あたしは少し変化があつた芽音くんとの関係性を感じつつ、それと同時に興味を持ち一緒に仕事場へと向かったのであつた。

第7話 上原ひまり

「オイコラてめーら！表のドアとカーテン閉めろ！早くしろ!!」

「ひまりちゃん!!」

「つ、つぐ……」

「とりあえず言う通りにした方がいい。俺がやります」

怯えるつぐみちゃん。

指示に従う俺。

そしてひまりちゃんを人質にとり拳銃を手に興奮する男。

これが今、羽沢珈琲店で起きていることだった。

※

「こんにちは」

「あ、芽音さん！いらっしやいませ!!」

俺は羽沢珈琲店に来ている。

つぐみちゃんの依頼で新作のスイーツの品評をしてくれないとの依頼があつたためだ。

「あー芽音さんも呼ばれてたんだ!」

「ひまりちゃん」

席について待っていたところやってきたのは上原ひまりちゃん。

ひまりちゃんとは羽沢珈琲店に通ううちに知り合いになった。つぐみちゃんの幼馴染で、さらにバンドのリーダーをやっている子らしい女の子らしい元気いっぱいの子だ。

「ひまりちゃんもいらっしやい」

「ひまりちゃんも一緒とはね。うん、楽しくなりそうだ」

「やだ〜芽音さんったら口が上手いんだからあ〜」
「(おだてられて喜ぶ近所のおばちゃんみたいだ)」
「新作の試食はひまりちゃんにいつもやってもらってるんですけど、お父さんが最近男の子の感想も聞いておきたいっていうから今回は芽音さんにもきてもらったんです」
「なるほどそういうことね」

合点がいった。確かにメインターゲットは女性とはいえカップルも来るだろうしテイクアウトしていく男性客も多い印象だ。

そういう意味では俺は年齢もメイン層に近く適しているかもしれない。

「つぐみ、私は買い物物に行ってくるからおふた方に出して差し上げなさい」

「あ、はいー!」

「すみませんね、どうしてもいかなきゃならなくて。もうラストオーダーは終わっている所以他にお客さんは来ません。ゆっくりしていつてくださーい」

「ありがとうございます」

「つぐのお父さん、ありがとうございます!」

マスターはそういうと入り口の札を準備中に裏返し、店を出ていった。

「さあ、ではまず一個目からいきますよー!」

「おーおいしそう!」

※

「それでモカがいうんですよ〜やっぱひーちゃんひーちゃんはひーちゃんだねーって。ひどくないですか!」

「あはは、モカちゃんは相変わらずだね」

「もう〜！笑い事じゃないですよー！」

「でもひまりちゃん、あれはさすがに……」

「む〜つぐまでえ……」

一通りの試食が終わりレビューを伝えると、一息ついて雑談する俺たち。

「あ、そうだ。甘いものが続いたのでよかつたらこれどうぞ」

「お、コーヒーか。ありがとう」

つぐみちゃんが持ってきたのは2つの淹れたてコーヒーだ。

いい香りが鼻孔をくすぐり、気分が良くなる。

「あれ？マスターは出かけているとうことは……」

「は、はい。私が淹れましたでしょう……？」

つぐみちゃんは緊張するように俺たちがコーヒーを口に運ぶさまを凝視している。

「……うん、おいしいよ」

「ほんとですか!？」

「うん。確かにマスターほどの洗練さはないけど一生懸命淹れたのがわかるしなんだろう、すごく優しい味がする。きつとつぐみちゃんはいいバリスタになれるよ」

「よかつたあ〜！ありがとうございます！」

「ほんとつぐもコーヒー淹れるの上手くなったよね〜」

「ひまりちゃん、結構味の違いわかる派？」

「……じつは全然。でもつぐの家のコーヒーだけはブラックでもいけちゃうので特別なんだと思いますー！」

「も、もうひまりちゃんつたら」

そんな感じで照れるつぐみちゃんはとてもかわいいと思う。

まあ実際美味いんだから仕方ないよね。

そんな感じで笑いが絶えない羽沢珈琲店の一風景。

しかしそれは突然終わりを迎え、この場は混沌とした恐怖に包まれる羽目になる。

そう、一人の男が店に入ってきたのがすべての始まりだった。

「いらっしやいませ。ごめんなさい、もうラストオーダー終わって……きやあ!」

「え!?! つぐ!?! きやあああああ」

「なに……!?!」

男は何も言わず、興奮した様子でつぐみちゃんを突き飛ばし、奥にいたひまりちゃんを捕らえるともっていた拳銃をこちらに突き付け叫んだ。

「オイコラてめーら! 表のドアとカーテン閉めろ! 早くしろ!!」

「ひまりちゃん!!」

「つ、つぐ……」

「とりあえず言う通りにした方がいい。俺がやります」

あ、これ多分あれだ。立てこもりだ。

相手は拳銃を持っている。隙について攻撃すれば無力化できるかもしれないがひまりちゃんがとられられている今、それは現実的ではなく下手に抵抗するべきではない。

俺は言われた通りに入り口のシャッターを下ろし、カーテンを閉め、外が確認できる部分をすべて遮断した。

「よし、それでいい。おいそこの娘!」

「は、はい!?!」

「110番に電話して俺の要求を伝えろ。逃走用の車と極道会組長を連れて来いといえ！」

つぐみちゃんはガタガタ震えながら電話を手取る。

「俺は何をすればいいでしょうか？」

「お前はなにもしなくていい。でも妙な真似はするなよ？ 妙な真似したらこいつの頭が吹き飛ぶぞ」

「さ、芽音さん……」

「……わかりました。わかりましたからせめてその子を放してもらえませんか？ なんなら俺が変わります」

「ダメだダメだ！ 要求が通るまでとにかくお前はおとなしくしている！」

こうして突如始まった、俺とつぐみちゃん、ひまりちゃんを巻き込んだ拳銃籠城戦が始まってしまった。

その外にはすでに警察官が多数押し寄せ、包囲している様子が雰囲気分かったのであった。

第8話 上原ひまりⅡ

状況を整理しよう。

まず犯人は手に拳銃を持ち、ひまりちゃんを人質に取っている。つぐみちゃんと俺は一緒の席に座らされており、つぐみちゃんは心配そうにひまりちゃんを見つめ、ひまりちゃんはボロ泣き状態で怯えている。

さてこの状況、一体どう切り出したものか。

こんな冷静に話してる俺ではあるが、内心は心臓がバクバク言っている。しかし最後の砦である俺が恐怖する事を二人に見せる訳にはいかないのだ。

俺は沈黙の中犯人を観察する。すると俺はある所に眼をつけた。

「あなた、ケガしていませんか？」

そう犯人の足からは血が流れ出ている。

興奮してアドレナリンが分泌されているせいか痛みが鈍感になっているようで、出血量はかなりあるように見える。

このまま持久戦に持ち込み出血で意識を失うまで耐えるという手もあるが……

「その出血量は危険だ。手当させてください」

「なんだと？」

俺は手当てを申し出た。

理由は3つ。

ひとつ、このまま出血が続き意識が混濁することで予期せぬ行動に出る可能性がある。それを潰すため。

ふたつ、万が一出血多量で死にでもしたら羽沢珈琲店は一気に事故物件になってしまうのでそれを防ぐため。

そしてみつつ、手当てをすることで探りを入れ、少しでも相手の霧

困気や考えを読み、そして冷静にさせることで痛みを実感させて動きを鈍らせるためだ。

「そんな事言って何かするつもりじゃないだろうな？」

「人質がいるのにそんな事しませんって。それに俺は素手。銃に勝てる訳が無い事なんて分かります。あなたの為じゃない。この店をこれ以上血で汚さない為だと思って下さい」

「……はやくやれ。妙な真似したらこの娘の頭ぶっ飛ばすぞ！」

「わかりましたからそう興奮しないでください。つぐみちゃん、救急箱はあるかな？」

そう言つてつぐみちゃんが持つてきた救急箱を開け、手当てを開始した。

「……ひどい出血ですね。一体どうしたらこんなになるんです？」

「……銃で撃たれたんだ。弾がかすつただけが」

「それにしてもこの出血量……多分血管に傷がついていますね。簡易的ですが止血します」

「うぐっ……！おい、もっと痛くないようにやれ」

「最大限配慮しているつもりですが多少は我慢してください」

俺は傷口に消毒液を塗り、包帯や布で力いっぱい止血をした。

「これでよし。応急処置ではありますがさつきよりはマシでしょう」
「……」

犯人は黙ってしまふ。さてここからどう切り出したもんか。

そう考えていると俺はあることに気が付いた。

「……もう逃げられない事が分かっているのではないですか？」

「なんだと……？」

そう俺は感じたのだ。興奮しているオーラはガンガン伝わってくるものの彼には殺気が無い。

つまり俺たちを殺す気など全く無いのだ。

これは・・・暴力や制圧に頼らずともいけるかもしれない。

「余りナメた口を利くんじゃねえ!」

「気に障ったならすみません。でもあなた、とても悲しそうに見える。本当はこんな事をするのは本意では無いのではないですか?」

対話を試みる俺。しかし相手はそれがお気に召さなかったようで激昂の声を上げる。

「お前に何が分かる!?!」

「分かりません。なにも分かりませんよ。良かったら要求が通るまでの間、俺と雑談しませんか?」

「なんだと!?!」

「俺にだって話を聞く事は出来ますし、何でこんな事に巻き込まれてしまったか聞いてもいいと思うんですけど」

なだめるように、相手に圧を与えないように俺は語り掛ける。

「・・・・!?!おい貴様なにしている!?!」

「!?!」

しかしそれは中断された。彼が声を上げるとその先にはつぐみちゃんがいたのだ。

カウンターで何かをやっている。

「えっと・・・ケガしてるみたいですし、リラックスになるかなって思ってます・・・」

つぐみちゃんが手に持っていたのはコーヒーだった。

おそらくさつき俺たちの為に入れた物の残りだろう。

しかしつぐみちゃんの胆力が凄い。普通こんな状況だったら震え上がって動けなくなってもおかしくないのに少し目を離した隙に自分で考えて行動し、店を襲った相手をも思いやる心を持っている。

「そんな事言つて変なもん入れてるんじゃないだろうな？」

「それは無いですよ。さつきまで同じ物飲んでましたし、なにより彼女はバリスタの端くれ。コーヒーに異物をいれるなんて天地がひっくり返つても有り得ないです」

「芽音さん・・・」

「それにあなたも水分をとった方がいい。脱水症状を起こしますよ」
「・・・こつちに持つてこい」

彼はつぐみちゃんからコーヒーを受け取ると熱いのをもともせ
ずぐいっと飲み干す。

「・・・うまい」

そして彼は一言、そう呟いたのだ。

「でしょ？彼女が心を込めて淹れたんだ。当り前さ」

「・・・」

するとどうだろう、彼はひまりちゃんを押さえる力を緩め、解放したのだ。

「ひまりちゃん！」

「つぐ！芽音さん・・・！」

全力疾走で俺たちに抱き着くひまりちゃん。

彼は依然と銃を突き付けているが、雰囲気少し和らいだようだ。

「自由にさせるだけだ。お前らが人質なのは変わらない」

「分かっていますよ」

「・・・俺にも娘がいたんだ」

※

彼は唐突に話し始めた。

彼は奥さんはすでに亡くしており、17歳の娘さんがいたらしい。

しかし、娘さんがたまたま起きていた暴力団の抗争に巻き込まれ、命を落としてしまったらしい。その抗争に関わっていたのが暴力団・極道会だった。

ブチ切れた彼は単身で組に襲撃をかけたが失敗し、事務所にあった拳銃を奪って逃走。拳銃を手にしたまま逃亡したせいで大騒ぎになり、駆け付けた警察官にみつかった。拳銃を持った凶悪犯として追跡され、その際に放った威嚇射撃が足を掠つてたまたま準備中で人が少なそうな羽沢珈琲店に押し入り今に至るとのことだ。

「絶対許さねえ・・・！あいつらをこの手で消さない限り俺は死ぬ訳にも捕まる訳にもいかないんだ・・・!!」

俺たちは黙ってしまふ。彼の壮絶な悲劇を聞いて何とも言えない気持ちになったのだ。

「妻を早くに亡くして苦労も多かった・・・でも娘は元気いっぱいの子で俺をお父さんと慕ってくれた。それをあいつらは・・・！」

一瞬だけ発せられた殺意。

間違はなく人を殺す気配だ。それほどに憎しみが深いのが分かる。

「でもそんなの、娘さんは望んでるの・・・？」
「ひまりちゃん・・・？」

そのとき、ひまりちゃんが突然言葉を発した。

「確かに悲しいかもしれませんが。でもそれだからって娘さんが人殺しを望んでいるだなんて思えません！」

ひまりちゃんやめろ、こいつは今殺意を纏っている。
刺激するのはやめるんだ・・・！

「黙れ・・・！」

「私とその娘さんだったら復讐なんて望みません！」

「黙れ・・・！」

「それにさつき私を捕まえているとき、苦しくないようにしてくれたのわかります。きつとあなたは、本当は優しい人です！」
「黙れって言うてんだろ!!!」

Bannon!

「きやつ・・・」

天井に向かって放たれる銃弾。

貫かれた天井の穴から石膏の粉がボロボロと落ちてくる。

「俺が優しいだど？戯言も大概にしろ・・・！俺はもう悪魔に魂を売ったんだ。どうせ2人以上殺せば死刑になるんだ。今さらひとりふたり増えたところで変わりはない」

刹那、拳銃で殴るように腕を振り上げる犯人。

俺は咄嗟に飛び出し、ひまりちゃんの前に立ちふさがった。

「ぐぬっ・・・！」

「きゃあああああ！芽音さあああああん！」

鉄の塊で殴られたんだ。目ノ玉が飛び出そうになる衝撃が俺を襲う。

しかし俺は踏ん張り、頭から流れる血を拭いながら犯人を睨みつける。

「少しは冷静になれたか・・・？それとひまりちゃん、ケガはないかい？」

「私は大丈夫です・・・芽音さん・・・頭から血が・・・！」

「俺も大丈夫だから」

そんな事を言って見せるがなんで俺意識保ってるのか分からんくらい視界が歪む。

でもここは倒れちゃいけない気がするので目をカツ開いて気を強く持つ。

「お前・・・なんで・・・」

「分からねえ奴だなあ・・・ひまりちゃんが言った事、ちゃんと聞けよ」「なんだと？」

「あんたが娘さんの為に復讐したい気持ちは分かる。だけどそれはあなたの娘さんの為にあんたが死刑になるって事だ。娘さんも亡くなつてあんたも死ぬ。娘さんからしたら自分が死んだせいで最愛の父であるあんたも死ぬって事だ。そんな結末、本当に娘さんが喜ぶと思うか？」

「うるさい！黙れえええええ！」

銃口を俺に向ける犯人。だがその手は震えており、再び迷いがあることを窺わせる。

だが俺は怯む事無く続ける。

「撃てよ！撃ってみろよ！何発でも何発でも撃ち込んでみろよ！何発撃ち込まれようがひまりちゃんやつぐみちゃんには傷一つつけさせやしねえぞ!!!」

俺は後ろにいるひまりちゃんに抱き着き、覆いかぶさって庇うように背を向けた。

「ぐっ……」

「それにアンタは自分の都合ばかりだ！アンタが憎む奴らにも家族がある。俺にも、ひまりちゃんにも、つぐみちゃんにもだ。悪魔に魂を売り渡しただと？笑わせんじやねえよ。アンタが悪魔になつて復讐してもまた新しい悪魔を生み出すだけだ。そんな悲しい連鎖を生み出す理由に、亡くなった娘さんの為という大義名分を持ち出して娘さんが本当に報われると思っっているのか!?そんなの誰も幸せにならない事くらいアンタはもう分かってんだろ!?!」

「やめろ……！もうやめろ!!」

「アンタは人を殺せるような人じゃない。最初から俺たちに危害を加えるつもりも無かつたんだろ?」

「う……く……」

「しっかりと罪を償って娘さんの分までちゃんと生きてくださいよ。お願いします」

俺は向けられた銃を掴み、セーフティをかける。

そしてそのまま彼は拳銃から手を放し、床に放り投げた。

「……すまなかつた」

「分かってくれて安心したよ」

「お嬢ちゃんたちも本当にごめんよ……特にキミ」

「え？私ですか!?!」

ひまりちゃんが指名されてびっくりする。

「実は君、死んだ娘によく似ていてね。娘に俺自身を否定された気になってしまった、正気を失ってしまった。本当に怖い思いをさせてしまった。そっちの子も。コーヒー、美味しかったよ。本当にゴメンよ……」

ふうー……

あーこれで一安心だわ。寿命が114515年くらい縮んだわ。

「あ……それとキミも。殴って済まない」

「俺は大丈夫。いいから外に出ましょ」

「そうだな……」

彼はシャッターを開ける。そして店のドアを開けると同時に両手を上げ、抵抗の意思がないことを警察官に見せつけた。

「俺が出所することにはキミも成人してるだろうし、そんなときは酒でも酌み交わそう」

「ああ。待ってますよ。」

そのまま男は取り押さえられ、連行されていった。

「ふうー……さてつぐみちゃん、ひまりちゃん。悪い、俺ちよつと限界っぽいで寝るね」

「え……?」

「芽音さん……!? つぐさっきの救急箱!」

「分かった! 後、警察の人に救急車呼んで貰ってくる!」

あー……

ちよーつと無理しすぎたかなー

そんな事を漠然と考えながら俺は眠りについた。

※

ふむ。白い天井、薬品の匂い。

「言われなくてもここは病院か」

「芽音!?目が覚めたのね!？」

「芽音くん!千聖ちゃん、お医者さん呼んでくるね!!」

あれ我が親友たちの声が聞こえる。

あーそっか。ついていてくれたんだな。

「手間をかけさせたな」

「いいから。とりあえず安静にして」

「そうだな。・・・心配かけたと思う。ごめん」

「ほんとよ。お願いだから余り無茶はしないで?」

「あれ?千聖泣いて・・・」

「そんなわけではないでしょう?」

一瞬そう見えたのだが気のせいだったのだろうか?

「連れてきたよ!」

「俗さん、今がどういう状況かわかりますか?」

そんな感じで医者による検査が始まった。そうやら俺は1週間ほど眠って板らしく、後日もう一度精密検査を受けるということで検査は終了した。

「では、お大事にしてください」

「ありがとうございます」

医者が退室し、一息つく。そういえば花音にはまだ謝っていないかったな。

「花音も心配かけてごめ……つてうお!？」

「芽音くん!!!」

「ちよ、花音!？」

「良かった、本当に良かった！また目覚めなかったらどうしようって……ずっと不安で……」

遠慮する事なくタツクルレベルで抱き着いてくる花音に驚く俺だが、逆の立場だったら同じ事をしていたかもしれないから咎める事は出来なかった。

「ごめんな」

「ううん、いいの。今こうしてちゃんと目を覚ましてくれたから」

「ほら花音、芽音は病み上がりなんだから」

「あつ／＼／私ったらごめんねっ……!！」

「私もこれくらい素直になれたら良かったのにな……」

「千聖ちゃん?」

「いいえ何でもないわ。それにしても本当に目が覚めてよかったわ。一安心ね」

その後俺は学校や事務所のバイトについて少し話をし、二人は帰っていった。

そして少ししたら刑事さんが事情を聞かせてくれとやってきて、事件の事を話した。

ちなみにその刑事さんは俺を事情聴取するのは3回目だ。(うんこの擬人化したHENTAIが千聖襲った時、食中毒おばさんのやまぶきペーカリー襲撃事件、そして今回)

刑事さんには「俗くんって実は名探偵の孫だったり薬で体が小さく

なった経験とかないよね？」といわれてしまった。

誰が金○一少年や江戸川コ○ンやねん。

ちなみに羽沢珈琲店は天井の穴以外は大きな被害はなく、警察の現場検証が終わりすぐ営業再開したそうだ。商店街や近所の人も心配してくれて再開後は沢山の人が来てくれたらしく、潰れたりという可能性は皆無のようだ。

そんなこんなで俺が・・・俺たちが巻き込まれた立てこもり事件は幕を閉じた。

その後俺は検査も異常はなく、無事退院する事が出来たのであった。

※

「な、なあつぐ。ひまりのやつ、さつきからずっとあんな感じじゃないか？」

「ひーちゃん、さつき電話かかってきてから目がとろくんとしてますねえ〜」

「なんか、ひまりがあんなだと調子狂う」

Afterglowのみんなが来てくれたある日の午後。

そして芽音さんが眠っている間、不安で押しつぶされそうな私たちだったがその日は芽音さんが目を覚ましたという電話が芽音さんから直接入り、一安心した日でもあった。どうやらひまりちゃんにも入ったようで、その電話が終わってからひまりちゃんはあんな感じだ。

「はあ〜・・・」

「おい、今度はでっかいため息をついたぞ」

「悩める年頃ですなあ〜」

「モカ、茶化さない。ねえつぐみ、なんか心当たりある？」

「うーんあるにはあるんだけど・・・」

これは言ってもいいものか。多分あの反応。ひまりちゃんはおそろしく……

「ひまりちゃん」

「……あ、つぐ」

私は他の3人に聞こえないように、少しだけ探りを入れることにした。

「芽音さん、目を覚ましたみたいだね」

「そ、そうなのよ！ほんと良かったよね！あの時は怖かったけど芽音さんがいてくれなかったら……！それに私を庇ってくれた時の芽音さんが……」

うーん。やっぱりこれ、間違いないよね。

「ね、ねえつぐ」

「なあに？ひまりちゃん」

ひまりちゃんは他の三人に聞こえない声でこそつと聞いてくる。

「芽音さんって……彼女とかいるのかなあ……？」

そう、それはつまりそういう事だったのです。

第9話 騒乱の学園祭

時は学園祭。今年は花咲川と羽丘合同で行われている。

そんな最中俺は何をしているのかというと、風紀委員の手伝いをしているのである。単純計算で来場は倍になるし、なにより花咲川の男子生徒も増えてきた。

羽丘の女子生徒たちに浮かれ羽目を外した結果問題が起きてしまったでは今後の合同開催は不可、となることも考えられる。

そうならなかったためのストッパーして、学園祭を手伝う片手間なので目を光らせてくれないかと紗夜さんや白金会長からお願ひされ、快諾したというわけだ。

一応花咲川、羽丘両方で動くことができる権限が付与されている。しかしそんな俺の心意気は粉々に破壊されてしまうことになる……そう、やつらの手によって……

※

「花音、きたぞ」

「あ、芽音くん！」

俺は待ち合わせしていた花音と合流した。

「悪いな、待ったか？」

「ううん、私も今来たところだから」

「そっか。あれ？なんかテンション高めな感じ？」

「あ、わかつちやうかな？芽音くんと一緒に回るのが楽しみで」

花音は満面の笑みでそう答える。

俺と“千聖と”という意味なのは分かってるけどその言い方やめなさい、そんなこといわれたらお兄さん勘違いしちゃうでしょ。

「だって去年は芽音くん、文化祭の前に・・・」
「そーいやそーうだったな」

去年、俺と花音、そして千聖は文化祭と一緒に回ろうと約束していた。

しかしそれは俺が清田美緒に襲撃されたことにより叶わなかった。つまり今年はそのリベンジというわけだ。

「さ、千聖を迎えに行くぞ」
「うん！」

俺たちは待ち合わせ場所へ向かうと千聖はすでに到着していた。

「すまん、待たせたかな？」
「いいえ、大丈夫よ」
「ふふ、楽しみだね」

俺たちは笑顔で合流する。なんだかこうやってこの三人で一緒に何かをするのはとても久しぶりな感じだ。

俺は1年前を思い出し、なんだかいい気分になっていた。

「芽音？なんだか嬉しそうね」
「あれ、ばれちゃった？いやーこの3人はやっぱいいなって思ってた」
「あ、私も同じこと考えてた！」
「二人とも素直ね」
「そういう千聖も・・・いや、言わんでもわかるか」
「ここでそんなことないなんて空気の読めないこと、言わないわ」

とりあえず俺たちは知り合いがやっている催しを回ることにした。

「すごかったね！プラネタリウム！」

「ええ、高校生の出し物とは思えないクオリティだったわね」
「俺たちの自信作だからな」

初めに来たのは俺のクラスでやったプラネタリウムだ。

「芽音くん、めっちゃくちや張り切ってたもんね！」

「作るのはその分大変だったけど・・・まあ結果オーライかな」

そんな声を出したのは受付をやっていた香澄さんと美咲だ。

実はこのプラネタリウム、ほぼ俺が監修して作ったといっても過言ではないという代物だった。天体観測が好きな日菜さんから大量に情報を仕入れ、アイディアを取り込んだという経緯があるのであるが・・・

だって日菜さんの知識量半端ないんだもん。それ聞いたら全部取り入れたくなってここまでのものが出来上がってしまったのだ。

「芽音くんってその辺こだわり強いよね」

「確かにそうね。でもそれはいいことだと思うわ。妥協せず納得のいくものを作り上げる。しかもクラスみんなが嫌な顔せず協力するってことは芽音の人柄がなせる技ね」

「え、なにこれこんなに持ち上げられると逆に怖いんですけど・・・」

「それだけすごかったってことだよ？」

「そうよ、あまり曲解しないでほしいわ」

少し頬を膨らませた千聖（実際には膨らませていない比喻表現であるが）はそんなことを言う。

「さすが元クラスメイトの親友、息ぴったりですねー。さてー次の回の受付をしますか」

「そうだね！あれ？あれは・・・」

お察しの通りではあるが、他の3人もひまりちゃん同様、羽沢珈琲店に通ううちに知り合った次第である。

「このプラネタリウム、本当に自信作なんで楽しんでいってよ」

「へえ・・・そこまで言うってことは相当自信あるんですね」

「ら、蘭ちゃん、そんな挑発的な・・・」

つぐみちゃんが焦ってフォローを入れるがこれはただの冗談ってことはわかっている。

「ああ、目に焼き付けてくるといいよ」

「・・・ふふ、わかりました」

「いや、蘭と俗さんはすっかり仲良しですな」

「別にそんなんじゃないし」

「またまた」

そういいながら蘭ちゃん、モカちゃん、巴ちゃん、つぐみちゃんが教室に入っていく。

「ひまりちゃんは入らないの？」

「へ!? あ、すみません。いきます!!」

「・・・?」

ひまりちゃんはそそくさといってしまった。

あれ・・・俺なんかしたかな・・・?」

「・・・まさかこんなところにも・・・」

「まさかひまりちゃんもだなんて・・・」

何やら二人がブツブツいっている。

え、なんだこれ怖い。

「おーい、二人とも。大丈夫か？」
「はっ……！大丈夫だよ大丈夫！」
「……問題ないわ」

何か煮え切らない感じだがまあ二人がそういうのならそうなんだろう。

ふと横を見るとよくわからないけど楽しそうといわんばかりの笑顔を浮かべる香澄さんと、何かを察して目を逸らす美咲の姿があったのだった。

※

「ふう、だいぶ回ったな」
「そうね」
「千聖ちゃん、そろそろ」

どうやら時間切れらしい。まあ俺も何だけど。

「私たちはこれから出し物の当番なの」
「うん、だからここまでかな」
「そっか。観に行きたい……ところなんだが風紀委員としての仕事もあつてな。俺はもう少し花咲川を巡回したら羽丘に移動するよ」

そういつて別れた俺たち。
いやーしかし楽しかった。やっぱこの3人は最高やな！

というわけで羽丘に到着したわけであるが……

「あー!!!!!!
芽音くん帰ーっけ!!!!!!」
「げえ!?!日菜さん!?!」
!?!
!!!!!!

るみたいな顔しちゃって」

「どうしてわかったの・・・!?」

「え、適当並べただけどアタリなんですか」

なんてやりとりをしているといつの間にか日菜さんとお嬢の姿がなくなっている。

「あれ、あの2人は・・・？」

「あ、ヒナとところなら控室の方に行ったよ」

「なんでまた」

俺は意図が理解できず困惑する。しかしその答えはすぐに出るところになったのだ。

「芽音くん！じゃーん!!」

「・・・や、じゃーんといわれましても」

日菜さんが持っていたのはネコメイド衣装。

もしかして日菜さんかお嬢が着るのか？二人なら確かに似合いそうである。

「ふーん。で、どっちが着るんだ？」

「芽音くんだよ？」

「芽音に決まっているじゃない！」

「フアツ!？」

いや何の冗談だ。え？冗談じゃないって？あらそう・・・

ちよ、ま、二人がジリジリ近づいてくる

え・・・？これは・・・

「逃げるのみ！」ガシッ！

いやああああああ黒服さんが3人がかりで捕まえてくるうううう

「放せコラー！」

「諦めて芽音くん、（黒服）3人に勝てるわけないでしょ？」

「バカ野郎お前俺は勝つぞお前！やめ、こんなところでやめて……ぎやああああああ」

※

「くくツ……芽音……よく似合ってるよ……くくツ」

「り、り冊……笑っては……失礼よ……くくツ」

「おー！すごいすごい！」

「完璧ね」

「くっ殺」

そんな俺の声が響き渡る学園祭はまだ始まったばかりであった。

!!!!!!

物を見つけたの！私もいなくなっちゃー！」

「え?!ちよつ!!!」

……行ってしまった。

待って、俺の着替え、ない

見た目は変態ネコメイド、手にはミツシエル。

「えっ……なにこれは……(困惑)」

日菜さんはいない。お嬢もいない。黒服の人もいない。

くっ……いや、もしかしたらリサさんの店に置きっぱなしになっているだけかもしれない。

「よし戻る……」

「やめてください……!」

ああもう、こういう時に限って仕事が!

「あくもう(治安)めちやくちやだよ」

目線の先には他行の男子生徒、絡まれる羽丘の女の子。
見るだけで分かる、テンプレなナンパ風景だ。

「いいじゃんいんじやん、君羽丘の生徒でしょ?案内してよ」

「退屈させないからさ」

「そっだよ」

3人の他校生はしつこく絡んでいる。

「友達と待ち合わせしてるんです!」

「じゃあその友達も一緒でいいからさ!」

いやよくねーよ。

どんな理屈だお前。仕方ない、いくか。

俺はミツシエルの仮面を装着しその場へ近づく。

え？なんでかって？んなもん黒歴史をバラまかないために決まってるでしょ。

「あーちよつとそこのあなた。風紀委員です。そのような行為はご遠慮いただきたい」

「あー？なんだてめ・・・うわっ変態!？」

「やかましいわ!」

いや俺が逆の立場でも同じ反応してただろうけどさ。

やはり面と向かって言われるとこう、刺さるものがある。

「そんな恰好の風紀委員がいてたまるか!」

「そうだ、存在自体が風紀違反じゃねーか!」

「そうだよ」

言われんでも自覚してるわ!いかん、ちよつとイライラしてきた。

「実際ここにいるんですから仕方ないでしょう」

「なんだと？誰だテメー?」

「私ですか？私はくっ殺仮面です。この羽丘の治安を守ります」

「ふざけやがって!」

「今なら見逃して差し上げますがいかがします?」

「んなもん知るか・・・え?」

俺は胸倉を掴もうと近づくと瞬時に掴み、力を込める。

相手が抵抗し振りほどこうとしてくるのは伝わってくるがあいにく俺の掴む力の方が上で微動たにしない。

「せつかくの学園祭なんだから楽しませようよ?」
「……………くっ!」

手の力を緩めるとそいつは踵を返した。

「おい、いいのかよ?」

「そうだよ!」

そんなやり取りをしながら消えていったのであった。

「あの……………ありがとうございました」

「いえ、私の仕事ですので」

あれ……………?よく見たらこの子……………

「どこかであったことありませんか?」

ひまりちゃんダア……………!!

知り合い!? ナンデ!? シリアイ、ナンデ!?

「いえ、初めてかと。こんなふぎけた格好した知り合いなんてなかなかいないでしょう」

「うーん……………あれ? さつき風紀委員って言ってたような……………まさか……………さきなり……………モゴツ!」

そこまでいいかけたところで俺はひまりちゃんの口に優しく手を当て言葉を遮った。

「勘弁してよ」

俺はミッシェルお面を少し上にあげ、ひまりちゃんに顔を見せる。

「日菜さんとこころお嬢。ここまで言えばわかるでしょ?」

「あー……」

どうやら察してくれたようである。

「あの……芽音さん／＼」

「ん?どうしたの?」

「ち、近いです……」

確かに。はたから見たら変態が女の子に言い寄っているようにしか見えない。

それを察した俺は瞬時に距離をとった。

「本当に申し訳ない」

「いえ、いいんです……別に嫌じゃないし……」

「……?そういえば他のみんなは?」

「私だけ少しだけ別行動してたんです。これからまた合流しますよ!ライブもありますし!!」

ライブ。そういえば文化祭特設バンドとポピパのみんなが講堂でライブやるんだったな。しかし特設バンドの彩さん、花音、モカちゃん、リサさん、つぐみちゃん、ポピパのみんなと全員知り合いなのはなんというかすごいよな。

これも地道にコミュニケーションを築いてきた成果かもしれない。

「俺も観に行くつもりだよ。それまでに見回りを終わらせつもりさ」

「あ、そっか。まだ仕事残ってるんですね。じゃあまた後ですね!助けてもらって本当にありがとうございました!!」

「いえいえ。そういえば俺とひまりちゃんって連絡先知らなかったよ

ね。!?!?!?
何かあったときのために教えておくよ
「え!?!?!?」
!?!?!?!?!

私はその申し出があった瞬間、天にも昇る気分になった。
芽音さんとはつぐのお店の常連同士ってだけで今のところそれ以上の進展はなかった。当然連絡先を交換するタイミングなんてなく、お店で会うくらいしか接点がなかったんだ。

「どうしたの?」

「い、いえ!えつと、どうぞ!」

私はメッセージアプリの友達登録用のQRコードを表示すると芽音さんが読み込んでいく。

「うん、あった。じゃあ追加するね」

私の画面に映し出される芽音さんの名前。私は嬉しくてそのままその画面をしばらく凝視してしまった。

「・・・まりちゃん?ひまりちゃん」

「はっ!ごめんなさい!」

「いいよ。そっちの登録は終わったかな?」

「はい!」

手に入れた。芽音さんの連絡先、手に入れた・・・!

「よし。じゃあ俺は仕事に戻るよ」

「あ、はい!ありがとうございます!!」

「じゃあね」

芽音さんの背中を見送る。

そこから私の足取りは軽い。最高の気分のまま、Afterglowのみんななどの待ち合わせ場所に向かったのであった。

※

「大丈夫ですか？」

「きゃあ、変態！」

「見た目は変態ですけど風紀委員です、トラブルは大丈夫ですか？」

．
．
．

「校内で危険な行動はやめてくださいね」

「ぎゃあ変態！」

「見た目は変態だけど風紀委員．．．」

．
．
．

「そっちは立ち入り禁止です」

「え、変態!?!」

「見た目は．．．」

．
．
．

つ、疲れた。

もう今日一日で何回変態呼ばわりされたかわからん・・・
いやまあ見た目変態なので仕方ないんだけどさ。

「やめてくださいー！」

「私たちほんと急いでるんで・・・！」

まーたかよ！

っておいあいつらさっきのナンパ3人組じゃないか。

そして絡まれてるのは・・・

沙綾さんと有咲さんだ・・・

(名前呼ぶことになった)

うう、また知り合いに黒歴史をさらけ出すのか・・・

「でもいかないわけにはいかないか・・・」

意を決した俺は歩みを進める。

「まーた君達か」

「げっ!?!さっきの変態!?!」

「変態じゃない、くっ殺仮面だ」

というわけでもたしてもナンパの処理をする羽目になったわけだ。
そしてこの話さ次回へ続くってことで。

第11話 騒乱の学園祭Ⅲ

「くそっ！変態め！」

なんて小物がような吐く捨てセリフを吐いてナンパ3人組はどこかへ行ってしまった。誰が変態じゃい。いやもう慣れたけど。

「あの・・・」

「おっとこんなナリしてますけど風紀委員ですので安心してください」

散々変態呼ばわりされたのもあつて先手を打つ。

「風紀委員・・・？もしかして芽音か？」

「ナンノコトヤラ」

俺に対し全く猫を被らなくなったのと、生徒会室に出入りすることで多少仲良くなれたせいか最近下の名前と呼んでくるようになった有咲さんが俺を名指しで呼ぶ。

しかし今の俺はあくまでくっ殺仮面、ということだとぼけて見せる。

「いや男の風紀委員って芽音しかいねーし」

「あ、そういえば内部人事知ってる人だったこの人」

「心の声漏れてんぞ」

「これは失礼。ふむ、バレては仕方ない。そうだ、俺こそが・・・くっ殺仮面こと・・・」

「いやそういうの聞いてねーし」

「ハイ」

冷ややかな視線を向けながら鋭い突っ込みを入れる有咲さん。

うん、まあ知ってるやつがこんなやばい格好してたらこうなるわな。

「本当に芽音くんなの・・・？」

「やあ沙綾さん。無事かな？」

そしてポピパを通して親交を深めこちらも名前で呼んでくれるようになった沙綾さん。

俺はお面を外し二人に素顔を晒す。

「わあ、本当に芽音くんだ・・・うん、大丈夫。何かされる前に芽音くんが助けてくれたし」

「そこは感謝しとく。でもなんでまたそんな変態チックな格好してるんだ？」

「日菜さん お嬢 捕まった」

「あっ・・・(察し)」

どうやら察してくれたようだ。

「というわけで着替えも取り上げられ、でも仕事をサボるわけにもいかず泣く泣く・・・」

「芽音も大変なんだな・・・」

「芽音くん・・・」

「ヤメテ！そんな憐れみに満ちつつも変態を見る目で俺をみないで！！」

冷静になると恥ずかしさが数倍増するというものだ。

俺は顔を隠すために再びお面を装着しようとしたところで、ようやく二人の格好について質問することを思い出した。

「そういえば二人も可愛い衣装着てるね。あそつか、これからポピパ

もライブだったね」

「あ、ありがと・・・／＼／」

「あーはいはい。ありがとありがと」

「有咲さんテキトーすぎやしませんかね？ほら沙綾さんを見てみなよ！非日常的な格好をして気丈に振る舞っていてもいざ指摘されると恥ずかしさが出てきてしまい、顔を赤くしてしまう！それこそ可愛い衣装を身にまとった女の子の義務、普通の反応ではないでしょうか！！」

「か、かわいい・・・」

「おめー格好が変態になって頭も変態になったんじゃねーのか？」

「辛辣なツツコミありがとうございます。自分でもちよつとそう思いました」

調子に乗って言うてみたがうーむ、ちよつと俺らしい発言ではなかった。

俺も文化祭で浮かれてしまっているんだろか？いつも通り俺に遠慮がない有咲さんに少し照れる沙綾さんであるが衣装の効果もあって魅力が倍増しているのもだろう。

「それに沙綾が顔赤くしてるのはそういうことじゃねーから」

「あ、有咲!？」

「え？どういうこと？」

「自分で考えな」

「そんなご無体な・・・おつと、そういえば見回りいかなきゃいけないところーつ残ってたんだった」

「私たちも準備にいかなきゃ」

「そうだよ、香澄たち待ってる！」

話を続けたかったが時間がタイトなものも事実でありうやむやにせざるを得ないな・・・

どうやらこの二人との会話はここまでのようだ。

「んじや、俺は行くわ。ライブは俺も観させてもらうから頑張ってね」
「おう、じゃあなー」
「また後でね」

そうして俺は残り1か所の見回りノルマを終わらせ、休憩に入るの
であった。

※

「おーい沙綾？」
「……………」
「沙綾ー」

芽音を見送ってから沙綾の様子がどうもおかしい。
いや待てよ、さつきちよつとからかいすぎた感はある。ヤバイ、も
しかしたら怒らせちゃったかな……………？

「沙綾……………その、さつきは調子に乗って……………」
「……………いいかも」
「……………は？」

沙綾は顔を赤くさせ少し息を荒くしている。

「な、なにが……………？」
「猫耳メイドの芽音くん……………いいかも／＼／＼」
「は……………？はあああああ!？」

どうやら友達がなにかに目覚めてしまったようである。
おい芽音、お前のせいだ。
責任……………とれよな？

そんなことを考えながら香澄たちと合流すべく私たちは移動を始めたのであった。

※

「つつかれたー・・・」

俺は校舎裏の誰も来なさそうなスペースで休憩をしている。

このあとはライブがあるのでそれを見なければならぬし会場の警備もしなければならぬ。そのための休憩、体力回復だ。

「お疲れ様、芽音」

「・・・千聖？」

ほっぺたに冷たい缶ジュースを当てられ、その方向を見ると千聖が立っていた。

「おう、ありがとう。あ、この格好は・・・」

「日菜ちゃんとこころちゃんにやられたんですって？」

「話が早くて助かる。そういえば花音は？」

「花音ならライブの準備に向かったわ」

「あーそっか。花音もスペシャルバンドで出るんだもんな」

どうやら千聖に眼力で殺されるような事態は避けられたようだ。

話を聞くに千聖も自分のクラスの出し物当番を終え、花音たちやポピパのライブを見るために花咲川から羽丘に移動してきたらしい。

その連絡があったのでここを指定したというわけだ。

「どうだ千聖、楽しんでるか？」

「ええ、とつても。今年は芽音もいることだし」

「よせやい、お世辞でも照れるだろ」

「でも芽音、本当にいい顔をするようになったわよ。会ったころとは大違い。あの頃は仮面を作ってコロコロ雰囲気を変えて無理して・・・」

「それはお互い様だろうて。あの頃の千聖、結構怖かったぞ」

「あら、失礼ね。そういうあなたは何を考えているかわからない、得体のしれないクラスメイトだったわ」

「むむむ・・・」

俺と千聖は真顔でにらみ合う。

「・・・くくっ」

「・・・ふふっ」

のであるがすぐに笑みがこぼれ笑顔に変わる。

「ホント、あなたは変わったけど・・・変わらないわね」

「千聖もな」

その言葉だけでお互いのことが分かる。

やはり千聖は特別な親友であるのを実感するとともにこうやって一緒に過ごすだけで安心感を得られる。この気持ちは何なのかの答えは未だに出ないけどまだゆっくり考えていていいんだろうか？

「ねえ、芽音。私たちは変わってない。でも、それは永遠じゃないわ」「なんだよ突然」

「ただの世間話よ。私たちは徐々に大人になっていくし、どんなきっかけで関係が変わるかわからない。でも関係が変わる出来事っていうその瞬間ははずれやつてくるわ」

「随分深いことを言うね」

「そうかしら？まあ私から言いたいのはその瞬間が来たと感じたらその都度、真剣になって考えてねってことよ」

「……よくわからんがわかった」

「……変な話をしたわね。頭の片隅にでも記憶しておいてもらえばいいわ」

千聖がどういう意図でコレを言ったのかわからない。しかし千聖が無駄なことを言うとは思えないし、きっとこの言葉の意味をかみしめる日がいずれ来るのだろう。

「ライブまでまだ時間があるわね」

「そういえば長めに休憩貰ったんだった。ここ静かでもいいけど、万一人に見られたら千聖は世間の目がマズいんじゃないか？」

「それもそうね……私としたことがうっかりしてたわ」

「千聖もうっかりすることあるんだな」

「人が来る前に先に会場に行くわ。話に付き合ってくれてありがとう」

「こちらこそ。有意義な時間だった」

「ふふっ……じゃあ、またね」

そのまま千聖はこの場を離れて行動の方へ向かった。さて、俺もう少し休憩したら行くかなー

「それで、他校に来てまで話って何でしょうか？」

あれ？声……？

この人の気がない校舎裏。

そのはずなのどこからか声が聞こえる。俺は少し気になり。その声ができる方へいくのであるがそこにいたのは紗夜さん……？いや、あれは……

「あんたいつとも私たちを目の敵にして！」

対する人たちは花咲川で多少素行に問題がある女子生徒3人組であつた。

ふむ、状況を察するに普段風紀委員により注意を受けている彼女らがその鬱憤を晴らすために風紀委員長である紗夜さん呼びつけ直々に物申している、といった具合か。

しかしあれは多分、紗夜さんではない。

「つまり、お話がしたいということでしょうか？」

「話・・・？そうね、話ね」

あれは、なぜか花咲川の制服を纏った日菜さんであつた。

※

「ただの世間話よ。私たちは徐々に大人になっていくし、どんなきつかけで関係が変わるかわからない。でも関係が変わる出来事っていうその瞬間はいずれやってくるわ」

「随分深いことを言うね」

「そうかしら？まあ私から言いたいのはその瞬間が来たと感じたらその都度、真剣になって考えてねってことよ」

世間話といったがこれは結構重要なことだと思う。

私たちの関係は“私たちが親友である”ことを前提で成り立っている。

でも私を知るが限り沙綾ちゃん、ひまりちゃんは間違いなく芽音のことが好きだ。

花音はどうかわからない。

そして芽音は人の雰囲気を読み取るのが得意なくせに自分に向けられる恋愛感情に恐ろしく疎いところがある。

このままいけば誰かが涙を飲むことになるのは間違いないし、全員

が涙を飲むことになるかもしれない。

私は芽音のことが好きだ。でも、だからといって他の人を芽音を選んだのであれば頑張つて諦めるようにするだろうし、ドロドロするの嫌だ。

だからこそ、芽音には少しでもその疎さを克服してほしいと思つた。

「そうかしら？まあ私から言いたいのはその瞬間が来たと感じたらその都度、真剣になつて考えてねつてことよ」

「……よくわからんがわかつた」

「……変な話をしたわね。頭の片隅にでも記憶しておいてもらえばいいわ」

故にこんな会話をしてしまったのだ。今はわからなくてもいい。その時がくれば芽音ならきつと気づいてくれると思うから。

※

「おーポピパのみんな！衣装いい感じだね!!」

「ありがとうございます！日菜先輩!!」

あたしはステージの設営、準備をすべて終わらせて時間を開始まで持て余していた。そして控えのところにあつたポピパのみんなの制服。

これを見てるんつってすることを思いついたのだ。

「ねえ香澄ちゃん！制服、ちよつと貸してくれないかな??」

「制服ですか？」

「うん、私が花咲川の制服を着れば……?」

「あ！紗夜さんみたいになる!!」

「せいかーい！というわけでどうかな？」

「楽しそう!!いいですよー!!」

きっかけはそんな些細なこと。

あたしは花咲川の制服を身にまとい、行動の外に出てみた。

「あのさ、ちょっと顔貸してよ」

「え?」

その刹那、花咲川の制服を着た3人組に手を引かれて校舎裏に連れていかれてしまった。

「あんたいつつも私たちを目の敵にして!」

あー・・・これあれだ

多分おねーちゃんが普段注意している人たちが文句をつけにきてるんだ。花咲川の制服を着ているあたしをおねーちゃんと勘違いしたってところかな。

「つまり、お話がしたいということでしょうか?」

「話・・・?そうね、話ね」

ひとまずおねーちゃんの振りをしてみる。

「話し合いであれば聞きますよ」

「わかったわ。でも、話すのはあの人たちだけどね!」

「えっ・・・?」

目線の先には3人組の男子生徒たち。

花咲川でも羽丘でもないようだ。

「私の彼氏と友達。あんたを懲らしめてもらおうと思って」

「オラ、こっちにこい！」
「痛っ！」

あたしはそのうちの一人に腕を掴まれてしまい、そのまま6人に囲まれてしまったのであった。

第12話 騒乱の学園祭Ⅳ

「痛い!やめて!!」

「普段偉そうにしてもやっぱ無力ね」

うーむ、よくないなコレは。

しかもあいつら完全に紗夜さんと日菜さんを間違えているし、このままでは勘違いで花咲川の生徒が羽丘の生徒会長に暴力を振るったことになってしまう。

・・・いくか。

「はいはいストップストップ」

「なによあんた・・・って変態!？」

「もうその反応飽きたわ」

「あれ・・・?芽音く・・・」

「おおっと。お初にお目にかかります、私はくつ殺仮面!風紀を守る者としてこの現場は見逃せませんね」

俺は日菜さんのセリフを遮り、自己紹介をする。

「くつ殺・・・?やっぱり芽音くんじゃ・・・」

「誰が何というとかくつ殺仮面!!!」

「あ!てめえはあの時の変態ネコメイド!!!」

「おや、ナンパ野郎3人組じゃないですか。また会いましたね」

そこにいたのはひまりちゃんや沙綾さんに絡んでいたナンパ野郎3人であった。

なるほど、こいつらが呼び込んだのか。

「見たところ女同士の話し合いをしている様子。そんな中に不純物である男が手を出すなんて・・・無粋ではありませんか?」

「さつきは人がいっぱいいたから堪えたけどよ……ここなら大暴れしても問題ないよなあ?!……つてああああ?いででででで!!」
「なら最後まで堪えましようよ。ふうー……この口調も疲れてきた。いいか?お前らがやってることは話し合いでも何でもない、単なるリンチ。言いたいことがあるなら言葉で語れ、話し合え。女の戦いに男が手を出すな。暴力持ち込むってんなら……相手になるぞ」

俺は殴りかかってきた一人の腕をねじり上げながら淡々と話す。

「今すぐ消えていなくなるなら今日は見逃してやる。どうする?」

「答えは一つに決まってるんだろ!お前らもかかれ!!」

「言っておくけど正当防衛だからな?風紀委員として暴力に対抗するためにやむを得なくやるだけだからな?」

勝負は一瞬。

まず腕をねじり上げていた奴のみぞおちに一撃。殴りかかってきた1人目に蹴りを一撃、最後に突っ込んできた奴はそのまま腕を掴んでぶん投げたやった。

うーん、受け身も取れないだろうし痛いだろうな

なんてしみじみ思っているとちよつと困ったことが起きた。

「ぶっ殺す!!!」

「うわっ、そういうのちよつと勘弁してもらえませんかね」

なーんでこういうチンピラ崩れってすぐに凶器だすかなー

俺はリーダー格の奴が手荷物折り畳み式ナイフが展開されたのを見てそう思ってしまう。

「さ、芽音くん……!」

「ねえ、さすがにあればヤバくない?」

「うちらそこまで頼んでない……」

「ちよつと、やりすぎだつて！」

女子生徒たちもこの光景を見て驚愕している。

ここまでやるとは思っていなかったのだろう。ちなみに残り二人の男もやべえよやべえよ・・・という顔をしている。

しかしその様子は興奮しているリーダー格の奴には全く聞こえていないようだ。

「あーもう。凶器出しちゃつたら内々で処理できなくなちやうじやん・・・めんどくさいことしてくれたねキミ」

ふつーに警察沙汰だもんなーこれ・・・

警察なんて来ようものなら学園祭が中止になることは免れないだろう。

うーん、どうしようかなあ・・・

「余裕そうな顔しやがつて！オラ！刃物だぞ！怖くないのか？」

「あいにくそんなオモチャを怖がるほどヤワじゃなくてね。最後の警告、今すぐナイフを捨ててこの場から消えるなら見逃してやる。どうする？」

よくみるとナイフを持つ手は震えている。

察するにカツコつけで護身用などといって携帯し、頭に血が上つて出したがいいがその実、人に向けたことはないのだろう。

「お、おいー！ここまでやつたらやべーつて！」

「そうだよ！俺捕まりたくねーよ！」

残りの二人の動揺はさらに大きくなる。

そうだそうだ、そのまま説得してくれ。正直この状況はあまりよくない。

そして女子生徒たちは完全に空気になっている。

「そんなにビビってんならお前らだけ先に帰れ！俺はこの変態をぶつ殺さねーと気が済まねえー！」

「カタカタ震えながらいわれてもなあ」

「う、うああああああ死ねええええええ」

結局素人丸出し、隙だらけの状態で突っ込んでくる。

俺は優しく（意味深）腕を掴み上げ、そのまま再びみぞおちに割と本気の一撃をぶちかますことにした。

「殺す、なんて気軽にいうもんじゃない。人を殺めんとする者はその逆をされる覚悟を持たねばならん。お前にその覚悟はあるのか？ないのならばその刃は即座に捨てる。似合わぬ」

「いや、それいつの時代の人？キャラ崩れてない？」

「日菜さん、結構いいこと言ったつもりなんだから茶化さないでもらえますかね？」

「あー！わかった！イヴちゃんの真似だ!!」

「・・・イヴちゃんには黙っててね？」

そんな説教を聞いていたかわからない、ぐたったりした相手を見ながら俺は呆れたように言う。

すみませんすみません、ちよつと時代劇が好きな仕事仲間兼学友に影響されて言いたくなつて言いましたすみません。

いやー日菜さん、こんな状況下でもう余裕取り戻してるってやっぱり大物だわ。

「さてと。そこの男二人！」

「は、はい!?!」

「なんででしょう!?!」

あらら、完全に委縮しちゃってるよ。
まあそつち方が扱いやすいからいいか。

「そこに伸びてるの、連れてさっさと消えろ。別にケガをしたわけでもないから特別に見逃してやる」

「わ、わかりましたあああああ!」

見逃すチャンスを3回も上あげて、ダメなはずなのに結局内々で処理しちゃうなんて俺も甘々だなあ。

でもまあ大ごとになるよかいいか。

さて、残りはこの愚かな女子生徒たちであるが……

「紗夜さん、もう出てきてもいいですよ」

「え?おねーちゃん?」

「ようやくですか」

すると隠れていた紗夜さんが姿を現した。

実は奴がナイフを出したあたりでいたのは気づいていたのだが、危険なので動くなどアイコンタクトを送っていたのだ。上手く伝わってよかった。

「え!?!風紀委員長が二人!?!」

「こちらは風紀委員長の双子の妹、羽丘生徒会長・氷川日菜さん」

「え……?ええええええ!?!」

「すみませんでしたああああああああああ」

「ごめんなさいいいいいいい」

3人は自分たちがしでかしたことの重大さにようやく気付いたよ
うだ。

「日菜、ケガはないですか?」

「うん、芽音くんが助けてくれたし」

「くっ殺仮面」

「それで、その変態仮面はなんでそんな素っ頓狂な格好をしているのですか？」

「くっ殺仮面！そしてあなたの妹のせいだよ!？」

「・・・大体事情は察しました」

さすが紗夜さん、今のやり取りですべてを察したようだ。

当の本人はニコニコしてるけど。

「さて、あちらの3人の処分はいかががしましょうか？」

「ひっ・・・」

怯えながら委縮する3人。日菜さんを拉致ってきたときの勢いはもうどこにもない。

話を聞くに、この3人は普段からいわゆる不良的に分類されているようで（これは俺も知っている）紗夜さんから度々注意を受けているらしい。

そして学園祭中も注意され、虫の居所が悪かったと。

そんで羽丘に来た時に偶然（日菜さんだったけど）見つけたので招待していた彼氏たちを巻き込み今回に騒動に至った・・・ということらしい。

「そうだったのですか。しかしやったことが許されるわけではありません」

「おねーちゃん、許してあげない？確かにやりすぎだけど、結果的に何にもなかったわけだし、楽しめたかったただけだろうしさ」

「日菜・・・そんな甘いことを言っている・・・」

俺は考える。確かにこいつらがやったことは許されないことだ。

しかし日菜さんが言うこともわかるのだ。こいつらは楽しめた

かっただけ。

それにみんなが頑張って実現したこの合同イベントに水を差すのもどうかと思う。

「んじや、落としどころをみつけてはどうかかな？」

「落としどころですか？」

「確かに彼女らがやったことは許されないことだけど、今ここでしよつ引いてもせつかくの学園祭に水を差してしまう。で、あればここは処分保留して終了後改めて考える」

「・・・なるほど」

「それにせつかくの合同イベントなんだ。みんなが楽しまなきや損でしよ」

紗夜さんは顎に手を当てて考える。そしてそのまま3人のところに顔を向け、語りだしたのだ。

「あの」

「は、はい！」

「私も少し言い過ぎたかもしれません」

「・・・え？」

「確かに楽しいイベント中に注意されたら思うところがあってもおかしくはないなど。私ももう少し言い方を考えるべきでした。今後も気をつけます。では、その案で行きましょう。」

「あれ・・・？風紀委員長って案外いい奴？」

「ってことだ。この件は俺と委員長さんが預かるから、お前らは終わったら後日出頭。まあなるべく軽い処分になるようにしてやるから今日は楽しんできなよ」

「お前、変態なのがいい奴だな！」

「変態だけどいい奴だね！」

「変態だけどいい奴！」

「変態だけどるんってする！」

「変態なのには余計だ!!!」

あと最後に混じった約1名、あんたらは元凶だろうて……
そんな感じで3人を解放した俺たちであった。

※

「申し訳ありません、俗さん。ご迷惑をおかけしました」

「俺は仕事を全うしただけさ」

「もうくつ殺仮面はいいの?」

「君たち相手に今さらどーでもいいや」

飲み物を飲みながら公演の時間まで駄弁ることにした俺たちはそのまま座って休憩をしていた。

「でもさー芽音くんって話には聞いてたけどほんと強いんだねー」

「ええ。確かにあれは目を見張るものがありました」

「んくまあそこらの素人よりは強い自信あるけど過剰な自信は破滅を招くって教えられたからあんま持ち上げないでもらえると助かる」

「そういうことであればあまり言いません。改めて、ありがとうございます
いました」

「うんうん、最初の方けっこー怖かったから感心感心。芽音くんに助けられるのは2回目だね!……あれはあまり思い出さくないけど」
「自分から話題に出していくのか……(困惑)」

俺はエレベーターに閉じ込められた出来事を思い出す。

後にも先にもあんなことは御免だ。それは多分日菜さんも同じことを思っているだろう。

「俺は日菜さんや白金会長、有咲さん、つぐみちゃん……みんなが頑張って実現したこのイベントを守りたかっただけだからさ」

この想いは本当である。

俺に任せろ。学校を守りたい！などいって盗撮に使ったスマホを破壊するようなものとは意味が違う（元ネタはご自分で調べてね！）

「おくカツコイイね〜これはちさ・・・女の子も惚れちゃうなく」

「だから持ち上げててもなんも出ないっての」

「・・・なるほど、これは少し厄介な」

「紗夜さん？」

今のやりとりで紗夜さんは何かに気が付いたようだ。

しかしそれを教えてくれそうな雰囲気はないので俺は追及するこ
とをしなかった。

「さて、そろそろ私は行きます。日菜、あなたも運営に戻った方がいい
わ」

「おねーちゃんがそういうなら。んじゃ芽音くん！ライブ楽しんでね
!!」

※

「日菜、さつき言いかけたことだけれど」

「あーおねーちゃん気づいちゃったか。うっかり口が滑るところだっ
たよ」

「やはりそういうことなんですね」

「そ、千聖ちゃん」

「・・・これはあまり言うべきことではないと思うのだけれど」

「まさかおねーちゃんも芽音くんが好きとか!？」

「茶化さない」

「あはは、ごめんごめん」

「松原さんもよ」

「……ありやりや」

「日菜あなたはどちらを応援するの？」

「んー……千聖ちゃん！でもどっちかの味方になって動けっっていわれたらあたしはどっちにもつかないよ。おねーちゃんもそうでしょ？」

「……さすがは姉妹ね。確かに先に知ってしまった松原さんを応援するつもりではいるけど、最終的にはどちらにもつかない」

「だって恋愛なんてさ。結局誰かと誰かが想いを通わせた結果に成就するものでしょ？流れに任せるしかないよ」

「リアリストね」

「それはお互い様だね！」

芽音と別れた二人の姉妹は並んで歩いてこんな会話をする。

それを知る者はこの姉妹以外になかったのである。

※

「俺の着替えどこ????」

次回、騒乱の学園祭編 最終回

第13話 騒乱の学園祭V

「待たせたな花音」

「ううん、お疲れ様芽音くん」

先ほどまでの騒動の後、俺は服を取り戻しくつ殺仮面を卒業した。その後、彩さん、つぐみちゃん、リサさん、モカちゃん、花音によるスペシャルライブを観戦した俺はそれが終わった後に昼休みに突入したわけである。

「とりあえずなんか買いに行くか」

「あ、それなんだけど・・・」

「・・・?どうした花音?」

花音がなんとなくモジモジしている。

何かあっただろうか?

「お弁当、持ってきたんだ」

「おお」

そんな会話をしながら屋上にやってきた俺たち。

羽丘の屋上は本来入っていけないが、くつ殺仮面の罪滅ぼしか休憩のためなら入っていいよと日菜さんに許可をもらった次第である。

そして、そうやって出したのは弁当箱のつつみ。大きめの弁当箱に2人分入っているのだろうか。

「いいのか?」

「そのために持ってきたものだしね」

そういいながら弁当箱のふたをあけるとなるほど、美しい。

色のバランス、盛り付け、献立、どれをとってもいうことなしであ

る。

「さっそく食べてもいいか？」

「うん、お口に合うと嬉しいな」

卵焼き、唐揚げといったスタンダードなおかずから少し手の込んだおかずまで様々ある。

俺はまず、弁当の代表格ともいえる卵焼きに手を伸ばした。

「・・・ふむ」

「どうかな？」

「うまい。これはマヨネーズを少し入れてるね」

「うん、正解」

こういったところまでしつかりこだわっている。

なるほど、花音のお母さんは料理が上手いな。

「こっちの唐揚げは・・・衣に何か混ぜてる・・・これは・・・じゃがじゃが」

「すごい！それはポテトチップスを砕いたやつが入ってるんだ」

「この香ばしさの正体はそれか」

実にアイデア満載なお弁当だ。

「いや〜花音のお母さんは料理にこだわりを持つてるんだな」

「うん。お母さん、結婚する前は調理師やってたんだ」

なるほどそれですか。いやーこれを毎日食える花音がうらやましい。

「本当に美味しい。毎日でも食べたいくらいだ」

「そ、そんなに？えへへ」

はて。花音が照れていらっしやる。

母親が褒められたことがそんなに嬉しいのだろうか？

・・・いや待て。この雰囲気はまさか

「・・・実はこれ花音が作ったやつだったりする？」

「実はそうなんだあ」

どうやら俺の口に会ったことで安心したようだ。

緊張した雰囲気崩し、少し顔を赤くしながらにへくつと笑う花音。

うん、かわいい（確信）

いやそんなことは前からわかってたことであるけどこういう笑顔ってさあ、なんか違うじゃん？

「すごいな。俺も自分で弁当作ってたからわかるがここまでこだわって作るのはなかなかできることじゃない」

「そういえば芽音くんも自分で持ってきてるんだったね」

「前はな。退院してから日課で朝のトレーニングをしてるんだが、そのせいで作る時間がなくて今はほとんど購買かコンビニで買ったもので済ませている」

リハビリ施設で鍛えてもらって、力の維持及び向上にはトレーニングが必須である。

朝弁当を作るために設けていた時間をランニングや筋トレ、素振りに時間を費やしているため必然的にそうなってしまったのだ。もつと早く起きろよという話ではあるが、入院生活のせいでどうも朝に弱くなってしまうみたいで今の俺にはコレが限界であった。

「ね、芽音くん」

「どうした？」

「あの、その、芽音くんの分のお弁当も私が作って来ちゃ迷惑かな?」
「え?さすがにそれは迷惑じゃないか?」

「ううん、お弁当箱に詰める手間が少し増えるだけだし、コンビニや購買ばつかじや栄養が偏るし・・・どうかな?」

ふむ。魅力的な提案である。

花音の弁当は美味い。それは今食べたとおりである。

それが毎日昼に食えると来たら午前の授業は乗り切れるし昼もパワーが出る。

メリツトしかない。

「ぜひお願いします」

「うん!じゃあ明日から作ってくるねっ。それとこれもついなんだけど、学校も一緒に行かないかな?芽音くん家、私も通り道にできるし、お弁当も渡したいし・・・」

「確かに理にかなっているな。花音の負担にならないようであればいいぞ」

「うん!!」

何やら嬉しそうな花音を見ながら俺は少し、頭の片隅で考えていた。

“これってそういうことなのか?”と。

いや待て、花音とは付き合いが長いし親友の延長の可能性も十分にある。

にもかかわらず変に決めつけて動くのはよくない。勘違いってのが一番恥ずかしいパターンだ。

・・・うん、やっぱないな。そう考えることにしよう。

そんなこんなで俺たちの明日からが決まったのであった。

※

「ぜひお願いします」

「うん！じゃあ明日から作ってくるねっ。それとこれもついでなんだけど、学校も一緒に行かないかな？芽音くん家、私も通り道にできるし、お弁当も渡したいし・・・」

「確かに理にかなっているな。花音の負担にならないようであればいいぞ」

「うん!!」

はあああ緊張した。

お弁当を作ることでもそうだけど、一緒に行こうって提案はちよつと不自然じゃないかな？って思ったけど芽音くんは快諾してくれた。

もしかしたら私が芽音くんのことを想っているのがバレてしまったかもしれない、という懸念は拭えないけどひとまず一歩前進だね。

明日からのお弁当のレパートリー、考えなくっちゃ。

それに朝一番で芽音くんの顔が見られるなんて嬉しすぎるよ。今までなんでしてこなかったんだろう？って思ったけどそんな勇気持ち合わせてなかったからだよね。

ハピネスっ！ハッピーマジカルっ

勇気を出してよかった。これもハロハピに入ったおかげかも。

ここから少しずつ、少しずつ関係を変えていけばいいよねっ

※

「しかしポピパのみんなは残念だったな」

「うん・・・たえちゃん、凄く泣いてた」

実は花音たちのスペシャルバンドのあとはポピパ結成1周年記念でライブをやる予定だった。

しかし、ギターの花園たえさんが別のバンドのヘルプをしており、それがブッキングしてしまったのだ。

本来であれば間に合うはずだったのだが、ヘルプに入っているバンドのライブが想像以上に盛り上がりすぎてしまい、出発が遅れてしまったらしい。

その遅れを彩さんがMCでつないでくれたり、朝日さんという羽丘の子がアドリブでギターを披露したり、Roseliaの面々がサブライズでライブをしたりしてくれたのだが、結局間に合わなかった。

「これが尾を引いてポピパに何か起こらないといいけど・・・」

「こういうトラブルって堪えるもんな。とりあえず香澄さんと沙綾さん、有咲さんは同じクラスだしそれとなく注意してみておくか・・・」

そんなことを考える俺、

しかしその問題に直面するにはそう時間はかからなかった。

俺はこの日以降、意外に早く関わることになるのであった。

※

こうして色々な騒動が起きた花咲川・羽丘合同の文化祭は終わった。

楽しくなかったといえは嘘になる。

千聖と花音と初めて回った文化祭、風紀委員ないしくつ殺仮面としての活動(二度と御免だが)、そして花音との昼休みなど思い出がたかったです。

「芽音くん、おはよう」

「ああ、おはよう」

そして翌朝、宣言通り花音が家に迎えに来た。

弁当を受け取り、並んで登校し、平穏なひと時を過ごす。

今度こそ、この平和な日常を壊さないようにしなければならぬ。

俺はなんとなく、そう強く思ったのであった。

第14話 珠手ちゆ

しかしでっけーマンションだなおい。何階あるんだこれ？

俺は指定された部屋番号の番号を入力し、インターホンを起動する。

すると物凄く明るい声で「お待ちしておりましたくどうぞく!!」と聞こえ扉が開いた。

R A I S E A S U I L E N のスタジオがあるマンション。

有咲さんや花園さんに場所を聞き出し、アポを取ってもらったところOKが出たため訪れた次第である。

ここに来る前、有咲さんや沙綾さんに色々話を聞き、そして俺は花園さんにも話を聞いた。

「どっちにせよケジメはしっかりつけるよ。それが礼儀」

俺はその言葉を聞き、余計なお世話かもしれないが動いたわけである。この行動が果たして正しいのかどうかはわからないが、俺は今回ポピパのために動くとした。結局は花園さんの結論次第になることはかわらないけどね。

引つ掻き回さない程度にやってみよう。ちなみに有咲さんや沙綾さんとの会話は次回になるのでよろしく (露骨な宣伝)

「ようこそ！わたくし、チュチュ様のお世話係をしておりますパレオと申します！以後お見知りおきを・・・あら？」

「あれ？まさかこんなところで会うとは」

そこにいたのはパスパレのファン第一線にいるレオナちゃんであつた。

リライブなどでは必ずいる上にその時に合わせて髪の色を変えてくるという歴戦の強者である。

「パスパレのスタッフさんとこんなところでお会いできるとは！世間は狭いですねえ、改めましてよろしくお願ひします！ここではパレオとお呼びくださいいね！」

「よろしくお願ひします。俺のことは好きに呼んでいいので」

「では芽音さんと呼ばせていただきますね！私に敬語は必要ありませんので！」

目の前にいるメチャクチャ明るいパレオさん。しかし俺は感じ取ってしまった。

・・・彼女の奥底に潜んだ暗い雰囲気。

“ああ、この子も仮面を被ってるんだな”

同族だからだろうか？すぐにわかってしまった。きっとこの子の本性は全く別のものなんだろう。だがそれをここで暴く意味も意義も感じないため、俺はそのまま話を続けることにした。

「What? サキナリって言ったかしら？」

「んんん、そのネイティブな英語と変な日本語が混じった話し方、聞き覚えがあるぞ」

「Oh... やっぱりあなただったのね。久しぶり」

会話に割り込んできた別の声。

回転イスを回して現れた顔は相も変わらずビーフジャーキーを口にくわえた“珠手ちゆ”その人であった。

「やっぱりちゆちゃんだ」

「今はチュチュって呼びなさい」

「わかったよ“ちゆちゃん”」

「No! チュチュ！」

「いやあ、“ちゆちゃん”は“ちゆちゃん”だし今さら変えられないわ」

実に久しぶりの再会である。

いやあ、この唯我独尊っぷり、かわらないなあ。

「お二人はお知り合いなのですか？」

「うん。実は俺ちよつと前まで大けがをしてリハビリ施設にいてね。その時同じ施設にいたのがちゅちゃん」

「だからチュチュ・・・はあ、もういいわ。サキナリは相変わらずね」

「ちゅちゃんこそ・・・まさかRASがちゅちゃんが組んだバンドだったとはね」

「そうよ！サキナリ、あんたが教えてくれたからできた最高のバンドよ!!」

「そーういやそーうだったなあ」

※

時は遡りリハビリ時代。

いつも通りリハビリをやっていたら一人の女の子が俺と同じエリアに入ってきた。

最初は警戒されていたけれど、目を重ねるうちに会話が増えていき、次第に本音を隠さず話せるようになったのである。

「じゃあ珠手さんは楽器演奏中の事故でケガをしたわけだね」

「・・・ファーストネームでいいわよ」

「え？」

「だからファーストネームで呼ぶことを許可するって言ってるの！」

「なるほど。んじゃ、ちゅちゃん」

「ん。何かしらサキナリ？」

「ちゅちゃんのケガって結構重め？」

「そうでもないわ。そんなに大したことないのだけれどマミーが大げさにね。あんたは結構重そうね」

「いやーレンガでぶん殴られちゃってさ。長いこと目を覚まさなかつ

たせいで筋力が落ちちゃって」

「なかなかアンビリバボーな人生を送っているわね・・・」

ちよつと引かれ気味に驚かれる。

その後も話は続くのであるが、どうやらちゆちゃんは才能はあるのに体の小ささのハンデなどもあり、上手く楽器を扱えないという悩みがあるようだ。

それを何とか克服しようとする器を演奏していたら事故を起こしてしまい今に至ると。

「昔から親は何でも褒めてくれる。失敗しても、ね。でもあたしがやれることはいつつも中途半端。やり方はわかっているのにできない。それが悔しくて、歯がゆいのよ」

「・・・だったらさ。プロデュースする側なんてどうよ」

「What?」

「だからプロデュース。ちゆちゃん自身に演奏する力はない。でもちゆちゃんには才能がある。その才能を生かした目利きの力もある。で、あればやることは自分の手足になってくれる人材を探し、プロデュースする。どうかな?」

「・・・」

「ちゆちゃん?」

「それよ!!! Nice ideaよサキナリ!」

!!!!

※

以上、回想終わり。

とまあそんな感じで俺とちゆちゃんは知り合いなわけだ。

「それで?タエ ハナゾノについて話があるって言ったけど」

「ああ、それが本題だね。ねえちゆちゃん。ちゆちゃんから見て花園さんはRASに絶対必要な存在なのかな」

「・・・質問の意味がわからないわ」

「言い方を変えよう。ちゅちゃんがプロデュースする最高のバンドに花園さんの存在は絶対なのかな？」

「絶対よ」

即答するちゅちゃんに俺は意志の強さを感じる。

ちゅちゃんは本気で花園さんを買っていて、正式メンバーに迎えた
いんだ。

「ひとつ、知り合いのよしみで聞いてもらってもいいかな？花園さんは諦めて欲しい・・・とまでは言わない。せめて本人の意思を尊重してほしい」

「・・・なんであなたがそんなことをいうのかしら？」

「今の俺はPoppin' Partyのためにここにきているからかな」

「・・・帰りなさい。あなたと話すことは何もないわ」

ちゅちゃんは冷たい目で俺を見てそう言い放つ、

しかし俺も引くわけにいかない。

「ちゅちゃん、少しくらい話を聞いてくれてもいいんじゃないかな？」

「何を聞けっというの？そんな義理、あたしにはないわ」

「・・・ちゅちゃん」

「帰れっっていつてるの！」

そう叫ぶちゅちゃんの目には涙が浮かんでいた。

しかしそれもわかる気がする。なぜなら・・・

「あたしはアンタにあの日、出会って今のあたしがある！アンタのアドバイスであたしのために音楽を奏でる最強のバンドを作った！それなのに！なんでそのアンタにバンドを否定されなきゃいけないの

よ!?!」

「チユチユ様、落ち着いてください!!」

いま彼女が言ったとおりである。

彼女がRASというバンドを作ったのは俺がきつかけだ。そんな俺が作ったバンドを壊すようなお願いに来ているのである。ちゅちゃんからしたらたまたまっただものではないだろう。

「あたしがどんな思いでバンドを作ったと思っているの!?!あの日アンタにアドバイスを受けてから寝る間も惜しんでずっと一人でやってきて・・・やつとメンバーが集まったのに!」

「・・・そうだよね。ちゅちゃん、ごめん。俺の配慮が足りなかった。でもね、ちゅちゃん。君が自分で作ったバンドが最強だと思うと同じで、ポピパもあの5人でポピパなんだ。だから諦めろとは言わない。せめて本人が決断したようにやらせてほしいんだ」

「帰りなさい」

「だからちゅちゃん」

「帰りなさい!パレオ、お客様がお帰りよ!!」

どうやらもう聞く耳を持ってくれないようだ。

仕方ない、伝えるべきことは伝えたしお暇するか。

「わかった。帰るよ。俺がここに来たのは花園さんに秘密にしてくれ」

「わかったわよ」

「それと、ちゅちゃん」

「今度は何?」

「久々に会えて嬉しかったよ。こんな形になったけどさ」

「・・・っ」

「じゃあ、俺はこれで」

俺は出口に向かって歩きだすと、見送ろうとパレオさんが後ろについてくる。

「サキナリ！」

「・・・？」

「あたしだってアンタに再会できると思ってなかったから。その、嬉しくないこともない・・・わ」

「なんと」

「・・・さつきは意固地になりすぎたわ。タエ ハナゾノの件は考えてみる。当然あたしは残ってくれろと信じているけど」

「やっぱちゆちゃんはいいい子だね」

「なっ!？」

ぼんっ!という音がこれでもかというほど似合う感じで顔を赤くするちゆちゃんをみて何となく懐かしいとともにさつきの暗さが吹き飛んだ。

ちゆちゃん、やっぱ変わらないなあ。

「あらあら〜チュチュ様可愛いです〜」

「パーレーオー!!」

パレオさんもそれに便乗した。もうこれ收拾つかねえな・・・

「んじゃ、本当に帰るよ。じゃあね、ちゆちゃん、パレオさん」

こうして、思わぬ再会を果たした俺は、デカイマンションを後にした。

そしてその足で、山吹ベーカリーに向かったのである。

第15話 仲間だよね？

「ねえ有咲さん聞いてもいいかな」

「・・・なに？」

「空気重くね？」

時は少し遡り、ちゅちゃんのマンションに行く前である学園祭翌日。

俺は風紀委員の後処理を生徒会室にて行っていた。

生徒会室にいるのは俺と有咲さん二人。白金会長と紗夜さんは羽丘の方に出向いて処理をしていない。

花咲川サイドの簡単な処理を任せられたため来たのであるが・・・
こう、有咲さんの空気がめっちゃ重かった。

「大体察してんだろ？」

「まあそれは」

ポピパのライブができなかったことであろう。

結成1周年記念ライブ。思い出になるはずがならなかったという
事実は高校生にとつて酷なことであろう。

「おたえと沙綾がさ」

「うん」

「おたえは自分のせいだって自分を責め続けてて、沙綾はとにかく元気がない」

「・・・だよね。沙綾さんの学校での雰囲気、どんよりしてたし」

「香澄とりみはフォローに回ってくれるんだけどどうにも上手くいってなくてさ」

有咲さんの話は止まらない。・有咲さんも今回はフォローに回る側になっているけど、この様子だと結構限界が来ているみたいだ。

「有咲さんってさ」

「なんだよ」

「口は悪いしツンツンしてるけどめっちゃくちや優しくていい人だよ
ね」

「ちよま!?!突然何を言い出すんだよ?」

「思ったことを言っただけです」

「んなことねーよ!・・・たださ、うちら結成の時も色々あつてさ。いろんなもん乗り越えてきて強い絆で結ばれてる・・・そう信じてきたのに今こんなじゃん。本当に大丈夫かなって不安になんだよ・・・」

「ふむ、俺が見てる限りポピパのみんななら大丈夫さ。人間なんだ。すれ違いなんて1度や2度じゃない、何度だつてする。それはその都度乗り越えていけばいいし、乗り越えた分、絆は強くなるもんだよ。今までもそうだったんでしょ?」

「・・・確かに」

「有咲さんは有咲さんのスタイルを貫けばいい。大丈夫、君は間違っていない」

俺は語る。俺自身そうだったんだ。

最初は仮面を被つて軸がブレブレな良いクラスメイトを演じる。

でもそこで花音や千聖と出会って救われて、仮面を被る必要のない今に至る。

その間にもいろんな出来事があつたもんだ。

「つてか芽音つてけっこー恥ずかしいこと平気でいうよな」

「自覚はあるさ。たまにはこういうのもいいでしょ?」

「ま、ありがとな。少し楽になった」

そういつて有咲さんは笑い、生徒会室を包む空気が少し軽くなったのであった。

※

「いらつしやいませー・・・あ、芽音くん」

「や、沙綾さん」

さあ最後の砦だ。

ちゆちゃんとの話を終えた帰宅途中、俺は山吹ベーカリーに寄った。

閉店間際の時間なので客は俺一人のようだ。

俺は残り少ないパンから適当に選び、トレイに乗せてレジに向かう。

「360円です」

「ちようどで」

「ありがとうございます」

会計をするがやはり沙綾さんはどうにも元気がない。

やはりライブのことを何かしら引きずってるのだろう。

「ねえ沙綾さん。この後って時間あるかな？」

「・・・え?」

「もうすぐ閉店でしょ?もし時間があるなら・・・」

そんな話をしていると奥から沙綾さんのお母さんが出てきた。

「沙綾、いつてきていいわよ」

「でもご飯の準備が・・・」

「今日はとても調子がいいから私がやるわ。せっかくだからお友達と話して来たら?」

※

「話って何かな？」

「有咲さんから聞いたよ」

「やっぱそのことかあ」

沙綾さんはなんとなく察していたようで、こちらに視線を向けた。

「学校で見たときもなんとなく落ち込んでるの雰囲気で察したからさ。やっぱ気になっちゃって」

「・・・少し話を聞いてもらってもいい？」

沙綾さんは自らのことを語る。ポピパ結成前に違うバンドをやっていたこと、そのバンドのファーストライブ直前にお母さんが倒れてしまいバンドをやめることになったこと。そのあとポピパと出会いバンド再スタートさせたこと。

「あの時香澄が私を見つけてくれたから。りみりんやおたえがいたから。有咲さんが優しくしてくれたから、私はここにいます。でも・・・」

話を続けて聞くとRASのボーカルが花園さんの幼馴染らしく、さらにバンド自体もガールズバンドの中では最高クラスのパフォーマンスを誇るらしい。

そんな凄いバンドのギターにヘルプといえ抜擢され、高見を目指す花園さんを見て、さらに結果的にポピパの記念すべきライブよりそのバンドを優先する形になってしまったこと、そのことを受け花園さんがショックを受けてこのままポピパを離れてしまおうんじゃないかと思えて怖いこと。

そのすべてを吐露し終える頃には沙綾さん目からは涙があふれていた。

「私は5人でポピパでいたい。おたえにいつてほしくない・・・！でも

怖い・・・怖くて言えないの・・・」

グスグスと鼻をすすりながら心の内をさらけ出す沙綾さんをみて、俺は思った。

こんな姿を見せてくれるまで俺のことを信用してくれているんだ。俺が何もしないわけにはいかない。

「沙綾さんってさ。すつごく優しい人でいつも周りに気を配って。本当にすごい人だと思うんだ」

「え・・・？」

「俺が沙綾さんと出会ってから抱いた感想だよ。でもだからこそ、それが弱点でもあると思うんだよね」

そう、それこそが今回を乗り切るキーとなることである。

「周りのことを気にしすぎて、色んなことに気を配りすぎて逆に判断ができていない状態っていうのかな」

「・・・芽音くんはすごいね。うん、その通りだよ。昔もそうだった。ポピパに入る前の私なんか特にそう」

「その時はポピパのみんなが沙綾さんの手を引いてくれたんだよね？じゃあ今度は沙綾さんが手を引く番じゃないかな？」

「私が？」

「そう。さつきもいったけど沙綾さんのその優しさはいいところであり弱点でもある。周りのためにはなるけど自分のためじゃあない。ではどうすればいいか？」

沙綾さんは腫らした目で俺をじつと見て、俺の次の言葉を待つ。

「今度は沙綾さんが自分のために動いて、ワガママをいって、花園さんや他のみんなに本音をぶつければいい。いかないでって。花園さんにちゃんと伝えるんだ」

「・・・大丈夫かな？嫌われたりしないかな・・・？」

「逆に聞くけどみんなが沙綾さんを嫌いになると思う？」

「それは・・・」

「大丈夫。有咲さんだってすごく心配してたよ」

「有咲が？」

「うん。有咲さんってツンデレだし妙に達観してるところあるからアレだけど、俺が見てわかるくらい気にしてた」

「そうなんだ・・・」

「沙綾さん、君には仲間がいる。1年間苦楽を共にして音楽に打ち込んで、いろんなことを乗り越えるたびに絆を深めた仲間がね。これは有咲さんにも言ったことだけど、困難やすれ違いつてのは1度や2度じゃない、何度だって来るんだ。でもその都度それを乗り越えれば絆はもつと深まる。仲間ってというのはそういうものだよ」

「芽音くん・・・」

「俺が保証する。俺なんかの保証が何の役に立つかはわからないけどね」

「ううん。ありがとう。なんか、やるべきことが見えてきた気がする」

そういう沙綾さんは涙交じりの笑顔になっていた。

うん、これなら沙綾さんの方は大丈夫そうだ。

「いい笑顔になったじゃないか。さて、長いこと話しちやっただね。あまりおそくなってもよくないしこの辺で切り上げようか」

「うん！・・・でも芽音くん。なんで私たちのためにここまでしてくれるの？」

疑問形で訪ねてくる沙綾さん。なんだそんなことか。

そんなの決まっている。

「俺だって仲間・・・仲間だよね？」

「・・・ぷっ！あははは！そんな心配そうにしないでよ。うん、そう

だね。芽音くんだった仲間だもんね」

「あーよかった。これで〃え・・・？仲間？〃とか言われたら恥ずかしくさで悶絶死するところだわ」

「それ以前にだいたい恥ずかしいこと言っただけでよくな気がするな」

「うう・・・掘り返すのはやめてくだされ・・・」

うむ。沙綾さんも調子が出てきたようだ。

「んじや改めて頑張つてね。陰ながら応援しているからさ」

「うん！本当にありがとね！」

そういう沙綾さんの背中に迷いはない。

いや、まだあるのだろうが行くべき道を決めたというべきだろうか。

多分これでポピパは大丈夫だ。俺はそんな確信を胸に、パンを片手に帰路についたのであった。

※

数日後。5人揃った元気なポピパをみることができたのであった。そして時は流れポピパの主催ライブが開催された。

ポピパ、Roselia、Afterglow、ハロハピ、パスパレと最近話題のガールズバンドが勢ぞろいである。これだけ揃うのはサークルというライブハウスで行われたというガールズバンドパーティ以来だとか。

ライブは大盛況。全バンドセトリを無視した大暴れといった具合でスタッフさんが目を回していたのは記憶に新しい。

それにどうなることかと思っていたちゆちゃんも招待された来たわけだが、演奏中ノリノリで見ていたのは微笑ましかった。

そしてライブは終わり帰り道。主催ライブに参加したバンドは打ち上げに向かったらしい。

「ちゅちゃん」

「サキナリ？」

「芽音さん！お久しぶりです！！」

「パレオさんもこんばんは」

一人で帰っていたところ帰宅途中のちゅちゃんとパレオさんに会った。

まあ厳密には会うように仕向けたわけであるが

「さつきは楽しそうだったね」

「そうなんです！チュチュ様ったらー可愛いんですよ」

「うんうん、ちゅちゃんって結構そういうことあってね。リハビリ施設でも・・・」

「ちよつと！本人の前でそうこと話さないでくれるかしら!？」

おつとストップがかかってしまったようだ。仕方ない。

「それにポピパ？Roselia？そんなの私がぶつ潰してやるわ！」

「ぶつ潰すとはまた物騒な」

「チュチュ様のぶつ潰すとは、バンドの世界で勝ってNo.1になるって意味なので悪意はないんですよ」

「わかってるよ。ちゅちゃん、人を傷つけることはしないし。いい子だからね」

「だから本人の目の前でやるのはやめなさいよー！！！！」

そんな感じでパレオさんと二人がかりでちゅちゃんをいじる。

おつと、そろそろ本題に入るか。

「ギターは見つかりそうかい？」

「・・・まだよ」

「つてことは打ち込みか」

「ええ。でも順次オーディションはやってるわ」

「なかなかいい方が見つからないんですけどね」

「そんな君にコレを。・・・の前に連絡先交換しない？」

「そういえばそうね。わかったわ」

「パレオもお願いします！」

ひとまず連絡先を交換する俺たち。

そして俺はすぐさま、とある動画のURLを張りつけ、送る。

「・・・？これは何かしら？」

「多分、ちゅちゅちゃんが今一番求めているものさ。上手くいくかはちゅちゅちゃん次第だけどね」

「・・・動画？」

俺が渡したのは学園祭で撮影されたある動画がアップロードされているURLだ。

ここにはおそらくちゅちゅちゃんが求めているものが映っていると確信している。

「まあ時間があるときにでも見てみなよ。んじや、俺はこれで・・・と
思っただけど」

時間が時間だ。夜道を中学生（一人は年齢的にはだけど）を二人で歩かせるのは少々気が引ける。

というわけで送っていくことにした。ちゅちゅちゃんは強がつて断ってきたがそのまま押し切った次第である。

そしてマンションに到着し、ちゅちゅちゃんと別れる。

「・・・ありがとう」

「どういたしまして」

「それではチュチュ様、明日また参りますので〜」

ちゅちゃんがマンションに入っていくのを見届け、今度はパレオさんを駅まで送ることにした。

※

「さてパレオさんも駅まで送るね。．．．いや、今はレオナちゃんではないかな?」

「なるほど．．．さすがですね。芽音さん」

「そ。人の雰囲気ってさ、大体話してるとわかるのよ。俺は人一倍そういうのに敏感なだけ。昔はね、いい子ちゃんの仮面を被って自分を殺しながら過ごしてたりもした」

今さら隠すことではないしおそろくこの子は同族だ。

俺は軽いジャブを打ってみることにした。どうやらそれはあたりだったようだ。

「俺は君がパレオでもレオナでも構わない。君自身が今辛い思いをしてるのでなければ俺が口を出す問題じゃないしね」

「お気遣い感謝します。大丈夫ですよ。無理なんてしてませんし、私を暗闇から拾い上げてくれた“ちゅ”をパレオとして支えるって決めたのは私ですから」

「なるほどね。わかったよ。あの子は色々突つ走るところがあるけどいい子だから．．．おっとこれはレオナちゃんの方が詳しいかもね。まあそういうわけだからちゅちゃんのこと、よろしく頼むね」

「はい! たとえ世界中の人がチュチュ様の敵に回ってもパレオだけは味方で居続けます!!」

曇りのない満面の笑み。

レオナちゃんは、最後はパレオになりそう言い切ったのであった。

そしてその後・・・

RASのギターが正式に決定したという知らせが入ってきたのであった。

※

ある日の休日。

スマホが鳴る。そこには沙綾さんからのメッセージが届いていたのであった。

第16話 √山吹沙綾

「うーん、ごめんね。こんなこと頼める人、芽音くんくらいしかいない」

沙綾さんに呼び出されて店に行くと呼び出された理由が分かった。
沙綾さんだけでなく有咲さんも一緒だ。

「気持ち嬉しいんだけど、その気がないのに期待させるのはかわいそうだと思ってハッキリいったつもりだったんだけど・・・」
「むしろそれをポジティブに捉えて激化していると」

ある日、沙綾さんが一人で店番をやっていると一人の男性が声をかけてきたらしい。それは近くのお坊ちゃん学校に通う人で、それなりに山吹ベーカーリーにパンを買いに来ていると。

「いらっしやいませ〜」

「あの、俺と付き合ってください!!」

「・・・え?」

店には沙綾さんとその男子生徒のみ。

そのタイミングを見計らってかその男子生徒は突然、沙綾さんに告白をしたというわけらしい。その男に対してどういった対処をするか。それが今回の相談というわけだ。

「えっと、あの・・・」

「友達からでも構いません!!」

「・・・ごめんなさい。私そういうの全然考えられなくて。あなたのことよく知らないですし」

「これから知ってください!きつと俺のこと好きになりますから!」

「(うわーすごい自信)・・・本当にごめんなさい。あなたとはお付き合いできないです」

「なんですか!? あ、そういうことですか!」

「……?」

「きつと俺の努力がまだ足りないんですね! 好きって気持ち伝わり切っていないんですね! なるほど。ではもつと男磨いてきますし店にも毎日通いますから!」

そう言い切って出て行ってしまったらしい。

うーん、なんというかすごい奴だな。自分の都合のいい方にしか考えられないというか無駄にポジティブというか。しかしアレだなー振られてるのに無駄にポジティブになってアピールを続けるのって……ストーカーの典型例じゃないか?

「それだけならいいんだけどね……本当に毎日お店に来るし、中には学校の帰りとかお店の前とかで待ってることあってさ……」

「本当にストーカーやんけ!」

「やつば芽音もそう思うか? 沙綾から話聞いてから私も心配だよ……それでなんかないかって考えたんだけど……」

「なんかいい手段あんの?」

「えつと……それは……」

沙綾さんが言いかけたところで店のドアが開いた。

「山吹さん! 来たよ!」

ああ……こいつがそうか。

なるほど、ぱつと見はさわやかなイケメンではある。しかし話を聞く限り自分に自信を持ちすぎるストーカー気質のある奴のようなので注意しなければならない。

俺は沙綾さんが出す困惑の雰囲気を感じ、俺は瞬時に状況を悟った。

「・・・君たちは？」

親しげに話す俺と有咲さんに向けてそいつは嫌悪感を纏う。
正確には俺に対してだけであるかもしれないが。

「私は沙綾の友達。んでこっちが沙綾の彼氏」

突然何を言い出すんだこのツンデレ金髪ツインテールは・・・？
沙綾さん方をチラ見すると申し訳なさそうに話を合わせてくれと
アイコンタクトを送ってくる。

ああなるほど。さっき言いかけていたお願いってのはこのことか。

「山吹さん!?!?どういうことなの!?!?」

「えっと・・・」

「今そっちの子がいったでしょ。悪いんだけどそういうことだから
さ。人の彼女に手を出さないでくれるかな？」

俺は話を合わせる。しかしこういうストーリーカー気質のある奴、さら
に自分に自信を持っている奴に通じるかどうか。仮に俺と沙綾さん
が本当に付き合っていたのだとしても略奪を狙ってきそうな雰囲気
がある。

「ふ、ふざけるな！俺のことを弄んだのか？」

「そんなこと・・・私、ずっと断ってきましたよね？」

「嫌よ嫌よもスキのうちっていうじゃないか。駆け引きされていたの
だど・・・俺のこと試していたのか思っていたのに・・・」

うわ、こいつマジでヤバイ奴だ。どれだけポジティブなんだ・・・
？

「それは押し付けが過ぎるっつものでしょう。実際、沙綾さんは断つ

てたんだし勝手に勘違いして勝手に舞い上がって勝手にここまでやったのはあなたです」

「うるさい！ねえ山吹さん、こんなやつやめておきなよ！こんな見るからに軟弱で貧乏そうな奴。こんなやつじゃなくて俺の方がずっとキミを幸せにできる！お金だってあるし腕つぶしにも自信がある！ねえ、いいだろ？」

うーん、これは救いようがない。世間知らずというかきつと今までも金の力で色々乗り越えてきたんだなつてのが分かる。

うーん、人間のクズがこの野郎

「・・・まつて」

「え？」

「黙って！！！！」

すると突然沙綾さんが叫んだ。

「あなたに芽音くんの何が分かるんですか？お金？腕つぶし？ふさわしい？そんなこと、あなたが決めることじゃないです！」

「な、なんだよ？口ごたえすんなよ」

「いくらお金があっても、腕に自信があっても・・・人間性に問題があったらお断りです！どんな人でも私の大切な人の悪口を言うのは許せません・・・二度と来ないでください！！」

「くっ・・・」

「・・・というわけだ。君さ、今のこの状況すごくカッコ悪いよ。生まれ変わって出直してきな」

「くっそおおおおおお！」

「あ、逃げた」

顔を真っ赤にして走り去る奴の背中を見ながら俺たちはほっと一息ついた。

「なんかゴメンね。まさかこんなことになるなんて」

「いや、大丈夫だよ。それにさつき言ってくれたことは普通に嬉しいしね。大切な人・・・うーんいい響きだ」

「か、からかわないで／＼／＼ご、ごめんなさい、私その、夢中で」

「おまえらーいちゃつくなー」

「有咲!? いちゃっ!」

「何言ってるんだこのツンデレ金髪ツインテール」

「おまつ!? 誰がツンデレ金髪ツインテールだ!」

「あ、心の声漏れてた」

「さーきーなーりー!!!」

「うわ、ツインテール振り回してペシペシするのやめろ!」

澤○・スぺ○サー・○梨々かあんたは

「あははは! やっぱ芽音くんに頼んでよかった」

「お、笑顔に戻ったね」

「おい芽音、後で覚えておけよ」

うーん、後が怖い。ま、仕方ないね。

「・・・あ、そうだ」

「どうしたの有咲?」

「なあ芽音、今日はあいつは帰ったけどさ。今後も現れないとも限らないじゃん?」

「うん、確かに」

「そこでだ、しばらく彼氏のフリしてしばらく沙綾と一緒に帰ったりしろよ」

「有咲!」

有咲さんはそう提案し、沙綾さんは驚きの声を上げる。

「いやだつてさ、万が一また来たたら沙綾一人で対処するの怖くね？」
「確かになあ・・・ああいうタイプってここまでなっちゃうとムチャし
そうだしね。あいつより俺の方が魅力的だつてことを証明する！み
ないな感じできて」

「・・・それはちよつと怖いかも？」

「よし、決まりっ！じゃあ芽音はしばらくの間、学校が終わったたら沙綾
を迎えに行くこと！わかつたな？」

「乗り掛かった舟かー。了解」

そんな感じで突然俺は沙綾さんの彼氏（仮）となった。

そういうえば昔、千聖の彼氏の役をやったりもしたなー

あ、そうだ。一緒に帰ることもある花音や千聖にはこのこと話して
おかないとな。

そんなことを考えながら俺は一日を終えるのであった。

※

「っーわけで沙綾、頑張れよ」

「あ、有咲あ・・・」

「大丈夫だつて。せつかくチャンスが巡ってきたんだし、これを機に
一気に行っちゃえよ」

芽音くんが帰った後有咲と話したのであるが、「やはりさつき不提
案は有咲の思惑通りだったようで、気を遣って芽音くんと二人きりに
なれる時間を増やしてくれたのだ。

「だ、大丈夫かな・・・？」

「大丈夫かどうかは私にもわかんねーけどさ。その沙綾が抱く気持ち
は本物だろ？いずれは打ち明けなきゃいけないんだし、その前の下積
みだよ」

「・・・そうだよ。せつかく有咲が私のためにやってくれたんだもん。私、頑張る！」

有咲は本当に私のことを応援してくれている。

その応援にも応えたいし、なにより今日の出来事で芽音くんに対する好きの気持ちが増大した私を自分でも止められる気がしなかったのだとその時に気が付いてしまった。

※

「あいつより俺の方が魅力的だってことを証明する！山吹さん、迎えに来たよ！」

「本当に言うのか・・・(困惑)」

沙綾さんと帰るようになってちよつとしたある日。

ストーカー野郎(後付光朗という名前らしい)が本当に現れてしまった。

「おい俗 芽音！俺と勝負しろ！」

そしてそれはとてもめんどくさいことになっているのだなとわかったのである。

「勝負って何？じゃんけんでもする？」

「ふざけないでもらおう。男の勝負といたら喧嘩だろう？」

「そうはいうけど。それ決闘罪っていう犯罪だから」

「俺が怖いのか？」

「話聞いてた？怖いとか挑発されたところで結局それ犯罪なの。なんで法を犯してまで君の相手をしなきゃならないの？頭がいいのは見た目だけで本当はバカじゃろお主」

あきれ顔で返す俺。そんな風にあしらわれたのが癪に障ったのか後付は怒りの雰囲気を纏いこちらに近づいてくる。

「舐めるのもいい加減にしろ!!!」

「危ない!」

殴りかかってくるやつ。

それを見て叫ぶ沙綾さん。そして体を少し横にずらし後付の足元に足を延ばす俺。

「ぶべっ!?!」

「うわー顔面ダイブとか痛そうだなオイ」

俺が伸ばした足に引っかけりそのまま躓いて地面に顔面ダイブする後付。

うむ、実に痛そうである。

「き、き、キサマ〜!!!」

「断つてんのに勝手にキレて勝手に突っ込んできて勝手に人の足に引っかけたってコケてさらにキレるってお前の頭ン中どうなってるのかね?」

「絶対に許さん!」

おおっと。スタンガンなんてもの取り出しやがったよ。

「さすがお金持ち坊ちゃん。護身用武器もお高いものをお持ちで」

「くたばれ!!!……ってえ?」

「いくら立派なおモチャをパパに買ってもらおうと当てなきや意味がない。ふむ、これって正当防衛だね?襲われたからやむを得なく無力化するだけなので」

俺は奴の腕を掴みながら思索する。

これなら決闘に応じたことにならないし一方的に危害を加えられたゆえの反撃だ。

そう考えた俺は奴の腕を一気にねじり上げる。

「いでででででで！」

「お前じゃ俺に勝てない。わかったら？ さっさと俺たちの目の前から消えてくれよ。放課後デートの最中なんだ」

そう凄んでみると振じり上げた腕から落ちたスタンガンを拾い、そのまま逃げていった。うむ、やはり大したことないやつであった。

「ごめん沙綾さん、怖かったよね」

「ううん、でもまさか本当に来るなんて」

「まだしばらく続けた方がいいかもね、この関係」

「うん!!」

「うお、びつくりした！」

嬉しそうに声を上げる沙綾さん、きつと奴へのリスクが俺の存在で軽減されるのが嬉しいのだろう。

しかし沙綾さんって普通に可愛いよなあ

(仮) といえ彼氏やってると本当の彼氏になれた人はさぞ幸せなんだろうと思うよ。

「そ、それじゃ。放課後で、デートの続きしよっか／＼」

「そうだね」

なぜかモジモジする沙綾さんの提案を受けまた歩き出す。

その日のその後から何日かは至って平和であった。

何日か・・・は。

そう何日か後に俺はまた奴の襲撃を受けることになるのである。

第17話 √山吹沙綾—fine—

「いらっしやいませー!」

俺は今、やまぶきベーカリーの店内にスタッフとして立っている。いつも通り沙綾さんの彼氏(仮)として送り迎えをしていたわけであるが、ある日家につくと沙綾さんのお父さんが少し慌て気味にしていた。

「お父さん、どうしたの?」

「沙綾、ちようどよかった。実は母さんが少し調子が悪くてな」

「え!?大丈夫なの!?!」

「心配ない。電話で病院の先生に聞いたら点滴を打って少し安瀨にすればよくなるだろうとのことだ」

「よかった・・・」

「すまないが私は母さんを病院に連れて行かなければいけない。店番を頼んでいいかい?今日焼く予定だった分はすでに焼き終わってるから売るだけなんだ」

「わかったよ。でもこの後ちよつと忙しくなる時間だよね・・・」

「うーん、そうなんだ。・・・おや、キミは・・・」

「お久しぶりです」

「おお!その節はありがとう!!・・・そうだ、君って接客業の経験はあるかな?」

とまあこんな感じで臨時バイトとして雇われたわけである。

「おやおやく?芽音さんじゃないですかー」

「モカちゃん?」

「はいはい、モカちゃんです。なんでそっち側にいるんですか?」

「実は臨時のバイトでね。今日限りではあるんだけど」

「そうなんですか。残念です。常時バイトなら取り入って売れ残りのおこぼれにあずかるという、たった今思いついた華麗な計画がとん挫してしまいましたよ。」

「たった今なのか。・・それに華麗ってそういう意味じゃないと思うんですがそれは」

「まあまあ細かいことはいいいじゃないですか。というわけでこれ下さい」

「マイペースだなあほんと。はい、ありがとうございます」
「ではでは」

店を出た瞬間パンをほおぼるモカちゃんを見送る。

「どうやらちょうど人の波が掃けたみたいだ。」

「あれ？モカ来てた？」

「うん、今さっき。相変わらず大量購入の優良顧客だったよ」

「あはは。モカってほんと美味しそうに食べてくれるから嬉しいんだよね。芽音くん、そろそろキリがいいし今日はこの辺にしておこうか。在庫もほとんど掃けたしね」

「了解」

「あ、今日のお礼もかねて売れ残りは好きな奴持って行っていいよ。もちろん、バイト代は別に出すし」

「マジで？いやーもしあれなら買おうと思ってたんだけどそういうことならありがたく」

「このパンほんと美味いからなー」

「これで明日の朝飯は確保できた。いやあ役得役得」

「んじゃ俺はあがるんで」

「うん！本当に助かったよ。ありがとうー！」

「こうして俺はやまぶきベーカリーを後にした。」

「さてと・・・」

帰り道を歩いていた俺は後ろから迫りくる気配を避けるようにサイドステップを踏む。

「なっ!？」

「やっぱお前か後付。お前、さっき俺が働いている時、物陰からチラチラ見てただろ」

そこにいたのは角材を空振りした後付光朗の姿であった。

「俗・・・お前のせいでお前のせいであの子を解放しろ！お前がマインドコントロールしてるんだろ!?!でなきゃあの子があんなに酷いことを俺に言うはずがない!!!」

何言ってるんだこのおぼっちゃんは？

「えーつと。頭大丈夫？」

「バカにするなあああああ」

「おおつと」

力任せに棒切れ振り回すだけじゃどうにもならないんだよなあ
こんなんでも全中二位の剣道選手だったわけであるので棒切れを見切って避けるなんぞ御茶の子さいさいである。

「もう満足した？」

「くっ・・・その余裕、いつまで持っていていられるかな？」

「なんだと？」

答えを聞く前に答えが分かっちゃった。

後ろから現れたのはガタイのいいお兄様。うーむ、ムキムキである。

「俺の攻撃で終わればよかったが保険はかけておくものだ。こいつは俺の雇ったレスラーの卵だ。お前みたいに貧弱な奴が叶うわけないんだよ！」

「あちやく気の毒に」

「自分のことを言ってるのか？」

「いや、そうじゃなくてね。汗水流して稼いだ金の行き先がバカ息子の無駄遣いって・・・パパが気の毒だなと」

「やれ!!!」

「死ねや!!」

「短気だなあ」

まずは動き、とパワーを見る。

動きはそこまで早くない。しかしパワーが今までやった奴らの中ではけた外れに高いのは見てわかった。

「逃げてばっかか？痛い目見る前に降参するか？」

「まさか。しかし困ったなあ」

相手はレスラーの卵である。その鍛え抜かれた肉体に俺が攻撃を加えても一撃で勝負を決めることは不可能だと思し、食らわせたところで反撃されるのが関の山だ。ひとまず回避を繰り返し作戦を考えよう。

「ハア・・・ハア・・・クツソ・・・ちよこまかと」

「いやあだつて当たったら痛いじゃんそんなん。そりや避けるって」「いい加減にしろー!」

考える。相手は体を鍛えることに心血を注いだ奴だ。

並大抵の攻撃はダメージが少ないし、捨て身で攻撃をしたら本当にやられる。

……待てよ。

「人間ってさ。どれだけ鍛えても鍛えられないところがあるって知ってる?」

「なんだ、苦し紛れにクイズか?んなもんはねえ!」

「そっかあ……残念、外れ」

奴は性懲りもなく突進をしてくる。

俺はそれを回避すると、足に渾身の力を込めてそれをある部分に放った。

「正解は……キ○タマだよ」

ガキイイイイイン!!!

?!?!?&%%&\$\$%&’;’(%&%&?!?!?」

「あら、声にならない声。もう一発!」?!?!?」

「うごおおああああおおおおああああああああおおお!!!」

「からのお……みぞおちに連打連打連打!」

「ガハッ……ウツ……」

ふむ、意識を飛ばすのに成功したようだ。

「さてと」

「ひえええええええ」

「うわ、クツソ情けない声」

「た、た、た、助けて……」

「それはあまりに都合がいいと思わないか?」

俺はスイッチを入れる。口調、言動、雰囲気を変え、コントロールする。

「一つ聞くけどよ。お前さん、当然覚悟はしてきてるんだよな？」

「か、かくご・・・？」

「やりあう奴にみんなに聞いていることだけだよ。人を傷つけるということは自分も傷つく覚悟があるかどうかってことだ。人を傷つけることにはなあ、リスクを伴うんだよ。それをお前は覚悟をしてここに来たのか？」

「そ、それは・・・」

「お前が金持ちなのも自分に自信を持つのも結構なことだ。でもそれを笠に着てイキリ散らすのは違うだろ。ましてや恋愛にまで持ち込んで相手のことも考えずに好き放題やりやがる。そんなクズのことを誰が好きになるんだ？身の程をわきまえろよ」

「そ、そこまで言わなくても・・・」

「そこまで言われることをお前はしたんだよ。さて、お話はここまでだ。これからお前の覚悟を試させてもらう」

「ひえ・・・!!」

後ずさりする後付しかし俺は構わず奴の胸倉を掴み、裏路地に引きずり込んでいった。

「いっつも俺が連れてこられる側なんだが・・・まあたまにはいいか」

なんてメタ発言をしていると怯えた後付が声を上げた。

「助けてくれ！金はいくらでも払う！俺が悪かったから!!」

「そんな無駄遣いする暇があったらパパに親孝行でもしな」

「ほんと頼むよ助けてくれ!!」

「・・・とりあえず警察に通報するか」

「警察だけは本当にやめてくれ!!こんなことがパパにばれたら殺され

る!!」

「お前マジでクズだな!?警察にもパパにもバレたくないってどんだけ身勝手なの」

「頼む!何でもするから!!」

「ん?今何でもするっていったよね?」

ようは今後一切沙綾さんに近づけさせなければいいのだ。

で、あればこの手のタイプにはアレが有効か。

「んじやさ、今から動画でお前のこと取るから。俺の言われた通りのこと喋りな」

※

“ 僕、後付光朗は自分勝手な考えで山吹沙綾さんに一方的にストーリーをしました。そしてそれを咎めた俗芽音さんに危害を加えようと父のお金を無断で使いました。このことを反省し記録に残します。また今後一切、山吹沙綾さんと俗芽音くんには関わりません。”

「え?本当に・・・?」

いつものように沙綾さんを迎えに行って送り届ける帰り道。

俺はこの動画を見せてもう後付の脅威はないことを沙綾さんに告げた。

「うん、実はバイトの後に後付と話し合ってたね。穏便に話がついて今後沙綾さんには関わらないことを約束させた」

「そっか。うん、ありがと!ほんと芽音くんにはいつも助けてもらってばっかだね」

「俺が好きでやってることだし気にしなくていいさ。しかしあれだね。これで彼氏(仮)も終わりかな」

「あ……」

それを言った瞬間、沙綾さんは黙り込んでしまった。続く沈黙少し気まずい。俺は意味が分からずなんかまずいことを言ったのかな？と考え始めていた。

「ねえ芽音くん。芽音くんってさ、好きな人……いる？」

沈黙を破ったのは意を決したように口を開いた沙綾さん。その表情はこわばっており、緊張している雰囲気だだもれである。

そんなこと、されてしまったらさすがの俺も感づいてしまう。

——ここで俺はある出来事を思い出す。

ああ、そうか——

「どうしたの突然？」

「えつと……深い意味はないっていうか……世間話っていうか……」

「ねえ、芽音。私たちは変わってない。でも、それは永遠じゃないわ」

「なんだよ突然」

「ただの世間話よ。私たちは徐々に大人になっていくし、どんなきっかけで関係が変わるかわからない。でも関係が変わる出来事っていうその瞬間ははずれやつてくるわ」

「随分深いことを言うね」

「そうかしら？まあ私から言いたいのはその瞬間が来たと感じたらその都度、真剣になって考えてねってことよ」

千聖。言ってたのはこういうことだったのか——

「沙綾さん俺は……」

千聖と俺の関係だけではない。あれはすべての人が対象の言葉だったんだ。ここは想いには応えねばならない。これこそが人と人の関係が変わる出来事なのだから。

「いるよ」

「・・・え？」

「いるよ。好きな人」

俺は淡々と話す。

「へ、へえそうなんだ。えっと、誰とか聞いてもいい？」

「ごめんそれは言えない。こんなことをいうのは恥ずかしいけど、その人はいろんな意味で深い絆で繋がっている、ずっとずっと前から大事な人なんだ」

それは君じゃないー

そう言っているようなものだった。

そしてそれは沙綾さんも察したようで、雰囲気はまた変化する。

「そっか！そっか・・・そうなんだ。そっか・・・そ、その人と上手くいくと・・・上手くいくと・・・あーやっぱだめだ・・・」

沙綾さんは決心したように顔を上げる。

「やっぱ言わなきゃダメだ。ねえ、芽音くん。答えはわかっている。でも言わせてほしい。言わないと私、一生後悔したまま過ごすことになりそうだから」

「・・・うん」

「芽音くん、私・・・私はあなたのことが好きです。最初に助けてもらったあの時から。ずっとずっと好きです。あれからも色々なことがあつてその度に芽音くんは助けてくれて・・・その気持ちはどんどん

大きくなっただけです。これが・・・私の気持ちです」

沙綾さんの決心は生半可なものではない。それなのに何だ俺は。間接的に事実を告げてそれで終わらせるなんてムシが良すぎるだろう。

そんなことが許されるはずがないよな。

「沙綾さんの気持ち、ものすごく嬉しい。でもごめん・・・ごめんね沙綾さん。でもこういう時はちゃんとと言わないといけないと思うから」
「うん・・・うん・・・」

俺は深呼吸してこれから告げる残酷な一言を喉元から出す準備を整える。

「俺は沙綾さんとはお付き合いできません。さっきも言った通り、俺には好きな人がいるから」

「望みはないんだよね・・・？」

「・・・うん」

「・・・そっか」

沙綾さんはうつむきしばらく震えていた。

ここで抱きしめる権利も肩を抱く権利も俺にはない。

だって俺は沙綾さんがこうなる原因を作った元凶なんだから。振った張本人なんだから。

「うん・・・よしっ！」

「え？」

「話聞いてくれてありがとう！言いたいこと言えてスッキリしたよ。なんか微妙な空気になっちゃったけどさ、これからもお友達でいてくれると嬉しいな！」

俺にはわかる。これはカラ元気だ。無理して笑顔を作って、今にも泣きそうなのを必死に抑えている。

でもそれが沙綾さんが出した答えなら。そうであるならば俺はそれに応えるだけだ。

「うん。これからもよろしくね、沙綾さん」

「うん！」

沙綾さんの限界が来る前に俺は退散することにした。

今日のところは俺が側についてはならない気がしたから。

「じゃあ沙綾さん。また学校で」

「うん。今日はありがとね」

※

芽音くんの背中を見送る。

私の中では自分が言った言葉、それに対する芽音くんの言葉が反芻している。

「沙綾」

「・・・有咲」

そこに現れたのは有咲だ。

「見てたんだ」

「・・・たまたまな」

「そっか」

しばし沈黙が流れる。

「あはは、ダメだったよ。やっぱり恋愛って難しいね」

「沙綾・・・」

「何よ有咲？私は大丈夫だよ切り替えて次いけばいいからさ」

「お前・・・そんな涙ポロポロの顔で言っても説得力ないっての」
「え・・・？」

指摘を受け私は自分の顔を触る。

その瞬間指はビシヨビシヨに濡れた。

「あれ・・・？おかしいな・・・」

するとその様子を優しくみていた有咲は突然私を抱きしめたんだ。

「頑張ったな。沙綾、ほんとによく頑張ったよ」

「・・・有咲あ」

もうダメだった。有咲の優しきで堤防が決壊してしまった。

「本当に・・・本当に好きだったんだよ・・・！わかってた。芽音くんの気持ちは私に向いてないってこと。でもどうしようもなく好きだったんだよ・・・！」

「うん、うん」

「いやだよお・・・芽音くん・・・好き・・・大好き・・・！」

「・・・今日くらいは胸貸してやつから」

「有咲・・・うわああああああああん」

その日私はとてもみつともなく有咲の胸で泣いた。

でも後悔はない。芽音くんを好きになって幸せな時間を過ごして今がある。

結果はダメだったけどこの時間は決して無駄なものじゃない。そう言える確信が私にはあった。

※

「芽音くん、おはよう」

「沙綾さん・・・？」

沙綾さんの告白があった翌朝。

昇降口で花音と別れて自分の下駄箱に向かうと、そこには髪をバツサリ切った沙綾さんの姿があった。

「沙綾さん、その髪・・・」

「あ、これ？あのあとさ、思い切って切っちゃった。どう？似合うかな？」

「あ、ああ似合うよ」

これはアレだ。間違いなく昨日のことが原因だろう。

そんなことを考えていると沙綾さんは笑いながら清々しい声でこう言い放った。

「まあこれからも変わらずよろしくね。あ、そうだ。私を振ったことを後悔しても知らないからね？」

彼女は笑う。その笑いには無理をしている様子は一切なかった。

そっか、これが沙綾さんの出した答えか。

「最後の最後に1本取られたね」

「あはは、なにそれ。じゃあ私は教室に行くね。じゃあまた」
「うん」

これで山吹沙綾さんと俺をめぐる物語は終わりだ。

恋愛の難しさ、向き合い方、いろんなものを学んだ。沙綾さんの決意を決して無駄にはいけない。俺は俺自身、自分の問題に向き合

わねばならない。
そう強く思う俺であつた。

√山吹沙綾 Fin

第18話 √ 珠手ちゆ

「やあパレオさん・・・いや、レオナちゃんかな」
「芽音さん」

学校の帰り、パスパレのマネージャーサポのバイトを終えた俺はたまたまレオナちゃんに出会った。

しかしレオナちゃん、雰囲気はどうにもおかしい。

なんというかパレオとレオナの中間というか・・・とにかく変な雰囲気だったのだ。

「レオナちゃん、何かあったのかい？なんというか・・・疲れた顔してるよ」

「芽音さんの目はごまかせませんね。大丈夫です、ちよつと気を抜いてしまっただけです」

「それならいいけど」

うん、明らかにウソである。

しかし本人が言いたがらないのに聞く趣味は俺にはない。

余程特別な事情でもない限りそのあたりの領域に踏み込むのはルール違反だと思うからだ。

「なんかあったら相談してよ？キミはただでさえ働き者なんだからさ」

「お気遣いありがとうございます！本当に大丈夫なので。それではまた！」

早足に去ってしまうレオナちゃんの背中。俺は違和感を覚えたままそれを見送ったのであった。

※

「なんでこんなことになってるんだよ」

数日後、どうにもレオナちゃんの様子がおかしくてどうしても気になった俺。ちゅちゃんのマンションを訪ねてみたらそこはひどい有様だった。

「ちゅちゃん？開けてくれたってことはいるんだよね？」

散らかった部屋を進み、俺は一つの部屋にたどり着いた。

そう、ちゅちゃんが作曲をしているプライベートルームだ。

「ちゅちゃん！あけるよ！」

「・・・サキナリ」

緊急性があると思って断りを軽く入れてドアを開けるとそこには涙でグズグズになったちゅちゃんがいた。

「なにがあったの？」

「みんな・・・みんななくなっちゃった」

俺はその一言で察した。

おそらく色々と折り合いが上手くつかず何かしらのトラブルになっっているのだろう。

俺はちゅちゃんに事情を聞くことにした。どうやら方向性を決めるのに一方的気味に話してしまったためマスクングさんと若干微妙な空気になったらしい。

そしてそれに加えて・・・

「パレオがいなくなったの」

「・・・やっぱりか」

「知ってたの？」

「いや、この間様子がおかしいパレオさんに会ったからさ」

「そう・・・それでマスキングやロックがパレオのこと心配して私にパレオのことを聞いてきたの。でも私は何も知らない。千葉の加茂川に住んでいることくらいしか知らない。そうしたらマスキングがもう少しメンバーのこと考えろって怒って・・・それでたまらなくなつて一人で帰ってきたのよ」

バツの悪そうな顔をしているちゆちゃんであるがあの人たち、特にマスキングさんは曲がったことが嫌いな性格だ。しかしそれはメンバーを思つて故のことだと思う。そう思うとバラバラになるなんてことはないと思うのだけれど・・・

「一つ重要な確認をしてもいいかな」

「・・・ええ」

「パレオさんはなんでいなくなったの？」

核心に迫る質問。なぜこんなことになつたのか。

“たとえ世界中の人がチュチュ様の敵になつてもパレオだけは味方で居続けます”

自信満々に言い放つたパレオさんは記憶に新しい。

そんなパレオさんがいなくなるなんて余程のことであることは想像に難くない。

「・・・」

「ちゆちゃん」

「・・・つていったの」

「え？」

「あんただけいても仕方ないって言ったの・・・」

「・・・え」

それは必殺の一言。

マスクングさんと微妙な雰囲気になった日、パレオさんは一人でも味方で居続けるとちゅちゃんに言ったらしい。

しかししれに對するちゅちゃんの言葉はパレオさんの決意を一刀両断する、もつとも言つてはいけないものであった。

それを言つたというのか？

「ちゅちゃん、もう一度確認するけどさ。それをいったのは間違いな
いかい？」

「間違いないわよ・・・」

「そっか」

俺は雰囲気を変える。

「ねえちゅちゃん。今から俺はとてモキツイことを君に言うと思う。
この言葉を俺が吐き散らかした暴言と思うのもそう思わないのも君
の勝手だ」

「サキナリ!!!!?」

「この大馬鹿!!!キミは今まで何を見てきた?もつとメンバーのことを
見ろつてマブキングさん言われた?ああそうだ、まったくその通り
じゃねえか。パレオさんがどんな気持ちで・・・キミを見てきたと思つ
ている!」

「ちよつと・・・怖いわよ・・・?」

「ひとまず黙つて聞いてもらおうか。反論はそれから聞く。自分の音
楽を奏でたい、自分の手足が欲しい。その手段としてプロデューサー
になる。確かに提案したのは俺だ。そしてその提案でここまで大き
なものを作り上げたものはすごいと思う。だがその結果がこれか?」

「そ・・・それは。仕方ないじゃない!このままじゃRoseliaに
負けちゃう!私の最強のバンドが・・・負けちゃう!」

「メンバーを犠牲にした上で成り立った勝利に意味なんてあるのか
?」

「・・・え?」

そう、これこそがこの問題の最大の争点になることである。

「キミはメンバーのことを何でも知ってるのか？音楽の腕以外を信頼しているのか？パレオさんの住んでいるところは？好きな食べ物は何？学校は？」

「それは・・・そんなもの知らなくたってバンドは・・・」

「ちゅ!!!」

「・・・!」ビクツ

「質問に答えろ」

「なにも・・・知らないわ」

「そうだろ？じゃあ次の質問だ。バンドは一人でやるものなのか？」

「そんなわけないじゃない」

「だよな。じゃあ次だ。バンドメンバーは機械か？ちゅ好みの演奏をやってくれる機械か何かなのか？だったらDTMでいいよな？」

「バカ言わないで。みんな個性を持った人間よ」

「だろ？じゃあちゅ。キミはその個性を尊重して、メンバーの性格や都合を考えてプロデュースをしていたのか？」

「そ・・・それは・・・」

「つまりそういうことだ。キミはRoseliaへの焦り、そして自分の腕に自信を持つあまりひとりで突っ走って、バンドのようなものをやっていたに過ぎない。そこにメンバーの意思はしっかりと反映されていないことは自覚しているんだろ？」

「・・・」

「なんでRoseliaが強いと思う？なんで花園さんはポピパにこだわると思う？そんなもん決まってる。心から信頼しあえる仲間がいるからだ。5人でRoselia、5人でポピパだからなんだよ」

「仲間・・・」

「そうだ。RASはどうだ？しっかりと信頼関係を築けているのか？仲間って言えるのか？この5人じゃなきゃRASじゃないって言えるのか？」

厳しい口調でその質問を投げかける。

その質問に対し、ちゅちゃんは何かのスイッチがはいつたのか、はたまた怒鳴る俺に対抗するためか表情を変え、大きな声を上げた。

「言えるわ!!!この5人じゃなきや・・・5人じゃなきや・・・イヤ・・・ダメなのよ!!!私が描く最強のバンド・・・レイヤが歌ってベースを弾いて、ロックがギターを奏でて、パレオがキーボードで踊ってマスクキングがドラムで暴れる。そうじゃなきやダメなのよ!アーティストとしても、人としても信頼している。ずっと見てきたわけでもないくせに偉そうなこと言わないで!!!」

それは強い意志。

珠手ちゅの心の叫びであった。

「最後に聞こう。キミはメンバーのことは好きかい?」

「好きに決まってるでしょ!?頼んでもないのに世話をやいてくれたり、みんなが集まってくだらない話をしたり、こんな私にも優しくしてくれるメンバーのことが嫌いなわけないじゃない!」

「やーっと本音出てきたね」

「え・・・?」

「その言葉、RASのみんなに言いなよ。多分みんなそれを言うだけでイチコロだよ」

「イチコロってきょうび聞かないわね・・・」

顔を真っ赤にしつつも少しあきれ顔のちゅちゃんをみて俺は雰囲気気を元に戻した。

「怒鳴ったりして悪かったね」

「・・・あなたも私のためにやってくれてるのわかったもの。構わないわ」

「ひとまずちゅちゃんにはメンバーにちゃんと気持ちを伝えようよ」

「今さらどう伝えればいいの・・・？」

「そんなに難しいことはない。思ったままに伝えればいい」

「思ったままね・・・」

「ねえちゅちゃん。キミはいつもこういうね。私の最強のバンドって」

「それがどうしたのよ？」

「これだけは言わせてもらうけどさ。もうRASはキミの最強のバンドじゃあない」

「・・・!?どういうことよ!?!」

「今は語る必要はない。これはちゅちゃんが自分で考えて導き出さなといけない答えだ。大丈夫、今まで話したことを全部思い返せば答えは自ずと出るさ」

RASは“ちゅちゃん”の最強のバンド。ちゅちゃんはそうだった。でもそれはもうすでに過去のものとなっている。RASはちゅちゃん“だけ”の最強バンドではない、RAS5人みんなが揃ってこそ最強バンドに生まれ変わったのだ。きっとちゅちゃんなら気づいてくれる。

俺はそう信じてちゅちゃんのマンションを後にしたのであった。

※

「・・・さすがに出ないか」

電話に出ないことを確認すると俺はメッセージを送る。

“話がしたい。誰に頼まれたわけでもなく、レオナちゃんの友人として。差し支えなければ今から君の地元に行ってもいいかな？”

するとすぐに返信が来た。

“遠いですよ?”

“構わないさ。どこにいけばいい?”

“では千葉県加茂川の……”

俺は指定された場所へすぐに向かった。

「レオナちゃん」

「芽音さん。どうも」

そこにいたのは紛れもなくレオナちゃん……鳩原令王那その人であった。

いつものように明るい髪色は面影なく黒に塗りつぶされており、眼鏡をかけて制服を着こんで、いかにも優等生といった感じであった。

「話をしようか」

俺はそのまま、レオナちゃんに向かい合って話を始めたのであった。

「きつとバチが当たったんです」

レオナちゃんはそう言い放った。

第19話 √珠手ちゆ—fine—

「私は気づいていました。ちゆが自分を見失って、焦って、暴走してくのを。でも私はそれならそれでいいと思っていました。だってそれがちゆの在り方なら私はパレオとして支えるだけだし、世界中の人が敵に回ろうとパレオだけは味方で居ようって決意していたからです」

レオナちゃんは海を背景に語りだす。俺はそれを黙って聞いていた。

「ちゆは優等生の仮面を被って何をしたいかも定まっていなないレオナを暗闇から救ってくれた。だからどこまでも付いていこうって、何があってもちゆを肯定しようって思っていました。

・・・でもそれはダメなことでした。いくらでもできることはあつたはずなのに、ちゆが傷ついていく様を見ながら何もできなかった。だから・・・バチが当たったんです。これは私への報いです」

「・・・キミはそれでいいのかい？」

「私の存在意義が存在する目的である本人に否定されたんです。私の意思なんて関係ありませんよ。私は鳩原令王那に戻っていままで通り過ごすだけです。もう終わりでもいいですか？」

「・・・ひとつ、昔話に付き合ってもらえるかな？」

「昔話？」

「ああ。バカな事件を起こして遠方に逃げたその先で優等生の仮面を被り、命をすり減らしながら自分を押し殺したバカなやつの話さ」

俺はすうつと息を吸い話を始める。

「昔々、中学時代に暴力沙汰を起こし、地元から逃れて遠方の高校に逃げた男がいました。高校なんて高校卒業の資格を得るために我慢して通うようなもん。そう斜に構えて優等生の仮面を被って生活をし

ているような奴でした。そいつは世の中なんてクソ、どうでもいい、理想のクラスメイトを演じてさつきとクソくだらない高校生活を終えよう。そう考えていました。」

「……それって」

「続けるよ。でもそいつはある日、一人の同級生と出会います。その同級生はそいつの本質を見抜いており、本性をバレてしまつてなお親友となることを許してくれました。そしてもう一人、新たな親友ができます。その新たな親友は演技力に長けており、一瞬でそいつが仮面を被っていることを見抜きました。そしてその新たな親友となる人物も、そいつの本質を知つてなお親友となつてくれたのです。そして、親友たちと過ごすうちに自分の本質を見えてくれる人の存在が大きくなつたそいつはいつしか仮面を被るのを辞めました。そいつは今も元気に好き勝手やっています。めでたしめでたし」

「……」

「結局はさ、この世の中の人全員に本性を知つてもらふ必要なんてないんだよ。人にはそれぞれ役割がある。優等生でいることを求められる場面もあればそうでない時もある、ようは使い分ければいいのさ。そして本性は知るべき人が知つていてくれるならそれでいいと俺は考えているよ」

「……やっぱり芽音さんのお話だつたんですね」

「おおっとおしゃべりが過ぎたね。俺もね、少し前は今のレオナちゃんみたいだった。でも今は違う。なんでかは……今の話を聞けばわかるよね?」

俺は優しくレオナちゃんに語り掛ける。

レオナちゃんは答えが分かっているようですぐに口を開いた。

「ありのままの自分を見てくれる人がいたから……」

「その通り。ねえレオナちゃん。俺はキミの本心が聞きたい。キミはさつき自分の意思なんて関係ないっていったよね」

「はい」

「それは違うよ。鳩原令王那がどうしたいか、それこそが今一番重要なことだ。ちゅちゃんか命ずるからとか必要とされてないからとか関係ない。キミはキミの思うままにやればいい。待つんじゃないよ、キミが選択して動くんだ」

「・・・いいんでしようか」

「気が進まない、このままただの鳩原令王那として過ごすというなら俺は止めない。でもそうじゃないならRASのみんなに本当のキミを見せてやりなよ。そしてキミの意思でRASに戻るんだ」

「・・・少し考えます」

「ああ。んじや俺は帰るよ」

そういつて俺は話をめる。そして背中を向けて歩こうとすると、レオナちゃんが声を上げた。

「あの一！」

「なにかな？」

「芽音さんは今、幸せですか？」

唐突に投げられた質問。俺は何のためらいもなく答える。

「もちろん」

そして俺はそのまま帰った。

そして帰りの電車に乗った最中、俺はRASのメンバーにパレオさんの所在を知らせるメッセージを送ったのであった。

※

RAS騒動から数日後の週末。

俺はとある山の中の川沿いにいる。

「おい芽音！肉食え肉！」

「俗さん、こちらも焼けていますよ」

「はい、パレオからもお肉のおすそ分けです〜！」

「ははは、ありがとう」

「ちよつとみんな、多すぎて俗くん困ってるから」

「んだよレイ、お母さんみたいなこというなよな〜」

「お、お母さん・・・」

「男ならたくさん食えるから大丈夫だつて！ほら、もつとよそいでやつから〜！」

あれからRASは無事に5人へと戻った。

そして今、紆余曲折あり俺は山中の河原でRASのみんなとバーベキューを楽しんでいるというわけだ。

「俺もみんなに」

「No, サキナリ、あなたは遠慮しないで食べなさい」

「ちゅちゃん」

「今日のあなたは私たちのお客様よ。気を遣う必要なんてないわ」

そう、俺は騒動解決協力のお礼ということでこのバーベキューにお呼ばれたわけである。

※

「いいよお礼なんて」

「ダメよ。今回は本当に迷惑かけたもの。お礼をしなきゃ私・・・私たちの気が済まないわ」

「そうですそうです〜さあ芽音さん！なんでもおっしゃってください〜！」

「そうだけ芽音。なんならどっかいくか？山か？海か？」

「この時期に海はヤバいでしょ・・・」

「んだよ根性ねえなあ。よし、じゃあ川いこう川！RASも再スタートしたしバーベキューでもしようぜ〜！」

「What!? No! No thank youよアウドドアなんて！」

「楽しそう（小並感）」

「サキナリ!」

「よっしや決まりだな！レイもロックもいいよな？」

「俗くんがいいなら」

「私も芽音さんが大丈夫ならいいですよ」

「よっしや！」

「うううううう……」

呻りながらも参加してくれたのはありがたいと思う。

とまあこんなやりとりがあつた感じで今に至るわけである。

俺たちはひとしきり食事を楽しんだあとそれぞれのことをはじめた。

「よっしやロック！釣りしようぜ釣り！」

「いいですよ！岐阜の川で鍛えた腕みせたる！」

マスクングさんとロックさんは釣りに行くようだ。

「私は散策でもしてこようかな」

「レイヤさん、パレオもお付き合います〜チュチュ様はどうされますか？」

「No thank youよ。ここでゆっくりしてるわ」

「そうですから〜ではレイヤさん、いきましよう。チュチュ様、頑張ってくださいね〜」

そういつて謎のウイंकをして去っていくパレオさんとレイヤさん。

そして横には若干顔を赤くしているちゅちゃんがいる。

「改めてお礼を言うわ。ありがとう・・・」

「どういたしまして。しかしあれだね、すべて丸く収まってよかった」

「今回ばかりは全部あなたのおかげよ」

「そんなことは・・・いや、力になれたようでよかったよ」

「ふふ、それが正解よ。度を越した謙遜は好きじゃないわ」

ちゆちゃんはいつもよりも柔和に、遠いところを見ながら話し始めた。

「前に・・・」

「ん？」

「前に言ったわよね。RASはもう私の最強のバンドじゃないって」

「言ったね」

「意味がやっと分かったわ。RASは私”だけ”の最強のバンドじゃない。RASが5人揃った、私”たち”最強のバンドなのね。当たり前前のことに気付いてなかった。ほんと、当時の私をぶん殴ってやりたいわ」

「はは、過激だね」

「それだけ反省しているということよ。私って視野が狭かったのね。あれからみんなが思っていることをぶつけてくれて、メンバーのみんなはあんなに私のことを見てくれてついてきてくれたのに・・・私ときたら目先のことしか見えていなかった。それを気付かせてくれたのはレイヤ、ロック、パレオ、マスキング、そしてあなたよ」

「もう大丈夫そうだね。ちゆちゃんは一人じゃないし、これから5人で楽しいことで辛いことも共有して絆を深めていけばいいさ。もちろん俺も力になるよ」

こんなに穏やかなちゆちゃんと1対1で話したのいつぶりだろうか。

そんなことを考えているとちゆちゃんは何かを考えている感じを下を向いてしまった。

「ちゅちゃん？」

「・・・サキナリ、私、私ね」

「うん」

「私・・・！」

決意をしたかのように顔を上げるちゅちゃん。

その表情は緊張が入り混じっており、体温が上がっているのが分かった。

「・・・もうあなたに頼らないことに決めたの」

「え・・・？」

飛び出した言葉は予想外のものであった。

素直に驚く声を上げる。俺ってそんなに頼りないのかな・・・？

「あ、ごめんなさい。あなたが頼りないって意味じゃないわ。今私たちは生まれ変わった。RASは新たな誕生日を迎えたの。今回はあなたがいていっぱい助けてもらってここまでできた。でも今度は、今度は私のプロデュースで、RASの5人で挑戦していききたいのよ。あなたの力はすごいと思うわ。でもこれからのRASには必要じゃない」

そういうちゅちゃんは確かな決意と強い意志を目に秘めてそれをまっすぐ向けてきたのである。

ここまで言われては俺はなんにも言い返すまい。

「なるほどね。うん、すごくいいことだと思うよ。でもどうしても立ち行かなくなったり、どうしても助けが必要な時は言っただけ。それくらいはさせてほしい」

「わかったわ」

そういうとちゅちゃんは立ち上がった。

「これでこの話は終わりよ。私もちよつと空気を吸ってくるわ」

「じゃあ俺も・・・」

「Wait. 今は一人になりたい気分なの」

「・・・そっか」

「悪いわね」

そのまま歩き去っていくちゅちゃんの背中を見ながら俺はその場に敷いてあるレジヤシートに寝ころんだ。

とまあ俺が関わったRAS結成談としてはこんなものかな。

本当に上手くいってよかった。これでRASはもう大丈夫だろう。なにせちゅちゃんにもあんなに素晴らしい仲間ができたのだから。俺はそんなことを考えながら気持ちの良い風に吹かれながらそのまま眠りについたのであった。

※

「おいチュチュ。あれでよかったのかよ」

「なにがよ」

「そうですそうです。てつきりチュチュ様は芽音さんに告白するものだと思ってました!」

「え?チュチュってそうなの!?!」

「むしろレイヤさん気づいてなかったんですか・・・」

「・・・みてたのね」

バーベキューが終わりサキナリは先に帰った。

私達5人はなんとなく音が会わせたくなくてマンションまで戻ってきたのである。

そこでマスキングから始まった話は一気にこの場を支配した。

「ワリイな。のぞき見するつもりはなかったんだけどよ」

「魚が全然いないのですぐに戻ったらチュチュさんと芽音さんがお話をされていたので・・・つい」

「私とレイヤさんは途中からですけど・・・」

「全然わからなかった・・・」

「んでチュチュ。どうなんだよ」

マスキングはなんで？といわんばかりに続ける。

「・・・私もするつもりだったわ」

「ではなんでしなかったのでしょうか？」

「サキナリの気持ち私が私に向いていないのはわかってたし、それにRASのことがあったからよ」

「RASですか？」

「RASがこうやって今5人でいるのはハッキリいってサキナリのおかげよ。彼がいなかったら今はない」

そう、これこそが今回の決意の理由だ。

「一人じゃ何にもできなかった私が、サキナリに付き合ってたなんておこがましいことは言えない。彼の負担にしなければならない。だから今はRASにすべてを懸けようと思ったのよ。サキナリの力を借りずに私とパレオと、レイヤにロックにマスキング・・・みんなで最強のバンドになって世界を変える。それを成し遂げるまでこの気持ちは封印することにしたってわけよ」

「チュチュ・・・」

「チュチュ様・・・」

「チュチュさん・・・」

「チュチュ・・・」

「そんなしんみりする必要ないわ。これは私の決意なの。だから、その・・・みんな、私についてきてくれるかしら？」

恐る恐る顔を上げる。

・・・そこには笑顔を浮かべたみんながいた。

「あつたりめーだろ！なあ？」

「当然です!! チュチュ様あるところにパレオあり!! どこまでもついていきますよー!!」

「チュチュさんの気持ち、伝わりました!!」

「私も。相当の覚悟があることが伝わったよ」

サキナリ。あなたがくれた今を私は突っ走るわ。

いつか最強のバンドになって世界を変えて・・・その時に気持ちを伝えられるように。

「私たちらしくいきましよう!」

珠手ちゆ√ Fin

―最終章―

序章 Nightmares again・・・?

今日は完全にオフだ。

私は少し久々に花音と遊びに出かけることにした。

芽音も誘ったのだけれど、芽音がメインで担当する日菜ちゃんが休んでないため芽音は仕事らしい。

「リベンジはいつにしよつか?」

「そうね・・・この前は少し欲張りすぎたから今度はもう少し近いところにしませう」

「あはは、私たちってなんでこう電車苦手なのかなあ」

私たち少し前、乗り換えを合わせて4駅離れたカフェに行こうとしたが結局上手くいかずに断念した。

そのことを思い出しながら笑い、歩く。とても平和だ。

「それで花音・・・花音?」

しかし、ここで突然花音の反応が鈍くなるのを感じた。

花音の視点は一定の方向を向いており、私もつられてそちらをみる。

「・・・!?!」

目線の先にいた人を認知した私たちは固まり、そのまま黙り込む。

そしてその人はこちらにそのまま歩いてきて・・・そしてそのまま何事もなくすれ違った。

その様子を見て、通り過ぎるのを待っていた私たちは緊張が解けた。

「やつほ、お二人さん」

しかしそれを予見してたかのようにその人は後ろを向いたまま言う。

そしてそのまま去っていったのだ。

「千聖ちゃん・・・」

「ええ・・・」

「芽音（くん）に知らせなきゃ」

私たちとすれ違い、言葉を投げたその人は――

芽音の宿敵。

清田美緒さんであった。

※

「だからいったでしょ日菜さん！あの行列に並んでいたら遅れるって！！」

「えーでもそこにあっただから仕方ないかな？美味しかったでしょ？特性スイーツ」

「おいしかったけどこの全力ダッシュで全部リバースしそうだよ！！」

俺は放課後、事務所のバイトで日菜さんに同行していた。

次の撮影場所へ向かう最中、とあるスイーツの路上販売が目に入った日菜さんはそれは大層興味をお持ちになり、並んで食べるとごり押しした。

幸い少し時間があつたのでOKしたはいいものの回転率はかなり悪く、行列を並ぶ羽目になった。

時間管理の都合上断念しようと思案したのだが、それもかなわず結局購入。

そして時間がかなりギリギリになって全力疾走で向かっているというわけだ。

「こういう日に限ってタクシーも走ってないしついてないなあもう！」

「まー大丈夫でしょ」

「川崎さんに怒られるの俺だからね!?大丈夫じゃないよ!!」

とにかく走る。俺たちは走る。

うん、このまま走り続ければギリギリインできるはず。

少し安心した俺であるが、対面から歩いてくる人。その人の顔を見て・・・驚愕した。

「芽音くん?どうしたの?遅れるよ?」

「・・・ごめん日菜さん。すぐ追いつくから先行っててもらえるかな?」

「えー?うーん・・・なんか訳ありっぽいね。わかった!川崎さんにはうまいこと言っておくね!!」

日菜さんは走り去る。そして俺はその人物に対峙した。

「清田美緒・・・!」

「やつほ、芽音。久しぶりね!」

あつけからんと満面の笑みで挨拶してくる清田美緒。

邪悪な気配を感じられないが当ては稀代の悪女。本人に悪気がないだけで邪悪そのものをコントロールしている可能性があるため油断できない。

「出てきていたのか」

「そ。少年院入りは避けられたけどね。でもさーこの件で親に捨てられちゃった、私。んで施設送りになったけどある人の養子に入って新しい親ができて今は比較的自由の身ってわけ」

「それでこんな境遇にした俺に復讐しに来たってことか？」

「え？あ、そっか、普通の人だったらそう思うか。私は謝りに来たんだよ？芽音には酷いことしたなーって。だからお詫びがしたくて会いに来たってわけ！」

「とぼけやがって・・・悪いがもう俺はお前を相手にするつもりはない。何を仕掛けてこようが・・・一切相手にはしない！」

「まあひどーい！でもいいわ、これから時間はいくらでもあることだしね。それじゃあ今日は話もできそうにないし、これでバイバイかな？」

「二度とツラ見せるんじゃないぞクソ女」

「うふふ」

清田美緒はそのまま手をヒラヒラさせながら去っていった。

本当になにもなかった・・・？いや、待て。今回は姿を認知させるためだけにてこれから何かしかけてくるかもしれない。

警戒を、警戒をしなければ。

俺たちの悪夢はここから再び始まることとなる。

大人の事情、悪意、いろんなものが折り重なりどす黒く染まる悪夢が――

俺たちはそんな悪夢の始まりが訪れていることにまだ気が付いていなかった。

第1話 悪女の復活とスキャンダル？

「なんじゃこりゃ」

俺は今銀行にいる。

通帳の記帳や生活費の引き出し、固定費の支払いなどのためであるのだが……

「多すぎませんかね」

その正体はバイト先の事務所から振り込まれた給与の額。

中小企業サラリーマンの月収程度の金が振り込まれており困惑するばかりである。

「経理が間違えたか？」

そう思い川崎さんに電話したところ、予想に反した回答が返ってきたのである。

「合ってる……？」

「はい、合ってます」

「いやあでもれ、さすがに多すぎませんかね？」

「そんなことないですよ。労働時間、危険手当、時間外手当諸々合わせて時給換算するとそれくらいはいきます。本当はもつと渡したいくらいなんですけどね。いかんせん未成年でアルバイトなので色々と厳しくて……」

「いやあそれも多いですよ」

「そんなこと言わずに、それはあなたが頑張った成果です。遠慮なく懐に入れてください。もちろん所得税は控除済みなので全部使っても大丈夫です」

とまあこんなやり取りがあったわけである。

一応大金なので親にも相談したら「あんたが働いた成果でしょ？よこせなんていわないからあんたの好きに使いなさい」とのこと。

素晴らしきかな自由主義。

「というわけで羽沢珈琲店にきているわけです」

「なるほどねえ」

そしてここは羽沢珈琲店。暇だったもあり花音と千聖を呼んでお茶会に耽っているわけである。もともと千聖は仕事で遅れてくるらしいのであるが。

「今日は俺が出すから好きなものいいよ」

「そういうわけにはいかないよ」

「いいっていいって。日頃世話になってるしさ」

「うーん、じゃあ甘えちゃおうかな」

俺たちはメニューに目を向ける。

「じゃあ俺はこれを」

「え、これって・・・」

「支払いは大丈夫だよ。花音は？」

「私はこのセットで」

俺が指さしたのはこの店で一番高いコーヒー。

お値段なんと時価。値段がわからずしかもバカ高い。以前つぐみちゃんから聞いた話によると、まず頼む人はいないらしいがオーダーの趣味で置いているらしい。

注文を取りに来たつぐみちゃんもまさかこれのオーダーを受ける日が来ると思っていなかったらしく驚きを隠せていない。

「お待たせしました」

そして運ばれてくるコーヒー。うむ、香りが違う。少しコーヒーにこだわり始めた素人でもわかる香りのよさである。素晴らしきかなコーヒーブレイク。一生懸命働いた甲斐があったというものである。

「いらつしやいませうあ、千聖さん！」

「花音と芽音は来ているかしら？」

「あちらに」

「ありがとう」

千聖が席にやってくる。

今日は来客が多いようだ。つぐみちゃんが忙しそうにしている。

「お待たせ」

「そんなに待っていないから大丈夫さ」

「千聖ちゃん、お疲れ様」

千聖も注文を終え、しばらく談笑に耽っていた俺たち。

しかし突然、横から声が聞こえた。

「お隣の席、よろしいかしら？」

「大丈夫ですよ・・・なっ!？」

「やつほ、芽音。みなさんお揃いで」

そこに姿を現したのは・・・清田美緒であった。

俺も千聖も花音も、驚きのあまり絶句してしまふ。

そして一番初めに我に返ったのが俺であった。

「てめえ。こんなところで現れやがって」

「もう、そんなに目くじら立てなくてもいいじゃない。別にとって食

おうってわけないんだから」

「存在自体が危険なんだよてめえは」

「うふふ、否定できないわね」

「謝りたいとかいつて虎視眈々と俺への復讐の機会をうかがっているってところか?」

「もう、信用ないなあ」

当たり前だ。お前が俺にやったことを考えたらそういう結論にいきつくのは当たり前のことであろう。

「あ、それとね。私の名前・・・」

「おいなんだこのコーヒー! ムシが混入してるぞ!!」

清田美緒が何かを言いかけた瞬間、違う座席から響き渡る声。

声の主の方に目を向けると男が一人、キレ気味に叫んでいる。

すかさずつぐみちゃんが駆け寄り、状況を確認すると男はつぐみちゃんを見て嘲笑し、一気に畳みかける。

「この店じゃ虫いりのコーヒーを客に出すのか? ああん? どう落とし前つけてくれるんだコラー!」

「申し訳ありません・・・! すぐ新しいものにお取替えますので!」

「そんなじゃすまねえんだよ! 誠意見せろコラー!」

物凄い剣幕にすっかりビビッて声が出せないつぐみちゃん。

周りの客も誰も止めようとしない。

千聖と花音は俺に目配せをしている。しゃあない、ここは仲裁に入るか。

「おいあんた・・・」

「少しよろしいかしら?」

俺が立ち上がろうとした瞬間、遮る声。
その声の主は清田美緒であった。

「私ねえ、見ちゃったのよねえ。あなたが故意に虫を入れるところ。そっちのポケットに虫が入った袋持つてるでしょ？出してはいいか？」

「て、ためえ因縁つけるんじゃないやねえ！」

ははーん。なるほど。あの焦りよう、まさに凶星を突かれて動揺している素振りそのものである。これだけバレバレな雰囲気を出しておいてまだしらばっくれるとはふてえ野郎だ。

ふむ、なるほど。こいつはタカリか。それなら話は早い。

「そうですよ！ムシが入って困っている人に因縁をつけるなんて！ねえ？」

「そうだ！こいつの言う通りだ！」

「え……？芽音さん……」

“私の味方じゃないの？”と不安げにこちらを見るつぐみちゃん。

“また悪い癖が出たわね”と俺が何をしようとしているかを把握し呆れ笑いする千聖の目。

“ほどほどにね？”とこれまた俺が何をするのか分かっている花音の目が俺を刺す。

俺はつぐみちゃんに“大丈夫”とアイコンタクトをすると、つぐみちゃんは安心したように目を伏せた。

「ほら！冤罪だって証明しましょうよ！ポケット裏返して!!」

すかさず俺は清田美緒が指したほうのポケットに手を突っ込み裏返す。

「あれ〜？なんだこのジップロック。そのコーヒーに入っているのと同じ虫がたくさん入ってますね〜？」

「てめっ！ふざけんな!!」

「おおっと」

俺は瞬時に回避をした。するとチンピラは頭からテーブルに突っ込み、虫入りコーヒーを被ってしまった。

「あちちち！てめえ！おいその女ア！てめえのせいだ！」

そして今度は清田美緒に狙いを定める。うーむ、真っ先にターゲットを女性に変えるとは情けない奴である。

「それは心外だなあ。そんなアホみたいな計画でやるのがダメなのよ。クレヨンし〇ちゃんでも今時こんな古臭いネタやらないわよ」

「なめやがって！俺のバックに誰がいると思ってるんだ！」

「誰がいるのかしら？」

「樹海組だ！俺を怒らせやがって・・・！ただで済むと思うなよ!!」

樹海組。おそらく暴力団の名前だろう。しかし参った。これだとこの場は解決してもそのあと嫌がらせをしてくる可能性がある、そうなる羽沢珈琲店のような個人経営の店は少し辛いかもしれない。

「樹海組・・・ふうんあなた、名前は？」

「愚藤だ！だからなんだってんだ！」

「あらそう」

そうやって清田美緒は電話をかけ始める。

「あたし。ねえ、あんたのところに愚藤ってのいる？・・・あらそうなの。ちよつとカタギに迷惑かけてね。しかもあたしにタダで済む

なって言ってくるんだけど。・・・あらそう？わかったわ。じゃあね」

電話を終えた清田美緒。間髪入れずに愚藤に言い放つ。

「なによあんた、まだ盃もらってないじゃないのよ。おおかた組員に知り合いができてその威光を使いたくって仕方なかったのね。バカねえ、組の名前使ってカタギ相手にこんな真似したら一発でアウトなのに」

「ど、どういうことだ・・・？」

その刹那、屈強な男二人が店内に入って愚藤を取り押さえた。

「なんだお前ら!?女あ!何者だ!?!」

「お嬢に向かってなんてクチ利きやがる!このお方は神山会総長のお嬢様だ!」

「ひえ!?!」

神山会。芸能界にいるおかげかその名前を知っている。

関東最大の広域指定暴力団である志賀組の傘下でも最大級の規模を誇る組だ。

「お嬢、こいつどうしますか?」

「うーんそうねえ。樹海組の組長はこいつのこと知らないみたいだし多分末端に知り合いがいるだけね。樹海組は注意だけでヨシ。そいつは・・・まあ二度とこんなナメた真似ができないように教育してあげなさい」

「かしこまりました!オラ!こい!」

「ぎゃあああああ」

「皆様お騒がせしました。そちらの壊れたテーブルと食器は私が弁償します」

「あ、ありがとうございます」

怒涛の勢いで行われたイベントに全員理解が追い付いていない様子。

無論、俺もである。

「お前の新しい親って・・・」

「そ、ヤクザの親分。名前も変わったんだけど・・・まあ今まで通りでいいわ」

※

「大変なことになったね・・・」

「芽音、大丈夫・・・？」

「あ、ああ」

そうはいっても動揺を隠し切れていない。あいつが。あの清田美緒がヤクザの力まで手に入れてしまった。

そうなってしまっただけでは手段を選ばないかもしれない。力でねじ伏せ、俺を思い通りに潰しに来るかもしれない。

「まあなるようにしかならんか・・・っと電話だ」

そんな話をしてしていると電話がかかってきた。

ディスプレイを見るとパスパレマネージャの川崎さんだ。

今日はメンバー全員オフのはずだがなんだろうか？

「はい、俗です」

「すみません、休みの日に・・・ちよつと緊急事態です」

「え？」

「今日発売の週刊誌ですが・・・少し面倒なことになっております。今からデータを送るので見てもらえますか？」

そういつて電話を切る。

「川崎さんかしら？」

「ああ。なんか週刊誌がマズイとか言つてて今データを・・・つてなんじゃこりゃ」

「・・・!?これは確かにマズイわね」

“ 現役高校生アイドルバンドグループP ベースのSが高校の同級生と熱愛!?”

そんな低俗タイトル。そしてそこにはオフの日に会っていた俺と千聖の隠し撮り写真が写っていた。目線は入っているがタイトルの書き方からしてすぐに特定可能だろう。

そして川崎さんから迎える車を寄越すからすぐに事務所に来るよ うにというメッセージがはいつていた。

「事務所に行こう、この誤解を解く対策をせねばならなくなった。すまん花音」

「ううん、芸能人つてこういう時大変だね」

「ごめんなさい花音」

そういつて花音と別れた俺たちは事務所へ向かったのであった。

第2話 号哭―失速―

「困ったねこれは」

「そうね。私たちとしては後ろめたいことはないのだけれど週刊誌にこう書かれてしまうと・・・」

事務所へ向かう途中の車内で俺たちはことについて考える。

俺と千聖はスタッフとタレントである以前に親友だ。ただの高校生同士の友達。それだけではあるが・・・

「迂闊だっかもしれないわね・・・」

「まったくだ」

千聖はパスパレとして、一人の女優としてどんどん名前が広がっている。それをいつまでも変わらないと思い今まで通りに過ごしてしまっただが、こういつた誤解を生むことをもつと考えるべきであった。

そしてうーん、うーん・・・と頭を抱えているうちに事務所に到着したのであるが、そこで待っていたのは川崎さんと社長であった。

「俗さん、千聖さん、申し訳ありません」

「川崎さんが謝ることではないですよ」

「そうかもしれないませんが・・・」

川崎さんがものすごく縮こまっている。確かに俺はバイトとはいえ川崎さんの部下でありサポーターだ。川崎さんも状況判断ができていなかったことに気づき、もつと考えるべきであったという反省をしているようだった。

「とりあえず、話を進めようか」

「社長」

「当事務所としては、今回の報道は事実無根であり誤報によるタレン

トへの名誉棄損行為に他ならない。週刊誌には嚴重に抗議します。だが・・・よく働いてくれている俗君に甘えすぎてしまった我々の落ち度でもある」

社長は淡々と話す。

「そこでだ俗くん。すまないのだが・・・」

「わかっていますよ、社長。当面の間千聖・・・いや、それだけだと不自然ですか。パスパレのサポートから一時的に外れます」

「話が早くて助かるよ」

※

「え〜〜?!芽音くん、担当外れちゃうの!?!」

社長との話が終わった後、パスパレのメンバーがちょうど集まるようだったので此度のことを話したところ、彩さんが驚きの声を上げる。

「仕方ないですよ、彩さん。今は騒動を鎮静化させることが先決ですし・・・」

「麻耶ちゃんの言う通りかもね〜。今の状況ってるんっ♪ってしないしね〜」

「う〜芽音さんと一緒にお仕事できないのはさみしいです!でも一時的なんですよね?」

「ああ、事務所としては事実無根ってことを発表するみたいだし、ほとぼりが冷めたら復帰するさ」

ゴシップなんざそんなものだろう。本当にやましいところはない。毅然とした態度で証拠を出していけば納まるさ。

「なんだよ千聖、辛気臭い顔して」

「いえ・・・普段からみんなに色々といっておきながら迷惑をかけちゃって・・・」

「なーに言ってるんの千聖ちゃん!」

彩さんが千聖さんの言葉を遮る。

「私だって千聖ちゃんに普段いっぱい迷惑かけてるし助けられてるよ?だから今回のことを迷惑だなんて思わないし、むしろ恩返しできる機会かなって思うくらいなんだから!」

「そうです!チサトさん、そんなに自分を責めないでください!」

「彩ちゃん・・・イヴちゃん・・・」

うん、これぞパスパレだ。

俺はそんな光景をほほえましく思いながら、その他の処理や仕事のため、その場を後にした。

※

その夜。俺はバイトを終え一人帰宅する。

いつもはパスパレメンバーと途中まで一緒に帰るのだが担当を外れてしまった以上、ほとぼりが冷めるまでは単独行動が良いと思ったのだ。

「・・・誰だ」

俺は後ろから近づく気配にそう問いかける。

「気づいてたのか。只者じゃないと思っていたが予想以上だな」

「あなたは・・・」

そこにいたのは――

とあるプロデューサーの秘書であった。

さかのぼること少し前。こんなことがあったのを思い出した。

―回想

俺はパスパレの挨拶周りに同行していた。

そのうち千聖の関係者に挨拶回りに同行していた際、とあるプロデューサーのところへ出向いたのだ。

川崎さんが挨拶をし、千聖も挨拶をする。そのあとプロデューサーの秘書と川崎さんが打ち合わせをしている最中、千聖はプロデューサーと会話している。

「ん〜さすが天下の白鷺千聖だねえ。会えて嬉しいよ〜」

「そんな、私なんてまだまだです」

「謙虚なところもいいねえ〜」

俺はそれを黙ってみているわけだがそこでプロデューサーがやかしやがった

「きやつ」

「ごらごら。この程度で悲鳴を上げてちやこの業界では生き残れないよ」

あろうことか千聖の臀部にさりげなく触りやがったのだ。そのあとの言動を見ても確信的な犯行であることは明らかだろう。川崎さんは打ち合わせをしながらチラチラこちらを伺っている。おそらく圧力を恐れて動けないのだろう。

そして抵抗できない千聖に味を占めたのかプロデューサーは1回、2回とセクハラの回数を増やしていく。

俺はそこで千聖にアイコンタクトを送った。

“助けるべきか?”

千聖が望むなら俺は助けよう。

しかしこのセクハラが芸能界の慣習だ、耐えねばならない・・・と千聖が考えているなら俺は耐えるつもりだった。(慣習だったらクソ極まりないが)

考えてみる、親友がセクハラされて黙ってることがどれだけ辛いことか。

でも俺が軽はずみに動くことで千聖の芸能人生活に陰りが出たら? 事務所に圧力がかかったら? いろんな汚い事情と権力が跋扈する世界だ。川崎さんが動かないところを見ると影響力があるプロデューサーのようだし、敵意をむき出しにして軽はずみに動くことはできない。俺は今すぐプロデューサーをぶん殴りたい衝動を必死に抑え、千聖の回答を待った。

“たすけて”

しばらくして俺はそのメッセージを受け取った。

そして俺はその瞬間、偶然を装って大げさに“コケた”

「あちちちちちちちちち!!!」

「ああ、申し訳ありませんサ! プロデューサー!」

俺はテーブルにダイブし、その拍子で卓上に合ったお茶を・・・プロデューサーの股間に向かって投げつけた(もちろん偶然を装って)のだ。

「キキキ、キミ! なんてことを・・・! あちちちち!!」

「すみませんすみません! すぐに拭きますから!」

そして俺は持っていたタオルでプロデューサーの股間を拭いてやった。

……タオルを握る手に目いっぱい力を込めて

「いであであで！キミい！なんでそんな力が強いのか!!?」

「すみませんすみません!!!」

俺は「マヌケなスタッフ」を演じきった。

「もういいから！あーもう災難だよ」

その後、プロデューサーは着替えのために退室、ちようど打ち合わせも終わったようで俺たちも退室することになった。

「俗さん、あとでプロデューサーに事務所から謝罪をしておきます」

「……申し訳ありません」

「川崎さん！芽音は私のために……!」

「わかっています。これはあくまで「取引先として」です。私個人的な感想を言わせてもらおうと……よくやりました!」

アカン、この人男前や……

満面の笑みでそう答える川崎さん。結局俺もそのあとお咎めはなく、社長にも「もう少しスマートにやるように」という謎の注意を食らってこの事件は幕を閉じた。

—回想終わり

「何かご用ですか？あの時は私もミスで申し訳ないことをしましたし、事務所からも謝罪をさせていただいて……」

「ハハッ。白々しいなあオイ。わかってんだよ。アレ、わざとだろ？

アホプロデューサーは本当に偶然だと思ってるみたいだけだよ」

「・・・どういうことでしょうか」

「あーいいっていいって。別にアホプロデューサーにチクる気もねーしそんな猫被りなさんな。おっと君には自己紹介がまだだったな。俺は鬼頭国光(きとう くにみつ)ってんだ。今は色々理由があつてあのアホプロデューサーの秘書やってんだけどよ。んで君は俗芽音だったか?」

こいつの漂わせる気配が只者ではない。

逃げ切るのが不可能だと判断した俺は奴に向き直ることにした。

「調べは済んでるみたいですね」

「まあな。んでよく芽音」

「気安く呼ばないでくれますかね」

「いいじゃねえかよ。話を戻そうぜ。君さ、週刊誌で出てた白鷺千聖の彼氏だろ? 健気だね〜彼女を守るために仕事まで一緒にさ〜」

「彼氏でも彼女でもないし友達ですよ。仕事はまあなりゆきですけど」

「いいっていいって皆まで言うな! んで、そろそろ担当外れたころだろ?」

「なぜ知っている・・・? それに、それがどうしたと・・・?」

「だってよく気になるじゃん。週刊誌にリークした身としてはよく」

「てめえだったのか・・・!?!」

「イイね〜その目! そういう目が見たかったんだよ」

挑発するように言葉を吐き散らかす鬼頭に、俺はだんだんといら立ちが抑えられなくなってきた。

「ある目的のためにやったわけだけどよ、なかなか効果覲面だったろ?」

「・・・!?! 千聖に何をやる気だ!?!」

「とある方のために色々動いている。それしか言えねえなあ」

「あのプロデューサーか？」

「あんなカスなわけねーじゃんwwwでも君みたいなのが白鷺にべったりひつついているとだとやりづらいからさ。学校もそろそろ冬休みだろ？その間、病室で健康的な生活はどうだ？動けないかもだけどよ」

「!？」

その瞬間奴は襲い掛かってきた。

目にもとまらぬスピード。俺はガードが間に合わずもろに攻撃を受けてしまった。

「ガハッ」

「おいおいこの程度よけれねーのかよ」

「喧嘩売ってんなら買うぞコラ」

俺は反撃の一手を繰り出す。その拳は鬼頭の腕にヒットし、確かな手ごたえがあった。

「おー痛ってえ。なかなかやるじゃん」

「余裕ぶっこいてないで自分の心配しろよ」

「あ？グオオオオオ！」

俺はそのまま立て続けに攻撃を食らわす。本気モードでひたすら怒りに任せて連打だ。

その一撃一撃には確かに手応えを感じ、鬼頭はその場に崩れ落ちたのであった。

「が、ガハッ・・・」

「大口たたいてた割には口ほどにもないねお前さん」

鬼頭はうずくまって動かなくなった。

なんというか奴がまどつていた殺気にしては弱すぎである。

うーむ、ひとまず警察にでもいうべきか……?

「……おー痛つてえ。もう許せんぞオイ」

「なんだと……?」

色々考えていたら鬼頭は何事もなかったように立ち上がった。

「んな馬鹿な……あんだけぶち込んだのになんでそんなピンピンしてんのよ……」

「遊んでやっただけだよ。じゃあ、お・や・す・み」

「は?何を言って……な……?が、くはっ……!」

反応できなかった。

「おおっと、今ので倒れないのはすげーな。んじゃあこれはどうかな?」

「あぐっ……てめえ……クソツ……」

「やるじゃん。しかし君も健気だねえ。たかだか女一人のために体張ってさ。君まだ18歳でしょ?まだまだこれから出会いがたくさんあるし……ここらで白鷺のことは諦めてよ」

「なっ!?どういうことだ!?!」

「そのまんまの意味。言ったでしょ、とある方のためってさ。君は障害にしかなんねーのよ。んーでも悔しいでしょ?白鷺のこと守りたいんでしょ?じゃあもつと立ち向かって来いよ。俺を楽しませろよ」

「こんの……クソがああああ!」

俺は今までで出したことのない渾身の力で立ち上がり鬼頭へ立ち向かう。

かつてないスピード、拳に力を込める。

「えっそれだけ？」

「ウソだろ……」

「ウソじゃあない。うん、でも今まで一番力入ってたしホントのホントに全力だったんだねえ」

「腕が……動かない……！」

「じゃあ本当のお休みの前に言っとく。白鷺は諦めろ。あと俺のこと他言したりへタな動きするようならよー事務所ごとパスパレ潰すからよ」

そういつて一瞬だけ奴の狂った笑顔が目映った。

なぜ一瞬かって？次に俺が視界を認識したのは、病院のベッドに寝ていた時に見える白い天井であつたからだ。

「芽音くん……！」

「花音か。えつと……何が……!？」

何があつたのかを聞こうと思つた瞬間、俺はあの瞬間を思い出す。繰り返される暴力、そして遊ぶような笑い声。徹底的にプライドも、身体も、全部打ちのめされた。

そうか……俺は

「負けたんだ」

そう、こんなに無様に。完膚なきまでに

「芽音くんとりあえずお医者さんを呼んで……え!？」

俺は気が付くと花音に抱き着いていた。

「くっ……くうう……ううううう」

